

藤田が與に、利ならぬ智勇の覺ある、汝達を伴にあらせじとて、そも亦邪神のなせし事歟、凡慮に分別すべくもあら
 ねど、幸ひにして我股肱の、敵の矢石に傷られざりしは、倒に躬方の利也。汝達那首に戰歿するとも、義通も亦免
 れ得ずは、後々までも躬方の不利也。恚れば汝達が妖怪に、魅されしは不覺に似て、反て主の與に宜き理あり。因
 て罪過の沙汰に及ばず。那折俱に立飯りたる、藏人が妻の親族們も、この義を以有免す。今番の軍陣に従ふて、功を
 もて恥辱を雪めば、其身々々の所以のみならず、こは義通の與也かし。こゝろ得たる歟。と理を推て、諭させ給ふ明
 君の、徳誼を胆に銘ずるまでに、歡び思ふ直行直元、三家老們も共侶に、感涙坐に目を數瞬きて、各々歡びをぞ稟し
 ける。君臣一致、世にしるき、素より武備の名家にあなれば、左右する程にはや、人馬の調煉整ひぬ、と聞えしかば、
 義成はその次の日に、出陣あるべし。と徇さして、今茲五歳になり給ふ、二男次丸（後に上總介實幾といひしはこれ
 なり）に、老黨杉倉木曾介氏元と、荒川兵庫助清澄を傳けて、留めて稻村の城を守らし、然而杉倉武者介直元を先鋒
 として、堀内藏人貞行を後陣とし、義成則中軍たり。この餘、東六郎辰相は、遊軍たるべし。期に莅て戰ひの、弱
 からん方を援けよとて、既に隊伍を定めらる。その勢約莫三千餘騎、文明十五年、春正月廿一日（毛野道節們が鈴茂
 林にて復讐の折と同日なり）逆將、藤田素藤を征伐の、首途と聞えけり。爾程に、嚮に義通の伴當の、死ざることを
 得たるそが中に、苦屋八郎景能を首として、銃瘡の大抵は、瘥たる士卒もありしかば、いかで今番の御征伐に、從
 ひまつらんとて請稟し、を、義成一切許し給はず、その兵毎の志氣は、歡ぶべき筋なれども、いまだ全く瘡平癒せて、
 戰場に赴くべからず。景能は先試みに、荒川兵庫に相副て、瀧田殿（義實をいふ）へ使に達ね。我大人へは日毎々々
 に、急脚の使价をもて、この回の奇異、義通が安危まで、傳聞く毎に報稟せしかど、なほ胸苦しく御坐すらめ。我身
 出陣のおん告別に、まゐるべう思ひながら、軍議に暇なきをもて、その義に及びがたければ、荒川兵庫助を名代とし
 て、那里へまゐらすべけれどとて、既に兵庫に吩咐おまぬ。景能も亦俱にまゐらば、那折の事詳に聞えて、慰め給ふよ

ナがにもならめ。然とて路次をいそぐは要なし。自愛して轡子を、用ひんこと勿論なるべし。然ば戰場へ相從ふも、
 大人のおん許へ使しぬるも、勤務は同じ主君の與也。この義をな思ひ謬ちそ。と諭させて又清澄にも、景能が事簡様
 簡様。と丁寧にくゝろ得さしつ、兵庫助が瀧田殿より、立かへり來ぬるまで、木曾介は當城に、止宿すべし。と掟給
 ふ、小心脱落なかりけり。間話除煩、却説里見安房守源義成朝臣は、三千餘騎を引卒して、稻村の城を進發し
 つ、安房上總の封疆なる、市坂を越給ふ程に、嚮に上總の諸城主へ、告文を齎して遣されたる、軍使十名のそが中
 に、三名許かへり來て、本陣へ報稟すやう、小可們は、覆本椎津應南へ快赴きて、那里的三城主に、告文を遞與し、
 御説を傳へて、その動靜を覘ひしに、件の城主達は、當初、藤田素藤の吹擧により、俱に獨立の志を轉して、當家
 に歸服せし比より、素藤と疎からねば、おん疑ひを恐れ身を詰みて、藤田に一味したりけん、陽には異議もなきもの
 から、言語應對潔らて、その面色不快に見えたり。就中覆本なる、城主千代丸豊俊は、曩に素藤が與に媒妁して、
 濱路姫上の御婚姻を、薦稟せしよしもあれば、免れがたとや思ひけん、悄々地に人馬を整へて、籠城の準備あるに
 似たり。因てこの義を注進の爲、先我們のみ那里より、走りかへり候ひき。と喘々聞えあげしを、義成はやくうち听
 給ひて、しからんには士卒を分ちて、快件の三城を、攻撃すばあるべからずとて、姑且這里に人馬を住めて、今番の
 先鋒後陣なる、直行と直元を、中軍に召聚へ、件の事の趣を、簡様々々と解示して、我汝達に一千の、精兵を授く
 べし。藏人は、武者助を副將として、這里より覆本の城へ推寄て、快豊俊を攻撃ね。那里的城を抜くならば、應南椎
 津の二箇城は、降すにいと易かりてん。機に臨み變に應ずる、軍慮を俱に旋らして、快大功を奏せよかし。とここ
 ろ得さしつ一千の、士卒をその隊に隸給ふ、軍配極めて速也。しかるに直行直元は、館山攻の先鋒後陣を、奉りし
 その日より、いかで素藤を生拘りて、先度の恥を雪んず、と思ふ心の勇れて、この地方まで來にけるに、今さら寇の
 本人ならぬ、豊俊們を討手として、他し城に向んことは、望しからずおもへども、素よりその身の名聞に、拘づらは

んは、忠臣の、せざる所とおもひ復して、一義に及ばず共侶に、言承しつゝ、隊兵を將て、千代丸豊俊が盾籠る、長柄郡榎本の、城を投てぞいそぎける。爾程に義成主は、更に又部を定めて、小森衛門篤宗が獨子なる、小森但一郎高宗と、浦安兵馬乗勝が弟也ける、浦安牛助友勝を先鋒として、東六郎辰相を後陣と定め、次の日新戸に著陣して、地理を擇て、屯を固くし、一日人馬の脚を休めて、その明旦館山の、城へ推寄給ひけり。然ば先鋒に找みたる、小森高宗と、浦安友勝は、快當城を攻破りて、父兄の恥を雪んず、と思へば衆に先だちて、斬を埋め堀際に近づきて、攻入らんと欲せしかども、城は究竟の要害にて、左右なく攻も落されず。義成これを驚して、然のみ無謀の戦ひせば、雑兵多く撃れやせん。けふのみにやは限る事歟。と制めて新戸へ退陣しつゝ、次の日更に隊配して、却城の後門へは、東辰相を大將として、數百の精兵を差向給ひ、又前門へは、義成みづからうち向ひて、一千有餘の兵を、找めて攻撃給ひしかば、城兵們も亦箭窓を開き、緊しく矢石を連發ちて、茲を先途と防ぎしかども、寄隊は毫も氣を屈せず、擊るゝ射方を埋草にして、はや屏一重破りけり。登時前門の城樓上に、武者四五名立顯れて、聲高やかに喚るやう、里見殿にものまうさん。是は轟田瀧頭に年來仕へて、股肱腹心と憑れたる、礪時願入業當、平田張益作與多門にて候也。抑我主君權頭が、國主を恨みし根柢は、曩に令愛濱路小姐と、婚媾の事をしも、只管に請稟せしに、思ふにも似ず權頭が、前功を空にせられて、許容なかりしのみならず、みづから驕昂能て、誹謗の過言に及れしを、人傳に聞知りたる、遺恨やる方なき隨に、去歲より籌策を旋らして、義通孺子を生けりしは、害して怨を雪んとにあらず。先非を悔て、濱路姫を、當城におくり來されなば、その折這那牽換に、義通孺子を返すべし。惑ひを執て不字をいはれば、此方も屈せぬ武士の意地、今面前に義通を、屠りて聊憂目を見せん。恩仇兩箇は生死の大根、この義を告て、賞罰を、決めよとある、主君の嚴命。回答遅くば、親子の別路、よく見給ひね。と暗きにほざきて、後方を佐と見かへれば、豫準備の雜兵が、義通君を擲擲めて、布囊を衝せしを、城樓の柱に掛著て、明晃々たる巨刀を、引抜きつ刃

尖を、義通君の胸前へ、推著つゝ皆喚りて、回答遅し。と責たりける。登時自餘の城兵は、麻裡に立、頭を擧し、弓弦を弾き、盾を鳴らして、齊一咄と笑ひけり。然ば寄隊の諸軍兵は、思ひの隨に克誇て、乗入らんとせし勢ひを、方僅這一擧に折かれて、勇あるも勇なきも、進んとすれば、御曹司の、害され給はんことを恐れ、又退かんと欲すれば、いまだ大將の下知を听かず。進退こゝに谷りて、拳を握り齒を切り、城樓を疾視て立たりける。義成これを驚して、怒りに得堪ず、聲ふり立て、蓬き賊徒の舉動かな。尙幼弱なる義通を、人質にしつゝ、要みて、飽まで我を辱るとも、我その非望を許さんや。その義ならば短兵急に、攻破りて素藤を、屠りて我道熱腸を冷さん。兵毎找みね、猶豫する事歟。怒に義通を、叛賊の手に亡れんより、遠箭に被て、我射て拿ん。若これをしも忍ぶとならば、何を忍ざるべきや。と鞍の前輪をうち鳴らしつゝ、進め。と誓獎して、馬を乗よせ、弓拿直して、城樓を向上げ、箭を刺ひて、機絞らんとし給ふを、馬の左右に従ふたる、昵近の諸侍、駭慌推禁めて、こは勿體なし、おん憤りは、大家猜しまつれども、今御曹司を亡ひたまはゞ、素藤竝に賊兵們を、一個も漏さず撃果すとも、その甲斐や候べき。又せん術もをはしますらめ。只權且の御堪忍を、願しくこそ候なれ。と辯論ひとしく諫稟すを、義成听ず、頭を掉て、若們が稟すよしは、我も思はざるにあらねども、世に恥を知らざれば、匹夫だも、そを人とせられず。況三軍に將たるものが、恚る恥辱に遇ひながら、阿容々々として退かば、上は父祖の名を降し、下は臣妾に侮られて、未代まで家の瑕瑾にならん。やをれ禁るな、放さずや。と敦固き猛く弓をもて、左右を拂ひ給へども、誰か一人も退くべき。なほ云云と諫めたる、捫擇果しなかりけり。爾程に、この日城の後門へ寄たりける。東六郎辰相は、恚とも知らて在りけるに、然しも主君を諫難たる、近臣們が人を走らして、事恚々と報しかば、辰相聞つゝうち驚きて、只一騎馬を跳して、主の身邊に走らし來つ、鞍よりやをら下立て、主君に朝ひて諫るやう、御請忿の趣は、はや人傳に承りぬ。いぬる比より、瀧田の大殿(義實をいふ)の、恚あるべしと、知食けん、御出陣の前日に、御内翰を賜り

て、御教諭を承まつりしよしあり、今さら思ひ合し候。誠や前漢なる買誼が策に、鼠に投るに器を、忌、とやらんいふよしは、素より君の知召す所、いと憚りあることながら、短慮は功を做しがたかり。微臣不肖に候へども、御曹司も恙なく、上の御恥辱にもならざるやうに、計ふべき術候へば、姑且こゝを任せ給ひて、新戸の御陣に懸せ給はば、君臣上下の幸ひならん。とくく退り給はずや。と和解て懸て義成主の、馬の鑣を楚と奪て、牽旋らしつゝその駿足の、尻を托地と鞭しかば、馬は撻れて蕪地に、退く主に隊伍を亂さて、前後に従ふ諸軍兵、初て胸を安くしつゝ、新戸の陣所へ俱しにけり。

第百三回

里見源老侯富山に亡女を弔ふ
大江親兵衛高峰に勅寇を拉く

單表、この日館山の城の後門を攻撃たる、東辰相が隊の先鋒の頭人は、田税戸賀九郎逸時、登桐山八良子と喚做たる、武勇一對の壯俊也けり。就中田税逸時は、いぬる日諏訪の社頭にて、賊徒の鳥銃に撃れたる、田税逸友の従父兄弟なりしかば、氏族の恥辱を雪ん、と思へば勇氣十倍して、專粉骨を竭せしに、這隊の大將辰相は、主君を諫まつらんとして、猛可に前門の攻口へ赴く折、逸時、良子門を招近づけ、事恁々と弄き示して、馬に鞭ち馳去りたる、爾後伴の兩人は、惴る躬方の軍兵に、よしを傳へ退聚合て、辰相の還るを等しに、姑且して躬方の雜兵、前門の攻口より赤來つ、逸時良子門に下知を傳へて、館は既に退き給へり。各位は、その隊の士卒を、推經め城を繞りて、殿りして退き給へ、と六郎殿の指揮也。やよとくく。といそがして、飛が似くに走去けり。登時田税逸時は、登桐良子に弄くやう、聞くに、這處を成る敵の頭人は、奥利浅木の膳碗門也。我々に酷く攻られて、臆病鬼の馮たらんに、退くととも退ふべからず。前門の敵は、これと異也。館の退陣し給ふを見れば、素藤必士卒を出して、喚留んと欲するならん。今この勢を兩箇に分て、和殿はその一隊を領て、東老と共侶に、簡儀々々に計ひ給へ。酒家は情々地に間路より

退き、城兵出て趕ふならば、前後より來みて、敵の大將を撃捕るべし。この義をな進へ給ひせ。といふに良子、こころ得て、七百餘名の隊兵を、過半率で徐々と、前門の方まで退きて、却辰相に、逸時が計策を報にけり。爾程に、東辰相は、苦諫幸ひにその甲斐あり。義成懸て圍を解きて、新戸へ退陣し給ふ程に、荐び馬にうち乗て、一霎時其方を目送りつゝ、一騎舊處に在り。浩處に、後門に残し置たる、登桐山八良子門は、四百餘名の士卒と俱に、はやくこの處まで退き來て、逸時にいはれしよしを、報るを辰相うち聞て、含笑ながら點頭のみ、異議に及ばず良子門と、共侶に士卒を將て、まだ遠からぬ義成の、殿をして徐行程に、城の大將素藤は、みづから城樓にうち登り、這光景を遙に看て、原來義成、恩愛の、やる方なさに逃伏しつゝ、圍を解て新戸のかたへ、退くとおぼえたり。遣るな兵毎、擊留めよ。と喚りつゝはや下立て、馬にうち跨、鎗腋夾て、勢ひ猛く出んとすれば、主に劣らぬ性急雄の、軍兵約四五百名、金鼓を鳴らし咄と嘯て、城門を颯と推ひらき、反橋托地と遣返して、蕪地にぞ趕ふたりける。登時辰相良子門は、敵の近づくを見かへりて、思設けし事なれば、毫も噪がずひらき合して、且戦ひ且走るを、素藤得たり。と隊兵を找めて、攻著々々揉だりければ、辰相門はいよゝますく、怵難たる如くにしつゝ、潑と崩れて逃走るを、素藤はなほ漏さじとて、趕ふこと既に五六町、一叢繁き野林の傍を、憶ず走り過ぎしかば、忽地心つきにけん、四下を見かへり、馬を駐めて、兵每惴るな。敵の伏兵、這頭に在らば、躬方の利ならず、退かずや。と喚りたる、その聲いまだ果ざる程に、はや間道より退き來て、件の樹蔭に埋伏したる、田税逸時が隊の士卒三百餘名、圍を咄と發りつゝ、勢ひ宛脱兎のごとく、素藤が後陣のかたより、推包ん、と競ふて蒐れば、故意走りて思ひの隨に、敵を勾引し辰相良子、折こそよけれ、と瞬息間に、備を懸て建直して、はや前後よりさし來みて、息をも養れず攻たりければ、城兵吐嗟と駭噪ぎて、一人も敵に當るものなく、將卒共に度を喪ひて、撃るゝものぞ多かりける。そが中に素藤は、辛く一方を殺啓きて、城を臨て逃走るを、辰相看つゝ馬に拍れ、趕ふこと既に急にして、箭行近くなる隨に、弓に箭

刺ひて、彈と射る。寛錯はず素藤は、左の肘を筒深く射られて、馬より滾落んとせしを、左右に従ふ殘兵に、帮助られつゝ命を免れて、やうやく城に近づく程に、城内よりこれを相て、礮時願入平田張益作、二百餘名の隊勢を將て、走り出主を迎へて、大家ひとしく逃籠り、橋を引き城門を閉たる、手懈し速なりければ、入り後れたる城兵は、寄隊の爲に撃れけり。恚りし程に、辰相門は、這勢ひを拔ずして、快馮入りにせよやとて、七百餘騎を一隊にしつゝ、透間もなく趕鬼たれども、敵は逃脚早かるに、城より援兵出て、素藤を拯ひ、城門を閉て、矢炮を飛すこと繁かりければ、辰相門は士卒を制めて、趕捨にして、捷闘を、揚つゝ徐に引返すを、城兵門は銃窓より、看るといへども初度に懲りけん、阿容々々として趕ざりけり。然ば、この日の戦ひに、辰相逸時良子門が隊に撃捕る所の、城兵無慮二百餘名、寄隊の刀槍戦殺は、只是雜兵のみにして、十四五名に過ぎりけり。現籌策合期して、恚全勝を得たれども、鈍や逆將素藤を、撃漏せしを飽ずといふめり。なれども、這日城兵に、曾平瀬十郎卒良井尻九郎と喚做たる、兩個の猛者あり。こは近曾素藤が隊に屬て、館山の城に籠りたる、夷瀧の野武士也けるが、俱に逸時良子と戦ふて撃れにけり。這門を宗徒の兵として、侍品の首三十餘級、鎗眉尖刀の尖に串きて、新戸の陣所へかへり來ぬるを、途に立て觀る里人多かり。爾程に義成主は、辰相に諫られ、心ならずも圍を解かして、新戸へ退き給ふ程に、辰相門が隊兵の退後れたりければ、城兵に咬留られけん、後陣に戦ひあり、と聞えしかば、義成驚き士卒に下知して、拿て返さんとし給ひしに、その戦ひは既に果て、躬方十二分に克にき、と再度の注進安定也。この故に義成は、懸て新戸に歸著して、辰相門を等給ひしに、後陣も程なく還りにければ、義成は遠しく、辰相を召し給ふに、面色いまだ快らず、來ぬるを遅しと聲高やかに、やをれ六郎、けふ素藤門が烏計の舉動、忍ぶべきにあらざれば、我義通を箭尖にかけて、後安く敵城を、攻破らんと欲せしを、汝は疎忽とおもひし賊、縦汝が千萬言、面を犯して諫るとて、名をも蓋をも見かへらて、一歩も退く我ならねども、思ひがけなく家殿君の、先見預知をはしませし、と稟しよし

の軀からねば、その一言にが駭ばず、遂に己を盡して、敵を後陣に併せしに、素藤果して城戸を閉きて、懸籠んとせし程に、戦ひあり、と聞えしのみ。その折我は適にして、那隊にあはぬは遺恨の事也。幸ひにして若門が、聊か捷利を得たりと聞けば、咎るよしもなき事ながら、萬にひとつ躬方輪なば、又但恥の上の恥也。異日凱陣したりとも、我身何等の面目ありて、大人に見參まうさんや。抑大人の御内翰に、甚なる事を寫せ給ひし。御教訓の趣を、聞まほしけれ、甚麼ぞや。と怒じて頻りに問給へば、辰相は稍暫く、額づきたる頭を擡げて、御説承り候ひぬ。いと憚りあることながら、嚮におん怒の激しかりしかば、非除臣們がいかがかりに、犯して諫め稟すとも、御許容あるべき時誼ならねば、已ことを得ず、權謀をもて御鬱忿を、推鎮め奉りき。然ば大殿より御内翰を、賜りたることもなく、御教諭を稟まつりしことは、一毫も候はねど、君御孝行にましますば、何事も大殿の、御説とあれば、承させ給ひて、損益まれ、賞罰まれ、御意に儘せよ、と仰られしは、一朝の事にあらず。この義によりて云云、と稟して諫めまつりしかば、果して多辯に及ばずして、立地に御許容ありき。そは臣として君を給く、罪を見かへる折にあらねば、世の常言に、窮する時には、親を出せといふことあるに、似たる拙策にこそ候なれ。この故に烈火のごとき。御震怒を鎮め給ひて、御退陣ませしかば、御方に三樁の大利あり。第一は御曹司の、御命に恙なければ、是より後も質として、那城内に屏籠置れん。是その利の一ツ也。又君猛可に圍を解きて、當所に退き給ひたればこそ、素藤みづから城より出て、御方の大利に及びたり。その故は箇様々々。とかの折田税逸時が、籌策により、二隊に分ちて、敵を前後に挟みて、攻戦ひし事の趣、素藤は辰相に、肘を射られて、城内へ、逃籠りたる爲體、この餘の城兵宗徒の猛者、曾平瀬十郎卒良井尻九郎とか喚做たるを、逸時良子が撃捕りし事、都て遺なく聞えあげて、又稟すやう、既にして戦殺の、賊徒は無慮二百餘名、御方の刀槍見は、十四五名のみ。素藤は懣に、君を窘んとしたれども、御曹司を害し得ずして、那身は反て矢傷を受たり。是その利の二ツ也。又素藤は、士卒を撃して、那身も痛瘡を負ひ

しかば、是よりいよ／＼胆落て、縦手繁く攻められずとも、久しからずして誅伏せん。はその利の三にこそ候へ。恠れば、御陣を退けられしは、御名譽にして、おん恥辱にあらず。是併御方の勇戦、就中逸時良于們が、智計その圖に當りし故也。但小臣のみ大功あらで、反て給きまうせし罪あり。御刑罰は君の隨意、毫も恨候はず。と憚る氣色もなく稟し、を、義成熱うち听給ひて、且感心大かたならず、憶ず持たる扇を抗て、股膝を托地とうち鳴らして、進微妙き六郎が、けふの擗き多く得がたし。又只汝のみならず、我軍に従ふもの、或は馬前に主を諫め、或は後陣に敵を挫ぎて、怨を復し恥を雪めし、忠信と云、智勇といひ、憑しからずと思ふものなし。然ば孝經の争諫章に、諸侯に争臣五人あれば、其國を失はず、とかき志されし孔子の教は、素讀の童蒙も知ることながら、得がたかるべき争臣を、恠まで我は多く持り。分に過たる幸ひなるかな。因ておもふに、けふ汝が、家嚴君の御内意あり、といひしは一時の虚談也とも、そはわが與には虚談ならで、即親の仰におなじ。倘そのことの微りせば、我いかにして退くべき。誠に親の御ころも、けふ辰相が諫言と、期せず符節を合することく、さぞ胸苦しく這方の天を、想像りてや在すらん。欲する所は義通を、快とり復し寇を夷けて、いかで大人の御ころを、休めまつらんと思ふのみ。必克べき勢ひを、我兒の所以に折かる、時の不祥を争何はせん。儘せぬものは江湖上の、經にはあれど、禍鬼の、暴虐に遇る薄情さよ。といひも盡さて、嘆息を、咳きに打紛らし給へば、辰相も感涙の、找むを覺ず額づきて、現有がたき御孝行、寛仁大度にましますば、恠る御諫を承らんや。君が千慮の一失を、諫めまつるは臣子の職分、そも易からぬ事ながら、教る所を臣とせて、よく其諫を容給はんは、いよ／＼難き事なるべし。寔にこよなき臣們が大幸、誠惶し、かしこし。と稱へて君臣和順の會計、なほ閑談にぞ及れける。浩處に瀧田より、老侯義實朝臣のおん使として、蟹崎十一郎照文が、居多の小荷駝を牽しつゝ、まありたり。と聞えしかば、義成は、辰相們と、共にみづからこれを迎へて、上座に登しつゝ、語て來命の趣を听給へば、照文も恭しく、おん使のよしを告ていふやう、今番館山の城攻は、以ある強敵なるをもて、大殿御ころ安からず。軍士を慰め給はんとて、美酒十駝、乾魚百疋を、御當陣に贈らせ給へり。就て戦ひの光景をも、承りて還れとある、仰を照文奉りて、おん使にまありたり。願ふは敵の強弱を、仰示さるべうもや。といふに義成膝を找めて、そは、辱き二種の恩賜、諸軍兵に配分して、御恩に預らせ候はん。著陣の後、幾日もあらぬに、恠御ころを添られて、遠路を教せ給はぬまでに、軍士を慰め給ひしは、義成が身に執て、謝し奉る所を知らず、都て拜戴仕りぬ。歡びこれに優ものなし。却おん倉は是まで也。又城攻の趣は、一朝に解盡しがたかり。そは緩やかに相譚ふべけれ。と仰に照文ころ得果て、遽しく身を起し、然而下座に立替り、又義成にうち對ひて、おそる／＼無異を祝して、辰相們に對面をすれば、辰相も亦歡びを、述て長途を勞ひたる、言果て又辰相は、照文にうち對ひて、昨今城攻の趣は、簡様々々に候とて、敵の擧動、躬方の進退、義通君の光景さへ、首より尾まで、いと詳に解説せば、照文耳を傾けて、連りに膝の找むを覺す。或は驚き或は歡ぶ、嘆賞の聲を得絶す。听果て恭しく、義成主に、勝軍の壽を演て稟すやう、約けふのおん進退は、不用意にして、大利となりぬる、御運愛たき所以にはあれど、君賢にして、臣も賢なる、忠孝兩ながら虚しからざる、徳誼の至りと稟さんも、倒に惶かるべし。然ば退き給ひしは、御孝行の所以なれども、そは兵法の旨に稱ひて、敵に驕らせ給ひしかば、素藤は毛を吹て、漫に疵を求めたり。この一條は大殿の、御感悦一入ならん、と思ひ奉るよしさへあり、よき家裏に候ひき。歸著の折に聞えあげてん。恐れながら臣們だも、感佩この義に候、と只管稱へて已ざりしを、義成听つつ合笑て、そは、歡しき事ながら、今も今とて六郎と、大人のおん噂をしたりしに、思ひがけなくおん使を、賜りて御安否を、承るこそ幸ひなれ。今番藤田素藤を、征伐の事に就て、家尊の大人の汝達に、宣はせしよしありもやせん。我後學にせまく欲し、有敷なしや。と叮嚀に、問れて照文、然候。いぬる比あん夜勤の折、唐山漢楚の戦ひの、おん物語を承りしに、大殿の宣ふやう、昔漢の高祖が、滎陽の廣武山に、項羽を圍み攻し折、項羽は防禦に術計盡

の城攻は、以ある強敵なるをもて、大殿御ころ安からず。軍士を慰め給はんとて、美酒十駝、乾魚百疋を、御當陣に贈らせ給へり。就て戦ひの光景をも、承りて還れとある、仰を照文奉りて、おん使にまありたり。願ふは敵の強弱を、仰示さるべうもや。といふに義成膝を找めて、そは、辱き二種の恩賜、諸軍兵に配分して、御恩に預らせ候はん。著陣の後、幾日もあらぬに、恠御ころを添られて、遠路を教せ給はぬまでに、軍士を慰め給ひしは、義成が身に執て、謝し奉る所を知らず、都て拜戴仕りぬ。歡びこれに優ものなし。却おん倉は是まで也。又城攻の趣は、一朝に解盡しがたかり。そは緩やかに相譚ふべけれ。と仰に照文ころ得果て、遽しく身を起し、然而下座に立替り、又義成にうち對ひて、おそる／＼無異を祝して、辰相們に對面をすれば、辰相も亦歡びを、述て長途を勞ひたる、言果て又辰相は、照文にうち對ひて、昨今城攻の趣は、簡様々々に候とて、敵の擧動、躬方の進退、義通君の光景さへ、首より尾まで、いと詳に解説せば、照文耳を傾けて、連りに膝の找むを覺す。或は驚き或は歡ぶ、嘆賞の聲を得絶す。听果て恭しく、義成主に、勝軍の壽を演て稟すやう、約けふのおん進退は、不用意にして、大利となりぬる、御運愛たき所以にはあれど、君賢にして、臣も賢なる、忠孝兩ながら虚しからざる、徳誼の至りと稟さんも、倒に惶かるべし。然ば退き給ひしは、御孝行の所以なれども、そは兵法の旨に稱ひて、敵に驕らせ給ひしかば、素藤は毛を吹て、漫に疵を求めたり。この一條は大殿の、御感悦一入ならん、と思ひ奉るよしさへあり、よき家裏に候ひき。歸著の折に聞えあげてん。恐れながら臣們だも、感佩この義に候、と只管稱へて已ざりしを、義成听つつ合笑て、そは、歡しき事ながら、今も今とて六郎と、大人のおん噂をしたりしに、思ひがけなくおん使を、賜りて御安否を、承るこそ幸ひなれ。今番藤田素藤を、征伐の事に就て、家尊の大人の汝達に、宣はせしよしありもやせん。我後學にせまく欲し、有敷なしや。と叮嚀に、問れて照文、然候。いぬる比あん夜勤の折、唐山漢楚の戦ひの、おん物語を承りしに、大殿の宣ふやう、昔漢の高祖が、滎陽の廣武山に、項羽を圍み攻し折、項羽は防禦に術計盡

て、曩に虜にしたりける、高祖の父劉太公を、緊しく細り屏に登して、漢王はやく降参せずば、今眼前に太公を、屠んと、軍兵に、喚らせたる事ありけり。憶ふに今番素藤も、亦那項羽が鬻に倣ふて、義通を像の如くに、計ふて寄隊を折く、豫の計較ならんかし。しからんには義成に、漢の高祖の胆勇ありとも、敵と勢ひと同じからねば、必難義に及びやせん。胸苦しきはこの事のみ、といと不樂しげに仰せしかば、小臣初てその義を曉得て、然らば甚たる計略をもて、御曹司を救ひ取り、まゐらすべうもや、と問奉りしに、否、我も亦機に臨ねば、思ひ得たりし事はなけれど、家に豕なし。二十たび見ば、神の教に稱ひやせん。是より外に術はあらじ、と仰示させ給ひしを、思ひ難つゝ、二たびは、問まつらんもさすがにて、惑ひは今に解ざりき。いかなる情由に候やらん。と報るを義成うち聴て、眉根を擧め手を叉き、沈吟じ給ふこと、既にして半响許、忽地莞爾とうち笑て、十一郎はまだ悟らずや。我その御意を思ひ得たり。夫家にして豕なきは、則是山の字にて、二十たび見るは、井也見なり。この三字を合すれば、寛の一字になれる也。寛は緩也、ゆるやか也。然ば素藤を攻撃つに、性急にせて寛やかに、計れと仰する隠語ならん。この義は豫傳へ聞たる、神の託宣示現のよしあり。それを忘れたるにあらねども、人傳なれば然ばかりに、信用んとも欲りせざりしは、鈍や凡夫の狐疑にして、方僅緩急の利害を知りぬ。神と親との教誨に悖らば、みづから幫助を失ふ也。我明日よりは館山を、遠巻にして急に攻めず、徐に便宜を等べきのみ。歸城の折に、これらのよしを、聞えあげよ。と睿智の決斷、いと正首に示させ給へば、照文深く感悦して、仰うけぱり奉りぬ。立かへる日を大殿の、さぞ等不悞しく思召らめ。今宵は且大樟村まで、退きて明日の歸路をいそがん。身の暇を賜るべし。と稟して聽て辰相們にも、告別して立程に、當陣の雜兵居多出て、照文が馬に馳して、齎したる樽を運び、乾魚の苞も拿入れて、收納はやくも事果しかば、照文は伴當を、いそがし立つゝ、幾十疋の馬を還して、大樟の、學店を投て退りけり。爾後又義成主は、辰相連時良于們に、感狀を賜りて、その軍功の賞大かたならず。這宅、小森高宗、浦安友勝們的の諸勇士をも、漏さず

俱に召寄て、或はその勇戦を譽め、或はその忠諫を賞し給ひて、然而瀧田殿より賜したる、樽を開き乾魚を啗ちて、限なく拿らし給ひしかば、雜兵に至るまで、恩を拜し徳を稱へて、歡び勇ざるはなかりけり。却説里見義成主は、次の日二千餘の、諸軍兵を隊部して、未明より館山の、城へ推寄給ひしかども、遠巻にして攻も撃ず。城を去ること二町有餘、究竟の地方を擇て、一日に陣屋を建連て、雨露を禦ぐ準備あり。夜は箭火を燒續けて、夜撃朝蒐の用心に懈らず。昨日撃捕たる、城兵の首級を梟並べて、をさく武威を赫奕し、よく敵城の咽喉を扼りて、飛鳥だにも漏すまじき、冲對の堅陣濃やかなるものから、館山の城内にも、戰粟箭種火藥に、置しきことのなかりしかば、恚りけれども氣を屈せず。素藤は倒に、攻撃れぬを幸ひにして、矢傷を療養したりしに、既に日屬を歴る隨に、その瘡痕瘻り果しかば、卒や寄隊の奴們に、打腫を覺させくれんずとて、士卒に下知して、間なく時なく、鼓を鳴らし鬨の聲を颯などして、撃出んとする勢ひを示し、ある時は又義通君を、城樓に吊登して、譴要むに、大音なる士卒を擇て、罵らすること初のごとく、寄隊を通りに招く光景、間遠ければ朦朧にて、寄隊の陣へは聲届ねども、然りとて見えぬにあらざれば、里見の士卒は怒に得堪ず、攻蒐らんとて鬨くもありしを、義成緊しく制させて、倘軍令に背くものは、首を刎ん、と徇られしかば、性起る勇士も猛卒も、俱に安からぬ胸を鎮めて、やうやく思ひ止りけり。左右する程に春も良、二月下旬になるものから、素藤は一番も、士卒を出して、敵を襲はず。寄隊は迥に城を眺めて、長き日ぐらし銷し難たる、鬱をやる方なかりけり。然ば素藤この折に、風ある夜艾士卒を出して、寄隊の本陣を火攻せば、そは必勝の勢ひならんに、他は奸智に長たるのみ、素より六韜三略の、兵書を知れるものならねば、然る軍略は思ひもかけず、いたづらに日を彌りたり。話分兩頭。爾程に、瀧田の老侯義實朝臣（里見治部大輔）は、瀧に蚤崎十郎照文を、新戸の陣所へ遣して、那里の勝敗を听せ給ひしに、始逆將素藤が、義通君を城樓に登して、譴要みつ寄隊に向ひて、非禮の婚媾を討めし事、この折、後に東辰相が、素藤を射て、瘡を負せし事、この日蚤崎照文が、

老侯の使として、新戸の陣に來ぬるに及びて、義成朝臣はゆくりなく、神と親との教を悟りて、是後火速に寇を攻めず、遠巻にして便宜の折を、等んと宣ひし事の趣、都て分明なりしかば、聊慰め給ふものから、それより三十許日を歴て、二月下旬になるまでに、躬方に利あるよしは聞えず。義通君の存亡を、知るよしとてもなかりしかば、左に右胸は安からず、懇思ひ給ふやう、恁る折に那犬士門が、在らば幫助になりぬべし。穗北に止宿と聞えしを、微迎んはさすがにて、當家の武徳は衰たる歟、と思れもせば恥しからん。初義通の伴當門が、再生の奇特ありしも、又館山の賊徒の首級を、樹杪に懸たるも、猜するに我亡女、伏姫の神靈の、冥助にこそありつらめ。烈女の魂、今なほ滅びず、那靈恚まで灼然なりし歟。爾後は義成を、幫助んとせられずや。今に至りて義通を、拯ひ取るべき便宜もなく、躬方の士卒はいたづらに、城を睨て日を彌るとのみ、人傳に聞くうればしさを。僕れば星移りて、甘稔あまりの昔になりぬ。伏姫が自殺の後、那山の山河、水十倍して、今なほ一日も瀬を見さず。この故に、渡せる橋は推流され、舟も筏も桿屈かねば、樵夫牧童だも登り得ず、人跡久しく絶しより、我も亦伏姫の、墳墓を見るよしもなし。只年々の忌日毎に、大山寺へ參詣して、他が菩提を弔ふのみ。然ば明日件の寺へ、詣て那神靈の、冥助を悄々地に祈りなば、感應せられて、義成が、武運芽出たく、十全の、勝利を得ぬる事もあらん。嗚呼しかなり、と心ひとつに、既に尋思をし給ひしかば、その宵蟹崎照文門に、よしを示し伴衛させて、次の日の未明より、瀧田の城をぞ出給ふ。微行の事にしあれば、伴當は最變して、照文並に近習には、東峯萌三、小水門目、船船員六郎など喚做たる、四名の後生のみ、この餘雑色奴僕に至るまで、四五十名に過ぎれども、大山寺にて、燒香の折の禮服、及布施物などは、都て照文が奉りて、兩箇の柳宮に藏めつゝ、伴の奴隸に託したり。又老侯の茶辦當、伴當の割籠なども、脱落あるべき事ならねども、諄々しき具にせず。却説里見義實朝臣は、走驅と命けたる、三歳鬮の駿足にうち跨りて、那富山の麓路なる、大山寺に詣給ひしかば、住持は大家を領て、みづから出迎て、佛殿へ導きたり。登時義實朝臣は、

準備の禮服に更めて、本尊を拜み奉り、次に伏姫の位牌に燒香して、祈念を凝し給ふこと半响許。既に退きて、禮服を脱袂けて、舊の野服に更給へば、僧衆客殿に請待して、茶をまゐらせ菓子をまゐらせ、住持も侍りて、おん布施の、歡びを符などしつゝ、一霎時慰めまうしたる、語次に住持のいふやう、豫知食すごとく、當寺より遠からぬ、富山の腰なる山河は、流水久しく淵を做して、人皆涉ることを得ざりしに、隔昨の曉より、那山河の水猛可に涸て、砂石を顯すまでになりたり。然ば三尺の童子といふとも、皆憑渉すべけれども、登山の後にその水の、又推來たることあらば、還るに路のなからんかとて、間近き里の老弱も、俯みていまだ涉らずといふ、風聲隠れ候はず。廿稔あまり淵を做したる、激流の一朝に、涸竭せしは、是も亦、奇しき事にて候はずや。といふを義實うち听給ひて、そは幸ひある事ならん。是よりの後木樵り炭造く、民の便宜になりぬべし。と回答て聽て遠しく、告別して出給へば、住持は亦復大家と俱に、玄關まで送りまゐらせけり。却説義實朝臣は、近習門を從へて、寺門を出つゝ、笠深くして、馬に跨んとし給ふ折、那富山の河水の、涸たりといふ事の趣を、照文並に近習門に、辭せわしく尋き知らしめて、我は是より富山に登りて、絶て久しき伏姫の、墳墓を見まく欲す。このころを得て伴せよ。と仰を大家承りて、雑色にも奴隸にも、件のよしを下知しつゝ、那山へ俱しまゐらせけり。兩程に義實朝臣は、馬の脚掻をはやめつゝ、聽て富山に赴きて、那山河の頭に来つゝ、那這と看互し給ふに、現風聲に違ふことなく、這川都て涸竭して、水は毫もなかりけり。然ば照文を首として、おん伴の毎は、聞しに優たる光景に、驚き思ざるはなく、奴隸は俱に舌を吐きて、奇也々々。と稱へたり。登時義實は、馬より因りと下立つゝ、準備の発兒に尻を掛て、照文に宣ふやう、登山に伴當多かるは、倒に路次の煩ひならん。且十一郎が親蟹崎照武は、當初八房の犬に伴れたる、伏姫を趕留んとて、這川にして事ありければ、先蹤尤不祥也。照文は這里に留りて、我がへり來ぬるを等ね。是より我身に從へんものは、東峯萌三、小水門目、船船員六門三名にて事足りてん、その餘は姑且要なし。と聞え知らしつゝ、鞋奴

に、持せし草鞋に穿更さして、杖を携、遠しく、身を起さんとし給ひしを、照文雲時、と禁め稟さく、御説うけば候へども、年居多人迹絶たる、高峯に登らせ給ふに及びて、纒に三個のおん伴當は、物體なく候はずや。切て十名二十名、従ひまつらば後安けん。餘人は生まれ右もあれ、小臣は那里までも、おん伴をこそせまほしけれ。親が這里にて身故りしとて、今さら不祥とせられんは、恐れながら本意にあらず。と憚るを義實聞あへず、否這山は昔より、猛獸毒蛇あることを聞かず。久しく人迹絶たりとも、何等の憚あるべきや。且伏姫の亡魂は、這山に留りて、親の守りになりもやせん。益なき言に、時をな移しそ。但よく人馬を聚合して、かへさを等こそよかめれ。と諭して河原に下立て、出たる石を踏傳ひて、前面の岸に登り給ふに、水涸たれば、野袴の、裾も濡さず易かりける。是よりして義實主は、三個の近習を従へて、みづから山踏をし給ふこと、幾町にか及ぶ程に、忽地後方を見かへりて、東峯萌三に宣ふやう、心屬なき事こそあれ。伏姫が墓に水を手向る折、石滴を汲取る東西なくては、手を空しうする外はあらじ。汝は快く走かへりて、馬柄杓を携、來つべく、且奴隷を領て、近村へ、赴きて花を求め、そも携て、後より來よ。折から二月の下浣なれば、這山にも花はあれど、這里なるを手折て、這里なる墓へ、手向んは疎略に似たり。快々せよ。といそがし給へば、萌三は應をしつゝ、躓て踵を旋らして、今來し路へ走りけり。恁而義實、主從三名、なほも程ある伏姫の、墳墓を投て登り給へば、三月に隣る峯上の櫻、這里も那里も開初て、花香寄する春の風、吹くとはなしに霞こめし、谷の柴鶴鶴、珍らしき、人來と鳴くや、我も亦、經こそ讀め墓參り、路の小草も目にぞ馮く、現托生の蓮華草、導き給へ佛の座、心づくしも幾春を、今は杉菜と臺に立つ、色美しき草も木も、竟に悉皆成佛の、功德を徐に念じつゝ、山又山を向うれば、奇虫突立して、造物天然の妙工を見はし、嶮邊迥に直下せば、白雲聳起りて、谷神窅然と玄牝の門を開けり。然ば流水に零る桃花は、武陵の仙境遠きにあらす、偃松に罹る藤葛は、天台の石橋危きに似たり。現眼に麗耳に聞くもの、皆悉く浮世の塵を、洗流せる靈場佳景、むかし見つるに類増たる、義



(す 舘に 侯老に 厄てし 世出再童神)

實憶はず、杖を拵めて、一霎時懸ひて、伏姫の、恨察られし曲屈に、稍近著んとし給ふ程に、左右に間なき樹蔭より、弦音高く射出す獵箭に、先に立たる近習の侍、小水門目は高股を、射られて托地と轉輾ぶ、程しもあらず又二の箭に、後方に從ふ船員六、こも亦膝を下叩に、射さして苦と叫びもあへず、仰反ながら仆れけり。登時左右の樹間より、顯れ出る隠胞兒四五名、手にく持る竹槍を、頻揚て喚る聲も齊一、やをれ義實、我々は、昔年汝に亡されたる、満呂安西、及神餘の與に、けふこそ復す怨の槍尖を、受ても見よや。と罵りて、右ひだりより競ひ蒐るを、義實法たる氣色もなく、寄せば撃ん、と杖うち棄て、刀の琿甘げつ、寇を疾視て立給ふ。浩處に傍なる、樹の蔭に又人ありて、天地に响く聲をふり立、やをれ隠胞兒們、無禮をすな、里見殿に宿因ある、八犬士の隨一と、その名は豫知られたる、大江親兵衛仁こゝにあり、住れやッ。と喚りて、走り出来る大童子、是甚なる打扮ぞ。但見る身の長三尺四五寸、面の色は薄紅にて、

桃の花を連ねし似く、肌膚は白く、肉肥て、骨逞しき勇士の相貌、身には段々筋の山樵衣の下に錦の襦袢を被て、手には六尺許なる、素朴の櫛の自然棒を、最も輕氣に腋挟み、腰に一口の短刀を、蕭下しに帶做て、振亂したる額髪は、年才より長ある神童の、威風に駭く臆兒們は、舌を吐き目を注して、左右なく找み難たりける。この段特に長やかなれば、集を套ね巻を更て、第七卷の首に解ん。本集下帙も亦六卷あり、看官姑且渴を忍びて、續出す日を等ねかし。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之六 終

八犬傳第九輯中帙附言

本傳は、文化十一年甲戌の春、書賈平林堂(弓張月の板元)の爲に、第一輯の復稿を思ひ起せしに、平林堂類編既に七旬、長編の刊行做し果さん事、心許なしとて、そが夥計の書賈、山青堂に譲らんと請ひしかば、予その意に儘して、當時稿本五巻を、山青堂に取らじけり。かくて書畫割刷の工成りて、おなじ年の冬、始めて世に見はるゝこととはなりぬ。十三年丙子の春正月、第二輯五巻を續出すに及て、世評いよく喝采、看官亦復後輯の出るを俟こと、一日千秋の如しといふめり。是よりして後山青堂多慾の故に、他事に耽ると聞えしかば、刊行等閑の年間これあり、第三輯五巻は、文政二年己卯春正月續出し、第四輯四巻は、三年庚辰冬十二月發版し、第五輯六巻は、六年癸未春正月續出しにけり。第一輯を刊行の年よりして、こゝに至りて十箇年になりぬ。然ば毎編出るを俟つゝ、看官渴望せざるはなく、掌球撫玉に異ならず。その時好に稱ひしもの、今昔無比と聞えながら、刊行の書肆が等閑なる、贏餘を他債の爲に果して、本錢續すなりにけん、新舊五輯の刻板を、涌泉堂に賣與へしかば、第六輯より下、續刻の書賈替りて、第六輯五巻(五の巻を盡て上下とす。本輯即六巻なり)は、十年丁亥春正月、涌泉堂が刊行しけり。第五輯發版の年よりして、中絶こゝに五箇年なりき。かくて第七輯七巻は、おなじ年の冬十一月、稿本既に成るものから、涌泉堂も亦本錢續す。その上帙四巻は、書林文溪堂の資助によりて、十二年己丑の冬十月二十九日に發版せしを、當時予はさりともしらず、下帙三巻は、十三年春正月、辛くして續出すことを得たり。しかるに亦涌泉堂も、等閑にして、理義を思はず、始よりして校閱を、一字も作者に乞ざりければ、備書剛人の爲に認れて、稿本と同じからざるもの多くあり。況七輯發兌のよしを、報することもなかりしかば、予はその例に違へるを、咎めて云云といひし折、書林永壽堂、文溪堂等、爲に勸解るに怠狀をもてしつゝ、陪話數四に及びにけるを、なほ聽ざらんはさすがに

て、いふかひもなく已にけり。かゝりし程に涌泉堂は、後輯の刊行に、微力足るよしなければとて、第一輯より七輯まで、所藏の刻板を活却せしかば、大阪の書林某甲が、購得てもて去にきと聞えたり。然而第八輯より以下の刊行は、文溪堂が購受て、續出す事になりしかば、本傳新舊の板家扶は、江戸大阪と兩家になりぬ。第五輯より下、ここに至り、刊行の書肆の替りし事、前後都て四名也。且いまだ結局に至らざるに、その板分れて七輯までは、遙に浪速に售遣られて、予は毫ばかりも識らざりける、彼地の書肆の藏板になりけるを、思へば一奇といはまぐのみ。識者はこの折眉を擧めて、江戸の花を失ひぬとて、嗟嘆しけるもありと敷聞にき。遮莫なほ幸ひに、第八輯より下は、江戸の書肆が刊行すなる、文溪堂の所藏になれ、作者の面を起すに似たり。榮辱得失、物皆爾なり。本傳にのみ限らんや。是等によりても有爲轉變の、速なるを思ふに足れり。かくて第八輯は、江戸の書林文溪堂が刊行しつゝ、天保三年壬辰の夏五月二十日に、上帙五卷（四の卷は上下二卷なれば即五卷也）を發販し、下帙五卷（八の卷を上下二卷とす）は、四年癸巳春正月續出し、第九輯上帙六卷は、今茲乙未春二月二十日に發兌しぬ。中帙七卷は、今番出せり。又下帙七卷は、明年丙申の春敷、遅く成るとも、秋冬の時候までには、必し續出して、大團圓になさま欲す。かゝれば六輯以下の分巻、共に六十八卷、一百二十八回にして、竟に全部たらんもの也。抑策子物語の、かく長やかに續るは、この書の外にまだ見ず。天もし作者に壽を借して、この筆すさみあらざりせば、二十餘年の久しきに、飽こともなくよく堪て、この結局を世の人に、見することはかたからんを、命あり時ありて、團圓將近からんとす。あな懽し、あなめでた。神官冥利に稱ひにけん、と思ふも烏澁の所爲にぞありける。

この書第五輯までは、一帙五卷を一輯とす。第五輯の六卷なるは、四輯の足らざるを補へる也。しかるに第六輯より以下は、涌泉堂等が乞ふに儘して、或は六卷を一輯とし、或は七卷を一輯とす。かくて第八輯に至りては、文溪堂の所爲に、十卷二帙を一輯とす。第九輯は卷の數いよます、多くなりつゝ、二十卷を三に分ちて、上帙中帙下帙とす。それを第五輯までの如く、毎輯五卷ならんには、十三四輯に至るべし。然るを九輯に絶めしは、文溪堂の所爲にあなれど、今さら思へば、こもよしあり。八は陰數の終り也、八の下に十あれども、十は一にかよふをもて、陰數の終りとせず。九は陽數の終り也、かゝれば八犬英士の全傳、局を九輯に結ぶこと、その所以なきにあらずかし。

吾嘗唐山の稗史を見るに、水滸西遊記傳の如き、是大筆の手段といへども、水滸は一百八箇の豪傑、その人極めて多ければ、史進、魯智深、楊志、武松等、全傳開手の豪傑なるに、梁山泊に入りしより、その勢ひ始に似ず。俱に軍陣に在むの外は、ありといへどもなきが如し。況百八人ならぬ者は、始ありて終なく、俗に云立滅せざるは稀也。又西遊記は、三藏師徒、孫猪沙と是四名のみ。その人極めて寡ければ、其事相似て且重復多かり。水滸にも亦重復あり。長物語は覺ずして、彼重復の瑕疵あること、年來みづから筆を把て、是等の苦海に墮落せざれば、所以ありけり、と悟るに由なし。最烏澁がましき説話なれども、本傳は、始より、用意をさく、加減あり。迺水滸百八人の、百を除きて八犬士あり。又加るに八犬女あり。且里見侯父子と、大と俱に一十九人。是を一部の主人公とす。かゝればその人多からず、又その人寡からず、水滸の多きと、西遊の、寡きには似るべくもあらず。この餘も忠臣義士はさら也、彼泛々の者といへども、始あれば終あり。中途にして立滅せし者、一人としてあることなし。看官徐に結局まで見ば、作者の用意を知るよしあらん。

唐山元明の才子等が作れる稗史には、おのづから法則あり。所謂法則は、一に主客、二に伏線、三に襯染、四に照應、五に反對、六に省筆、七に隱微即是のみ。主客は、此間の能樂にいふシテワキの如し、その書に一部の主客あり、又一回毎に主客ありて、主も亦客になることあり、客も亦主にならざることを得ず。譬ば象棋の起馬の如し。敵の馬を略るときは、その馬をもて彼を攻、我馬を喪へば、我馬をもて苦しめらる。變化安にぞ疆りあらん。是主客の崖略也。又伏線と襯染は、その事相似て同じからず。所謂伏線は、後に必出すべき趣向あるを、數回以前に、些墨打をして

置く事也。又襪染は下染にて、此間にいふしこみの事也。こは後に大關目の、妙趣向を出さんとて、數回前より、その事の、起本來歴をしこみ措也。金瑞が水滸傳の評注には、遺染に作れり、即襪染とおなじ。共にしたぞめと訓むべし。又照應は照對ともいふ。譬ば律詩に對句ある如く、彼と此と相照らして、趣向に對を取るをいふ。かゝれば照對は、重復に似たれども、必是同じからず。重復は、作者謬て、前の趣向に似たる事を、後に至て復出すをいふ。又照對は、故意前の趣向に對を取て、彼と此とを照らす也。譬ば本傳第九十回、船虫蠅内が、牛の角をもて戮せらるゝは、第七十四回、北越二十村なる、鬪牛の照對也。又八十四回なる、犬飼現八が、千住河にて、繫舟の組撃は、第三十一回、信乃が芳流閣上なる、組撃の反對也。這反對は、照對と相似て同じからず。照對は、牛をもて牛に對するが如し。その物は同じけれども、その事は同じからず。又反對は、その人は同じけれども、その事は同じからず。信乃が組撃は、閣上にて、閣下に繫舟あり。千住河の組撃は、船中にして樓閣なし、且前には現八が信乃を捕んと欲りし、後には信乃と道節が、現八を捉へんとす。情態光景、太く異也。こゝをもて反對とす。事は此彼相反きて、おのづからに對を做すのみ。本傳にはこの對多かり。枚擧るに違あらず。餘は俶らへて知るべきのみ。又省筆は、事の長きを、後に重ていはざらん爲に、必開かて稱ぬ人に、偷聞させて筆を省き、或は地の詞をもてせずして、その人の口中より、説出すをもて脩からず。作者の筆を省が爲に、看官も亦倦ざるなり、又隱微は、作者の文外に深意あり。百年の後知音を俟て、是を悟らしめんとす。水滸傳には隱微多かり。李賢金瑞等、いへばさら也、唐山なる文人才子に、水滸を弄ぶ者多かれども、評し得て、詳に、隱微を發明せしものなし。隱微は悟りがたけれども、七法則すら知らずして、綴るものさぞあらん。及ばすながら本傳には、彼法則に做ふこと多かり。又但本傳のみならず、美少年録、俠客傳この餘も都て法則あり。看官これを知るやしらすや。子夏曰、小道といへども見るべき者あり。嗚呼、談何ぞ容易ならん。これらのよしは知音の評に、折々答へしことながら、亦看官の爲に注しつ。

予が毎に續る、策子物語の寫本はさら也、駭駭る折卷々を、校閱せざることはなけれど、刊行の書肆として、世に知らぬ者もなければ、作者のこゝろに儘せぬ事多かり。且その卷々は、己が綴れる文どもなれば、眼に熟れてまだ忘れぬを、なほ幾回も讀復せば、誤寫ありとても心つかで、暗記の隨に讀るゝから、動もすれば檢遺して、後に悔しく思ふ事尠からず。總て刻本は、書畫俱に人に誦へて、板下てふ物を調へぬれば、必その板下に、訛舛なきことを得ざる也。是に加るに、鬪人の誤刀あり。半頁十一行なるも、眞名毎に傍訓あれば、眞名と假名と二行になりて、半頁二十二行に等しき、その文字幾百なるを知らず。然るを熟たる眼にて、最も急迫しく校閱しぬれば、檢遺す誤脱多かりしを、事過きたるは姑闕きぬ。本輯上帙六卷にも、筆工の誤寫ありしを、出版の後に見出しにき。そをひとつふたつ左に録す。一の卷判荷、當に荆軻に作るべし、荷は誤寫也。二の卷正行、當に正義に作るべし。六の卷誠壯、雖は皺のあやまりにて、筆工の手にたかへるを、校閱の折檢遺したり。この餘てにをはの錯へるは、輯毎になきはあらず。第一輯は殊に多かり。當この本文のみならず、本輯上帙の引に、孔子家語を引て、有文武事者必有武備といふべきを、誤て文備に作れり。(本書此に従つて訂正せり) 又第八輯の自序に、莊子を引て、名者實之賓とある、者の字を脱されたり。是より先にも、自序に誤寫あり轉倒あるを、後に至て見出しは、いかにせん悔ども及ばず。發版の後、その板に、埋材などして彫更るは、六日の菖蒲、十日の菊にて、長視榮なき所行なれば、梓行の書肆が歡ばず。承引ながら等閑にて、竟に果さずならぬは稀也。遮莫その訛謬あるも、多かる本文はさることながら、漢文の自序などは、二三頁に過ぎるに、そをしも校合のゆき届ぬはいかにぞや、と思ふ人もあるべけれど、序目は、卷々を稿じ果て、いと後に綴りぬれば、刊刻も隨て、最太う後れしを、本文摺刷の折などに、急迫しく校閱しぬるをもて、熟讀重訂の暇なければ、二三頁の物といへども、檢遺さざることを得ず。且出像などに至りては、蛇足の爲に、動もすれば、作者の畫稿と違ふもあれど、改め畫かせんはさすがにて、そが儘にして闕くも多かり。看官作者の苦界を

知らねば、その稿本の訛謬なめり、と思はぬは稀なるべし。いにしへの人のいへらく、書を校するは、風葉と、塵埃にしも異ならず。随て拂ひぬれば、随て又これあり。書として孰か誤寫なからむ。況遊戯の策子をや。吾亦ふかく懸念せず、そは知る人ぞ知るべからむ。褒貶毀譽を度外に置いて、具眼の指摘に儘するのみ。

予が著したる物の本、或は合巻と唱る繪冊子の、ふりたる板家扶を購求めて、恣に畫を新にし、且書名を改めて、それを新板に紛しつゝ、翻刻して鬻ぐものありと聞にき。そは勸善常世物語、三國一夜物語、化競丑三鐘などの事は、郷に本傳前輯の、簡端に既にいへり。近屬又括頭巾縮緬紙衣三巻を重刻して、腕久松山物語と書名を改め、出像を新しくせしものあるを見き。その書は、文化三丙寅年、書買住吉屋政五郎の需に應じて、予が綴りたるなれば、今に至り三十許年の、春秋を歴ぬる舊作なれど、知らざる人は惑されて、新板ならんと思ふもあるべし。且書名の更ざまも、甚なる狡兒の所爲なりけん、腕久松山物語と改めしは、作者の用意を得ぞ知らぬ、寔に烏滸の黠竄なるかな。夫腕久は標客也、又松山は遊女也。縦その小傳を爲るとも、その書に命くべきものにあらず。是を作者の用心とす。かゝる意味だもしらずして、放なる更改は、莊子に所云倏忽が、混沌を損ふと、亦何ぞ異ならん。只是嗟嘆に堪ざるもの也。又高尾船字文(中本五卷)は、寛政七乙卯年、予が始て綴りし策子物語なりければ、いとをさなしたとも拙くて、今さらに又見るに得堪ず。嘔吐もしつべきものなるを、去歲の冬そを重刻して、端像を新しくせしもの出たり。爾るもその翻刻本には、再板としられたれば、腕久松山物語のごとき、世を欺くに優すよしあれども、俱に作者に重刻の、義をも告す、恣に畫を更、或は書名を更て、竊に蠅頭の微利を欲りする歟。人を人とも思はざりける、皆是賈豎の所以にぞ有ける。よりていぬる比、その再板本を予も聞せしに、自序の落款にかしき事あり。そは題三於雜貨店帳合之暇、としるせし是なり。雜貨は唐山の俗語にて、此間にいふ高麗物の類なり。四十餘年の昔といふとも、予は高麗物を鬻ぎし事なし。便是當年の洒落にて、都て裨官者流の肚裏には、種々無量の意材あり。譬は

雜貨高麗物の、品類最も多きに似たれば、投云云としるせしが、適當時の洒落にて、識者の笑を取る爲なれども、開も流行に後れては、をかしからぬのみならず、看官疑惑ふべし。然ば件の船字文は、水滸焚椒録などを、此彼と撮合して、綴做たるものながら、四十年前の拙作にて、疎文いふべうもあらざるを、翻刻して世に出されては、禪き折せし手習葉子を、老後に汝が手蹟ぞとて、賣弄せらるゝに異ならず。いと恥しきものにしあれば、翻刻本は、原刻と、文の錯へるや、さもなきや、予はよみ見るに懶ければ、古見琴嶺が在世の日、今茲の春二三月の比にやありけん、命じて舊本と比較せしに、處々に誤脱あるのみ、大かたは違はずといひにき。よしや寫し僻めずとも、今さら疎文をいかゞはせん。看官これを思ひねかし。又大師河原撫子話といふ、合巻の繪策子も、予が舊作にて、今より三十一年已前、文化二年乙丑の冬、畊書堂が刊行せしを、今亦畫を更重刻して、新板の如くにしつゝ、鬻ぐものありと聞にき。是等も作者に告ざりければ、思ひがけなく人傳に聞にき。この餘も予はいまだしらぬ、烏滸の重刻さぞあらむ。吾在世にすら書肆等が、恣なる事かくの如し。なからん後はいかなるべき。そも浮たる名の所以にはあれど、名を賣らるゝこそうるさけれ。近世明和安永年間、風來山人(平賀鳩溪)が戲墨の策子、太く世に行れしかば、その身後に至りても、偽作せしもの多く出たり。今をもて昔をおもへば、わがうへにのみあらざりける。こゝに虚名の昨非を知りて、嗟歎のあまり懷を述たる、吾多せ長うた反歌あり。こも亦要なきすさみながら、録してもて箴とす。歌にいへらく。

あだし世に	あだし世わたる	あだし名の	あだにしたて婆
はづかしき	こゝろあさ瀬の	水くきは	ちびたる筆と
すみ田河	いざこととはん	人しあらば	なしとこたへて
夏の夜は	ほたるあつめし	まどの外に	杖をもひか傳

なまそぢの 翁さびたる すぎみには 於曾しや似けも
 あらがねの 眞金にあらぬ あだしぶみ つゞれさせてふ
 むしよりも はかなかりけり あめつちの むすびの神の
 あやまちか かくまでをこの しれ人を うみだしけん
 ゆゑよしを いはまくすれど くちなしの 花のみめてて
 山ぶきの 實のありとしも 得ぞしらぬ あだし世の人
 あながまや あだしこの名を としあまた あだにしられし
 身をいかにせむ

反歌

かくれてもなほあだなりきみの笠の名はあらはれしあめのしたはも
 天保六年といふとしのはつきとをまりふつかにしるしつ

蓑 笠 漁 隱

南總里見八犬傳第九輯中套總目錄

- 卷之七 第四百四回 富山之餘波 とやまの なごり
- 謁ニ老侯ニ親兵衛訟ニ神助ニ おとろうきとておとこに しのおのくきしんす
- 驚ニ奇特ニ刺客等各歸順 おどろきとておとこに しのおのくきしんす
- 同 卷 第四百五回 富山之餘波 とやまの なごり
- 名山有靈枯樹復花 めいざんありやうこじゆふたしなばな
- 逃客無路老俠獻俘 にやうかくなしみちをらうけけんとりこ
- 是のこ はるのこ
- 卷之八 第四百六回 大山寺春宵 おほやまてらの はるのよ
- 牽ニ青海波ニ景能自稻村ニ來 ひきてせいはなを かげよしも いなほらきたる
- 犯ニ黒闇夜ニ曼譜信赴ニ館山ニ なかりてあやをまさしおちむくたに
- 同 卷 第四百七回 館城之着落 たてのしろの おちかた
- 里見御曹司優還ニ陣營ニ さとみおんせうしめにかへるちんえい
- 卷之九 第四百八回 館城之着落 たてのしろの おちかた
- 義成 旨仁 寛刑 よしのむねとじてじんをゆるくすけい
- 貞行 調主 奏克 さだゆきとてしんすかちを
- 同 卷 第四百九回 妖怪之卷 あやしみの まき
- 八百尼山居誘ニ引敗將ニ はちやくにさんきよいざなふはせう
- 濱路姫病牀被ニ冤鬼壓ニ はまじひめびやうしやうにゐんきにおそは
- 卷之十 第四百十回 妖怪之卷 あやしみの まき
- 反間術妙棒 遠ニ大江ニ はんかんじゆつみやうちんとほくやなえ
- 妖書孽仁 辭ニ別妙眞ニ えうしよのわざひんせしちへきまやうしん
- 同 卷 第四百十一回 館山後卷 たてやまの のちのまき
- 妖尼庭聚ニ家兵ニ えうににばあつしゆへい
- 素藤夜襲ニ舊城ニ もとふぢよらおそふきやうじやう

懿哉八犬之英士。起八方也。妙哉一顆之靈玉。護一身也。仁義禮智。救柔挫剛。忠信孝悌。補君討讎。抑離散。有時。行會。有日。八士不蓋。誓者。殆二十餘年。終同歸一州。而威名不朽。然當時載筆者。未具。粵肇有演義書。是義笠翁所編述。筆端波瀾。與彼水滸三國演義。拮抗。自是書一出。于世。而人人方知。犬士所以爲犬士。可謂奇且盛矣。余叨賦拙詩。以爲證。詩曰。

犬姓俊雄都八人 俱惟里見股肱臣
乾坤到處曾無敵 踔躒義翁碑史陳

琴 籟 閑 人 題

南總里見八犬傳 第九輯 卷之七

東都 曲亭 主人編次

第四百四回

老侯に謁して親兵衛神助を訟ふ
奇特に驚て刺客等各歸順す

再說、那廝兇兒們は、手に槍を閃かし、義實主を拿綱て、擊果さんとて鬪く折から、思ひがけなき樹間より、只見る一個の大童男、大江親兵衛仁と名告て、叫禁めつゝ突然と、走り出来る面魂、足柄山に生育たる、又那酒田公時ならずは、童話に聞えたる、桃太郎にはあらずや、と驚き呆るゝ廝兇兒們は、勢ひ忽地胆落て、他は怎麼、とばかりに、憶はず俱に兵兵と、逡巡して、左右なくは、有繫に擊も蒐り得ず。然とて續く敵なきを見て、思ひ回せし諸聲高く、噫嘻きたり、小猴子奴が、秣を刈り牛を鞭ち、狗を走らし兎を趕はゞ、その身に相應しかるべきを、命も知らぬ似而非胆勇、由なく仇の助剣して、息絶る折、後悔すな。快撃任せ。と動揺めきて、多勢を憑む假猛者、槍を拈て左右より、咄と嘯きて、三七二十一に、競蒐れど、親兵衛は、毫も噪かず身を反して、素樸の棒もて擊拂ふ。向に前なき奮勇鬪挑、當るべうもあらざれば、廝兇兒每は避易して、皆竿槍を打折られ、刀抜く間も奈麻與民の、腕前經肩腰骨を、撃惱されて平張伏たる、そが中に一個の廝兇兒、聊本事あるものなるべし。連りに槍をうち閃めかして、刺んと抜むを、親兵衛は、もの／＼しや。と受住て、邪と聲かけて、丁と撃つ、劇しき棒の術中に、這も亦槍を打折られ、餘れる棒に肩尖を、撃れて痛楚に堪ざりけん、苦と一聲叫びも果す、仆れんとせし脚踏住めて、樹の間潜りて逃走るを、親兵衛透さず趕ふたりけるに、往方も知らずなりしかば、冷笑ひつゝ趕捨て、舊所にかへり來つ、擊仆

したる隠胎兒四名を、腰に準備の藤蓑もて、威嚇々と縛縛めて、傍の松に繫住め、兩袒さし袖を斂め、裳を下し塵うち拂ひて、義實主の身邊に来つゝ、額衝き跪坐て粟すやう、烏濤がましうは候へども、我姓名は、豫より、聞召たることもあるべし。小可は下總なる、市川の船長にて候ひし、山林房八が獨子にて、初名は眞平とも、又大八とも喚れたる、大江親兵衛仁にて候也。君がけふの厄難を、我恩神の誨によりて、豫知るよしありしかば、聊先途に達まるらせて、見參に入りまつること、又是神慮に憑れるのみ。君臣一致の時日到來、寇は輒く對治せられて、おん身に恙まします。いと歡しくこそといふ、辯説さへに鄙ならて、大人備たりける進止の、世に憑しく見えにけり。爾程に義實主は、思ひがけなき隠胎兒門に、伴當二名を射て仆され、已ことを得ず手を下して、みづから防戰んとて、刀の柄に手を掛給ふ、程しもあらず一個の少年、大江親兵衛仁と名告て、樹粒の蔭より顯れ出、瞬間に五個の、寇を撃伏せ赶走らしたる、武藝勇敢、人柄まで、思ふに優たる擗きに、且驚き且訝りて、うち目成りてをせしに、禍鬼はやくうち讓ひぬる、這少年は豫聞く、犬士の一人、大江親兵衛仁なりき、と名告ること、既に分明なるものか、疑霧いまだ霽ねば、そが儘に傍なる、巨樹の株に尻をうち掛け、眉根を鬘め左見右見て、原來和郎は、妙眞が、孫と聞えし大江氏、那大八の親兵衛なりし歟。生れながらに仁の字の、玉を持ちし甲斐ありて、親房八に優りやすらん。犬士の隊に入りぬべき、恁々の瘧子ありといふ、妙眞竝に照文門が、噂に豫听しかど、神察しとかいふことにて、往方も知らずなりにしは、六稔以前の事にして、年四ばかりの秋ならずや。然ば和郎はやうやくに、今茲は九才なるべし、と思ひしに似ず、身長は、約莫三尺四寸あらん、筋骨さへに逞しく、凡庸の少年の、十六七歳なるものといふとも、及がたかる武藝勇力、單身にして、五個の、寇に當りて物ともせず、四個の生拘り、一人を、撃走らせしは、和漢に稀なる、神童とこそいふべけれ。加以年居多、人迹絶て、浮世に遠き、恁る深山に誰鞠養て、人と成しけん。訝しきよ。故こそあらめ、其願ぞや。と問れて親兵衛然々候。おん疑ひは理り也。既に知られまつりし如

く、水可憐に年四なる、秋葉月の初旬にかありけん、能九郎とか叫喚たる、野人の手稱にせられて、命危かりし折、不測に神女の擁護によりて、那能九郎を誅戮せられ、這身は神女に擁護れて、這山に領て置れしより、伏姫上の墳墓ある、岳崖を宿としつ、その日よりして姫上の、神靈に夜となく晝となく、養れまつりしを、初は宛夢に似て、思ひ辨よしなかりしに、やうやく人と成る隨に、折々神女の誨によりて、我うへを知れるのみならず、大母妙眞は、那時候より、君の御恩を稟まつりて、恙もあらず、今もなほ、瀧田の御城内に在る事の顛末、外伯父、犬田小文吾悌順の上はさら也、この餘同因果の六犬士、犬塚大川、犬山犬飼、大阪犬村の流浪窮厄、昨は恁々の事ありき、けふは又箇様箇様の事こそあれ、と七犬士門が、六稔以來の、履歷動靜その折々に、一事も漏さず、神女の告させ給ひしかば、瞭然として那人々の、傍に立て看るごとく、知らずといふこと候はず。然ば三浪四時の衣、皆姫上の神通力もて、那里よりか取寄せて、恁養れまつりしは、又只我身單にあらず、這年來同宿の、人の帮助も候へば、人迹絶たる深山に在ても、徒然としもおもほえぬ、身は年毎に長伸て、既に禿するごとく、我ながら怪しきまでに、最も大きくなりぬるは、日毎に神女の賜りし、仙漿奇果の故なる歟、理をもて論じがたければ、神變奇特といはまくのみ。然ば、神女の御恩徳は、枚擧るに遑もあらず。手習讀書、弓馬擊劍、文學武藝、何くれとなく、皆教させ給ひしかば、六稔以降修練せし、本事なきにも候はず。なれども神女は旦暮に、我々と共侶に、岳崖には在さずかし。要ある折には出顯し、要なき折には見え給はず。恁而今朝しも姫神の、又忽然と立顯て、小可門に宣ふやう、けふ恁々の左側に、我父纒に兩三個の、伴當を領て、我墳墓を、見んとてみづから山踏して、這頭へ來給ふことあらん。その折不測の寇ありて、犯しまつらんとこそすべかんめれ。親兵衛は、このころを得て、時分を料りて、件の寇を、對治して、我大人の、見參に入り奉れ。這餘のものは箇様々々。と叮寧に宣示し給ひて、這箇一口の短刀と、這錦繡の襦袢一領を、小可に賜りて、又宣ふやう、その懐劍は、我生前に、身を放さざるものなりき。截味尤覺あれば、そをもて

汝が身の護にせよ。錦繡の襦袢は我手づから、昨宵縫たるものぞかし。汝も八犬士の一人なるに、けふ我大人に初見
 参に、その魚袴の衣のみにては、身の皮無下に鄙備たり。よりにてををしも取する也。抑、爾と同因果なる、七犬士の
 黨は、我生做せし子に異ならぬ、宿因深きよしあれば、孰を疎に思ふべき。然ば他門が窮厄毎に、影に立形に添
 て、救ざることなきものから、爾は特に薄命にて、忤折二親を、喪ふて、剩、必死の大厄ありしかば、見過しがた
 さに、その窮厄を、救ふて這里へ領て來つ、五六稔養育して、像のごとくに、生育しは、只是爾の身單を、悲しき
 ものに思ふにあらず。親房八は、安房の俠民、柚木撰平が後にして、その身を殺して仁を做したる、義侠そのよしあ
 るをもて、その子は料らず仁字の、靈玉を得て、八犬士の、隊に入りたる故ぞかし。夫仁義入行は、人皆天より稟たる
 所、貴き賤き誰もかも、五常八行の心なからんや。然けれども、世の庸人は、通て人慾の私に、迷ふて、遂に八行
 を、執喪ざるものは稀なり。恠れば世の億萬人に、捷れて五常八行を、做得んことは易からねど、就中仁をのみ、
 孔子も輒く許さざりしは、素是天とその徳を、等くしがたき故也けり。自然なるを天と叫做し、人に在りては仁とい
 ふ。爾は親の義侠によりて、仁の一字を得たりしかば、その名を仁と喚るれども、我おそらく、その徳を、天と等しく
 做し得んや。縦至仁に至らずとも、婦人の仁に做ふことなく、今より勉て殺生を、好まで忠恕惻隱を、心とせば事足
 りてん。世に武夫の業はしも、大刀を帶、弓箭を拿て、君父の與に仇を防ぎ、身をしも護るものにしあれど、只當前
 の敵を撃て、降るを殺さず、走るを捨て、人を征するに徳をもてせば、則忠恕の義に稱ふて、仁といふ名に差ざるべ
 し、頃者は、我任なる、冠者義通窮厄あり、久しく寇に拿籠られて、今なほ館山の城内に在り。この故に義成夫婦、
 及我大人の最大う、胸安からずをはします、大人の登山も、この義にあなれば、爾先道高峯なる、寇をはやく對治し
 て、更に又館山へ、赴きて那素藤を、降して我任義通を、拯ふて大人と義成夫婦の、憂苦を慰めまらせなば、六稔
 爾を養育したる、我も面を起すべし。いふべきよしは、是まで也。既に這世の縁盡たれば、今より永く別れなん。秀

意なるな、忘るべからず。や、勉や、勉や、と繰返しつゝ、諭し給ひて、自餘の者にも云々と、那を告て、又忽然
 と、降聚る雲に神隠れして、掻滅す似く亡給ひたる、迹には香氣馥郁と、異花降り、音樂翠天に聞えて、峯上に残る
 白雲も、風のまに／＼あらずなりにき。登時小可、哀慕に得堪ず、母に別るゝ心地して、外視思はて蹉跎しつゝ、う
 ち泣てのみ候ひしを、同宿の甲乙に、只管諫慰められて、やうやく我に回るものから、幾の時にか忘るべき。今も
 心の悲みを、然こそと查し給ひわかし。恠あるべきにあざれば、君の與に寇を帯ふて、神女の誨に悖らじ、と思ふ
 心のいそがれて、前より這頭に樹隠れて、御登山を待まつりしに、果して神女の示現に違はず、君に寇做す應見あ
 り。そが四個を生拘りたれども、鈍や一個を漏せし折、なほ追稠なば、捉ふることの、かたかるべくもあらざりし
 に、走るを捨て、と教給ひし、神の隨意趕捨たる、用意は是のみならず、那奴們を對治しぬるに、始よりして刃を
 もてせず、棒もて總て撃つして、搦捕り候ひしは、寇ながらも怒に乗して、殺さじとの所行にこそ候へ。那七犬士
 は、小可が、所在を年來尋難て、八人具足せん折ならては、参りがたし、と固辭まうしつ、今も他郷に流寓たる、そ
 の義その信、多く得がたき志を恠々と、神女の告させ給ふによりて、事詳に聞知るものから、然とても我うへ
 を、言報やらんよしもなく、心苦しく候ひしに、這身單が那人々に、先だちて、今見参に、入り奉る不思議の計
 會、併人力人智の、よくすべき事にはあらず。皆是神女の神謀にて、君には恙まします。寇は大槩對治せられ
 て、我身の顛末、遺もなく、聞えあげぬる意外の歡び、何事か又これに優すべき。恠れば程なく御曹司を、拯攬まる
 らせて、御爵忿を慰め奉らん。この義も御心安かるべし。うちも任せ給はずや。と稟す詞の委なく、過去來の事さ
 へに、前後紊さぬ物がたらひは、宛水を洗すが似く、辯論義あり、亦忠あり。現憑しき勇士の嫩生、是八犬士の、隨
 一と、いはでもしるき、相貌才學、自然と備る豪傑の、心術言語に顯れて、思ひがけなき事のみなるを、義實主はつ
 くづく、听つゝ、速りに駭駭して、なほ聞く隨に疑ひの、胸うち豁け含笑れたる、事の歡び大かたならず。腰なる

扇子を抜きて、颯と推啓き、親兵衛を、うちあふぎつゝ宣ふやう、適愛たき後生なるかな。言皆意表に出ざることなき、和郎が顛末、奇なる哉。伏姫は、世に稀なる、女侠にこそ、と思ひしに、死後の神靈恚までに、灼然にして功績多かり。和漢に備あるべしや。願ふに、和郎が六稔の程に、最大きうなりたるは、現仙境に生育て、神樂奇果を旦夕に、たうべたりける故ならん。それかあらぬ歟、いよ／＼奇也。見るに、和郎が腰に帯たる、短刀は、我認りたり。そは伏姫が終焉まで、身を開放して、命根を、悍くも斷し東西なれば、當日姫の亡骸と、俱に柩に斂めしを、復茲に看る不思議さよ。拾と云恰と云、因あり縁あり、證據あり。身に那瘡もあるならん。恚れば和郎がいふよしの、搗鬼ならぬを知るに足れり。今さら何をか疑ふべき。この餘も多く這那と、思ひ合するよしあれども、急ぐべき事ならざれば、そは後にこそ解示さめ。宴に姫の孝順なる、這八犬士の一人もて、我災厄を救ひたる、神力不可思議、感深かり。是に就ても更に又、痛み思ふは兩個の伴當、船船貝六、小水門目は、寇の獵箭に窮所を射さして、忽地命を殞しけん、惜むべし／＼。と嘆息しつゝ、慨然と、那亡骸を見かへり給ふを、親兵衛慰め稟すらく、おん伴當們が、受たる矢傷は、非如窮所にあらずとも、毒箭にこそ候はめ。爾らんには只一箭にて、呼吸絶たるも、寔に以あり。遮莫小可幸ひに、神女の授け給ひたる、回生起死の神藥あり。必その效觀面にて、活すといふことなしと听にき。先や試候はん。といひつゝ、はやく身を起して、矢傷兒の身邊に立より、兩個の矢傷をよく見るに、貝六郎が死に至るまで、なほ楚と握持たる、義實主の刀あり。そを拿放ち、塵うち拂ひて、捧げて返しまるるを、義實やをら受奉て、腰に挿副給ひけり。恚て又親兵衛は、腰に吊たる藥籠より、那神藥を幾粒か、遽しく滴出して、噉碎きつゝ、矢傷兒們が、身に中たる箭を抜けて、這那共に瘡口へ、藥を塗著推容れて、關りたる牙を推開きて、餘れる藥を沃ぎ入るゝに、石滴を掬ふ療養に、手の届きたる進退精妙、兩個を俱に披起して、背を三四拳搥しかば、死せりと見えたる貝六目、は、神藥胃中に下ると覺て、忽地に蘇生りて、眼を開き息を吹き、一霎時愕然たりけるが、氣力やうやく我に復

りて、痛楚もあらずなりにけん、共侶にうち驚きて、恙なかりし主を見つ、又親兵衛と、生口の、應應兒們を見かへりて、今さら我を怪むまでに、相歡びて慌しく、主君の身邊に找朝ひて、共侶に稟すやう、臣們は、嚮に寇の獵箭に、射仆されしを知るのみ、其後の事を覺えず。爾るに這一少年、その姓名は人の噂に、豫より聞知りたる、那八犬士の隨一人、大江生の折もよく、君の先途に達まらせて、那應應兒們を四名まで、生拘にしたる事の趣、且姫神の靈驗冥助、年來那身を這頭に置いて、人と成給ひしといふ、和漢今昔未曾有の、奇談、耳に入り心に通じて、一事も漏さず聞知りしより、覺ての今も記憶せり。恚りし程に大かたならぬ、大江生の介抱にて、蘇生りて、身はいと安く、矢傷もはやく愈にけん、既に起居に自由を得たり。勇士の帮助は、伏姫神の、神力にこそ候ひけり。得がたかるべき大奇大幸、最も惶く候。と稟すを義實うち听給ひて、原來若門、身は仆れても、心神去らて、有つる事を、聞知りたる歟、开亦奇也。且その矢傷の立地に、愈しは逆伏姫が、這親兵衛に授けしといふ、神樂の效に憑れり。曩に義通の伴當們が、多く矢石に傷られて、一旦命終りしに、稻村の城に將て還されて、甦生の奇特ありけると、等き神の祐にこそ。併親兵衛の介抱なくば、いかにして、事よくこゝに及ぶべき。快歡びをいはずや。と仰に、目貝六は、俱に親兵衛にうち對ひて、額をつき恩を稱へ、歡びを舒て、又いふやう、我門は、那箭にて、共に命の終るとも、惜むに足らぬことながら、老侯恙ましますば、千遍悔とも及んや。然るを和殿の帮助に依りて、君臣無異の幸福あり。短き詞に盡しがたかる、洪恩にこそ候なれ。といふを親兵衛听あへず、开首の口誼は、無益也。我身に何等の功あらんや。皆君侯の洪福にて、神女の冥助顯然たり。嚮には稟す事の多くて、いまだ這應應兒們が、來歴を責問ざりき。意ふに館山の城内より、素藤がおこしたる、刺客にぞあらんずらん。といへば、目と貝六郎は、然也々々。と點頭て、拷問の事はしも、咱門兩個に任し給ひね。いで／＼といひつゝも、共侶に身を起して、樹枝を折て鞭としつ。繫置れし應應兒們を、鞭撻責ん。と立蒐れば、應應兒們は、驚慌て、跪きつゝ諸聲揚て、やよ等給へ、人々

よ。責られずとも聞えあげん。既に推量せられしごとく、我々は素藤と、一味のもので候へども、然とて來歴なきに
 あらず。且、鎮りて聞給はずや。と叫ぶを義實うち听給ひて、しからんには咎を住めて、徐に言を盡させよ。と仰に目
 貝六は、承りぬ。と應つゝ、左右に別れて跪坐たり。登時件の厩廐兒門は、頭立たる者とおぼしき、兩個が先陳ず
 るやう、在下は、故の當國の一郡司、安西三郎大夫景連が再任にて、安西出來介景次、と叫做すもので候也。と名
 告れば、又一個がいふやう、在下も亦昔年、老侯に討滅されたる、麻呂小五郎信時が同宗にて、麻呂復五郎重時、と
 叫做すもの也。然は景連信時の、滅亡の比はしも、我々が親は病死して、自他孤兒也ければ、由縁の人に携られて、
 悄びて上總へ走りつゝ、夷濃の普善村に落住りて、世を民間に不嫁たりしに、轟田權頭素藤が、館山の城主になりし
 より、安房四郡の舊領主、神餘麻呂安西の子孫あらば、稟出よ扶持せんとて、尋るよしの聞えしかば、我々兩個、神
 餘の兒孫と、共に館山に赴きて、來歴を演、家譜を捧げて、仕んことを請ひしかば、素藤歡び對面して、馳て城内に
 留め、扶持せられたる、管待通て等閑ならず。賓客の禮をもて、月俸、その餘の東西までも、多く宛行はれしかば、
 我々心を傾けて、いかで恩義に報ん、と思ふにも似ず素藤は、慢に酒色に荒みしより、民を虐げ奢侈を極めて、又我
 們を見かへらず、祿を減し格を貶して、奴僕の像く趕使るゝを、いと朽惜く思ふものから、外によるべの岸もなけれ
 ば、立も得去らで在りける程に、素藤猛に逆謀あり。縁故は、國主の息女、濱路姫を娶ん、と欲りせし宿望稱はね
 ば、執念深まてに國主を恨みて、去歲より間なく時となく、計策を旋らして、義通君を拿籠めつゝ、國主の多勢を引
 受て、いまだ勝負を分ざるよしは、是世人の知る所、今亦具にいふにしも及ばず。愆而素藤、いぬる比、我々を閑室
 に、招よせて弄くやう、汝達瀧田に赴きて、義實を狙撃果しなば、事の潰に義成を、撃捕んこといと易かり。然ると
 きは房總二國は、我輩に入りぬべし。汝達這同大功あらば、安房四郡を盡興へて、各一郡の領主に做さん。甚願、
 この義をよくせんやとて、亦他事もなく懸れしかば、我門が、準備をしつゝ、其夜城内を潛出で、當殿に赴きた

る、同志の甲乙に五行、本月の初旬より、瀧田の城下を徘徊して、潛入りまく欲せしかども、城郭總て堅固に
 て、いまだ便宜を得ざりしに、老侯けふは未明より、大山寺へ參詣の、風聲城下に聞えしかば、時を得たり、と厥歎
 びて、像のごとくに準備をしつゝ、迹を跟け去向を料りて、狙撃まく欲せしに、微行とまうせども、五六十個の伴
 當あれば、左右なくは手を下しがたかり。奈すべきと思ひ難しに、年來這頭の山河の、水安淵を做し、より、人迹久
 しく絶たりしに、いぬる日猛可に水落て、涉すに易し、と聞えしかば、老侯馳て登山あり。亡息女伏姫の、墳墓を齧
 するとて、伴の蒼隸が罵りしを、洩聞しより心勇みて、間道を走り、先だちて、快這高峯に陟り來つ、那里の樹蔭に
 埋伏しつゝ、悄々地に準備の毒箭をもて、伴當二名を射て仆し、同じ箭局に老侯を、脱しはせじ、と彎固めたる、二
 張の弓弦は忽然と、斷れて役には達たずなりにき。最も怪しき事ながら、却已べきにあらざれば、更に準備の竿槍を
 もて、推拿調て撃んとせし折、候には不測の帮助出來て、咱們四名は生拘られ、一個は酷く撃惱され、辛して逃亡た
 れども、料るに痛楚に堪ずして、遠くはゆかて仆れしならん。現怖るべき這少年の、勇力武藝は、億萬人に捷れし
 みに候はず、年來神女の冥助によりて、愆る深山に人と成りたる、魂談奇話を側聞して、身の非を悟りし慚愧後悔、
 世は是澆季に及べども、争ひがたき神靈冥福、併、老侯の、賢明仁義の俊徳なくば、今畜害を轉して、這祥瑞に
 逢ふよしあらんや。然ば昔年景連と、信時の滅亡は、賢を媚みて邪計を行ひ、非義の利のみ欲せし所以にて、老侯
 の罪ならざりしに、我々理義に暗ければ、只仇とのみ思ひ怨みて、恩赦を願ふことを要せず、反て奸賊素藤の、扶持
 を求め、その隊に屬て、他が與に老侯を、刺まくせしは、紂を資けて、周武を撃つに似たるべし。今は邪念を轉し
 ぬ。濁を去て清に附ん、と庶幾外候はず。なれども身の罪輕からねば、縱饒されがたくとも、仁義の君の手に死な
 ば、そは切もの事なるべし。天神地祇も照覽あらん。今いふ所虚談にあらず。願ふは亮查あれかし。と那陳すれば、
 這も陳じて、迭代に後悔の、招了紛れなかりけり。親兵衛これをうち听て、義實に稟すやう、老侯開召れし歟。初

他們が毒箭をもて、おん伴當を射仕せしに、侯を犯すに弓箭をもてせず、槍を引提てうち向ひしを、こゝろ得がたく思ひ候ひしに、那折弓弦の斷れたるは、神女の擁護に候はん。就てなほ疑ふべきは、安西麻呂の黨こそ、侯を怨るよしもあらめ、神餘は逆臣定包が、弑逆により家亡びしを、我君義旗を揚給ひて、定包を討給ひしかば、素より是の徳あり。爾るに恩義を仇として、撃まくせしは、甚なる意ぞ。この義を質し候はばや。といふを那餘の生口門は、听つゝ俱に聲を掛て、大江生々々々、我門も來歴來意を詳に聞えあげん。疑念を解て、憐愍を、垂給ひね。と叫びたる、そが一個の且いふやう、在下は、神餘長挾介光弘の近習なりける、天津兵内明時が弟にて、天津九三四郎貞明と叫喚すもの也。當年這地の俠民と聞えたる、那杣木樸平と、洲崎無垢三が、謀し合して、山下定包を撃んとせしに、反て那逆臣の、奸計に陥られて、光弘主を犯せし折、我兄天津兵内は、樸平無垢三門と戰ふて、命を其里に歿したり。是より先に我姉は、光弘主に仕へしかども、那玉梓の壽にあらず。既にして、主君の胤を、孕て五箇月に及びし比、光弘果敢なく撃れ給ひて、定包長挾を横領したるに、我姉は光弘主の、胤を孕りと聞知りて、淫婦玉梓にこゝろ得さしつ、毒を養んと欲するよし、事幸ひに洩聞えしかば、在下姉を伴ふて、悄々地上總へ走りつゝ、蘇々利村なる親族許、共侶に潛びて在り。愆而月來になる隨に、我姉は産の氣つきて、生れしは男兒也。故主の落胤なるをもて、左も右もして鞠養む程に、我姉は時疫にて、竟に黄泉の客となりき。折から山下定包は、里見の義兵に討滅され、又麻呂と安西も、滅亡したる事の趣を、世の風聲に聞くものから、然とて還るべき家もなし。是より安房さへ上總さへ、里見の有となりしかど、神餘の子孫を尋求めて、絶たる家を嗣せんと、宣はするといふ沙汰も聞えず、いと恨く思ひしのみ。訴出んはさすがにて、百折千磨の世を渡りつゝ、腋子を養ひまらせしに、腋子は質弱多病にて、且その性も人並ならねば、年十五六に及びても、菽と麥だに分ち得ず。剩風濕に嬰り、脚痺て、年中三百六十日、枕の外には友もなく、筆をばかりの氣力もあらず。いと可憐く思へども、鍼灸藥師、加持咒法も、空懸め

にて效驗なき、生來なるを争何はせん。浮世を溜ぶ身にしあれば、神餘の姓氏を憐りて、神餘の姓を、上甘理墨之介弘世と名づけまゐらせて、果敢なく時の至るを俟しに、料らず墓田素藤の招きに應じて、這年來、主僕二名、館山の城内に扶持せられて、安西麻呂門と同列たり。しかるに素藤心傲りて、我門をよく見かへらず。弘世はその性慈にて、剩病者なればとて、月俸なども年々に、貶して定のごとくにせられず。口を餉ふに足らねども、在下をのみ苛刻く、使ること日毎に多かり。なれども這回の密議を稟て、這個の人々三四名と、俱に今日老侯を撃まくせしは、神餘の後を立られざりしを、恨しく思ひしそがうへに、事成らば神餘の舊領、長挾平郡を與ん、といはれしに心迷ひて、賢明徳義の良將を、暴虐奸詐の墓田が與に、狙撃まく欲りしたる、先非を悟りて罪を知る、後悔は麻呂安西と、いひ合さねど同意なり。非如我身はこの儘に、結紐頸を撃るゝとも、弘世主を憐愍て、小祿也とも宛行れ、神餘の祀を嗣し給はゞ、この年來在下が、盡せし孤忠も虚しからず、死して榮ある一世の歡び、快く目を閉ぐべし。願ひまつるはこの義のみ。又この男子は、同志の俠客、荒磯南彌六が乾子にて、椿村の墜八と、叫做すもので候也。といへば又墜八も、跪きつゝ陳するやう、小可は墓田殿に、稟たる恩も候はず。素より國主老侯を、怨まつる事もなし。但我乾父南彌六は、昔年杣木樸平と、俱に定包を撃まく欲りして、愆て光弘主を、犯せし當日撃れたる、洲崎無垢三が外孫也。外祖無垢三が撃れし折は、なほ總角でありしかば、上總の夷瀧に逃去て、年來を歴たりと听にき。愆而件の南彌六は、外祖に劣らぬ俠氣あり。無垢三が愆て、光弘主を犯せしを、最酷う羞思ひて、神餘の氏族の在しなば、いかで一臂の力を盡して、外祖の汚名を雪ん、と思はざる日もなき所以に、擊劍白打相撲の術まで、その師に就て習得たり。臂力も人に捷れしかば、里の俠長、と衆人に、尊敬せらるゝものにこそ候へ。愆りし程に光弘主の、落胤あるよしを、聞知りしより歡びて、遂に這天津氏、九三四郎と交を、結びて年來疎からねば、今番の計議に荷擔を容れ、小可を伴ひて、三個の人々と共侶に、侯を撃まく欲せしかども、這少年の勇敢武藝に、敵すべくもあらざれ

ば、辛く命を免れたり。他愁に漏ずして、囚れて這里に在るならば、俱に奇特を感悟して、みづから新にすべかりしを、逃亡たるは幸ひならず。他が不幸に候ひきとて、遺なく招了したりけり。義實は、衆口衆意の、齊一かりしをうち听給ひて、嗟嘆に堪はず、生口門を、つらくと見かへりて、やをれ天津貞明とやらん、神力瑰異に驚きて、後悔陳謝は遅からずや。汝が亡君長挾介光弘に落胤あらば、何どてや早く恚々と、瀧田へ告訴せざりけん。弘世とやらんが事はしも、義實が知るのみならず、當時金碗八郎すら、その子の事を知らねばこそ、何ともいはて身故りたれ。それを義實が執立すとて、恨みたるは愚痴なれども、その孤忠は憐むべし。又景次重時とやらんもしかぞかし。當時麻呂安西を、義實が討ちしにあらず、信時は、景連に、賣られて終に自滅を取りにき。又景連は、義實が、功を媚みて邪計を旋らし、攻滅さんとせられし故に、已ことを得ず鋒を交へて、克ことを得たる也。恚れば他々が滅亡は、則自業自得にて、怨る所なかるべし。然けれども麻呂安西の、同宗たるもの罪を謝して、軍門に降参せば、我豈執念深崇らんや。時宜によりて舊家の後を、立て家臣に做すべきに、遠く走り深く躲れて、反て悪人素藤に、扶持せられしは、是も亦、人を知ざる惑ひ也。この餘、南彌六墜八門は、素是市井の俠者にして、志氣ありといふとも、無明の醉は同じかるべし。そは左まれ右もあれ、絶たるを繼ぎ廢れたるを興すものは、古昔聖王の道にして、開國の主の善政也。陳ずるよしの違はずは、安房殿(義成をいふ)に命乞して、願ひのごとく做も得せん。但その言の證據なし。異日なほよく輪問して、賞罰はその折にあらん。先この意を得よかし。と仰に大家額を衝て、歡ひ面に顯れけり。姑して天津九三四郎貞明は、大江親兵衛にうち對ひて、目今墜入が稟しごとく、那荒磯南彌六は、市井の俠者て候へども、罪を饒して用ひ給はば、必做すことあるべきもの也。他一旦は逃たれども、撃たれし苦痛に堪はずして、山路を遠く走りたさに、其頭に懸れて在るべき敷、是も亦知るべからず。倘逃果して館山へ、還らば虚實を墓田に知られて、妙ならざる義も候はん。はやく人を遣して、住方を尋問し給はずや。といふに親兵衛領きて、我も亦如右思ふ

第百五回

名山靈有り 枯樹復花ぞく
逃客路無し 老俠俘を獻る

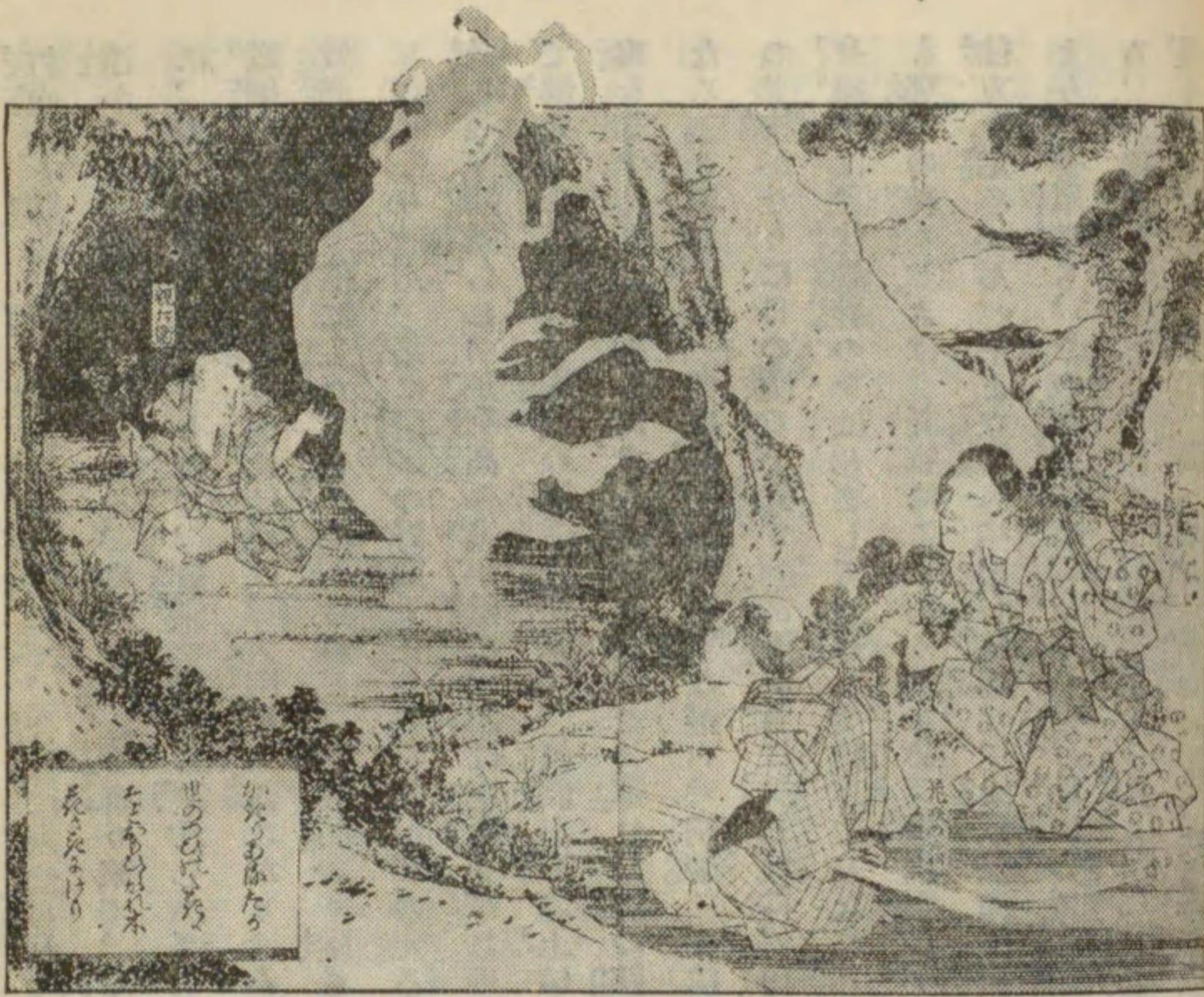
也。といふを、目と見六郎は、共偈にうち听て、しからば我門二個に一個、おん許を蒙りて、逃遁て在らば、斬もて来てん。と憚るを親兵衛推禁めて、不知案内なる和殿們より、我走一走行て索ん。いでく。といひつゝも、身を起さんとせし程に、傍の樹蔭に又人ありて、やよ和子、一霎時等給へ。其南彌六をば擄捕て、先の程より這里に在り。やよ等給へ、と叫禁めて。樹間を徐に出来るものあり。此は是甚麼なる者ぞ。开は又這下の回到、解分るを聽わかし。

登時樹蔭に入りて、大江親兵衛を喚禁め、徐に出て來にけるを、大家誰や、とうち見れば、則一個の老翁也。鬢髯のいと皓かる、枯野に残る小草の上に、置く朝霜に異ならず。身體は瘦て、枝疎なる、漁村の松に似たれども、筋骨はまだ衰へず。龜齡鶴算幾ぞや、尙鏗鏘と輕健なる、氣力面に見れて、花田の布の綿陽衣の、裳を叩く結み、白布の袖脚衣して、手に朴刀を携たるが、那南彌六を緊く細りて牽立々々找みたる、後方に續くは、一個の老嫗也。こも魚袴の衣を被て、下短に壺折り騰げし、打扮殊に精悍しく、手に眉尖刀を挟みしが、義實を相て、遽しく、その眉尖刀を擲遣捨て、裳をはやく解下しつゝ、阿容す俱にぞ找みける。却説老翁は南彌六を、索拿縮て、義實主の、目前遙に牽坐て、膝折俯たるそが後方に、老嫗も跪坐て共偈に、先老侯を拜しけり。爾程に義實主は、這老男女の爲體を、料り難つゝ訝しさに、傍を見かへり、やよ親兵衛、他們は原是甚麼なる者ぞ。和郎と親しく相識りたらば、他も亦這山に、年來住や熟たりけん。嚮に和郎が同宿の、者しもあるれば徒然ならず、といひしのみにて具ならねば、事問ばやと思ひながら、他事に紛れて、果ざりしに、其人ならば、怪しうはあらず。といひつゝ老翁を偈と見給ひて、やをれ老人、親兵衛と、山居同宿の者ならば、近く找みて、顛末を、詳に聞えあげよ。やよ快々。と扇をもて、連りに招き給ふにぞ。老翁は阿と應して、先南彌六を、貝六目に、牽遞與しつゝ、主の身邊へ、找めば老嫗

も後に跟着、おそる／＼近づく程に、貝六目は、南彌六を、又樹下に繋置て、親兵衛と共侶に、主君を左右に守護したり。當下老翁は、恭しく、義實主にうち朝て、手をうち拍し額を衝たる、頭を擡て稟すやう、今恚る瀬に逢ざりせば、素より賤しき我々が、貴人に近著まつりて、親くものをまうさんこと、彌勒の世まで有がたからんを、惶けれども稟上ん。言長くとも聞召れよ。數ならぬ身の死して又、世に見るゝ小可は、犬山道節忠興が父なりける、犬山道策が舊僕にて、初の姓名は姥雪與四郎、後に梶原（又神谷に作る。里呼加爾波なり）の精平、と喚れしものにて候也。又此に侍るは拙荆にて、名を音音と喚做たる、道節の嫡母なりき。聞も及せ給ひけん、今より六檢前つ秋、柴月の初旬、我見十條力二郎、及その弟尺八郎は、武藏豊島の戸田河にて、犬士を追隊の大敵を、遮留め断戦ふて、竟に戦歿仕りぬ。折から音音は兩個の媳婦、曳手單節と世を不媿て、上毛州甘羅郡、白井の城に程遠からぬ。荒茅山の隱宅に在り。柴月六日の事なりき。兩個の兒子、力二尺八が亡魂の、母の宿所へ歸り來にける、怪談の候へども、要緊の事ならざれば、其頭は言略ぎ候はん。然而。といひつゝ言訥りて、後方を見かへり、やよ音音、是より後の事はしも、渾家こそよく覺たるらめ。代りて稟上ずや。といはれて音音も膝を找めて、義實主に稟すやう、目今良人與四郎が、聞えあげまつりしごとく、賤妾と媳婦は、煉馬家の、滅亡より世を不媿て、件の山家に在りしかど、良人は年來故ありて、武藏の梶原に流寓ひて、漁獵して世を渡りにき。折から主なる犬山道節、及その黨犬塚犬川、犬田犬飼も不憶く、賤妾が隱宅に聚合ひし夜支、與四郎も亦情やかに、武藏より來にけるが、兩個の兒子力二郎、尺八が亡魂の、媳婦が馬に乗り牽れ來て、犬士の與に、戸田河にて、追隊の頭人丁田氏と、思ひの隨に戦ふて、件の頭人町進を、撃果したる事の形勢を報知らせ、又二親の離別して、年來胡越に異ならぬを、うち歎くことの切なりしを、道節聴て深く憐み、這宵、亡親道策に、代りて精平の與四郎が、做し、昔の罪を宥めて、酒盃を拿らしつゝ、賤妾と夫婦に做し給ひぬ。是等の情由は忌々しく、面正しくはなきことながら、原野合の夫妻にて、離別したるはそ

が故なれども、兒子の忠孝、與四郎も、功あるをもて許されて、小衛が雪の侶白髪、老ての後に婚禮は、世に有がたきことながら、恥しくも亦哀しさの、やる方もなく侍りにき。といひつゝ涙、吐みたり。當下與四郎焦燥て、益なき雑談いはずもあれ。と禁めて貌を改めて、却その次を稟上ん。この夕音音が隱宅へ、道節門を宿せしよしを、白井へ密訴せしものあり。これにより緝捕の頭人、巨田新六郎助友が、軍兵多く從へて、不意に起りて、推寄せ來つ、事の難義に及びしかば、我門必死を究めし折、犬士の一人、犬田生が、曳手單節は我舊里なる、行徳へ領てゆかん、といはれしかばその議に任して、象立置たる駿馬にうち乗せ、小可音音は、道節と、四犬士を、後安くて、延さん爲に、稠入る敵を、姑且防戦ひしかば、竟に弓折れ勢突り、免るべくもあらざれば、そが儘奥に退きて、家に火を放け、夫婦ひとしく、煽々たる猛火の内に、跳入らんとせし程に、奇なるかな煙の裡に、嬋娟たる一個の神女、最大なる犬の背に、尻うち掛けて出現あり。小可と音音を制めて、若門は、是忠臣節歸、天助感應なからんや。努を戦没すべからず。是に携れ。と宣示して、犬子の絆を投被給へば、小可門は夢歟と可に、且駭き且感激して、音音も俱にその麻索に、携ると纏て中天へ、掖登されて、忽然と、黑白も知らずなりにけり。恁而其詰朝なるべし。小可も亦音音も、やうやくに我に復りて、共侶に身を起しつゝ、驚きながら四下を顧るに、怪しや身は這深山に在り。水は織々として、奇岫の間に流れ、松は亭々として、涼風の秋に唸ず、異草地に滿て、靦然たる花馨ひ、林鳥梢に集て、耳珍しき聲したり。是すら意外の奇觀なるに、なほこゝろ得がたきは、年四五なる穉兒の、一人山嵐の内に在り、手に草花を耍子て、餘念もあらず見えにけり。登時小可門思ふやう、原來身ははや冥土に到りて、這頭に置くゝものなる歟。然らば前面なる谷川は、俗の口順に聞えたる、塞の河原にあらんずらん。若しからずば那穉兒の、一個這頭に在るよしあらんや。七歳未滿の穉子也とも、死しては靈のあるべきに、問訊ん、と尋思をしたる、夫婦情々地に商議しつゝ、俱に岫嵐の頭に起きて、喃和子よ、事問ん。這里は何處那地ぞや。這山の名は何といふらん、倘知りたらば

誨すや。和子は亦何等の故に、獨言頭に置れしぞ。其由あらん、甚麼ぞや。と問へば件の穉兒は、莞やかに見かへりて、翁門ははまだ知らざるべし。這里は安房の富山也。二十稔あまり前つ比、里見の息女伏姫上の、山居し給ひて、果は刃に伏給ひしは、則這岳窟にて、墳墓も亦這里に在り。我は則翁門が故主、犬山道節忠與門と、大かたならぬ宿因ある、八犬士の隨一人、大江親兵衛仁也。過日我身は、下總なる、市河の頭にて、箇様々々の大厄ありしを、伏姫神の救せ給ひて、這山へ領て來給ひしは、隔昨五日の事ぞかし。其よりして今も姫神の、傍に在して慰め給へば、徒然ならず、這里に在り。昨日翁門を猛火の内に、救ふて這里へ領て來給ひしも、亦姫神の冥助なるに、身の歡びを稟さずや、といふこと毎に大人備て、且過去を悟り未來を示す、辯論意表に出さることなく、世に又あるべきことならねば、且驚き且惶みたる、夫婦が歡びいふべうもあらず。こは神女のこの穉兒に、馮りていせ給ふならん、と思ひにければ、謹て、原來おん身は五犬士達の、噂に初て知りたる、犬江腕子てをせし敷。神女は何里に在するぞや、と問へば後方を指さして、那々那里に在するに、と教られても小可と、音音が視には見え給はねども、深信いよいよ胆に銘じて、忝き事限りなければ、其方に朝ひ、身を投俯して、黙禱に時の移るを覺す。やうやく頭を擡れば、親兵衛腕子の又いふやう、神の冥助は、翁夫婦、只是兩個のみならず、五犬士も悉なく、寄隊の虎口を免れたり。又兩個の媳婦曳手單節も、昨日神女に導れて、玆の犬塚の頭に在り。那里へゆきて快見ずや、と又指さし誨られたる、小可音音共侶に、驚奇哀權判よしもなく、慌惑ひつ、岳窟の、頭也ける塚下へ、走ゆきつ、共侶に、見れば果して曳手單節は、昨日乗したる馬と俱に、呼吸絶てなほ馬上に在り。こは、誰何、とばかりに、駭譟ぎつ兩個して、曳手單節が騰げられたる、絆索を急に解捨て、抱き下してよく看るに、身に受たる痕はなし。憐むべし件の駿馬は、肛門より腹内まで、銃傷を受にけん、後足さへ踏さへ、血に塗れて死たるが、その鞍下に附られたる、力二尺八が首級もそが儘あり。人こそ大切也けれ、と思へば婆々と共侶に、曳手單節が手を取りつ、又胸脇を指し、



(りけにきさ花木れかしひもとおとそまきたのひつの世かたるありきか)

寸口の脈は、糸よりも、細やかなれども尙絶えず、鳩尾温なりければ、又兩個して、兩個の媳婦を、抱き起しつ、臂近なる、石滴を口に沃ぎ入れて、神女の冥助を只管に、祈りて喚活などせし程に、歡ぶべし曳手單節は、忽然と甦生りて、小可門を見て、訝り疑ひ、又歡びも大かたならず。思ひがけなき這地方に、聚合しよしを問れしかば、我門答て、伏姫神の、靈驗冥助を蒙りて、萬死を出て、一生を得て、この山に來ぬる事の顛末、又那犬江神童の、厄を神女に救はれて、本月の五日より、この山なる岳窟に、置るゝと解示されし、其言の首より、疑ひを解き惑ひを醒せし、奇話珍説の尾まで、簡約にて遺なかりける。越に翹て身の往方と、神の擁護を感悟せし、事情を告知して、和女門も、昨乘たる馬の、深瘡に死なて幾十里なる、這山へ來て斃れしは、開も亦神女の冥助にて、世に有がたき再會は、皆是神の恩徳也。工夫にな思ひ給ひそ、と一五一十を解諭せば、曳手單節は聞く毎に、驚きつ亦惶みて、齊一

空をうら向うて、伏拜むこと半响許、然而小可門に報るやう、奴們は、知せ給ふごとく、過日荒茅山の隱宅へ、大敵打向ふと聞えし折、犬田主の介保にて、合鞍に乗せられつ、落ぬ與にと絆索をもて、幾重敷藤著給ひて、牽退けて、遠からぬ、樹間に繋置れしを、寄隊の雜兵群り來て、牽もて去ん、と競蒐るを、犬田主の走り來て、防戦ひ給ふ程に、刀尖狂ひて、繋ぎし馬の、絆索を撲地と斷れしかば、馬は猛火に駭噪きて、狂ひ走りつ、駐んと、欲する敵を蹴倒したる、勢ひ當りがたければ、犬田主も術なかりけん、馬は快こと箭の如く、去向も知らず走りたり。その折に奴們兩個は、俱に生たる心地はあらねど、尙鞍局より墜もせず、騰られたる故に侍り。恁てぞ馬は直走りに、走るこ幾町なりけん、路に居多の野武士在り、奴們が馬の走るを見て、駈駐んとしたれども、駐るべくもあらざれば、遣過しつ、連發ちし、銃响高き鳥眼銃に、馬は窮所を撃れけん、嘶きあへず跳騰りて、倒れんとせし折から、忽然として篝火とおぼしき、兩個の團隊晃き來つ、奴們が頭の上に、撲地と墜ると思ひしのみ、共侶に呼吸絶にけん。爾後の事を知ず侍り。しかるに大人達のみならず、撃れし馬の奴們を、乘して遙々這深山邊に、來ぬるは全伏姫神の、擁護なること疑ひなし。世に復得がたき幸ながら、倘夢にては侍らずや、と女兒が報れば、女弟も續て、迭に盡す來し方の、物がたりに日の關るを覺す。當下音音は笑しげに、曳手單節にうち對ひて、今も爹々の告給ひたる、大江神童の身邊には、伏姫神のをはしまして、守らせ給ふよしなれども、爹々にも奴家にも、凡夫の視には見え給はず。なれども那子の神々しきは、託宣にこそありつらめ。恁れば和子に再生の、歡びを稟すべく、尙この後の吉凶禍福を、問て往方を定めてん、やよ立給へ、と心を囑て、大家俱に岳屋の、頭に跪坐て、神童を、俯拜みつゝ稟すやう、おん誨により曳手單節も、この地方に來て在りしを、見出して介保しつゝ、恁再生の幸福を得たり。只惜むらく媳婦們が乘たる、馬は斃れて生べうも候はず。他はいかど仕らん。又我々は那地を投て、赴かば道節們に、環會よし候はん。この義も教え給ひぬかし、と問へば徐に見かへりて、然なり。馬の亡骸は、那里の犬塚と推並べて、町撃に埋め得させ

よ。戌と午とは地枝六合也。素より因縁なきにあらず。鋤も蓋も那里にあらん。又這山は年居多、麓の河水灘と成て、人馬の通路久しく絶たり。縦汝達故主を慕ふて、他郷へ去んと欲するとも、目今は山を出がたかり。咱們と俱に這岳屋を、崖として時の至るを等ね。今よりして衣食の類は、姫神の賜なん。皆先これをたうべよとて、秋桃四顆を拿出て、手に手に授けられしかば、大家ひとしく受戴きて、件の桃をたうべしに、味ひ宛蜜の似くて、只一個にて飽たるが、是より數日飢ざりけり。恁而又小可門は、曳手單節も共侶に、塚の頭にゆきて見るに、果して舊たる鋤整二挺、繋き簀竹の中にある。是も神女の賜ならん、と思へば取りつゝうち戴きて、兒子等が首級はさら也、舊塚と推並べて、馬の亡骸を埋め、塚を造りて、又岳屋にかへり來ぬれば、神童は、晝寢をしたり。折から初秋の事なれば、被たる衣の薄かるに、脇不縫の間より、その背の見えたるが、九の兪より臀に痣子ありて、形牡丹の花に似たり。犬士の黨誰もかも、同じ像の痣子あり、と聞しを今更思ひ合して、こゝにつらく思惟るに、小可門は、少かりし時、過失こそあれ、この年來、積たる功德は毫もなし。然るを神女の恁まで、一家四人の必死を救ふて、這山に置給ふ事、その所以なくばあるべからず。願ふに這神童を、我門四個に守させて、その徒然を慰る、よすがになさん、と思召たる、神謀りにぞあらんずらん。現我故主も犬士の隊にて、俱に骨肉に優す過世あり、と豫听しを今又思へば、這神童に仕るは、道節主に仕ると、又何ぞ異なるべき。況五犬の黨は、昨日寄隊の虎口を免れて、恙あらず、と託宣あり。今さらに他を求人や、と思ふこゝろを音音にも、及媳們にも、聾き示せば、大家然也、と點頭て、俱に心をひとつにしつゝ、守して和子を慰めたり。是日よりして鍋釜など、米さへ味噌さへ菜蔬さへ、誰かもて來るとは知らねども、皆岳屋の内に在り。又夏冬の衣なども、神女の賜ふとおぼしめて、求めざれども得ることあり。約莫日毎の食料の、竭んとすれば、孰の間にか、一苞つづ又ありけり。俵藤太が龍宮より、得たりと聞えし米苞も、恁ありけん、と思ふ可の、無盡蔵にて、最奇なり。恁而神女は親兵衛腹子に、手習讀書を教として、文學武藝道もな

く、教給ふ敷と思ふ事、年來間斷なかりしかども、小可門が眼には、神女を拜みまつること克はず。又おん聲も聞え
 ねど、獨和子のみ分明なるべし。細沙を坦して、字を寫覚え、その書なくして、素讀をしたり。或は擊劍弓馬の技、
 獨學にして、獨學ならず。是等をこそ奇しき中の、一大奇事と思ひ候ひしに、親兵衛腹子は、身長の、年々に伸るこ
 と、世の假子に十倍して、六稔の程に、三尺有奇、五寸許になりたり。こは奇異に候はずや。といひつゝ、少許退
 きて、腰に夾みし手巾もて、額の汗を推拭へば、音音は良人に立替りて、又老侯に稟すやう、事の珍奇は、そのみ
 ならで、尙一棒事の御利益侍り。初曳手單節門が、這御山に來ぬる比より、猛可に腹の大きくなりて、醫ば有身たり
 しもの、臨月に異ならねば、病痾の所爲にあらずや、と思ふものから思ひ難て、他們を質し問はべりしに、曳手單
 節が答るやう、豫知せ給ふごとく、亡夫達と婚姻の折、幾日もあらで別れしより、二たび枕を並ることなく、一稔あま
 りを經る程に、その亡魂に見えしのみ。恚れば今さら奴們が、有身るべうも侍らねど、只怪しきは腹内にて、折々動
 くもの侍り。爾も甲乙一對の、思ひは不思議に侍るか。甚麼なる病痾の所爲ならん。心にかゝるはいぬる年、婚姻
 の比よりして、今なほ月水を見ず、血塊とかいふもの、年を歴れば毛を生じて、形形をなすことありと聞けば、
 それかあらぬ歟、我ながら、淺ましとのみ思ひ侍り。といひしを與四郎がうち聴て、凡夫の臆斷、いたづらに、云云
 とものを思んより、又神童によしを告て、神女の旨を伺ん。然はとて聽て件の義を、腋子に告て、病瘡の、根元を
 問奉りしに、親兵衛腋子の答るやう、曳手單節は懐妊也。素より病痾の所爲にあらず。初力二尺八門と、添臥纏に
 一宵といへども、その折他們は姉妹俱に、既にして有身たり。折から煉馬家滅亡して、夫婦離別の憂苦あり。この故
 に胎内なる子の、氣血足らねば、大きく得ならず、臨月遙に過たるに、生れざりしを、その母門さへ、今までも知ざ
 りし也。そが徴は、曳手單節が、那比より昨今までも、月水にならざるをもて、疑ひを解くに足ん。爾るに過日、
 姉も妹も、荒茅山の嶽嶽を駈るゝ折、乘たる馬を野武士門の、鳥眼銃に撃れしかども、馬はなほ他們を棄せて、這地

かへ來ぬる事も、その折兩箇の遊魂の、墜て他們が懐に入りたるも、皆是神女の神力により。那日の燈火は、力
 二郎と、尺八が遊魂なるを、神女の憐み給ふの故に、兩箇の妻の胎に投じて、胎内の子の氣血を補ひ、且這山なる神
 漿仙果を、たうべる事を得たりしかば、姉も妹も、胎内なる子の、猛可に大きくなりたる也。恚れば安産遠からず。
 又何をか疑んや。可も併此年來、若門一家、父子夫婦は、忠義節操拔群なるに、もし後なくば應報足らぬを、造
 化の神の憐愍で、力を用ひ給ひけん、神女の冥助のみと思ひそ。善には善の報ひあり、惡には惡の報ひあり。那房
 八が身を殺して、仁を做たる應報と、粗相似たるを悟りねかし、と丁寧に示し給ひしかば、皆疑ひの霧晴て、茲にも
 照す天津日の、惠に遇る神の加護、惶も亦忝きに、大家涙 吒む迄に、感嘆せざるも侍らざりき。是より三十日
 許を経て、曳手單節も、同日に、産の氣つきて、安らかに、生たるは俱に男子にて、その面影は、力二にも、尺八に
 も肖て、毫も違はず。思ひがけなく兩個まで、孫を得たりし祖父祖母は、共侶に愛くつがへりて、甲乙俱に拿揚つ、
 産湯浴する谷河の、水より深き姫神の、おん惠を感じおもふ。歡びいふべうも侍らずかし。然ば曳手單節門は、血
 量もあらで肥立程に、乳も亦多に出しかば、孫們は甲乙よく肥て、病氣もなく生育侍り。因て父の名をそが儘に、曳
 手が子を力二郎、單節が生みしを尺八、と名づけて年來養育しつゝ、今茲は六才になり侍り。身長の伸たると、智慧
 力量さへ神々しき、大江和子にはいかにして、及ぶべうも侍らねど、うち見には、尋常なる、七八才の童蒙より、大
 きうや侍らん歟。といひかけて吻々とうち笑へば、與四郎已々、と推禁めて、找み出額を衝て、又義實主に稟すや
 う、其後做べき事もなきを、幸ひにして鋤整あれば、畊作せばやといひつるを、親兵衛腋子が諾はず、衣食は折々伏
 姫神の、賜らんと仰するに、畊して何にせん。且這山には石多ければ、水田陸佃、共に要なし。但這峯上に觀音堂あ
 り。そは老侯の志願にて、伏姫上の菩提の與に、昔年建立ありしかど、落成の比よりして、這山河の水倍て、船も筏
 も竿届かねば、今に迫て二十許年(長祿三年より、文明十年まで)參詣の貴賤、登山に路なく、那里に久く香華絶た

り。翁と媼は身の勤に、折々御堂を掃除して、香を焼き花をまゐらせ、親族有縁、亡人々の、菩提を弔ふこそ相應しからめ、と誨させ給ひしかば、斯歡びて、朝毎に、峯上に登りて、観音菩薩を、拜みまつらぬ日は稀にて、別當しつゝ遙けくも、六稔の光陰（時に文明十五年なり）を歴にけるよしは、既に稟上たる如し。愆而今日朝未明に、大江生が慌しく、小可毎に告るやう、翁門ははまだ知ざるべし。いぬる日より這山河の、水の猛に落たれば、今日瀧田の老侯の、伏姫上の墳墓を、祭らんとて登山あるべし。その故は箇様々々。と那葉藤が反逆の事の顛末、并に御曹司義通君の、御窮阨の趣を、言語急迫しく解知して、又神託を傳るやう、姥雪門皆承れ。今日老侯の登山の折、箇様箇様の危難あらん。そは犬江親兵衛に、對治せんこといと易かり。若們もこの折をもて、老侯に見參して、俱に御恩に預りまつれ。今より浮世に出る身なれば、道節自餘の犬士們にも、再會必遠かるべからず。陽世幽冥、隔あれば、是より永く別れなん。この義を遺なく傳へよ、と神女の仰候ぞや、といはれて音音、曳手單節も、皆共侶にうち驚きて、遽しく漱ぎ、線香を焼き身を淨めて、那里に在とは知らねども、釋兒力二尺八にも、誨て大家共侶に、俯つ拜みつ、おん別れの、惜かる隨に感涙の、坐に找めば袖濡れて、詮方もなく候ひき。折から花降り、音樂聞えて、尊さ越に彌増せしを、然而あるべきにあらざれば、一霎時目送り奉りたる、犬江生は時分を料りて、今日老侯に寇做す奴們を、對治せんとして精悍しく、身装しつ、棒挟みて、麓路投て出てゆきしを、有鑿に心もとなくて、推續んとて準備をしぬれば、音音并に媳婦孫們さへ、共侶にとて、後に跟くを、禁めもあへず來ぬる折、逃迷ひけん一個の厩廐兒、足を曳つゝ前面より、來ぬるに撞見したりければ、遣も過さず、組伏せて、索を掛候ひき。他は身に受たる撲傷の、疼痛にや堪ざりけん、小可如き老人に、敵し得ずして茲に及べり。愆而這厩廐兒を、牽つゝ這方へ來る程に、同類の厩廐兒四名は、はやく犬江生に搦捕られて、そが招了を聞召す、折からなれば、尙なく找ます、言の果るを等候ひしに、逃たる賊徒南彌六を、捉へんとて人々の、既に立まくせられしかば、已むことを得ず聲をかけて、

君の見參に入るのみならず。小可音音門、兩箇の媳婦が、六稔以前に再生の、幸ひは伏姫神の、冥助なりしを稟しぬる、一期の歡び、附驥の功、過世ありけん一家の榮、と稟すは烏計に候はめ。這厩廐兒は、墜入とやらが、招了に著れたる。那南彌六に疑ひなし。皆是君のおん威徳にて、世に有がたく候。と稟せば音音も、千歳の、壽をなん唱ける。是を听ぬる里見主従、生口毎に至るまで、皆駭然と面を注して、新奇を感嘆したりけり。そが中に義實主は、扇子を膝に、歌杖に、推立頭を傾けて、つらくと听果て、感心尤淺からず、姥雪夫婦にうち對ひて、現不可思議なる神助靈驗、方才面前に祇聽くにあらざば、誰か實説と思ふべき。嚮にも既にいはまくせしを、言多きにより果さざりき、親兵衛も听ねかし。我はこの年來、伏姫が菩提の與に、他が月の亡日毎に、精白米五苞、并に味噌醬油、菜蔬柴薪の料を、大山寺へ遣して、貧民乞兒に齋を與へ、又夏冬の筆には、布を施行に牽せしに、詣來て齋をたうべるもの、寡き折も、米はさら也、その餘の東西も残らずとぞ。誰がもて去とは知らねども、愆る事折々あり。又布なども如右也、と聞えしも久しくなりぬ。又親兵衛が被たる襦衫も、願へば出處あるに似たり。昔年伏姫が常に布用ひたる、錦綉の襦兒ありけるを、他が身故りたりし比、大山寺へ遣して、調度など共侶に、那里の寶藏に奔め置せしが、彼と此とよく相似たり。よりに思ふに、六稔以來、伏姫が亡魂の、親兵衛と若們を、養ひしは外の東西ならず、皆我施行の有餘なるを、問ずして知るべきのみ。愆れば由て來たることあり、不思議にして、不思議にあらず。然も思はずや。と宣へば、大家呼とばかりに、いよく感嘆したりける。這回いまだ盡さねども、楮數こゝに定限あれば、卷を更て第六六回に、解分るを聽ねかし。

第一百六回

青海波を牽して景能稻村より來たる
黒闇夜を犯して曼壽信館山に赴く

却説里見義實主は、又姥雪夫婦にうち對ひて、我方僅解も示せしごとく、願へば東西皆因あり縁あり。就てこゝろ得がたきは、與四郎が朴刀と、音音が眉尖刀を携たるは、开も亦出處あること歟。猛火の中に死を免れて、身を這山に置れしには、相應しからぬ器械也。それも亦伏姫の、亡魂の授けし歟。と問れて與四郎額を衝て、おん疑ひは理り也。這朴刀は小可が、曩に武藏の戸田河原より、兩個の兒子力二尺八が、首級を惜々地に奪奪て、荒芽山へ赴きし折、身の護に携へしを、當夜白井の密隊を防ぎて、箭種も既に竭きしかば、又是をもて幾個歟、近づく敵を研拂ひつゝ、纏て猛火に身を焼して、死まくしたる折までも、尙この刃は放さざりしを、我身と俱に這御山に、領て置れけん、その折より有り。皆是神女の靈應なりき。といへば音音も亦いふやう、曩に煉馬を没落の折、駿馬と俱に那眉尖刀を、賤妾が手親牽きもしつ、携へもして、上毛なる、隱宅に來て在し程、身の護に藏措きしを、又那白井の密隊を防ぎて、あの眉尖刀の鋭鈍も、聊鉢み侍りたり、开を那折に喪はざりしは、伏姫神の冥助にて、與四郎が朴刀と、此彼同じ奇時に侍り。爾るに擲に犬江主が、今日上の御登山の折、障導あらんを對治せんとて、單身出てゆきしかば、與四郎も亦推讓て、麓路投ていそぎしを、有緊に心もとなきて、非除老女の果敢々々しく、事の要には達たずとも、上に速做す賊徒あらば、一個也とも擊捕ばや、と思ふ心に身をば料らて、あの眉尖刀を携しを、鳥計とや思召れけん、寔に鳥計に倅るあり。といひつゝ、嗚々とうち笑るゝを、袖もて急にうち捲ふ、老樹の花の唇は、薄からずして露やかに、實ある言葉の男々しきを、義實感心淺からず。听果て又宣ふやう、思ふに優たる、音音が用心、這夫にして這妻あり。現一對なる忠魂義胆、今の世にはいとく得がたし。就て若們が兩個の媳婦、曳手とやらん、單節とやらん、开が兒子們も那里に在るやと、問れて音音は歡しげに、隨即答まうすやう、擲に他們も賤妾と俱に、那樹下までまゐりしかども、御免を蒙らて、一族渾て見參に、入りまつらんは無禮なるべし、と思ふによりて推止めて、おん目前へは出さざりき。といふを義實聞あへず、そはさぞ立も疲れけん。そが兒子をも這方へ召ね。けしうはあらず、快々。と仰に音音は、阿と應て、身を起しつゝ、遽しく、件の樹蔭に退りたる、程しもあらず曳手單節と、兩個の孫兒を伴ふて、舊處に出て來つ、大家程よく並坐して、義實主に拜見す。當下親兵衛找み出で、老候に稟すやう、他們は則音音が媳婦、十條力二尺八が妻也ける、曳手單節姉妹にて、兒子は後の力二尺八にこそ候なれ。と聞えあぐれば與四郎も、笑しげに額を衝く程に、音音は、兩個の孫兒の頭に、兩手を掛けつゝ額を衝して、俱に千歳をぞ唱へける。爾程に義實主は、這四個の母と子を、つらくと見つゝ宣ふやう、やよ曳手單節とやらん、若們が再生の、奇特は既に與四郎音音が、告しによりて具に知れり。寔に天墜惹たず。若們姉妹孝順にて、よく姑に仕へずは、いかにして這應報あらんや。且力二尺八が、遺腹の子あるを知らず、その期を過して安産せしは、いよく奇異といひつべし。今よりして與四郎音音を、花咲の翁とも、又花咲の媼とも喚ん。然ばこそあれ若們も、又是枯樹に花娘なれども、憐むべし、良人に後れて、青年にして孀婦になりぬ。倘この憂ひ微りせば、得がたかりけん子をば得生まじ。倚伏は糾ふ纏に似たり。哀しむべからず、歡ぶべからず。そは若們が兒子なるよ。兩個ながら恰惻像也。年十許にならん折、我孫達の陪從にせん。舅姑共侶に、瀧田に參て扶持を受よ。城内には、犬江親兵衛が祖母、妙眞も在るなれば、詞敵によかんなん。先よくこの意を得よかし。と懇に仰すれば、曳手單節は感涙の、落るを押へて共侶に、頭を擡げて稟

すやう、世に有がたき御懇命、數ならぬ身に餘りぬる、一家の幸とまうさんも、猶憚りに侍るめり。皆是神女の御引接にて、縁しあればぞ、大江の和子の、餘慶を受し歡びは、駛馬の尾に附たる蠅の、千里に到るに似たらん歟。故主て侍る道節すら、まだ見參に入らざるに、开が家僕の宅眷なる、我々に惶うも、恚はおん目を賜はする、面目あまりて今さらに、影護くも侍るか。といへば亦與四郎も、音音も俱に稟すやう、媳婦門が聞えあげたるごとく、時宜にはあれど、道節門に、先だちたる見參は、寔に惶う候ひき。といふを義實主推禁めて、否賞罰は貴賤によらず。我は只若門が、忠信節義を賞するのみ。微賤也とて敷んや。譬ば、道節門七犬士のごとき、我照文をもて幾番敷、招きよせまく欲りせしかども、他門は俱に固辭まうして、八人具足せん折まで、得まらざりけるに、招かずして親兵衛仁を、越に得たるは時なるかな。夫仁義入行は、虧べからざるものなれども、就中仁を根柢とす。那竹の節あるごとく、則仁を根として、餘の七行は、各節也。然ば孝悌忠信も、又義も禮智も仁なければ、その徳聖に至りがたかり。この故に入士の一人、曼譜信の一仁先出世して、忠孝義信、禮智も悌も、皆道仁に由らんのみ。差こそ異なれ、姥雪一家も、俱に曼譜信の仁に由て、その忠義節操の、應報を得たる也。我聖人にあらざれば、茲に仁を做得ざれども、不用意にして仁を得たり。僥倖也けり。と道理を盡して論し給へば、與四郎音音、曳手單節も、這它のものも推並て、感嘆の外なかりけり。そが中に親兵衛は、額に汗しておそる、老候に稟すやう、目今仁字のおん論は、尊く承り候へども、何でふ臣等がこれに當らん。譬ば那鼠璞の如く、名は同うして、その物異也。最恥しく候かし。就て那南彌六とか聞えたる鷹兜兒は、既に墜入が招了にて、素生は見れ候へども、尙詳ならざる義あり。那奴も拷問仕らん歟。聞召るべうもや。と詞急迫しく問まうせば、義實听つ、領き給ひて、有理左に右とうち紛れて、他が事に及ざりき。親兵衛徐に尋ね。與四郎音音、曳手單節は、禪兒門共侶に、瀧田の城へ、我領て還ん。姑且後方に退きて、下向の折を等ねかし。と仰に畏む老夫婦、兩個の雛婦は、兩個の兒子を、先に立しつ、皆共侶に、近き樹下に

に退きて、事果るまで跪坐たり。登時犬江親兵衛は、樹下に蒙置したる、生口荒磯南彌六が、射邊に伏みうち辨ひて、やをれ鷹兜兒、南彌六とやらん、聞くに汝は當初、當國洲崎の俠客也ける、無垢三が外孫ならずや。神餘の子孫あるにより、憂を分ち死地を踏み、昔在無垢三が、愈て、光弘主を犯したる、辜を償んと欲りせしは、然もあるべき事ながら、理義も邪正も思はずに、逆賊素藤が與に、我老候を、犯しまつらんとせしは甚麼ぞや。實に神餘の爲を思はば、九三四郎門に説薦め、稻村殿(義成をいふ)へ訴稟して、恩祿を乞ひまつるべきに、茲に心のつかざりし歟、その愚は丙丁相似たり。取るよしもなき白物なるかな。恚ても陣するよしあるや。と通りに問れて南彌六は、羞たる頭を稍擡て、小可無學俗骨にて、血氣の勇を旨としたる、弱冠の初より、俠を磨き意を立て、みづから許して世の豪傑ぞ、と思ひ誇りしは、井中なる、蛙に似たる淺智短才、後悔臍を嚙ども及ばず。嚮に和君に撃れし折、疼楚に堪ず、逃迷ふて、峯上の方へ走る程に、那姥雪とかいふ翁に、撞見して捕捕られしは、撲傷によりて進退不便の、命運に盡たるならん。縦みづから新にして、恩免を請稟すとも、赦されがたき大辟の、罪戾を争何はせん。死も亦恥には代がたかり。只速に死んのみ。といひつ、傍の樹に觸て、頭を擡きて死まくせしを、親兵衛、や、と牽禁めて、やをれ南彌六、狂へる歟。賞罰は上に在り。大辟不赦の罪人なるに、恚に死まくすとも、なてふ自殺を許さるべき。心を鎮めて听わか。汝は、那定包に謀られて、不測の罪を醸したる、外祖州崎無垢三が、本性に似たりと思ふ歟。我は當年無垢三と、俱に當國の俠民なりける、杣木樸平の曾孫也。然ば我父、山林房八は、大父の汚名を雪んとて、身を殺して仁を做し、より、我身に至て思ひがけなき、天の資神の庇あり。世に俠者といはるゝものは、不義に與せず、奸邪を資けず、善人の與に憂を分ちて、よく理義に明なるを、世々に命けて義俠といふ。我父房八則是也。且我曾祖杣木翁と、汝が外大父無垢三は、俱に金碗氏の舊僕にて、八郎主の劍法を、受たるよしも傳聞にき。乃祖をいへば、我は四世、汝は祖孫三世なれども、行狀霄壤の差ひあり。譬ば這天津九三四郎のごとき、當年那古七郎

と、俱に主君の先途に達て、戦歿の聞えありける、天津兵内が弟也といへり。當年那兵内と、俱に戦死したりける、那古の侄は、犬士の一人、我小父犬田小文吾是のみ。因ておもふに、その先人の、忠死も亦得失も、異なることなけれど、子係の行状同じからねば、受る所の榮辱禍福、かくの如き差池あり。この義を熟思ふべし。恚れば若門が縲紲の恥辱は、皆是自業自得にて、憐むよしもなき事ながら、昔を思へば我も亦、空谷琵琶の情なきにあらず。陳ずるよしに詭なくて、良民にならまく願はゞ、我織芥の功に易て、命乞して得さしめせん。身の非を飾る事をなせそ。と諭せば南彌六額を衝きて、仁義の教諭、肝胆に、銘じて死後まで忘るべからず。非除這身は許されずとも、今はしも恨なし。犬馬の齡吳竹の、四十に泊る今までも、身の愚魯を知ざりければ、大父の汚名を雪ん、と思ひつゝ罪を累ねたり。皆愆にて候ひきとて、只管陪話て已ざりしを、親兵衛、然こそ。と領きて、退きて義實主の、身邊にまゐりて稟すやう、言皆听せ給ひけん、他も招伏仕りぬ。別に仔細も候はず。と告るを義實うち听給ひて、嚮にも既にいひけらし。他們は瀧田の獄舎に繋ぎて、なほ詢問して、言實ならば、安房殿に聞えあげて、都て那里の下知を等べし。命乞はその折の、時宜に依るべきものなりかし。と宣ひながら天うち仰ぎて、思ひがけなき這那の、問答に時を移して、上墳をいまだ果さず。快ゆくべし。と遽しく、身を起さんとし給ふ程に、貝六目は、左右より、找出つゝ稟すやう、萌三がおん花を、求得てかへりまゐりたり。又蚤崎十一郎照文と、この餘御伴の近習三名、俱にまゐり候ひしが、おん事多かる最中に侍れば、なほそが儘におん後方に、扣てこそ候なれ。と聞えあぐれば義實主は、亦復石に尻を掛て、そはよき折也。快召ね。と仰に目貝六は、阿と應つゝ退きたる、程しもあらず東峯萌三は、莽草と桃の花などを、手に持て找み出、且照文以下の伴當も、俱に見参に入りけり。登時萌三がいふやう、嚮に仰付られたる、おん花を、求得て、還りまゐらんとせし程に、十一郎門は、御登山に、おん伴當の寡きを、いと心もとなしとて、俱に推参仕りぬ。爾るに君には御危難ありしを、幸ひに神童の賊徒を捕りしといふ、事大驚は側聞し

て、皆共働に、一たびは、驚きつゝ又戦ひて、御高運のこよなきを、今さら感佩仕りぬ。と祝し稟せば照文も、找み近づきて稟すやう、嚮には御登山のおん伴を、許させ給はざりしかども、萌三をすら、おん花の、御用に還させ給ひしかば、いよく胸中安からて、一霎時は那里に候ひしが、左にも右にも堪がたさに、おん叱を省す、同志の甲乙さへ誘引て、推参仕りたる甲斐に、御危難の事の、趣、伏姫神の靈驗奇特、及大入の犬江親兵衛が事の顛末、并に與四郎音音門、一家兒の、再生の奇談まで、料らず君のおん後方にて、粗所知りて又さらに、胸を潰し候ひき。事皆君の御洪福、最歎しく候。と壽きまつれば、義實主は、含笑ながら點頭て、然也。嚮には若門を、制めて麓に在らせしかども、今は人に要ある折也。招れずもよく來つるかな。萌三は、一兩個の、同僚と俱に、這生口門を、快麓へ牽下して、那首より雜兵を領て、今宵瀧田へ遣して、有司に告て獄舎に繋ぎね。又目は、音音曳手單節と、兩個の禪兒力二郎尺八を、大山寺へ案内して、今宵は那首へ止宿させよ。我も亦時宜により、又那寺へ立寄りて、曉るを等て明日歸城せん。親兵衛と與四郎を、我郷導にすべければ、十一郎貝六門は、這里より登山の伴に立つべし。就中十一郎は、親兵衛が年四の秋、神祿に遇ひしより、他が生死存亡を、思難つゝうち不娛しに、料らずも今對面して、年來の胸開けにけん、寔に奇しき事ならずや。と仰に照文額を衝て、御説の如く、和漢今昔、世に神童なきにあらねど、身長さへ恚猛可に、大きうなりしは一大奇事にて、古にも傳なく、後の世はなほ有がたからん。前よりつらく相候に、幼貌は耗ねども、その人としも聞ざりせば、いかにして認るべき。猶緩やかに來し方の、物がたりを听ばや、と思へば楽しく候也。却要緊の一條を、稟上漏し候ひき。稻村の大城より、苦屋八郎景能が、次丸君のおん使として、駿馬一疋を牽しつゝ、今朝瀧田の御隠館へ、來著仕り候ひしに、君は今朝未明より、大山寺へ御参詣の、よしを傳承り、快見参に入らばやとて、躰て那首へ赴きしに、那首にははや御坐さず。又御登山の趣を、听知りてなほおん迹を、慕ひつゝ這山の麓まで、参りしかども、臣們をすら許させ給はて、遣し置せ給ひしかば、這里までは得伴

はて、御下向を等し候ひき。件の駿馬は、青海巻村より、今番二頭獻りしを、そが一頭は、館山なる、御陣へ牽して、おん殿君へ、まゐらせ給ひぬ、と聞えたり。又一頭は、老侯へとて、獻らせ給ふにこそ。と聞えあぐるを、義實主は、听つゝもうち含笑で、次丸は尙幼小なるに、父祖へ孝順、歡ぶべし。そは氏元清澄門が、稟薦しにぞあらんずらん。と仰に親兵衛找出て、願ふはそのおん馬を、小可に貸給ひぬ。今より館山へ騎走らして、立地に御曹司を、拯奉らん。と憚るを、義實見かへり給ひて、壯なる哉、勇士の情、願。开も歡ぶべき筋なれども、義成が大軍ですら、動しがたき勅敵を、和郎一個ゆきて、成ことあらんや。开は歸城の後、左も右もせん。然まで急ぐ事かは。と制めて許したまはねば、親兵衛は、いふかひなし、と思ふものから争ひ難て、應をしつゝ退きをり。爾程に義實主は、先や墓所へいそがんとて、やを杖を搔拿て、衝立て身を起し給へば、萌三は、遠しく、花を貝六に遞與しけり。當下與四郎は、主の先に立、親兵衛、照文貝六は、左右に従ひつゝゆく程に、音音は又曳手單節と、力二尺八をも侍らし、目萌三、自餘の近習と、俱に跪坐て目送りまつるを、義實急に見かへりて、萌三門はこゝろ得たる歟。その生口毎を領て、瀧田へ還らば、我は今宵大山寺へ、止宿のよしをも有司に告よ。いふに及ぬことながら、夜分の小心、門戸の守衛等閑にすべからず。快々ゆきぬ。といそがし給へば萌三は、唯々と應して、なほ姑くは跪坐たり。既にし義實主は、遠くなりゆき給ふ程に、大家ひとしく身を起して、萌三は自餘の同僚們と、俱に五個の生口毎の、索拿分ちて牽立れば、音音は、捨たる肩尖刀を、又携て、媳孫們と、俱に目に導れて、齊一麓路へいそぎけり。却説里見義實主は、山路を陟り給ふこと、纔に兩三町にして、一條の谷川ありけり。こは麓河の水源なれども、此すら水の涸たりければ、昔見たると同じからず。前面は即伏姫の、墳墓ある岳也。大法師が年尚少くて、金碗大轉孝徳と喚れし時、八房の犬を撃んとしたる、その鳥眼鏡の鏡丸あまりて、伏姫落命し給ひたる、事さへ思ひ出られて、涙と共に目も迫に、震龍たる山又山の、岳根斷崖花開初て、遅々と長き春の日も、路の葉も那這と、結ぶは夢の浮世

そ、と願念の外他事もなし。嶽、瀧の氷溜たれども、塵埃、霧、雲、霧、高く蒸て、升降不恆の難處にあなれば、親兵衛と照文は、義實の手を掖まゐらせ、或は藤蔓に携り、岳稜に手を掛て、辛して前面に迫るに、與四郎は朴刀を、衝立々々先に找みて、荆棘を拂ひ、垂たる枝を推揚て、徐に導引まゐらせけり。既にし義實は、岳崖に辿り著て、先那這と見給へば、崖門の邊には、地炕ありて鍋を掛たり。この餘は、碗と折敷と、手桶柄杓、播盆菜、刀、燧匣あるのみ。裡面には、筵を幾枚か布たれども、衾夜物などは見えず。義實これを訝りて、親兵衛門は、この年來、夜はいかにして寝たるやらん。春冬の寒けき夜にも、衾はなき歟、甚麼ぞや。と問れて親兵衛然候。這岳崖に在るときは、冬の夜もいと暖くて、汗する可也ければ、衾は欲しくも候はず。夏はいと涼しくて、蚤蚊もあらず候ひき。といへば義實點頭給ひて、然ぞあらん、开も亦奇なり。と稱へて纏て伏姫の、墓頭に迫り給へば、標の松は翠を増て、稍高きぞなりにける。然れど掃除に箒除を遣さず、小草なども刈拂ひたる、墓には、今朝植たらん、とおほしき色々の花多くあり。青磁の香爐に燒さしたる、煙なほ仄にて滅ざりしは、是も亦與四郎音音が、手向たりけん、と猜せらる。登時船船貝六郎は、齎したる花を植更て、石滴を汲みつゝ、沃ぎなす。與四郎も亦これを帮助て、準備はやくも整ひければ、義實は懐より、一裏の香を拿出て、件の香爐に燒熏らしつゝ、廻向に時も移るべし。爾程に照文貝六は、跪坐て後方を見かへれば、山は慶雲を吐て、奇峯を累ね、風は松濤を起して、彈琴に似たり。靈芝石上に黏て、五彩眼に美しく、異禽幽谷より出て、友を求る聲あり。沙石は、黒白を雜えて、基仙を見るに由なく、飛泉は底當を見はして、深淺を料るに易かり。實に是塵外の一天地、東海無雙の仙境なりき、と意中に賞賛したりけり。且して義實主は、念じ果て退き給ふに、舊にし事のみ偲れて、憶はず嗟嘆せられたり。又大江親兵衛も、出世の暇を棄さんとて、墓に朝ひて拜稽す。次に、照文貝六郎、與四郎も許されて、送代に拜みけり。就中照文は、亡父輝武の事をしも、今亦こゝに思ひ出て、哀慕の情やる方なきを、只是一蓮托生、と念じて稍籠りにけり。祭果て義實主は、這伴當門を從へ

て、那首級を壘みたる、塚を見んとて赴き給へば、曩に與四郎音吉門が、築建にきと聞えたる、馬塚も茲にありけり。義實主は、兩個の塚を、左さま右さま 齧して、現親兵衛が伏姫の、靈に聞にきといへりしごとく、午と戌とは六合也。今までは這丘を、犬塚とのみ喚傲たれども、犬塚は信乃が家號と、相混じて宜しからず。因てこの丘を改めて、犬馬塚と喚すべけれ。衆伴この意を傳へよ。と仰に大家異口同音、承りぬと應けり。この後居多の歳月を歴て、岳巔なる家伏鍋釜は、化して石になりたるが、犬馬兩塚と共に、里見九世、義安の時までありけり。其後はいかにしけん、今は聞えずなりしとぞ、話省饒舌、登時義實主は、照文と與四郎を、喚近づけて宣ふやう、茲より峯上へ遠くもあらじ。卒觀音堂へ參詣せん。與四郎案内をせよかし。と只管にいそがし給ふを、照文諫め稟すらく、御説では候へども、亦復那里へ追らせ給はば、御下向は山路に暮て尤不便に候はん。願ふは異日參らせ給へ。けふのみに限ることかは。といふを義實聞あへず、否、我も亦其頭の事を、思ざるにあらねども、擲に危難を免れしも、又親兵衛を得たりしも、皆伏姫の神靈の、冥助擁護に依るといへども、他が菩提の與にとて、建立したる峯の堂の、觀音薩埵の妙智力を、加え給ひしも知るべからず。その佛恩を思ひながら、賽願を疎にせんや。況建立の後、幾程もなく、山河の爲に路を絶れて、詣ることを得ざりしに、その路開けて茲まで來ながら、空に歸るはこゝろにす。與四郎先に立ずや。と論して只管進み給ふ。理りなれば照文門は、再議に及ばず断從ふて、躑躅峯上に俱しにけり。是より路はなほ峻峭にて、熊徑鳥路の羊腸たるを、主從辛して登る程に、やうやくに嶺に屆りて、那這となく見亘すに、安房上總の海はさら也、武藏伊豆相摸の海濱まで、煙霞の間に見れて、走船の白帆幽に、一葉の波濤に漂ふに異ならず。況津島の、夕陽に群飛ぶ光景は、百花の春風に、翻るに似たりけり。然ば補陀落山の秋の月も、夜々茲に限なかるべし、祇陀竹林の春の鳥も、朝々暢ひ來ぬらん、と思ふ可の靈場佳景、睡眠たる奇岳は、刀して削做すとも及べからず、屈曲たる早巖は、畫る波の磯打敷、と疑はる。建立せられしより既にはや、二十餘有餘を歴たれども、觀音堂は

荒もせず。只諸翁の柱高欄などの、雨風の爲に處々、剥たるもありけり。與四郎音吉が六秘以來、仕まつりし甲斐ありて、人詣ねども、香華絶す、蜘蛛もなく鳥も糞さて、尊さ更にいふべうもあらず。貝六郎が茲までも、携たる花の折枝、なほ餘りありければ、それを佛前の花瓶に植加なす。登時義實主は、堂内に陟我みて、燒香默禱を齎らし給へば、親兵衛、照文、與四郎、貝六も、主の後方に並跪きて、共侶に拜みけり。是より下向に赴き給ふに、登るには似ず足も找みて、いまだ疲勞もあらざりける、義實は、照文と親兵衛に宣ふやう、十一郎はけふ料らずも、親兵衛と再會の本意を遂て、他が恚大きうなりたる、神助の奇特を知るといへども、左に右に暇なかりし、我面前を擲りて、別後の情義を盡さざるべし。折から山路は交加ふ人なし。けしうはあらず、相譚ひね。听つゝあるかば、疲勞を忘れて、好慰にあらんず。と仰に照文、然候、御内人は多かれども、小臣のみ親兵衛と、憂苦を俱にしてければ、別後の事も問まほしく、恙なかりし歡びを、舒るに暇候はねば、雙ておん伴に立ながら、靴を隔て癩を搔く、心地のみして候ひき。然らば御免を蒙て、這通路來し方を、語り慰め候はん。と答まうしつ、親兵衛と、うち斯話つゝゆく程に、那神罰に心地快かりし、舵九郎が事はさら也、その後甲斐の石木にて、信乃道節に環會たる、其頭の事を窺として、濱路姫の上までも、甲乙となくいひ出れば、親兵衛も亦照文が、鶴に開漏らしたる我うへと、姥雪一家の事までも、皆詳に説示すを、照文いよく奇也。と稱へて、連りに歩の找むを覺す。側聞する貝六郎も、憶はず止息を吻く迄に、その言毎にうち驚きて、幾番となく見かへりけり。兩程に義實主は、甲乙の物がたらひの、最興あれば、笑局に入りて、來るともおぼえず、又舊の、樹粒間なき邊までかへり來給ふ程に、然しも長かりし春の日の、生憎越に暮果て、加以今宵は烏夜なるに、樹の下ゆけばいとゞしく、其里とも絶て辨よしぞなき、主從俱に找難て、殆困じ果たる折から、去向の路より閃々と、蕉火張燈 晃きて、人馬許多近づき來にけり。登時義實主は、這衆人の親疎禍福を、量り難つゝ路傍に、杖を住て熟視るに、他門が引提たる張燈の、花號は中黒也ければ、僅に心おちみたる。

照文は貝六と、共侶に找出て、来たれるはおん伴當門敷。上には這里まで御下向なり。快燈燭をもて来ずや。と兩聲高く呼はりけり。當下來ぬる伴當門は、應と答て、路傍に、わかれて二行に扣えたる、そが中に近習兩三名、持る張燈うち抗て、邊しく杖み來つ、照文門にうち對ひて、嚮に目萌三が、仰を稟てかへり來ぬる折、今日の御危難、後竟に、御利運になりし事の趣、并に大江姥雪門が奇異の顛末、その崖略を所知りたれば、相歡びて御下向を、なほも那里に等奉りしに、日暮るゝ迄も見え給はねば、有繋に心もとなくて、準備の張燈蕉火に、路を照しておん迎に参りにき。就て稻村よりのおん使、苦屋八郎景能も、久しく河原に等奉りしが、牽し來たりしおん馬と、その身の伴當をのみ那里に留めて、こゝまで推參仕りぬ。と告るを義實听給ひて、來ぬる伴當を勞はせ、然而景能を召近づけて、汝は長途の疲勞も厭はで、我迹を那道と、慕ふて這里までも來ぬる事、歡び思ふ所也。次丸が贈りぬと聞えたる、馬は麓へ下りて見ん。大山寺まで伴せよ。と仰に景能歡びを、稟して馳て退きけり。この時迎に來たる伴の近習門が、今朝瀧田より吊したる、老侯の轎子を、這里まで昇せしと聞えしかば、照文門薦稟して、乗せまらせんと欲せしかども、義實頭をうち掉て、けふは特に長途なるに、皆山路にて疲勞にけんを、いかにして我身單、僅に昇して還らんやとて、毫も听かて、麓まで、そが儘下向し給ひしを、雜色奴隷に至るまで、傳聞つゝ感服して、皆忝く思ひけり。既にして義實主は、麓の河原にかへり來て、登見を建させ、尻うち掛、又景能を召近づけて、けふまらせたる那馬を、觀んとていそがし給ふにぞ、景能隨即伴當に、蕉火を乗らし、四下を照して、馬を牽寄て見せまらせするに、現その形勢、凡庸ならず。毛色は、蒼と白を雜えて、鱗の像く波に似たり。高は七尺有餘にして、那高瀬景時が、生暖磨墨也といふとも、是には優さじと見えたりける。當下景能がいふやう、原るに這馬は、當國蒼海港の牧より出たり。既に鬪することく、青白の駈、波に似たれば、牧士們命けて、青海波、と喚做たりと承りぬ。と告れば義實驚き給ひて、寔に毛色の波に似たるは、青海港に相稱へり。并は好名也、後々まで、如右喚すべけれとて、只管賞

讚し給ひつゝ、側に侍りたる、親兵衛を見かへりて、和郎、這馬を何とか見たる。と問れて親兵衛、然候。孔子の御まへに、語道に似たれど、小臣曾聞ることあり。約馬は、八尺以上を龍といひ、七尺以上を駝といふ。六尺なるを、通て馬とす。良馬は、頭を王とす、宜く方なるべし。目を丞相とす、宜これ明なるべし。脊を將軍とす、必是強を欲す。腹を城郭とす、好張ることを欲する也。四下を令とす、得て長かるべし。眼は高く匡うして、眼睛、鈴を懸たる如く、眼下は、鬚と鬚を懸たる像く、鼻孔大うして、鼻頭に王火の二字あり。口中尤赤かるべく、膝骨は圓して張たるを宜しとす。耳は、相近くして堅く、小うして厚かるべし。伏龍骨は軟て、頸長く、雙跌大うして突出、蹄は厚く、腹下平にして八字あり。尾骨高くして、垂るゝこと長かるべし。かくの如きを千里の馬とす。此は是いはでもしるき、李伯樂が相馬經の、崖略に候歟。這馬、高七尺有餘、骨法右の趣に、及ざる者ありといへども、龍と驪の間たり。よく騎る者は、一日に、百里を行くこと易かりてん。この雜毛の波瀾に似たれば、龍種ともいはいふべし。なれどもこは外飾にて、世に稀なるを愛るのみ、良馬と做すに足らざる歟。と阿容たる氣色もなく稟ししかば、義實主該き感じて、適要ある才子なるかな。今這馬を和郎に取せん。鞍鍔さへ皆具ひて、牽もて來たれば便り好し。うち乗て我先に、立て非常に備へずや。と仰に親兵衛忻然と、額を衝き、賜を拜して又稟すやう。烏澁がましうは候へども、小臣が曾祖木樨平は、青海港村の民也とか聞にき。この馬も那里の牧より、出たらんには舊縁あり。先乗試候はん。といひつゝ、馳て牽退けて、閃りとうち乗る約法に、暴馬なれども靜にて、主のこゝろに隨ひけり。登時大江親兵衛は、輪騎を做すこと兩三遍、舊處に下立て、又おん前に参りにけり。義實主は、親兵衛が、武藝膂力の捷れしを、嚮に目撃し給ひしかど、馬術までは能せじ、と思ひ給へば這暴馬を、賜りて乗せ給ひしに、精妙かくのごとくにあなれば、いよゝ感悅淺からず。况照文以下の伴當、孰か甘服せざるべき。ますます憑しく思ひけり。爾程に義實主は、晴たる星をうち仰きて、噫漫なりき。要なき事に、甲夜過ぬらん。卒ゆくべし

とて、登見を放ちて立給へば、鑓奴がはやく牽よする、馬にうち乗給ふ程に、親兵衛も亦青海波に、乗てぞ先に立にける。この餘古屋景能は、稻村より乗もて來ぬる、馬ありければ許されて、騎馬にて後方に從ふたり。愆而照文員六與四郎門、近習外様の伴當は、左右に從ひ前後を衛りて、張燈蕉火振照らしつゝ、ゆくこといまだ幾ならず、小水門目は、その身の伴當と、大山寺なる道人、兩三名に手炬を秉して、迎に來つゝ路傍に、跪居て老侯に見參す。義實主は音音門を、那里へ送り届たり。と報るを听つゝ、只管に、馬の足掻を早め給へば、既にして大山寺なる、三門に來給ひつゝ、廳て馬より下立て、玄關に赴き給ふ程に、住持は、役僧を領て、遠しく出迎へ、廳て客殿に案内をして、茶を薦め果子をまらせ、富山の奇談、神女の靈驗、听たる隨にいひ出て、その歡びを舒なとす。愆りし程に役僧門は、行童喝食を給侍に立して、先準備の夕饌を、老侯に差めまらせ、次に親兵衛照文門、都て幾十名の伴當にも、遺る限なく夜飯をものして、馬にも秣を飼したる、管待極めて丁寧也。そが中に親兵衛のみ、老侯と一席にて、たうべることを許されしかば、人感これを羨みけり。愆而伴當門の饌道もなく、果たりと聞えしかば、義實主は、與四郎と、音音曳手單節門に、嚮に听たる奇譚の、漏たる事もあらん歎とて、皆並て客殿へ、召登し給ひける。おん後方には照文景能、貝六目門も侍りたり。登時親兵衛找出て、義實主に稟すやう、我君、願ふは小臣に、權且暇を賜ひねかし。恩賜の馬に乗走らし、今より館山へ赴きて、御曹司を拯ひ取り奉り候はん、といふを義實主見かへりて、开は又酷く性急也。和郎は、庸人ならざれば、縦せん術ありとて、館山までは路の程、十數里なるものを、這夜を犯して遣られんや。明日は瀧田へ領て還りて、和郎が祖母妙眞に、對面させんと思ひしに、その義なくば恨みやせん。和郎敵城にゆかんとならば、異日義成にその義を告て、謀じ合して、便宜に任せん。憚るは要なき事にこそ。と諍返しつゝ、制め給ふを、親兵衛听す又いふやう、賢慮寔にその理あるべし。そを總角の生賢像に、御説に悖らば罪得がまし、寔に畏う侍れども、古語にも、兵は拙速を、貴ぶとこそ聞えたれ。久して謀の、巧なるをよしとせず。今より

那里へゆくにあらずば、御方の機密を敵に知らるゝ、透これなしとすべからず。小臣も亦祖母に、對面を急ぎざるにあらねど、そは、私の恩愛のみ、臣たる者の本意にあらず。痛ましいかな御曹司は、虎穴の内におん身を置れて、いくその艱苦を受給ふらん。そを想像り奉れば、一日も千秋に異ならず。然ば神女の示教にも、山路の窓を對治して、快義通を拯取りね。と宣はせしに、這里に宿て、今宵を工夫に過しがたかり。御許容あらば、公私の大幸、この上や候べき。いかで。と只管に、忠義に厚き武勇の魂、止るべくもあらざれば、義實主に點頭給ひて、然まてに思は、禁めはせねど、曉方までは烏夜なるに、さりとては心もとなし。非如和郎十勝の、計略ありとて、その身單ゆかんは危し。我伴當の數を盡して、咸和郎に從はせん歎。他們は都て甲冑の、準備なきを争何はせん。と問れて親兵衛、否、伴當の、多きは路次の煩ひあり。この身の外に一人也とも、帮助を求むべくもあらねど、然しも國主のおん使、と稱て那里へ赴くなれば、伴若黨一名と、鑓奴の奴僕はあるべし。這兩個にて事足りなん。况甲冑などは要なし。願ふは禮服一領を、貸給ひね。と稟すにぞ、義實主眉を蹙て、そは易きことながら、和郎は國主の使と唱て、那里にゆきて何といふやと、問れて親兵衛、然、候。箒策は密なるをよしとす。機に臨み變に應じて、術はいくらも候はん。目今こゝにて云々と、安定にはいひがたかり。と答まうせば點頭て、然らば和郎に拿すべき、我身甲と掩膊脛甲も、柳宮にあらんずらん。开を禮服の下に著籠めよ。却誰をか伴若黨に、打扮して遣すべき。といひつゝ、左右を見かへり給へば、苦屋景能找出て、その義はいかて小臣に、仰付られ候へかし。曩に御曹司に俱し奉りて、殿臺に赴きしかば、那里の地の理は既に知れり。且稻村より乗もて來ぬる、馬も這里に候へば、那青海波に及ばずとも、五十歩百歩の間にて、趕續き候はん。といへば又與四郎も、おそるゝ。席末より、膝を找めて稟すやう、願ふは和子の鑓奴に、小可こそ參るべけれ。六稔以來守傳きしに、今さら愆る大事の伴に、立すは生甲斐候はじ。といふを義實主うち笑ひて、八郎は、稻村の、使者にはあれど、内人也。自他の差別のなきものなれば、所望に依るもよかんなん。

與四郎は老人也。駿馬の足に及んや。已ねく。と禁め給へば、與四郎休へず眼を睜りて、御説では候へども、小可
 はこの年來、山路に熟て、身の衰を、毫も覺候はず。こは那仙果神漿を、たうべし所以に候はん。千里を走る馬
 也とも、趕續んこと極めて易かり。いかで許させ給ひねかし。と怨じて只管請まつれば、親兵衛陪補しなうすやう、
 他は知せ給ふごとく、稀古の齡に候へども、世の老人と同じからず。倘路にて疲れなば、搔抓みて、小臣が、尻馬に
 乗せ候はん。この義も御ころ安かるべし。といふに義實主含笑て、然らば甲乙俱にゆきね。安房殿へもこの趣を、
 はやく通達せずもあらば、期に莅て不便ならん。といひつゝ、傍を見かへりて、十一郎は、我副馬に、うち乗て他門と
 俱に、路次をいそぎて是等のよしを、射方の陣へ注進せよ。八郎を借るよしは、別人をもて明日稻村へ、いひ遣すべ
 う思ふかし。と仰に歡ぶ與四郎はさら也。照文も欣然と、俱に言承したりける。登時又義實主は、目貝六を喚近づけ
 て、我兩箇の柳篋には、副佩の兩刀と、嚮に著たる禮服あらん。倘掩膊と脛甲と、身甲もあらば、皆廣蓋に、うち載
 て快もて來よ。と分付給へば、件の兩臣は、承はりぬ。と應つゝ、いそしく俱に立にけり。姑且して貝六目は、老侯
 の副佩の刀、衣裳はさら也、這餘の東西をも、兩三箇の、廣蓋に載ても來つゝ、侯の身邊に安排べて、御身甲も掩
 膊脛甲も、非常の備に、おん伴當が、もてまゐり候ひき。といふに義實主、左見右見て、先副佩の兩刀を、傍に置し
 て、親兵衛に、うち對ひて宣ふやう、和郎はいまだ听ざりし歟。我家に、大月形、小月像と名けたる、重大の刀あ
 り。大月形は、家督と共に、昔年義成に譲與へたり。といひつゝ、件の副佩の、刀をやをら拵抗て、見よ此は是小月像
 也、夜行に迷ぬ奇特あり。世に聞えたる重寶なれども、今日和郎が大功の、賞として取る也。その短刀に挿添て、
 館山へ赴けかし。又その小袖と、肩衣袴は、長短和郎に相應しきや、量りがたき東西なれども、开を著て今番の使价
 を勤めよ。こゝろ得たる歟。と言示して、手づから刀を遞與し給へば、親兵衛は、速しく、膝を找めて、小月像を受
 取きて席を避け、腰に帯つゝ、稟すやう。然ば小臣が、微功を賞し給はんとして、慙莫大なる賜は、冥加

にあまりておん承を、稟すも畏く候也。御服章なる衣裳だに、拜領容易からざらんを、況當家の御重寶と聞えたる、
 這おん刀を賜らんや。おん使を勤果なば、程なく返しまゐらすべけれ。といふを義實主推禁めて、否、汝達八人は、
 我外孫ぞと思ふよしあり。伏姫が靈のその短刀を、拿出て和郎に與へしも、事情は同じかるべし。そが儘帶て、子
 孫に傳へよ。なで返すことあらんや。と諭して又中刀を、拵抗て宣ふやう、親兵衛、これを和郎に取せん。こは
 與四郎に譲り與へよ。他は馬の鑣録に、打扮つとも敵地也。朴刀は相應からず。因てこれを取する也。卒々。とい
 そがし給へば、親兵衛は、又膝を找めて、受戴きて稟すやう、小臣のみかは、與四郎さへに、恚る御恩は有がたきま
 て、那身に餘り候はん。といへば義實主頭を掉て、然にあらず。彼夫婦は、兩個の娘と共に、六稔和郎に仕へたる、
 功あるをもてこの義に及べり。开を手づから取せぬは、故主と聞えし道節に、いまだ對面せざれば也。賞は貴賤に依
 るべからず。推辭は要なき事にこそ。と諭し給へば親兵衛は、いよゝますゝ感佩しつゝ、退きて、然而與四郎に、
 うち對ひつゝ、やよ翁よ。目今御説の趣を、具に拜聴せしならん。こは拜領のおん東西ぞや。といひつゝ、遞與す中
 刀を、與四郎は、夢歎とばかりに、屢捧、戴くのみ、只感涙に胸塞りけん、ものいふべくもあらざりけり。然ば後
 方に侍りたる、音音并に曳手單節も、俱に感涙吐みて、皆老侯を拜しまつれる、歡びいふべうもあらざるべし。是等
 の事の趣を、見も聞もせし照文景能、以下の近習も目を注しつゝ、這君にして、這臣あり。現羨むべき榮にこそ。
 と感じ思はぬ者もなし。春の夜なれば短くて、はや子の五尅になりしかば、義實主は、親兵衛門に、身の暇を給はり
 て、罷出んとする程に、又喚返して宣ふやう、和郎が騎馬の打扮を、我見まく欲するかし。三門より這方には、寺法
 に騎馬を許されねども、こは軍陣の使价にて、勿論非常の大事にあなれば、住持に請ふて、玄關の邊より乗しめん。
 馬には飽まで豆秣を飼して、腰戰飯を忘るゝな。十一郎八郎門、與四郎も共侶に、退りてはやく準備をせずや。と仰
 に大家、阿と應て、立まくすれば、親兵衛は、恩賜の衣裳を左の肩に、被ぎて退るそが後方より、照文景能與四郎も、

うち續きてぞ退出ける。この折までも席末に、侍りし姥雪の娘、姑、音音並に曳手單節も、却あるべきにあらざれば、後に跟きつゝ出る折、音音はいそぐ良人の袂を、披住めて悄語くやう、上の御恩のかしこきに、就ても小心し給ひね。いふまでに侍らねど、老ては勤に勝難て、朽惜き事もありなまし。馬に後れて期に合すは、俱しがひもなく侍らなん。心にかゝるは只これのみ。といふに與四郎點頭くのみ、應もあへず、景能門に、後れじとてか袖うち拂ふて、庫裡のかたへぞ走りける。爾程に義實主は、次の間に侍りたる、近習を召て云々と、住持に請ふべき事の趣、その餘も下知を傳ふべき事、且親兵衛門が身装して、立出んとしぬる折、快知らせよ。と分付給へば、近習は腰應をしつ、こゝろ得果て立にけり。左右する程に、眞夜中の、鐘鐃々と响く時候、件の近習は走り來つ、親兵衛門が身装、皆整ひて候。と報るに義實、然ばとて、遽しく身を起し給へば、目はおん佩刀を持て後方に従ひ、貝六郎は提燭を乗て、躰て先にぞ立にける。既にして義實主は、玄關に立出給へば、音音は曳手單節と俱に、力二尺八をも喚覺して、式臺に聚合てをり、又老侯の伴當は、大家廣庭に星列れて、事の容を觀るもの多かり。然ば住持役僧門は、義實主の身邊に侍り、沙彌喇食們は所化寮の、窓より闖くも勢からず。今宵は天好晴たれども、晦に近き月いまだ昇らず。遮莫支關の邊なる、登石の左右には、多く庭燎を燒たりければ、烏夜にも遺る隅なくて、白晝の如く明かりけり。爾程に大江親兵衛は、青葱綬の身甲に、銀打たる細鏢子の鉞擲て、上には、緋の飾磨紺の履斗緋小袖の、中黒の花號あるを著下し、下には薄紅の膳膊の小袖二可うち襲被て、純褐の長社袴の、こも中黒の花號あるを穿たる、袴の襠をいと叩く綱揚げ、鞋は撒金に、簞竹龍胆を描金にしたる、絲柄の短刀に、小月形の名刀を、瓊叩に腰に跨え、細柄ある馬上張燈を、斜に帯の間に挿て、那馬馬青海波に雲珠鞍置て、眞紅の厚總の、燃出る可なるを掛たるにうち跨り、紫と白と絞分たる釣子を搔繰りつゝ、十繫とかいふ、馬立小屋の頭より、徐々と歩せたるが、故意蹣蹣をば著けず、著坐に便よからん爲也。當下姥雪與四郎は、紺の綿腸衣の袖大きなを、腰高に端折袈げて、海鼠形の躰衣の革紐を、

前襟に楚と結び、正平革の靴履して、恩賜の一刀を腰に跨え、麻織の草鞋を穿て、右手に櫛の長煙を、乗りつゝ、顔面に従ふたり。正に是一個は十歳未滿の神童、年小なれども、身長叩く、深山を出る新鷹の、雲を凌る勢ひあり。一個は七旬前後の老翁、鬚類きたれども、筋力壯に、谷河渉す沐虎の、子を駝る情あり。この餘、登崎十一郎照文、苦屋八郎景能も、己がじしなる打扮して、各馬に乗たるが、俱に歩捷き奴隷を擇て、鑢奴にぞしたりける。恁而大江親兵衛は、馬を登石の頭に找めたる、人品初に彌増て、最長やかなる額髪を、左右へ耳まで振分たる、面色特に美しく、威ひあれども猛からず、意氣揚々たる打扮を、觀る者齊一稱贊して、憶す耶々と喝采にけり。登時親兵衛、馬を駐めて、玄關にうち朝ひ、鞍の前輪に額俯すを、義實主觀つゝ、聲を被て、適愛たき勇士の行藏、我は明日より汝が吉左右を、瀧田の城に俟つゝ在らん。曉天近し、快ゆきね。と仰に親兵衛、阿と應て、馬に拍れ乗透らして、觀る間に出る三門口、與四郎も亦後れじとて、夸父が目を逐ふ勢ひあり。後方に續く景能照文、腰に吊たる張燈は、烏夜の螢火と見めきて、竝樹の松の右ひだり、二町あまりを瞬間に、はやくも見えずなりにけり。

第七七回

大江親兵衛活ながら素藤を捉ふ
里見御曹子優に陣營に還る

却説大江親兵衛は、當晩名馬青海波にうち跨て、大山寺を出しより、纔に二响許にして、素藤が館山の城に程遠からぬ。上總州夷濃郡、羽賀の郷の頭なる、竝松原まで騎著しに、天はいまだ明ざりけり。この時照文景能は、俱に後れていまだ見え來ず。唯姥雪與四郎のみ、駛馬に赶携りて、一町とも後るゝことなく、俱にこの地方まで來にければ、親兵衛深く嘆賞して、翁は齡頰きたるに、路を千里の馬と俱に、烏夜にも迷はて逸早く、十數里を來ぬる事、又是一奇といひつべし。意ふに年來靈山に、心神を願ひて、仙骨をや得たりけん。併伏、姫神の、擁護も茲にありけんかし。といふに與四郎含笑て、いはるゝごとく我身ながら、奔走思ひの隨にして、壯年に彌増せしは、寔に神女の

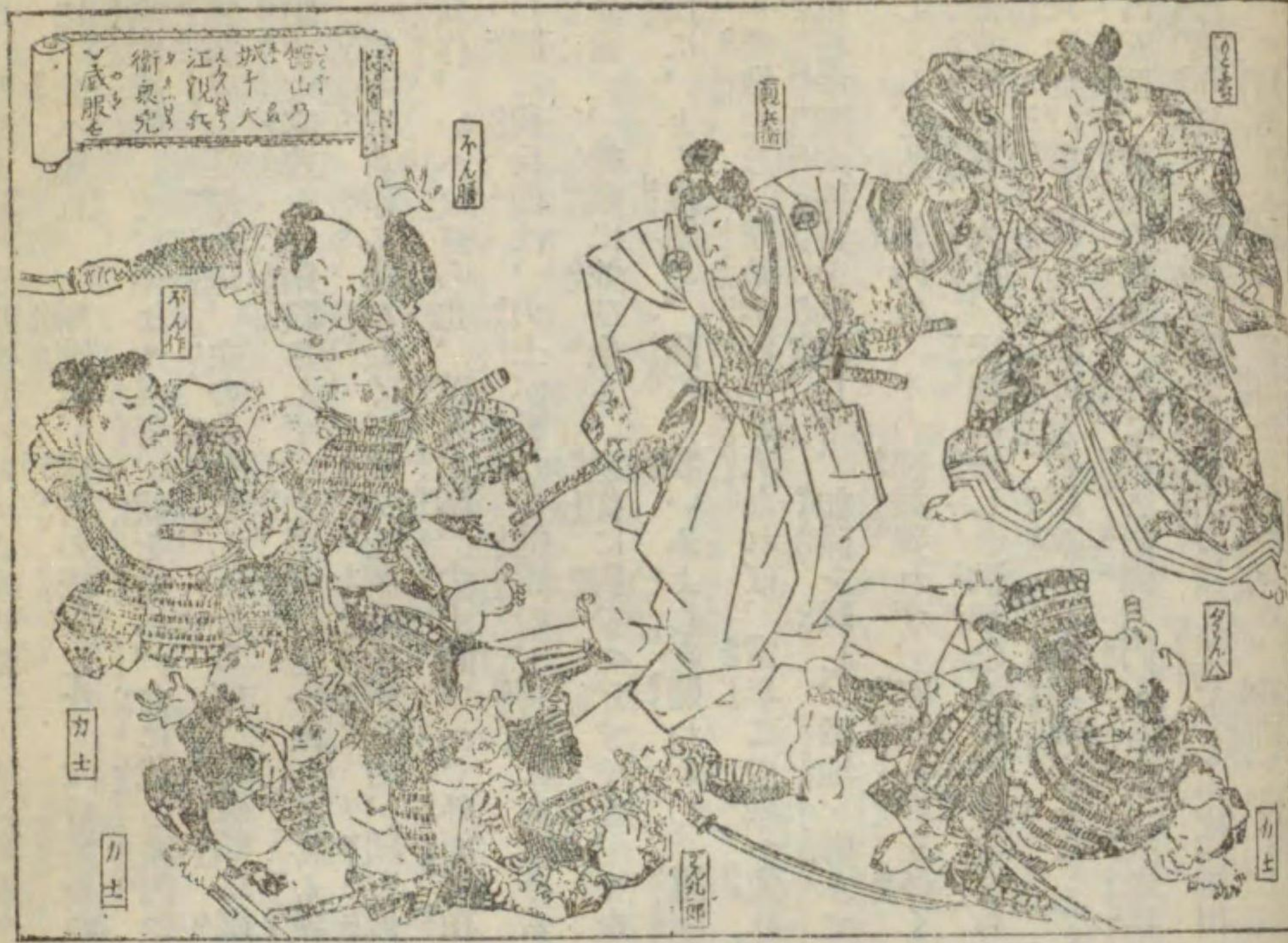
冥助なるべし。登崎苦屋の趕著まで、茲にて憩ひ給はずや。といふに親兵衛點頭て、那這と見かへるに、在曉の月既に出て、いと明かりける樹間に、舊たる佛堂ありしかば、馳て馬より下立て、這廢堂の縁頼に、尻をうち掛て憩ひてをり。當下與四郎は、袂なる、手巾を拿出、汗を拭去て、馬には草を食せなどす。左右する程に天は明て、鳥の森を離るゝ時候、景能照文二騎相並びて、やうやくに來にけるが、親兵衛の等つゝ在りしを、うち見て俱に馬より下て、主僕を只管勞ひけり。就中與四郎が、青海波に後れずして、よく走りしに胆を潰して、最恥しく思ふものから、鏢録の奴僕們は、酷く後れけんいまだ來ず。登時親兵衛がいふやう、和殿門既に來ませしに、這里にて時を移すべからず。我は快館山なる、敵城に赴きて、御曹司を拯拿りてん、益なき奴隷を等ことかは。苦屋主の乗たる馬は、這頭に繋置わかし。快々といそがせば、照文景能異議もなく、しかるべし。と應ても、親兵衛が今日の謀慮を、まだ知らざれば今さらに、心もとなく思ふのみ。恚てあるべきにあらざれば、景能は遽しく、身装を更めて、伴若黨に打扮けり。照文は又景能が、馬を乗捨置ん事、惜むにはあらねども、一疋也とも軍陣に、必要あるものなれば、我は歩行より御陣にゆきて、二疋の馬を牽んといひけり。浩處に後れて來ぬる、照文景能が伴の鏢録僕們は、疲たる足を曳つゝ、折よく趕著得てければ、大家他們を勞ひて、一霎時喘を定めさせ、照文は又馬にうち跨り、苦屋が伴の奴隷には、景能の乗捨たる、馬を牽し相俱して、國主の陣へいそぎけり。却說犬江親兵衛は、景能と與四郎を、馬の左右に從へて、館山の城へ行く程に、朝日隈なく半竿昇りて、路傍に開初たる、山櫻の露馨やか也。既にして親兵衛は、館山の城の正門に迫りて、一町許這方より、景能を走らして喚門するに、景能憚る氣色なく、單正門の橋際に抜向ひて、聲高やかに喚るやう、籠城の人々にもいはん。目今國主のおん使、犬江親兵衛仁來れり。主僕纒に三名なるに、駭かれて箭を發ち、銃丸を飛ばして拒むべからず。はやく主長に報知して、城門を開きて迎へずや。と兩三番喚門程に、親兵衛も亦馬を控めて、主僕三名、正門なる、櫓を渡しつ、開くを遅しと、鐵門の頭に立たりける。この時館山

の城兵衛は、久しく國主の大軍に圍れて、籠中の鳥に似たれども、然ばとて又攻も撃れず、防禦の外に他事もなく、四門の衛戍を警て、憶はずも日を彌りしに、忽地國主の使价と名告て、最尊大に喚門ひしを、士卒驚き且訝りて、關兒の小彌より張見るに、思ふにも似ぬ主僕三名、騎馬なるは少年にて、鏢奴は老人也。壯なるは若黨のみ。他は誰何と、呆惑ひつ、遽しく退きて、這隊の頭人、礪時願入業當に報しかば、願入听つゝ、眉を蹙めて、城樓に登りてこれを見るに、果して違ざりければ、左右を見かへり冷笑ひて、意ふに義成攻厭倦て、和議の使に那小兒を、おこせしにぞあらんずらん。先このよしを聞えあげてん。漫に許して内へな容れそ。いで〜といひつゝも、遽しく下立て、單みづから本城なる、後堂へ赴きて、素藤に報るやう、目今寄隊の使者と稱て、額髪ある猴子一名、禮服にて馬にうち跨り、犬江親兵衛仁と名告て、僅に兩個の伴當を從へ、胆太くも正門なる、御橋を既に渡り來て、對面を請ふといへり。因て猜し候に、義成久しく攻厭倦て、詮術のなき隨に、義通と牽替に、濱路姫を餽送んといふ、和陸の使价にこそあらめ。いかゞ計ひ候はんや。といふを素藤笑しげに、听つゝ、屢點頭て、開は推量に差ふことなく、必和議の使价なるべし。然るを某甲某乙と聞えたる、一二の老黨を聞きて、二十に足らぬ小猴子を、大事の使价に立せしは、柔よく剛を征するといふ。拙策なる歟、爾らずば、愆失ありても、怯を取りても、弱輩なれば許されん、と思量りし所處ならん。開は左まれ右もあれ、飽まで武威を赫奕して、开奴に胆を潰させん。事の準備は恚々にして、箇様々々に計ふべし。この議を餘の老黨にも、士卒にも相傳へて、事整は城内へ、开奴を容れて、案内をせよ。我書院にて對面せん。快々せよ。といそがせば、願入異議なく感服して、承りぬと應つゝ、走りて外面へ退りけり。爾程に犬江親兵衛は、城の門前に馬を駐めて、主僕等こと半响許、こゝろ頻りに焦燥つ隨に、景能と與四郎は、迭代に城門を敲きて、開よ〜と喚れども、城内なる雜兵們は、等ね〜と答るのみ、速には開くべくもあらず。恚りし程に礪時願入は、平田張益作與多と共侶に、華やかなる武具して、隊兵多く領て出て來つ、正門を成る雜兵們に、目を注

し下知を傳へて、寄隊の陣より來ぬると聞えし、大江親兵衛と敷喚做たる猴子主僕が、門外に在るならば、内へ入れよ。と喚れば、雜兵們は應と答て、角門を推開き、卒おん使价入り給へ。といふを親兵衛冷笑ひて、馬より下りず、聲高やかに、若們などて我身單を、害怕るゝことの甚しきや。縦城門を咸開くとも、後より續く敵はなし。君子はゆく徑によらず、況國主のおん使价として、角門より入る義やある。禮儀を知らぬ白物かな。と窘められて願入盆作、怵へず兩聲ふり立て、嗜たり猴子奴が、月屬寄隊の大軍だも、屑ともし給はざる、我君の武威をもて、今さら誰にか憚るべき。人がましき老黨を、擇て使价におこされなば、城門を開きて入れもせん。寄隊の陣に人はなきや。年は幾か知らねども、額髪ある少年の、加以大江と名告れるには、狗寶こそ相應しからめ。开を角門より入れらるゝは、分に過たる管待なりき、と思はて過言は身の程知らぬ、白物也。と遣り返せば、親兵衛呵々とうち笑ひて、若們聞ずや、古の、賢しき人の例を思ふに、武内宿禰は、年十四の時、天皇(景行)の勅詔を奉り、北陸、及東方諸國を巡察して、百姓の叛るを治めたり。又日本武尊は、おん年二八にて、熊襲が魁帥と聞えたる、川上梟帥を誅し給ひき。又厩戸の皇子(聖德太子)の如きは、生ながらの聖にて、聰明睿智儔稀也。又應神の太子、鬼道の稚郎子は、髻歳にして智慧廣大、始て百濟の王仁們に就て、天朝漢學の開祖たり。遠からぬ世に追りては、菅家は五歳にして、五言絶句の作あり。後醍醐の入歳の宮、孝順戀字のおん歌あり。又その武勇の捷れしは、安陪貞任が獨子千代童子、十三歳にして、萬夫無當の勇あり。楠正行十三歳、父正成の遺訓を守りて、既に恢復の大志あり。この它、源爲朝、源太義平、源牛孺、曾我箱王、義朝の金王、教經の菊王、熱田の御所五郎丸、枚擧るに違あらず。是をもて觀るときは、才あると才なきと、人の賢と不肖なるは、老小をもて論ぜんや。且我家號を大江と告るとて、狗寶より入るものならば、若們が主と憑む、墓田は瀨より出入するや。墓田の墓が瀨より出て、迎ふことを要せずは、大江も赤角門より、決して出入すべからず。この義は何處。と詰られて、それは、とばかり願入盆作、腹は立ども理の當

然に、争ひかねていふよしもなく、勢快出率を走らしして、親兵衛にいはれしを、素直に出進しつゝ、故意門外を叱りなどして、大門をぞ開せける。登時大江親兵衛は、馬より閃りと下立て、門内に抜入る程に、願入盆作相迎へて、名告をしつゝ、案内に立けり。その事の爲體、墓田が士卒、犇々と、鎧たるもの二三百名、左右二行に相備へて、長鎗眉尖刀を見めかし、或は弓箭鳥銃を携て、專武威を張るものから、親兵衛は自若として、毫ばかりも見かへらず、引れて中門に迫るまで、景能は隸従ふて、左右に眼を配りたり。爾程に與四郎も、續きて馬を牽入れしを、城の士卒們罵り咎めて、こは漫也、疾出よ。といふを與四郎冷笑ひて、靜謐無異の折ならば、馬を門前に繋ぎもせん、這籠城の最中に来て、獨門外に主を等んや。時宜を思はぬ衆人かな。といはせも果す城の雜兵、二三十名群立蒐りて、推戻さんとて鬪く程に、名馬も事情を知りけん、忽地に嘶き狂ひて、前より找むを嚙倒し、後より寄るを蹴返したる勢ひ禁むべくもあらざれば、衆兵齊一駭謀きて、憶はず捫擇せし程に、與四郎は馬と俱に、突然として中門を、過りて玄關の頭に來にけり。登時願入盆作は、件の悲劇を見かへりて、苦々しくは思ふものから、大事の前なる小事にこそと、思ひ返しつ、趕蒐來ぬる、雜兵們に目を注して、禁めてなほも親兵衛の、先に立つゝ案内をす。既にして玄關の、式臺に登る折、親兵衛はなほ刀を帶て、伴當に遞與さざりしを、願入盆作共に咎めて、こは無禮なり、作法を知らずや。諸侯たりとも使臣たる者、兩刀を帶て、玄關へ、登ることを許さんや。最鳥計也。と制するを、親兵衛听かず、冷笑ひて、然ばかりの事知らぬにあらねど、人に尊卑あり、禮に吉凶あり、我君は、是房總の國主也。墓田は原その麾下の城將、所領一郡の外を出ず。縦和順の折也とも、對應の義に及ぶべからず。矧謀叛籠城せられて、怨敵御方と分れては、只軍陣の作法に由るべし。約莫その君の使として、敵城に來ぬる者、身に帶たる刀を放さば、开は降人に異ならず。且這刀は、君家の重寶、我老侯の賜なれば、權且も身を放つべからず。益なき事を咎んより、快々案内に達すや。と答て從ふべくもあらぬを、願入も盆作も、先度に懲りて争はず、肚裏には冷笑ひて、只今何と

もいはどいへ、主君對面の折にこそ、猫兒に逢たる鼠の像く、頭を擡げ得ざらん。と呟きながら聞ぬ貌して、廳で書院へ伴へば、景能と與四郎は、俱に支關の簷下にをり、今奥に入る親兵衛の、背影を目送りて、心憎々地に伏姫神の擁護を祈念したりける。却説大江親兵衛は、坐席幾間かうち過つ、長廊下を遶り來て、引れて儲の書院に赴き、と見れば、墓田素藤は、朱纒の甲の、吊腿のみなるに、純紺錦の戰袍を披下し、堆朱の刻函の大刀を佩て、膝に鐵骨の軍扇を衝建、虎彪の皮をうち累たる、褥子に坐して上座に在り。左右に侍る老黨兩個は、奥利本膳盛衛、淺木碗九郎嘉俱也。俱に玄革綴の鎧を撰たるが、こも披、膊をば著けず、象頭と鮫函の、解手刀を腰に帶たり。この餘、究竟の力士四五十名、短鎗肩尖刀の鞘を除して、二行に侍立し、一百有餘の雜兵は、弓箭火銃を手々に持て、孫廂の下に羅列れたり。その事の爲體、齊々整々として、猛威を赫炎し、素破といはゞ、打も蒐るべき面魂、都て一人當千と、見えざるはなかりけり。當下願八盆作は、俱に書院の縁頗に跪きて、寄隊の使臣大江親兵衛を、おん下知により領てまゐりぬ。と名告をすれば、素藤は、其方を乞と見る程に、親兵衛は揖讓もせず、長袴の下遣返して、説使なれば、勿論上席、宜く用捨あるべし。といひつ、はやく找登りて、床間なる鎧櫃を、披出し尻うち掛て、正面なる、第一の上座に著しかば、素藤主従一個として、呆れて瞻仰ざるはなく、他は誰何。とばかりに、早に咎る者もなし。登時素藤勃然と、怒れる聲を肯立て、噫無慙なる、猴子が狂態、おもふに這奴は瘋人ならん。はやく引揚降さずや。と勢ひ猛く下知したる、聲共侶に碗九郎、本膳願八盆作們は、承りぬ。と應つ、大家蒐れ。と身を起せば、四下に守護の力士毎、咄と嘯て、短兵を、晃めかしつ、親兵衛を、推捕稠て撃んとす。那時遅し。這時速し。奇なるかな、親兵衛が懷より、一道の光颯と榮耀して、打向ふ兵毎の、面を撲地と撻しかば、大家都て服を射られて、諸聲高く、苦と叫ぶ。碗九本膳、願八盆作、力士も俱に助斗りて、簀子に腰を撲惱し、或は柱に頭を破りて、平張俯たる儘にして、一霎時は起も得ざりけり。今這奇しき光景に、外面なる雜兵們は、驚愕怖れて伏み得ず、只驚々と聞ゆるのみ。鐵櫃を伏



(す服威を兇衆衛兵親江犬に城の山館)

る親兵衛の、門に聚合ふに似たりける。登時親兵衛聲高くやかに、若們何ぞ無禮なる。墓田は我君麾下の城將、虎狼の野心を逞くして、今籠城に暨ぶとも、軍陣の作法をもて、國主の使者を迎ふべきに、恚まで傲、恚まる、非禮を容ざる、天罰觀面、恚ても悔すや。懲りずや。と罵責られて、素藤も、驚きながら毫も怯まず、眼を瞪らし聲ふり立て、猴子奴、幻術ありとて、我刃尖に向んや。开里な退そ。と致圍て、突と身を起し、引抜く大刀風、兩段になれ、と丁と撃つを、親兵衛聲がず身を反して、扇子をもつて那這と、柔柱ひながら、耶と聲かけて、刃を礮と打零せば、素藤吐嗟と踏入て、組んと找むを引著て、項を掴み揉躰して、隻足に楚と踏伏せたり。現比類なき勇力に、壓れて苦楚堪がたかる、素藤は、千曳の石を、背に受たる心地やしけん、面色宛、土の如く、饒せ饒せ。と叫べども、吭逼りて聲立ず、絶る可に呻吟きたり。恚りし程に、願八盆作、本膳も碗九郎も、力士們もやうやくに、我に復りて共侶に、身を起しつ、眼睛を定めて、見れば、無慙や素藤は、酷く親兵衛に踏伏られ

て、呼吸も絶へべき形勢なれば、大家吐嗟、と駭嘆ぎて、拯ひ拿まく思へども、初めに懲りて、和郎立ね。和主且試に、先へ蒐れ。と断譲る、處丙の訟果しなく、分惑ひぬる田の畔の、蛙兒に似たる面框、咸停跛て長視てをり。登時素藤聲戦して、やよや兵母、我を救へ。命に代る東西はなきに、勸解よく。と叫ぶにぞ、親兵衛呵々とうち笑ひて、臆病鬼の受地子母、主の命を乞ふとならば、皆縁頼に羅列れて、我託宣を拜聴せよ。倘又不の字をいふ者あらば、一壓中て素藤を、踏殺さんず、立ずや。といはれて答も投頼の、尋念に違あらずなりたる、保質をさへ拿られしかば、一言半句も争ふものなく、皆刃を捐鋒を倒して、頭を低腰を折め、阿容々々として縁頼に、出て命を乞ふとす。願八盆作、いへばさら也、碗九本膳、力士們さへ、外面に在る雜兵まで、人多ければ推合て、繡眼鳥の像く竝びたり。その間に親兵衛は、力士が棄たる捕索の、臂近にありけるを、極拿はやく素藤を、緊しく網りて動かせず。そが儘傍に牽著て、縁頼に並び坐る、逆從に對ひて示すやう、やをれ同惡の白物們、この期に及びて命を惜む敷。狂ふ猿馬を丹田に、よく推鎮め、謹て、我いふよしを聞かぬ。這素藤は、近江の山城、但鳥跡六業因が獨子にて、初は但鳥源金太と喚做たる、原是刑餘の罪人なれば、當年この地へ免れ來て、愚民を惑はし、榮利を謀り、小鞠谷如滿が家臣也ける、兎巷幸彌太遠親を哄誘して、如滿を弑し、城地を奪ふて、罪を遠親に負したる、奸計立地に成熟して、夷瀧を横領したれども、當時は、その惡發覺れず、初病民を多く救ひし、功ある由のみ聞えしかば、そが儘城主になされしは、是我君の寬仁大度、天地に等しき洪恩なるに、开をうち忘れ心傲りて、舊黨願八盆作を、竊に招き寄せ、幫助として、民を虐げ驕を極め、剩非分の婚姻の、宿望遂がたきを深く恨みて、又奸計を旋らして、義通君を捉り奉り、又滿呂安西、神餘の舊黨、并に俠客南彌六們をもて、我老侯を富山にて、犯しまつらんと欲りしたる、その惡既に極れり。遮莫昨日、その刺客們を、我那山にて生拘りしかば、浦田の獄舎に繋れたり。抑我身に、同因果の、弟兄弟七名あり、その窮厄ある毎に、富山なる伏姫神の、冥助を得ずといふものなし。就中我親兵衛仁は、年四の秋よりして、又那神

女の機謀を蒙り、六條富山に生育たる、今茲は浦の九歳なれども、見よ、身長さへ、心術さへ、恁まで大きくなりたるを、誰か驚き仰ざるべき。神變不測、無類の神童、二人と見ること有がたければ、結縁の爲禮拜せよ。然ば我、這素藤の、素生と奸詐をよく知たるも、身單説使に立たるも、皆是神女の示教に憑れり。昔唐山なる秦の甘羅は、年十二の童なりしに、呂不韋に説て趙に使し、大功ありしを、司馬遷が、史記てふ書に載せしより、唐人們は詩にも賦し、物にも引て、唱嘆しぬれども、皇國にも這親兵衛仁あり。その功甘羅と孰與ぞや。开は左まれ右もあれ、約莫我義兄弟は、感得の靈玉あり。その玉には八行の、文字を分ちて、玉毎に、一字づつ自然とあり。开を我持るは仁字の玉也。因て名を仁と告りにき。若們我を撃んとせし折、光に撲れて度を失ひしは、我靈玉の奇特なるに、幻術ならんと猜せしは、這素藤が愛歡ぶ、邪術に思ひ比べし歟、淺慮臆斷笑ふべし。縦素藤邪術をもて、御曹司を捉り奉りて、計略を得たりとすとも、我君仁義の大軍もて、攻潰し給はん事は、石をもて卵を、壓すよりもいと易けれど、這城内へ匪拿られたる、罪なき民の、瓦礫と共に、焼れん事を憐愍給ひて、最寛やかなるおん計ひは、唯御曹司を思召す、故のみにあらざるを、若們愚物の本性にて、漫に誇りて我君を、做事あらじ、と侮りたる、報ひを目今知るや知すや。先非を悔しくおもふとも、皆是五逆の罪人なれば、誰か一人も饒ざるべき。刑罰踵を旋さて、梟首せられんものなるを、我又神女の示教に憑りて、仇に報ふに徳をもてして、曼諧信の仁を施さずは、若們生て、今まで在んや。先はやく是等のよしを、御曹司に聞えあげて、慈悲の恩免を請まつりね。我も亦御陣に參りて、國主に大赦を請ひまつらん。倘等閑の計ひあらば、素藤を首として、誅して首級を御陣へ獻せん。若們首を接まく願はば、目今玄關の頭に在る、我伴當に報知して、御曹司を送り奉る、事の準備をはやくせよ。我俱したる若黨は、曩に諏訪の社頭にて、若們が火銃に、撃れたる御方の近臣、苦屋八郎即是也。那折都て深夷に仆れし、御曹司の伴當は、亦是神女の冥助によりて、蘇生して稻村の城にあり。恁まで天福神助多かる、國主に弓を彎たるは、天に對ひて唾吐くより、なほ甲

妻もなき白物也けり。快々せずや。と警懲せば、願八益作、碗九本膳、以下の兇黨舌を掉ふて、戦き怕れて、仔細に及ばず。承りぬ。と應して、本膳と碗九郎は、走りて外面へ赴きつ、先苦屋景能に、親兵衛が奇異武勇の事の趣、并に籠城の将平が、咸降参の義を報知して、案内して義通君の、身邊へぞ起さける。單表、里見御曹司義通君は、久しく當城に屏籠られて、慰めまゐらすものもなく、柵締たる一室の内に、且しくらし給ひしに、この日思ひがけなくも、賊徒本膳碗九郎が、苦屋景能を俱して来て、城兵都て降参の、事情を告まうしつ、遽しく圍を披き、別宿に出しまゐらせて、儲の褥に請登すれば、景能懸て見参して、恙なかりしを祝し奉り、然而大江親兵衛が、武勇大功の速なりし、事の由を告まうせば、本膳と碗九郎は、歸降のよしを聞えあげて、御陣へ送り奉らん。徐に出させ給ひねとて、茶をまゐらせ果子を薦めて、をさく、勸り慰めけり。義通君は是等のよしを、つくぐとうち聴て、景能に宣ふやう、我も那大江が事は、人の噂に聞知るものから、尙總角にてかくの如き、武功のよしを思ふにも、恥しきは我うへ也。時の不祥にあなれども、久しく賊徒に屏籠られ、或は城樓に推登されて、責辱應れたりけるを、射方の士卒も、嚴君も、鬱したらんかし。然る辱を受たるに、生て還るが歡しとて、この儘にして阿容々々と、大人に見参なるべきや。初のごとく轎子に、うち乗りて初の如く、居多の士卒を従へずは、恥を雪るよしあらず。什麼この義をよくするや。と問れて本膳碗九郎は、景能が答を待す、俱に額衝て稟すやう、その義は御こゝろ安かるべし。おん轎子は損はて、當城に藏めてあり。然ば城内の士卒、數を盡して、おん伴を仕らん。只穩便の御沙汰のみ、願しく候なれ。いかでく、とうち陪話して、走りて書院に赴きしを、景能は冷笑ひて、なほ幼君を守護してをり、恚而本膳碗九郎は、故の縁頼にかへり來つ、親兵衛にうち對ひて、義通君のおん答、箇様々々と告しかば、親兵衛、然こそと點頭て、現大將の器、智勇自然と備り給へり。今この坐席へ迎まつりて、見参に入るべけれども、おん父君の愆とは知らず、配安からず御坐すらめ。やをれ若門、おん送りの、準備をはやく整へよ。そが中に願八益作、及

碗九郎本膳とやらん、この餘も重立たる兵隊は、皆面縛して、御陣へ送れ。縦横兵たりとて、或は武器を著用し、或は腰刀を帶ることを許さず。この義に叛くものならば、先素藤より屠戮して、皆悉、頭を刎ん。後方に侍る力士毎、願八と益作に、索を掛てうち成れ。那奴兩個は、素藤が、惡を資けし舊盜也、努々由斷すべからず。本膳と碗九郎には、腰索を被て、おん送りの、事の準備を動させん。快々せよ。といそがせば、力士們は身の祟を、怕れて推辭ことを得ず、先願八と益作に、武器を脱して、縁頼より推下して索を被け、又碗九郎本膳には、小手を饒して是も亦、網りて縁頼に牽居たり。浩慮に、這城内なる百姓們は、素藤既に生拘られて、餘類は降参せしよしを、傳聞皆歡びて、四門を成る頭人を、搦捕り網縛て、牽つ、書院の庭に來て、然而親兵衛に訴るやう、恐れながら我門は、夷瀧の良民毎で候ひしを、素藤に取拿られて、他が軍役に從ひしは、實に本意に候はず。爾るに逆將俘にせられて、當城おん手に入りたるよしの、洩聞えしより悦に堪はず、隨即守門の頭人們を、搦捕て早獻せり。この餘の雜兵仿武者など、事の敗れに駭怕れて、咸副門より山路を投て、多く落亡候ひき。と告れば親兵衛領きて、并は切てもの事なりき。今當城に在る若、曹、良民たるもの幾名ぞや。と問へば答て、然、候。二三百名候はん。といふに親兵衛又領きて、然らば一百五十名は、御曹司のおん伴して、御陣へ送り奉れ。又一百五十名は、我伴當、姥雪與四郎を頭人として、權且當城を成るべし。又素藤をば箇様々々、恚々にして領てゆかん。杉木と車の準備をせよ。先若門が一火の中内にて、こゝろ得たる者兩三名、はやく御陣へ走りまゐりて、是等のよしを注進せよ。その餘は、這願八と、益作をも牽預りて、我出る折を等ね。又力士們は、本膳と、碗九郎を牽もて退りて、おん轎子の準備をせよ。こゝろ得たる歟。と示せば、百姓們は歡び承て、願八益作を受取りつ、守門の頭人共侶に、牽立て皆退りしかば、力士并に雜兵們は、嘆息しつ、皆、悉、大刀も鐵鎧も脱棄て、本膳碗九を先に立、こも皆外面へ出にけり。姑且して力士們は、四五名書院へかへり來つ、親兵衛にうち對ひて、御曹司をおん送りの、準備整ひ候ひぬ。と報るを親兵衛

うち聴て、然らば我もおん伴せん。案内をせよ。と趕立して、細り措たる素藤を、小兒の像く腋下に抱きて、そが儘玄關に出しかば、與四郎馳て走り寄り、事の歡びを舒なす。登時親兵衛は、與四郎に、權且當城に留りて、守るべき旨を言示し、又百姓門を喚よせて、卒とて素藤を渡與すにぞ、大家豫の下知に違はず、素藤を受拿て、杉木の杓に網著て、騰げて車に推建けり。恚りし程に義通君は、郷に社參に被給ひたる禮服を、舊のごとくに裝ひて、小刀を帶て景能を、從へて出給ひつ、親兵衛にうち對ひて、神速の大功を、譽て歡びを演給へば、親兵衛は謹て、歸陣を祝して稟すやう。他御覽ぜよ。素藤を、長杉木の杓まで太きに、登して御陣へ牽し侍り。恚ては君が會稽の、恥を雪るに足りぬべし。快々出させ給ひね。といふに義通笑しげに、うち點頭て立給へば、百姓們がこゝろ得て、はやく轎子を昇寄せけり。畢竟里見御曹司、父の陣營に送還されて、後の説話甚麼ぞや。开は次の卷に、解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之八終

南總里見八犬傳 第九輯 卷之九

東都 曲亭 主人編次

第一百八回

義成仁を旨として刑を寛くす
貞行主に調して克を奏す

話表、里見安房守義成主は、神と親との教誨に従ひ、只那寛の一字を守りて、叛賊藤田素藤を攻伐つに、敢火速の兵をもてせず、をさへ城を遠圍にして、憶はずも日を彌る程に、既にして春もはや、二月下旬になりけり。浩處に有一朝、蛭崎十一郎照文が、瀧田殿(義實をいふ)の使として、一騎本陣に來にければ、義成馳て對面して、そのいふよしを听給ふに、老黨東六郎辰相を首として、小森但一郎高宗、浦安牛助友勝、田税戸賀九郎逸時、登桐山八良子們も、皆左右にぞ侍りける。登時蛭崎照文は、義實老侯の仰を舒て、義成主に告まつるに、富山の麓河猛可に水涸て、登涉に自由を得たる事、是により老侯は、昨日大山寺へ詣給ひしかへるさに、伏姫の墓を祭らんとて、近習纏に兩三名を領て、那山に登り給ふ程に、素藤が刺客、安西出來介、滿呂(又麻呂に作る)復五郎、天津九三四郎、荒磯南彌六、棒村墜八など喚做たる、安房の舊黨都て五名、山の半腹に埋伏して、兩個の伴當を射て仆し、既にして老侯の、危窮に及び給ひし折、料らずも犬士の一人、那大江親兵衛仁が、突然として樹間より、顯れ出先途に達て刺客們を撃伏て、老侯を救ひ奉りし、勇力武藝比類なかりし、不思議の大功ありし事、且親兵衛は、六稔以來、伏姫神の冥助により、養れて富山なる、岳窟の内に在り、今茲は甫の九歳なれども、最殊う大きくなりて、身長は三尺四寸、心術も孺にあらず、文學武藝學得て、通達せずといふことなき、神童なりし事、又親兵衛に生拘られたる、出來

介、復五郎、九三四郎、墜八が首伏の事の趣、並に九三四郎が故主と聞きし、神餘長挾介光弘の落胤なる、上甘理墨之介弘世の事、又姥雪與四郎、その妻音音、二個の媳婦曳手單節も、又是伏姫神の冥助によりて、親兵衛と俱に富山に在り、曳手單節は、その良人と、婚姻の折有身しを、知らず臨月遙に過ぎて、甲乙共に男子を、安らかに産しかば、則父の名をそが儘に、力二尺八と喚做す事、又那荒磯南彌六は、親兵衛に撃惱されて、辛くして逃んとしたる、山路に與四郎が生拘りて、老侯に獻り、夫婦姉妹、兩個の孫まで、見參に入りし事、又虜を負たる兩個の伴當、船船貝六、小水門目は、親兵衛が介保して、神授の奇薬を用ひしかば、立地に蘇生して、矢傷もはやく癒し事、又五個の刺客們は、伏姫の神靈の、灼然なりしに駭き怕れて、先非を悔こと大かたならず、且老侯の恩澤慈善に、感じて歸順を願ふ事、并に天津九三四郎員明が孤忠の事、又南彌六も凡庸なる、俠客にあらざれども、陳謝そのよしありながら、いまだ正しき照驗なければ、俱に瀧田へ遣して、獄舎に繋ぎ置る事、この日又老侯は、伏姫の墳墓に、香華を手向給ひつゝ、猶も峯上に攀登りて、觀音堂へ詣給ふ程に、かへさは既に日の暮たれば、大山寺へ止宿の事、この日苦屋八郎景能が、次丸君の仰により、青海波といふ名馬を牽して、稻村よりまゐりしに、老侯瀧田にましまさねば、馳て富山の麓まで来て、見參に入りしかば、老侯他をも大山寺へ、召俱させ給ひし事、當晚大江親兵衛は、身單敵城へ赴きて、御曹司を拯拿り奉らんとて請ひ稟し、老侯初は許し給はず、教諭丁寧なるものから、親兵衛は只管憚りて、神女の示教に候へば、枉て許させ給ひねと屢請ふて已ざりければ、老侯是非なく御許容あり、則名刀小月形と、服章なる社衾小袖を、親兵衛に賜りつゝ、駿馬青海波にうち跨りて、大山寺を出るに及びて、景能與四郎伴當たり、又照文は、御陣へまゐりて、是等のよしを聞えあげよと仰付られたるにより、馬を親兵衛景能們と、共に走りして、大山寺を出たるは、眞夜半の時候なりし事、愆而親兵衛は逸早く、羽賀の松原まで歸着て、路上佛堂に憩ひてをり、殊さらに賞すべきは、那姥雪與四郎が、老人には似げもなく、駿馬に後れずよく走りて、毫も疲勞ざりし

事、親照文と景能は、天の曙る時候來にければ、親兵衛は景能と與四郎を、驪奴と伴若黨に打擲して、驛馬の左指に從へつゝ、館山の城に赴き、照文は、注進の爲、景能が乗捨たる、馬を他が讎奴に、牽して本陣に來ぬる事、瑰奇異聞の趣を、首より尾まで、一事も漏さず告稟ししかば、義成主は、いふもさら也、左右に侍る辰相們、老黨近臣駭き嘆じて、奇也々々。と稱へたり。登時義成主は、照文が注進の、速なりしを勞ひて、辰相們に宜ふやう、那大江仁の事は、我も豫十一郎が、告たるにより、聞知たれども、女兒の君の神靈の、冥助によりてこの年來、富山の奥に生育しすら、思ひがけなき異聞なるに、今茲九歳の童にして、身長才幹、武藝まで、古の賢人勇士に、異ならざるは奇なるかな。恁まで天祐神助を得たる、俊傑ならんには、必又大功あるべし。就中歡ぶべきは、那山中の一條也。昨日嚴君危難の折、他箇富山にあらざりせば、誰かよく先途に達て、寇を輒く捉んや。この一事をもて人力人智の、及ばざるを知るに足れり。我は二千の士卒を領て、三十餘日城を圍みて、勞せしみにて功なかりしに、方僅親兵衛が身單にて、よく義通をとり復さば、兀自我家の幸ひ也。城内に火を颯て、暗號を示す事もあらん。その折城に攻入りて、快親兵衛に力を戮せん。遮莫且這方より、然る氣色を見はさて、事の安危を窺ふべしとて、その隊配を定らる。當下士卒は、大江仁が、奇談を初て聞知りて、胆を潰しつ且相賀して、勇ざるものなかりけり。愆而この日亭午の時候に、館山の城より出て、寄隊の陣へ來ぬるもの、兩三名ありしかば、雜兵們訝り咎めて、捉へて本陣へまゐらせしに、他們則陳じていふやう、小可毎は、この月來、素藤に駆入られて、那城に候ひし、夷灣の良民て候が、大江主に吩咐られて、注進の爲にまゐれり、といひけり。是により、東辰相立出て、そのよしを尋問ひしに、大江親兵衛が武勇の事、素藤既に生拘られて、衆兇降參したりしかば、親兵衛則城内なる、軍民三百餘名を二隊に分ちて、そが一百五十餘名は、姥雪與四郎を頭人として、城を成らせ、この餘は都て御曹司義通君に俱し奉らせて、程なく御陣へ御歸座あるべし。勿論素藤以下の降人は、牽して實檢に備へんとす。この餘の事は箇様々々。と詳に聞えし

かば、辰相は悦に堪ず、且這民們を留置て、よしを主君に聞えあげしに、義成主は始より、天助神祐大かたならぬ、親兵衛なれば、謀るが如く、功なからずや、と憑しく、思ひ給はざるにあらねども、なほ心もとなくて、今まで胸の休からざりしに、恚る注進聞えしかば、その喜びいふべうもあらず。然而辰相に宣ふやう、大江親兵衛、不測の功あり、素藤既に生拘られて、義通かへり来るならば、我はなほ這陣に在りて、そが賞罰を左も右も、行ひ果して城に入らん。爾せざれば、親兵衛が、大功を掩ふに似たり。さばれ非常の與なれば、田税戸賀九郎逸時と、登桐山入良子に、五百個の士卒を授け、程よき處に備を找めて、那城より出るもの、皆悉出果なば、立替り城に入て、姥雪與四郎を相資て、姑且四門を衛らすべし。剛才人の告るを听しに、館山の賊兵們が、副門より落亡ぬる歟、山路を投て出るもの多かり。撃捕ばやとて動揺めしきを、我推制めて、追も撃せず。那城には、今親兵衛あり、他が武勇に害怕れずは、誰か一人も落亡べき。必射方の吉事ならん、と思量りしに、果して違はず。よしを士卒に徇示して、逸時と良子に、快々下知を傳へよ。と事遣もなく命じ給へば、辰相はこゝろ得果て、遽しく退りにけり。登時登時照文は、義成主の身邊に侍り、那注進を聞しより、忻然として稟すやう、既に知せ給ふごとく、那大江親兵衛は、今より六稔前つ秋、神懸しにあひし折まで、西も東もまだ知らぬ、纒に四才の小兒なりしに、名將勇士も及びがたかる、かくの如き大功あり。數ならねども微臣が、大法師と共侶に、弗憶く犬士們を見出せしより兩三番、おん使に立られしに、開を將て還る功なかりしに、單親兵衛が抜出て、昨今老侯郎君の、危難を拯ひ奉り、寇を生拘り城を抜きたる、この擧によりて身の鈍かりし、面も起し候ひき。といへば義成主うち領きて、寔に汝が稟すごとく、僅に親兵衛一人てすら、忠武大功比類なし。況八人具足して、當家の股肱にならんには、攻るときは、百萬の、勇兵に捷るべく、成る時は、鐵壁の、石城より堅かるべし。武門の幸ひこの上なしとて、俱に笑局に入り給ふ。恚りし程に東辰相は、逸時良子兩隊の士卒を、遽に出し遣りて、難兵に、陣門の、掃除をいそがし、準備を整へ、旌旗を建、刀鎗を見めかし、

本陣の四面に、士卒を備へ、武を嚴密して、親兵衛が降人門を、牽して義通君に供して來ぬるを、今か、と恨たりける。却説。這時館山の城山には、義通君の伴當の、準備整ひぬ、と聞えしかば、親兵衛下知して、第一番に、素藤以下の降人毎を、先御陣へ牽べしとて、城の北門より出し遣し、次に義通君の轎子添は、苦屋景能奉りて、軍民百五十名を従へたり。登時大江親兵衛は、名馬青海波にうち乗りて、殿して徐もて來ぬる、約莫事の爲體、白布の標幟兩竿に、叛賊臺田素藤と寫し、又降伏兇黨と寫せしを、兩個の軍民捧持て、眞先にぞ找みたる。次に礪時願八、平田張益作、奥利本膳、淺木碗九郎門、素藤に重用せられて、頭人たりし逆徒二十餘名を、背手に縛縛て、居多の民們が追立ゆくめり。次に臺田素藤を、太く長やかなる杉木の杓に縛着て、騰けて車に推建しを、軍民二十名してこれを牽くに、杉木の杓より結び下たる、四條の麻索を操れる者あり。敵き倒さじとての與也。そが中に、手巾を顛纏にして、偏袒ぎたる者一人あり。扇を開きうち招きて、聲高やかに音頭を操れば、牽兒大家節を合して、遣材唄を誦ひけり。越の國なる雪の深山に、杣木樵つゝ家路にかへる、雪車歌とかいふものも、恚やあらんと思ふ可に、いと詛て俗備たれども、寄隊の耳には興あるべし。素藤は始より、親兵衛が仁恕を倡て、大赦を請んといへりしを、倘やと憑て、罵り噪がず、果敢なき命を惜むの故に、身の存亡を他に儘して、阿容々々として縛縛に、就ていふ事もなかりしが、這時肚裏に思ふやう、昔我親は、京都にゆきて、六月の祇園會の、山鉾を觀たる折、應聲虫の病痾により、搦捕られ祭獄せられて、竟に命を殞し給ひき。思へば今は我うへにて、恚車に推建られたる、容は宛祇園會の、山鉾にも似たりけん。开も義通を幾回歎、城樓に登し柱に吊して、謹愼みて寄隊に示せし、報ひなるを争何はせん。却も那八百比丘尼は、那里へ影を躲しけん。我恚なりしを知らざる歟、知れども救ふに術なきや。初の程は這那と、帮助になる事多かりしに、今この折に效驗を見せぬは、益なかりき、と胸にのみ、うらみは葛に吹く風ならで、憂苦をやる瀬はなかりける。間話休題、素藤が車子の次に、降參の賊卒三百五六十名、或は五人或は十人、數珠の像くに繋れて、こも

民毎に迫立らる。是より十間餘りを隔て、義通の先伴なる、軍民約四五十名、叱咤の掛聲遠く聞えて、先を赶ふこと嚴重也。この餘、百餘個の軍民は、轎子の後に従ひ、由縁ある民は許されて、左右に従ふも多かりけり。次に大江親兵衛仁は、初の儘なる禮服にて、馬上優に歩せたる、伴當は多からず、五六個の軍民を、馬の前後に従へたり。この時錦山の城の塹の頭には、里見の士卒五百許名、田税戸賀九郎逸時と、登桐山八良于們これを領て、左右二備に守護したるが、義通君の轎子の、正門より出るを見て、威遠しく跪坐せぞ、遙に見送りまらせける。然らば降参の逆徒們は、既に密隊の陣門に迫りしに、親兵衛們は城を出て、なほ幾程もあらざりけり。折から普善蘇々利の村人們が、いかにしてはやく聞知りけん、老弱男女衆ひ來て、觀る者人の山を做したり。約莫這城下なる民毎は、曩に素藤に自燒せられて、這頭にあらざりしかど、近き村に人の多かる、田舎に似げなき光景なるを、親兵衛はつくんと、見つゝ心に思ふやう、上總は民人富裕にて、畹作漁獵採薪まで、都て生活の便宜を得たり。然らばこそあれ素藤は、世を累ねたる城主ならぬに、年來奢侈を極めしは、以あるかな、と嗟嘆して、徐に馬を找めける。爾程に降人們は、牽れて陣の北門にまゐりしかば、小森高宗(字は但一郎)浦安友勝(字は牛助)雜兵居多從へて、出て降人們が姓名を、問つ實檢簿に寫さして、局内へ追入れたり。そが中に素藤のみ、車子よりいまだ下さず、そが儘陣門の外面に、在らして士卒に守らせしかば、觀る者いよく多かりけり。左右する程に、義通君の、轎子近著來にければ、東辰相蟹崎照文、雜兵を從へて、東門より迎へまゐらせて、儲の席に案内をしつゝ、壽祝を演などす。當下苦屋景能は、なほ御曹司に従ひて、席末に侍りたり。程しもあらず親兵衛は、東門の頭にて、馬より下りて扱入るを、守門の雜兵類御き迎へて、云々と喚れば、照文、遠しく立出て、先親兵衛に、大功の、歡びを御案内をして、件の席に伴ひければ、親兵衛は又改めて、義通君に見参して、歸陣の歡びを稟しけり。一霎時ありて、義成主は、身甲の上に、時服を襲被て、烏帽子直垂御羅やかに、黄金裝の大刀を佩て、近習に壽を祝らしつゝ、屏風の後より立出て、上座に著給へば、東辰

相、小森高宗、浦安友勝以下の、毎、幾谷殿從ふて、皆左右にぞ侍りける。登時義成主は、先親兵衛を召近著て、席を賜ひ勞ひて、昨今二度の大功を、褒賞給ふこと大かたならず、手づから打飽を賜りて、君臣の義を祝し給へば、親兵衛は席を避て、謹て稟すやう、微臣神女の示教によりて、織芥の功あるに似たるも、皆是君の洪福のみ。然るを御曹司を聞れて、見参に入りまつること、冥加あまりて最もかしこし。願ふははやく御對面あれかし。と薦め稟して、後方を乞と見かへれば、照文景能こゝろ得て、辛とて癒て義通に、俱して御前にぞ出にける。當下義通御曹司は、恭しく嚴君にうち朝ひて、勝軍の、壽を、舒て且宣ふやう、孩兒憶はず叛賊の、爲に俘囚となりしより、快死なばやと思ひしかども、うち守る者間斷なければ、朽惜き事いと多かり。この故におん身親、征伐に日を彌り給ひし、御爵愈を猜しまつれば、不孝の罪免れがたかり。然るを大江親兵衛が、不思議の大功神速にて、勅敵降伏したりしかば、聊恥を雪め侍り。是併家尊の大人の、軍威にも憚りて、纒に一個の親兵衛に、征せられたるものにやあらん。抑大江親兵衛が、六稔富山に生育しといふ、神助奇特の願末は、纒に景能が告しかば、その崖略を知り侍り、寔に奇しき事也きとて、その歡びを演給へば、義成像快に領きて、然也、阿子がいふごとく、親兵衛が事はしも、常理をもて、論じがたかる、その功も亦神靈の、助る所あればならん。素藤奸智に逞しくて、一旦他が辱を受しは、則我愈にて、阿子が不幸に似たれども、今さら思へば後轍の、戒となる事多かり。世に貴介の公子たるものは、纏襟の内より長となるまで、婦人の手にのみ守鞠養れて、世の人情を知るによしなく、民の艱苦を思ふもの稀也。こをもて、萬事みづから賢として、身の愈を聞くことを憎み、人の惡を聞くことを、樂と做す故に、讒言是より行れて、佞人親愛せらるゝことあり。且身には美服を襲ね、口には美食を毎として、起擲くこともなく、安坐のみして人を使へば、人に使はるゝ苦辛を悟らず。この故に、多くは脚氣の、病痾を生じて、救ひがたきに至るものあり。況脚色に耽り、大酒を好むが如きはみづから壽命を損へども、死に至るまで悔なきが、是貴人の通病也。しかるに阿子は、

叛賊に、俘にせられ、責懲れて、虎穴に在ること四五十日、辛くも死なでかへり來にける、事をし生涯忘れずは、是に優たる幸ひはあらじ。然れば唐山の鄙語にも、苦中の苦を喫ざれば、人の中なる人となること、いとかたかり、といひしにあらすや。阿子は今年十一歳、親兵衛には二才の兄也。他と比ぶべくもあらねど、兀自(ワルジモ)幼少といふにはあらず。這教訓を小耳に留めて、幾々までも、親兵衛が、忠義の大功をな忘れそ。やよ親兵衛に謝せよかし。と諭給へば義通は、感涙坐に吐みて、承りぬ。と應つゝ、遽しく身を起して、又改めて親兵衛に、歡びを述、忠義を稱て、三拜せまく額衝給ふを、親兵衛驚き推禁めて、故の席に請薦れども、義通頭をうち掉て、否とよ、然のみ推辭事かは。こは箱の仰にて、伯母の御靈を拜する也。和殿一個の上にはあらず、と争ひながら三拜の、禮を正しく行ひ給へば、親兵衛は困じ果て、背に汗を流したり。これを見る者、義通君の、年には倍て伶俐きを、且感じ且相賀して、俱に千歳を唱へつゝ、日屬久しくうち擧めたる、眉を一時に開きけり。事の便宜に辰相們は、親兵衛に名對面して、大功を讚し、奇異を稱て、各齊一敬ふたる、口誼訖りて辰相は、義成主に稟すやう、素藤們を誅罰の事、稻村へ奉すべきや、這里にて梟首せしめんや。願ふははやく天罰を、示して後の兇奸を、懲し給ひぬ。と請まつるを、義成聞つゝ領きて、その義も亦親兵衛が、思ふ旨こそあらんずらめ。仁は孰を佳とするや。と問れて親兵衛膝を扱めて、件の一議は、仰なくとも、請まつらんと思ひ候ひき。抑素藤們が悖逆は、饒されがたきものなれども、願ふは我君格別の、仁政を施て、他們が頭顱を接し給へ。初微臣、素藤を、生拘りし折約束して、咸立地に降伏せば、國主に大赦を請まつりて、死ざることを得さしめん、といひしを、那奴們甘じ承て、阿容阿容として皆悉、面縛して牽れ候ひき。そが中に倘一人、義に仗り命を惜ざる、眞勇のものあらば、纒に一個の敵を怕れて、かくのごとくに至らんや。素藤既に生拘られて、他們は首なき蛇の像く、僅にその尾を動せども、今さらに做す處を知らず。是小人の本性にて、畢竟命を惜むの外なし。愆れば今素藤們を、饒して追放し給ふとも、又何ばかりの事をせん。非如今成、頭顱を斬斷給

ふとも、當家の政事仁義に違ひて、武徳衰へ給ふことあらば、奸民必武を接て、叛くもの多からん。願ふは仁恕のおん計ひこそ、あらまほしく候なれ。と道理を舒て諫稟せば、辰相怵へず、親兵衛に、うち對ひて難するやう、現和殿の意見を聞に、开も亦人の及ぬ所。仁といふ名に相應しからんを、左右いふべきにあらねども、那唐山なる吳と越の、二國の得失を憶ふに、那越王勾踐は、吳王夫差が父の讐也。戰ひ既に勝利を得て、會稽山に住せしを、攻め殺さで、詭譎の、和議を容れ命を饒して、剩國へ還せしかば、勾踐遂に攻撃て、夫差を殺して吳を駢したり。今素藤を饒し給はゞ、那吳越の得失と、亦何ぞ異ならん。寡に仇は養ふべからず。檻を開きて虎を放せば、後の患ひなきことを得ず。宋襄の仁、微生の信、その行ひは果して美し、しかれども事に益なし。この義をいまだ念れずや。と詰れば親兵衛含笑て、いはるゝ趣その理あり。但素藤は勾踐と、同日の論にあらず。且越王勾踐は、吳王夫差が父の讐なるに、饒せしは不孝にて、義にも亦違ひたり。素藤は然る仇にあらず。只御曹司を辱めたる、報ひは則木に登し、車に建て、陣門に、曝したれば事足るべし。又勾踐が手下には、苑籛大夫種など聞えたる、最逞しき謀臣ありき。素藤には然る智謀の臣なし。縱夫差が、認て、勾踐を饒すとも、西施を受けて、溺るゝことなく、忠臣伍子胥が諫を容て、佞人太宰嚭を用ひずは、勾踐其何とかせんや。昔漢末の諸葛亮は、南蠻國を征伐せし折、その蠻王孟獲を、七たびまで虜にして、七たびこれを饒せしかば、孟獲竟に感伏して、誓ふて長く叛かずなりにき。素藤目今饒されて、亦復叛くことあらば、その折人手を借らんと欲りせず、晩生早に誅罰して、餘塵を帯ひ候はん。宿老姑且狐疑を禁めて、この義に儘し給はずや。と憚る氣色もなく論せしかば、辰相竟に諾なひて、又いふよしもなかりけり。義成主は、甲乙の、問答をうち聴て、感悦特に淺からず。然而宣ふやう、六郎が意見もその理あり。我も如右こそ思ひしに、親兵衛が論辯は、又一級の上の在り。殘に克然を去り、寇に報ふに徳をもてせば、我後いよく長久ならん。現素藤は兇惡なれども、只私の怨讐にして、天子將軍に叛きまつりし、國賊にあらざれば、法度を緩めて追放つとも、誰か亦

これを非とせん。遮莫、大約小人は、威さざれば懲りぬもの也。素藤を首として、頭立たる兇黨は、各額に黥して、且一百鞭撻て、封疆盡處より追放すべし。この義は、則親兵衛と、六郎に課せん。速に如右行ひぬ。我は義通を携て、城に入りて萬緒を掟ん。照文並に景能は、馬を瀧田と稻村へ走らして、是等のよしを注進せよ、快々。といそがして、出し遣りつゝ、程もなく、小森高宗、浦安友勝、以下の士卒を従へて、義通君と共に、館山の城に入り給へば、親兵衛と辰相は、雑兵に下知を傳へて、先森田素藤と、曠時願八、平田張益作、奥利本膳、淺木碗九郎門、都て頭立たる兇黨を、局の内に牽居させて、國主仁恕の寛刑を、恚々と言示し、若們倘この義を忘れて、立かへり來て悪事を做さば、其回は決して饒さじ、縦城郭に據りて、千百の、兇黨を復鳩るとも、我這大江親兵衛が、在らんに涯りは人に譲らで、立地に威屠戮せん。是を思へ、これをおもへ。と諄復しつゝ、いひ懲せば、素藤並に兇黨は、額を衝き洪恩を、稱て承伏したりけり。當下雜兵幾名敷、下知に隨ひて、素藤們が、額に遺なく黥して、衣を脱しつ推伏て、背に笞を中ること、二百板に及びしかば、皮破れ、突顯れて、鮮血の流ること、尠ならず。各苦痛に堪はずして、叫喚の聲も立ずなる比、板果て引起し、水を與へ、膏藥を、背に布て推居たり。素藤以下の兇黨も、かくの如くなるべかりしを、親兵衛下知して、笞の數、三十を饒せしかば、七十板きて止にけり。この餘烏合の兇卒們は、最多ければ、板くに及ばず、威その額に黥して、都て追放せられけり。是等の事に時移りて、日は西山に沈む時候、護送の雜兵部して、素藤並に居多の賊徒を、便宜の海邊に牽もて行て、或は五名十名づつ、分ちて船に乘し漕出して、武藏は、墨田河の西岸に迫り、相摸は、三浦岬崎に到て、威追放ちてかへり來にけり。是より先に親兵衛辰相們は、件の一義に日の暮たれば、這夜はそが儘在陣して、君侯に旨を伺ひ、次の日陣屋を毀しつ、素藤に自燒せられし、城下の里正故老を召よせて、家なくなりし民毎に、頒ちてこれを拿らせしかば、大家歡び恩を拜して、家作の料にぞしたりける。爾程に義成主は、その日嫡男義通と馬を並べて、館山の城に入り給ふ程に、居多の士卒相從ひ、及本陣へま

ありたる、軍民們も皆陸續と、行列を正して従ふたる、事の形勢、武備嚴重なる、中黒の白旗、長柄の數鎗、或は弓手銃手、その程々に隊伍を紊さて、徐に伴ひまゐらせけり。登時田稅戸賀九郎逸時、登桐山八郎良子は、姥雪與四郎と共に、君侯父子を迎まつりて、城内無異の趣を、云云と聞えあげけり。是により義成主は、姥雪與四郎を召出して、老に似げなき神行の、功を賞て東西を賜ふに、打大刀甲冑をもてせられしかば、人皆これを榮とす。この折又義成主は、那神餘光弘の、落胤と聞えたる、上甘理墨之介弘世が事を尋させ給ふに、病臥て宿所に在り、そが儘人に昇れ來て、見參に入るものから、その性の果敢々々しからぬに、病者なれば、問るゝことを、恍惚としてよくも答へず。この後普善の村長故老に、那安西出來介、滿呂復五郎、天津九三四郎、荒磯南彌六、椿村隆八們が、來歴素生を問し給ふに、嚮に登崎照文が聞えあげたる、他們が招了の趣と、啗合せしのみならず、出來介復五郎の宿所に、は、滿呂安西の家譜あり、と聞えしを、拿密て見給ふに、照較疑ふべくもあらず。是等の賞罰は、稻村へ、凱陣の後沙汰あるべしとて、先素藤が婢妾、兇黨の宅眷を出し遣りて、その所因なき者は、いまだ姿らざる莊客に賜り、且曩に素藤に、冤屈の罪を負せられて、誅滅せられたる農民の、親族宅眷を召出して、米錢を取らし給ふ、仁政隈もなかりしかば、那身はさら也、土民們、皆悉歡びて、慶賀稱讚の聲、街衢に盈たり。そが中に、生才學もて、一理屈ある者は、悄々に眉うち擧めて、守の仁政佳といへども、素藤は、五逆の罪人也。因て律を按ずるに、大赦を行はるゝ折也とも、五逆と人を殺せしは赦さず。況那願八益作、本膳碗九郎など、喚做たる兇黨は、賊首素藤が虜になりしに、害怕れて、猛可に阿容々々と、降を請にき、と聞えたり。縦面縛して參るとも、眞實の歸降にあらず。然るを一人も誅せずして、追放ち給ひしは、その制度法家の旨に違ひて、柔弱に過ぎたるにあらずや。虎狼は、山に還すべからず、悪木は、根を遺すべからず。我恐らく、後の患ひなからずや。と呟きけり。話較饒舌。却說大江親兵衛仁、東六郎辰相は、素藤們を追放したる、次の日陣屋を遺なく毀ちて、家なき城下の民に取らしつ、第三日の朝、

士卒を領て、俱に館山の城にまゐりしかば、義成これを勞ひて、親兵衛に宜ふやう、當城既に著落して、夷濤は風波起すなれども、那千代丸、眞里谷、武田などの、餘寇いまだ伏誅せず。曩に眞行直元に、一千の士卒を授けて、討手として遣せしより、折々注進ありながら、いまだ全勝のよしは聞えず。恚れば又當城も智勇兼備の者にあらずは、餘餘を鎮ることかたかるべし。因て汝を、這館山の城主と做して、逸時良子を副とせん。與四郎も共侶に、當城に住りて、宜く計議に與るべし。又那上甘理墨之助は、神餘光弘の落胤たる事、普善の村人們が口碑に在り、最憐むべきものなれども、その性殊に慙にて、且廢人なるを争何はせん。他は稻村へ將てゆきて、なほ計ふべきよしもあらん。この餘の事は箇様々々と、町寧に示し從て、隨即士卒五百名を、住めて當城を成らし給ひ、既にして凱陣の、人馬をいそがし給ふ程に、この日堀内藏人眞行は、二百餘名の士卒と俱に、生拘千代丸豊俊と、降人眞里谷信昭を領て、當國應南より凱陣しつ、義成主に見參して、鬪戰全勝の趣を、具に聞えあげにけり。开をいかにぞと尋るに、初堀内藏人眞行と、杉倉武者助直元は、一千の兵馬を領て、千代丸圖書助豊俊が盾籠りたる、長柄郡榎本の城を攻けるに、椎津の城主、眞里谷信昭、及應南の城主、武田信隆も、年來素藤豊俊門と、交り淺からざるをもて、免れがたしと思ひけん、各五百の軍兵を領て、みづから援兵として、榎本なる、城外二箇所に屯しつ、犄角の勢ひを張りしかば、眞行直元、兵を分ちて、直元は城を壓、又眞行は、眞里谷武田の、兩敵と戰ふて、勝負區々なるものから、敵を三方に受たれば、果敢々々しき事もあらで、憶ずも日を彌る程に、春は二月の下濤になりけり。登時眞里谷信昭は、獨熟思ふやう、我交遊の義によりて、里見と矛盾に及べども、こは長久の計にあらず。意に素藤が、今寄隊の大軍に、怯まで城を固るは、初虜にしたりと聞えし、義通あるの故にして、外の繋ぎの城もなければ、幾まで敷然面あるべき。戰飯箭種竭るに及ば、必誅滅せらるべし。その折大軍寄加らば、いかにしてよく柱んや。我は國守の通家にて、千代丸武田と同じからず。義成の亡母、五十子の刀自は、我養父靜連大人の、第二の女兒なりければ、我と他

とは從母兄弟の義さへあるものを、今この時に反忠して、志を顯さずは、後悔を噬む事あらん。嗚呼爾なり、と肚裏に、主意既に決りければ、寄隊の陣へ箭書を射被て、眞行にその密意を示し、爾後武田信隆には伴りて、信昭猛可に持病發りて、對陣に堪がたかり。權且居城に退きて、將息すべし、といひ哄て、その隊の士卒を從へて、夜に紛れて退陣せしを、信隆は欺れて、毫も疑ふ心なく、眞里谷が在らずなりたりとて、戦ひがたき事かは。と呟きつ士卒を勵して、なほも日毎に眞行、と鋒頭を交争ひしに、有一日信隆が、應南の城の殘兵が、幾名か逃れ來て、信隆に報るやう、往日眞里谷信昭主が、その隊の士卒を從へて、應南の城に來ましつ、信隆主の傳言あり、密議もあれば、城の番士に、對面せまほりする也。速に入られよ。と喚はらせ給ひけり。眞里谷は無二の射方にて、且一方の大將なれば、誰かを疑ふべき。隨即城門を推開きて、城内に迎入れしに、眞里谷の一軍入るとひとしく、鬪を發り火を放ち、三七二十一に殺斷けたる、只是不慮の攻撃に、城内の士卒駭謀ぎて、撃るゝ者尠からず。素より射方は小勢にて、防禦に術のなかりしかば、多くは副門より脱れ去て、城を奪れ候ひき。といふに信隆驚呆れて、原來信昭、義に叛きて、我を出し拔きたりけるな。我居城を拿られては、一日も恚て有がたかり。今宵悄々地に退きて、快應南に立かへり、奪略られし我城を、とり復して後にこそ、又豊俊を拯はめとて、當晩篝火を燒棄、人馬を纏めて、退き去んとせし程に、眞行は逆より、直元と謀し合しつ、恠にて武勇の壯佼なりける、堀内雜魚太郎貞住と二隊に備て、左右ひとしく追撃々々、息をも養ず攻たりければ、武田の一軍亂立て、左右なく退難たりしを、豊俊迥にこれを見て、眞里谷が心變りを知らねば、うち驚きつ、且性起りて、目今武田を撃しては、我も當城を有ちがたかり。信隆擊すな、兵毎とて、三四百の軍兵を、魚鱗に備へ、城門推開きて、竊地に馳出でしに、二十日あまりの烏夜に紛れし、直元が一隊の伏兵、忽然と起り立、瞬間に二隊にわかれて、一隊は城に入替り、一隊は豊俊を遮留めて、攻伐つこと酷急也。爾程に、眞行貞住は、信隆を拿綱て、攻著々々採たりければ、信隆、士卒を多く撃して、馬を蝨して

逃走るを、貞行はなほ漏さじとて、その通背趕撃しかば、信隆は身に從ふ、近臣纒に五名になりぬ。今さら飯るに家もなければ、便宜の浦に船を徵め、主従辛く命を免て、日を歴て甲斐國に赴きつ、那川の國守武田信昌は、親族なれば、その隊に屬て、時の至るを俟しとぞ。こは是後の話也。又豊俊はその夜艾、杉倉直元の伏兵に、最も緊しく攻られて、鬪戰難義に及びし折、と見れば城内に火光發りて、鬪の聲高く聞え、敵はや入替りぬとおぼしくて、那這に推建たる、中黒の白旗の、風に翻りて見えしかば、他は何麼とばかりに、且駭き且悔れども、勢ひ既に窮りて、免るべくもあらざれば、阿容々々と降を請ふて、敵の俘になりしかば、士卒は、四零八落に落亡て、竟に落城したりける。因て武者助直元は、榎本の城を守りて、今もなほ那里に在り。又藏人貞行は、武田信隆を趕たりけるに、他は海船にうち乗りて、脱れ去りにき、と聞えしかば、馳て應南に赴きて、眞里谷信昭に對面して、功を譽て城を受取り、相俱したる任の壯俊、堀内雜魚太郎貞住に、士卒三百餘名を授て、應南の城を守らし、眞里谷信昭を伴ふて、又榎本の城に來つ。隨即直元と商議して、酒家みづから館山なる、御陣に注進すべけれどとて、馳て千代丸豊俊を、艦車に乗して、夫役們にこれを昇し、又信昭を伴ふて、館山に來ぬる也。義成主は、貞行們が勝軍の顛末を、うち听て感悅淺からず、則眞里谷信昭に對面して、一旦の野心、その罪なきにあらねども、忽逆意を轉して、武田信隆が應南なる、城を一時に攻落したる、忠戰尤賞すべし。恚ればこの功をもて、前の罪を償ふに足れり。本領を安堵して、參勤懈るべからずとて、鞍置たる馬一疋と、大刀一口を賜りて、椎津へ還し給ひしかば、信昭は恩を拜して、誓書を獻り、且素藤們が、降伏の歡びを演、隊兵を領て、椎津の城へ退りしが、今番大江親兵衛の、胆勇奇特の大功を、聞きしより舌を掉ひて、國主の武徳を仰ぐのみ、永く一方の扞城となりて、竟に叛くことなかりけり。信昭の事、這下に話なし。却説又義成主は、貞行直元が功を譽て、現今番の擢きは、曩に義通に俱したる折、中途よりかへり來ぬる、疎忽の罪を償ふべし。藏人は年老たり、我に從ふて、稻村へ凱陣せよ。武者助と雜魚太郎は、榎本と應南なる、

二箇所の城を相守りて、各城邑を理めよといふ、御教書を齎して、使者を二箇所へ遣し給へば、その地方の民安堵して、歡ざるものなかりけり。恚りし程に貞行は、大江親兵衛に對面して、その大功と神女の擁護を、越に始て知りて、胆を潰しつ感嘆して、實に我君侯の、洪福也ぞ稱ける。

第九百回

八百尼山居に敗將を誘引ふ
濱路姫病牀に寃鬼に壓はる

登時又義成主は、親兵衛に宣ふやう、眞里谷信昭が反忠にて、豊俊降伏したれども、單武田信隆のみ、没落の聞えあり。いまだ往方知らざれば、なほ枕を高うして、睡るべくもあらずかし。恚れば縛に課せしごとく、汝は、這館山の城主として、逸時良子們と共侶に、守禦の用心怠るべからず。瀧田なる妙眞が、さぞな見まくほしかりとて、かへり來ぬるを等つゝあらんか。そは我宜く慰めて、いよ／＼當郡無異ならば、汝を瀧田へ遣さん。その折祖母に對面せよ。今姑且の事なるべきに、勉めよかし。と叮嚀に、聞え給へば、親兵衛は、類衝たる頭も擡て、仰承り候ひぬ。前にも推辭奉らん、と思ひながら事の多くて、その義に及ばず候ひき。微臣當城に留められて、守禦の一條は承りぬ。この城主に做されん事は、望む所に候はず。我身長は四尺に近くて、智勇も人並なればにや、織芥の功ありといへども、生れてより纒に九箇年、誰か孺子にあらずといふべき。然るをこの一城を、領けさせ給ひなば、相應しからず候はずや。且自餘の七犬士は、いまだ見參に入らざるに、微臣一人拔萃されて、恚る大任に當りては、樂しくも候はず。願ふは這館山の城主には、別に人を擇ませ給へ。微臣はその隊に屬て、力を盡し候はん。といふを義成主聞あへず、开も亦仁義を旨とすなる、賢者の心なるべけれど、汝は非常の人にして、既に非常の大功あり。なでふ非常の賞なからんや。我はさら也、人も皆、汝が功の莫大なるを、うち仰ぐのみ、その年の、幼少なるを誰か論ぜん。且

遠く唐山の、故事を原るに、昔燕の昭王が、賢者を招まく欲せし折、然しもなかりし臣郭隗を、先重く揚用ひしかば、樂毅鄒衍の諸賢才、齊より燕に聚來て、王を佐け齊を伐て、七十城を降しつゝ、竟に覇業を起したり。恁れば汝を這城主にして、今我重く用るは、那郭隗が例に似て、郭隗の儔にあらず、自餘の犬士們このよしを、傳聞なば相歡びて、皆聚來て我を佐ん。然るときは燕の昭王が、樂毅鄒衍を獲たりしに、優りこそせめ劣んや。我心既に決せり。やや、勿推辭を、いなみそ。と諄復しつゝ諭し給へば、親兵衛は困じ果て、僅に言承をしたりけり。姑且して義成主は、又貞行に課するやう、那千代丸豊俊は、素藤が黨類なれども、數世榎本の城主なりければ、素藤と同例に、抜き追放つべきものにあらず。他は汝に預んず。稻村へ領て還りて、緊しく閉籠置わかし。又上甘理墨之介弘世、と喚做す者あり、他は要なき廢人なれども、神餘の落胤なるをもて、こも稻村へ遣すべし。この義は嚮に六郎們に、分付たりき。と宣へば、貞行はこゝろ得果て、その仁政をぞ感じける。この次の日に義成主は、義通御曹司を伴ふて、凱陣の提點あり。堀内貞行、東辰相、小森浦安、以下の甲乙、勇士猛卒千五百名、隊伍を整へ相從ふて、館山の城を出給へば、大江親兵衛、姥雪與四郎、及田税戸賀九郎、登桐山八共侶に、或は城の内外を警固し、或は遠く郊外まで、送りて凱陣を祝したる、約莫その事の爲體、但見る甲の縵糸は、五彩あり間色あり。騎馬武者は後陣に従ひ、歩兵走卒は先隊に多かり。二十四挿たる白羽の征箭、握太なる重藤の弓、この日を晴とぞ打扮たる。旌旗は山風に翻翻として、白鷺の群飛像く、刀鎗は朝日に晃亘りて、玉の柳の糸にも似たり。近村の良賤街頭に聚合て、觀者路を去あへず、或は跪坐て拜むもあり。當家の武徳を稱讚したる、聲轟々と聞えけり。是より先に、瀧田稻村の兩城内には、蟹崎照文、苫屋景能著到して、大江親兵衛が武功の顯末、素藤立地に虜にせられて、從類降伏したる事、こゝをもて義通君は、優に陣營に還り給ひし事、賊徒を刑罰の議に就て、國主仁政の趣まで、詳に聞えしかば、瀧田の老侯の歡びはさら也、稻村に在す、義通の母君を首として、女兒の御達も、次丸も、諸臣嬭母們、女房まで、天に歡び地

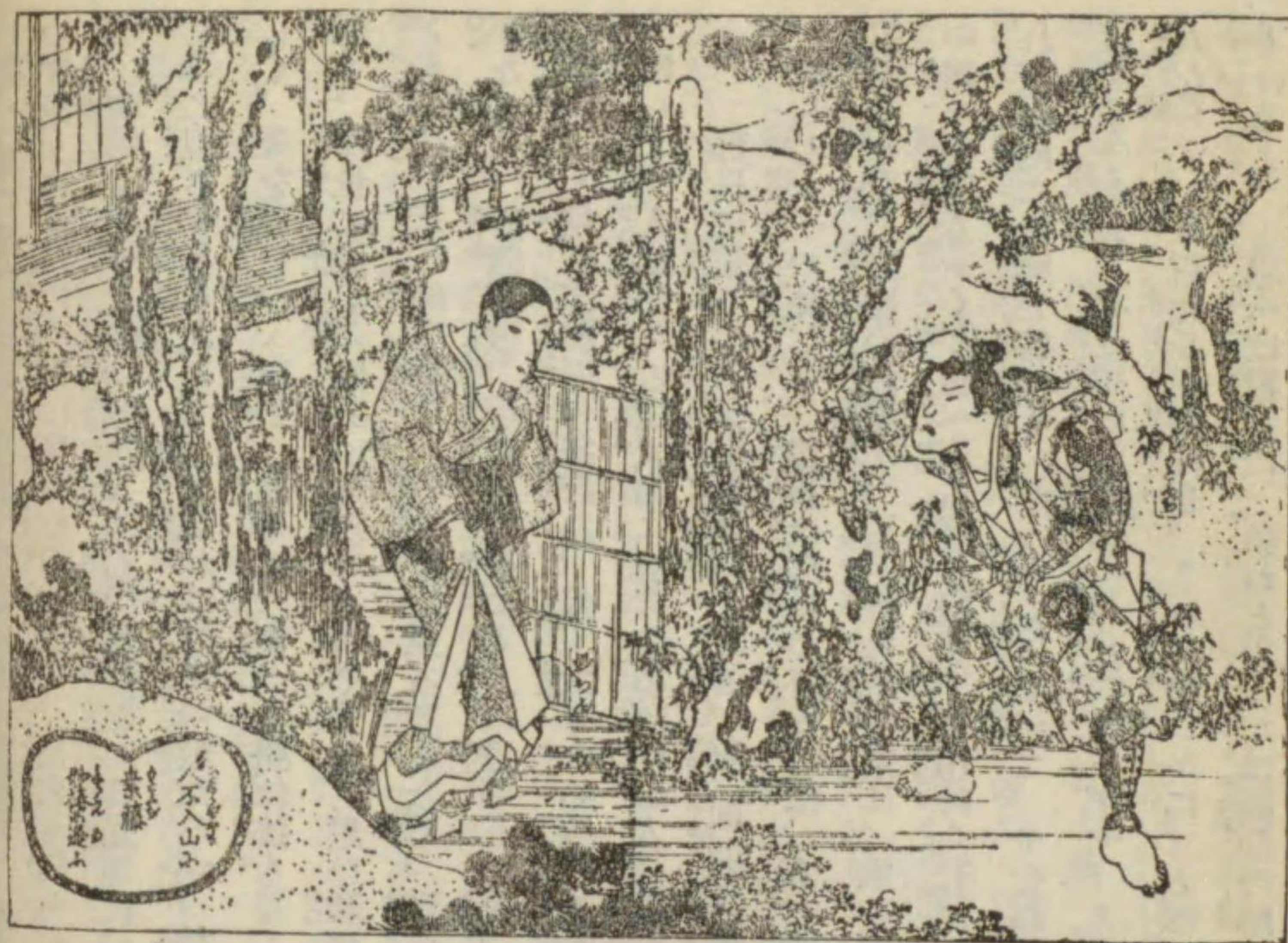
に喜びて、俱に歸城を待まつる、準備に暇なかりけり。この時、義通君の傳なる、小森衛門、浦安兵衛、近習田税力助們は、曩に義通の伴に立て、上總なる殿臺に赴きし折、那諏訪の社頭にて、憶はず兎黨に撃れたる、銃瘡稍癒しかば、その折の士卒數十名と、俱に迎に出たるが、義成父子館山を、立去り給ひし次の日に、上總と安房の界なる、市之坂の頭にて、君侯父子に見參して、義通君の馬の前後に、從ふことを許されけり。恁りけれども義成主は、なほ稻村へいそぎ給はず、降人千代丸豊俊と、上甘理弘世們と、要なき士卒雜兵のみ、過半稻村へかへし遣し、義通と共に、瀧田の城へ赴きて、先老侯に見參しつゝ、今番の歡びを稟し給へば、義實主喜悅大かたならず、大江親兵衛が富山の擗き、及館山にて素藤們を、威服したりし大功を、照文が注進にて、聞たる隨にいひ出で、義通の武運愛たきを、祝して笑局に入り給へば、義成主は、その言の、漏たるを又云々と、詳に解稟し給ひて、今番の勝利は外ならず、只是大人の御盛徳と、女兒の靈の神助によりて、面を起し候ひきとて、傍をやら見かへり給へば、義通も亦膝を抜めて、大父の君に、身の幸ありける、歡びをなん舒給ふ。是より席を改めて、祝壽の酒宴あり。この折義實主は、貞行辰相、高宗友勝們を召よせて、その軍功を褒賞させて、東西を賜ふこと差あり。又小森衛門篤宗、浦安兵馬乘勝、田税力助逸友も、俱に老侯に見參して、病後の禮を稟しけり。既にして酒宴初獻の折、義成主、及義通君も、名刀各一口と、夷瀧の土宜種々を、老侯に獻り給へば、義實主も、這二所に、牽出物をまゐらせ給ふ。其馬二頭は、蟹崎照文船船貝六郎奉り、庭上に牽もて出で、貞行篤宗に遞與しけり。恁者伶人參聚ひて、祝言の猿樂あり。この折妙眞と音音們と、曳手單節も兒子と共に、今日老侯の召させ給ひて、既にまゐりぬ、と聞えしかば、義成主は、妙眞と、音音們五名を召よせて、先妙眞に、今番大江親兵衛が、館山にて武勇の擗き、奇特の大功ありしよしを、云云といひ知らして、汝はさぞな一日もはやく、見まくほしう思んが、他が館山に在ざれば、なほ心もとなきよしあり。因て那里の城主に做したり。いよ、靜謐ならんには、遠からず召來たして、對面させんと思ふかし。この意を得よと

慰めて、白銀井に巻絹と、綿さへ多く賜ふにぞ、妙眞は感涙の、扱むを覺す頭を擡て、君と神とのおん庇裏にて、孫にて侍る親兵衛が、心術さへ身長さへ、六稔の程に最大う、世にも人にも勝れたる、不測の功を人傳に、聞侍りしより歡しさに、胸は潰れて宿も睡られず。別れし後の哀しかりしも、忘るゝまでの身の幸に、讐を取るに物も侍らず。とてもかくても今世では、逢がたからんと思ひぬる、稚枝の春に、老樹すら、なほ憑しきは命に侍り。非除一年三箇月、相見ずとも胸安かり。氣長く折を等侍らんに、世に有がたき御説の上に、おん東西多く賜する、御恩に御恩を累られて、いよゝ冥加に餘り侍り。と歡びを稟して退る程に、義成主は、又音音と曳手單節、力二尺八門を、身邊近く召よせて、六稔富山に親兵衛を、守傳きたる奇特の事、及與四郎が南彌六を、捕捕たる當日の擗き、且親兵衛に従ひて、館山へ赴く折、駿馬に後れず走りし事、他をも權且館山の城内に、留置るゝことの上しを、町寧に聞え知らしめて、その功を譽させ給ひ、這五名にも白銀と、巻絹と綿をその人別に、多く取らし給ひしかば、音音はさら也、曳手單節も、感涙坐に吒て、答奉らん所を知らず、恠る御恩も道節門に、舊縁ありける餘慶にて、併伏姫神の、冥助にこそ、と更に又、稱稟しつ、福草の、幸ある世とて存命し、身の賤きを忘るゝまでに、惶うも歡びを、聞えあげつゝ、妙眞と、俱に罷出んとせしを、義成主留めさせて、好折なるに、汝門は、妙眞も共侶に、女房の勾欄にまゐりて、能樂を拜見せよ。老侯が召させ給ひしも、牙が與にぞあらんずらん。穉兒門がさぞ樂しかるべし。いそぐことかは。と宣へば、大家亦復歡びを、稟して馳てその役人に、掖れて勾欄へまゐりけり。恠者能樂始りぬ。と聞えしかば、義成主は、義通君と、俱にその席に出給へば、義實主ははやくより、其里に在して待せ給ひぬ。瀧田の諸臣、稻村殿の伴當も、許されて觀る者多かり。然ば俗人は祕曲を盡して、舞樂の袂を翻す。堪能の吹鼓、五番にして果しかば、妙眞音音門は、暇を給はりて、曳手單節と共侶に、力二尺八を携へて、宿所へぞ退りける。恠ても饗饌竭されば、義成主は、御曹司と、共に當城に止宿あり。その甲夜の間に義成主は、賞罰の可否を、老侯の問まつれ給ふ言の

敏に、上甘理墨之介弘世の事をいひ出て、有つる儘に報給へば、義實主點頭給ひて、神諭は當國の舊家也。そが子孫に疑ひなくば、宜く扶持し得させ給へ。況廢人(モノ)ならんには、いよゝ憐むべきもの也。又天津九三四郎は、件弘世に孝順也。既に孤忠の聞えあれば、他も亦罪を饒して、弘世に諱るを仁といふべし。又那滿呂復五郎、安西出來介と喚做す者も、眞實歸降の心あらば、饒して祀を繼し給へ。讐に報ふに徳をもてすといふ、聖教に稱ひやせん。又荒磯南彌六は、昔年當國の俠者にて、大江親兵衛の曾祖也ける、柚木樸平と共侶に、謬て神餘光弘を、犯して刑戮せられたる、洲崎無垢三が外孫也といひにき。志氣ある者とし見ゆれば、他們も赦免あらまほしけれ。近日件の罪人們を、稻村へ遣すべし。有司に命じて、慮と實を、左にも右にも糾し極めて、饒ざるべくは饒し給へ。誅するに優すよしもあらん。こは是老が願ひにこそ。と町寧に宣へば、義成主謹て、仰承り候ひぬ。他們が罪戾は、他事ならず。縦舊家の氏族にもあれ、這房總の民として、大人を犯し奉らん、と欲せし者で候へば、實に歸降を願ふとも、必是極刑に、處すべき事は、勿論なるを、然までに憐愍思召す、御仁心を争何はせん。再問して言實ならば、仰に悖り候はじ。と答給へば、義實主は、像快に點頭て、そは憑しき事也かし。當家の先祖、義家朝臣は、降人安陪宗任を、饒して身親く使れしかば、宗任遂に復讐の、害心を轉して、良臣となりし例あり。今の滿呂安西は、宗任にこそ及ばざらめ、人として再生の、恩を思はぬものはあらじ。親兵衛が請稟して、那首惡たる素藤すら、死罪を饒されきと聞えしに、その餘は物の數にもあらず。必上我所以に、苛くなものし給ひそ。といと正首に慰め給ふ。閑談數刻に及びたる、その詰朝義成主は、義通御曹司と共侶に、瀧田の城を辭し去て、稻村へとて還らせ給ふ。伴立昨日に彌優て、貞行辰相以下の士卒を、前後左右に従へたる、馬の足掻も緩やかに、路さへ長き春の日の、天よく晴て、戰吹く風に、偃草は、野も山も、君が威徳の涯りなく、高き例に仰ぐなる、今を盛の花の雲、西も東も遅々と、路傍にたつ陽燄の、五百に餘れる入馬の裝ひ、愛たくも亦勇ましきを、這里にも觀る者多かりけり。話分兩頭。兩程に、藁田素

藤は、辛くも死刑を饒されて、東辰相が隊の雑兵們に、水行より身單を、武藏のかたに送り遣られし、次の日の未牌の時候に、その船は墨田川なる、西岸に泊しかば、陸に登し追放ちて、雑兵們は又船を、漕して安房へ還りけり。當時藤田素藤は、獨岸邊に鶴立て、前面遙に看互すに、彼首は舊たる名處にて、昔在五中將の、卒事問ん、と咏み給ひたる、都鳥にやあらんずらん、喙と脚の朱かるが、淺瀬に立て求食の見ゆ。況梅若塚の楊柳の枝は、長き輪回を今もかも、無常の風に靡くめり。紫の筑波峰は、遠く夕霞天引て、緑なす牛島は、近く角組む兼葭も伸たり。裕と云恰といひ、情景兩ながら盡し得て、趣あるに似たれども、汨羅に呻吟ふ屈原ならねば、沈んとするに命惜けく、還んとするに家はあらず。背に受たる管滄に、衣の障れば疼かるに、額には十文字の、黥をせられしかば、誰も罪人なるを知るべし。那里に歇店を求めん歟、と思ひ難つ、長き汀渚を、徘徊しつ、時も移りて、下晡になりけり。登時素藤は、肚裏に又思ふやう、益なき足を疲勞して、東西欲しうなりたるに、這頭は都て水原にて、里人の家もなければ、況酒活る又六が門などは、夢にだも見たかるべし。願八益作を首として、我兵毎は分たれて、那里へか追放されけん。はやくも逢はゞ慙る折、商量敵になるべきに、思ふのみにてこも無益なる、我から速に定難たる、身の往方こそ果敢なけれ。見れば那里の水草の中に、繫舟一艘あり。今宵は且那舟に、曉して終夜好主意を、絞り出して左も右もせん。是より外に術なし、と尋思をしつ、遽しく、舟の邊に赴く程に、折から盈潮也ければ、舟は這方の岸に寄りたり。懸て閃りとうち乗て、見れば故たる管義あり。こは究竟の衾兒にこそ、と搔拿てやをら引起せば、下に一箇の割籠あり。拿揚て試るに、重やかなるを訝りながら、開きて見れば飯と味噌あり。天の賜慚愧し、とうち戴きつ、箸を索て、立地に啖ひ盡せば、海月の骨にあふ心地して、然ばかり力馮にけり。この時黃昏なりけるに、昨夜は里見の雑兵們に、うち守られたる船に揺られて、目睡もせず來にければ、今宵ははやく枕に就て、疲勞を盡し氣を養ふて、明日の便宜を索ぬべし。世話にも果報は變て等、といふことあるに。と獨語て、臥しつ、被く兼葭の、鬼の子ならて

山賊の、親に襲たる似而非賊、浮宿の舟に身を就て、今宵も舟に渡被、所寓の巖は定めねど、住めばすむ世の墨田河、心ばかりは濁江に、影は宿らぬ甲夜闇の、黒白も知らぬ高野、懸て熟睡をしたりける。素より疲勞れし藤なれば、素藤は宿轉もせて、幾時歟睡りけん、鳥の聲に喚覺されて、忽然と眼を開けば、こは何處、那河邊なる繫舟を、宿としたるに似るべうもあらず。と見れば松柏の故たるが、枝を交へ日光を掩ひて、頭の上に差出たれば、うち驚きて、遽しく、身を起しつ、四下を見るに、有つる舟は迹もなく、這頭は正に山中にて、深林奇巖の外に物なく、狐兔栖を得て、浮世に遠く、幽冥に近かり。つく／＼と思ひ難て、兩手を又みつ、愕然と、鶴立こと半响許。人に問まく思へども、牛を牽て峰を下る、牧童だも見ることもなく、疎朶を駝ふて谷を出る、樵夫にも逢ふことあらず。宇津山ゆく業平ならて、夢歟現歟、現にも、夢にも人に逢ざりしを、却あるべきにあらざれば、覺束なくも辿りて、人煙を索てゆく程に、と見れば前面の谷蔭に、最も大きな蓋松を片拿て、締掛たる草莽あり。竹の柱芽の檐、側曲る隨に伐らず削らず。人跡絶たる這太山にも、住めば住む人のありけるよ、と思へば有繫に憑しくて、葛に携り俎を傳ひて、辛うじて那里に迫るに、柴垣締遶らしたる、東面なる兩折戸は、半分斜に開きたり。找み入りつ、喚門へば、主人なるらん女子の聲して、這里は浮世の外なれば、人に訪るゝことはなきに、誰にかあらん。と咄くのみ、速には立も迎ざりしを、素藤心焦燥て、否咱們は仇の爲に、家を喪ひ路に迷ふて、憶ずも來ぬる也。願ふは一霎時憩して、一碗の饅を賜ふべく、里へ出る路の程を、指南せられば、大慈大悲の、功德何事歟これに優すべき。やよ喃々。と叫立れば、内には應と答つ、やうやくに立出て、やをら障子を引開るは、是則一個の女僧也。素藤を見て像訝に、思はざりけんおん身は正に、墓田の犬人にあらずや。といはれて素藤驚きながら、眼睛を定めて這女僧を見れば、別人ならず、八百比丘尼妙棒也。これ什麼いかに。とばかりに、鄙語にいふ、地獄にて、逢る佛の船護光、又浮瀬はありけるよ、と思へば歡びに、勝ねども、なほ疑ひの解ざれば、左右なく母屋へうちも登らず、且妙棒の爲體を、左さ



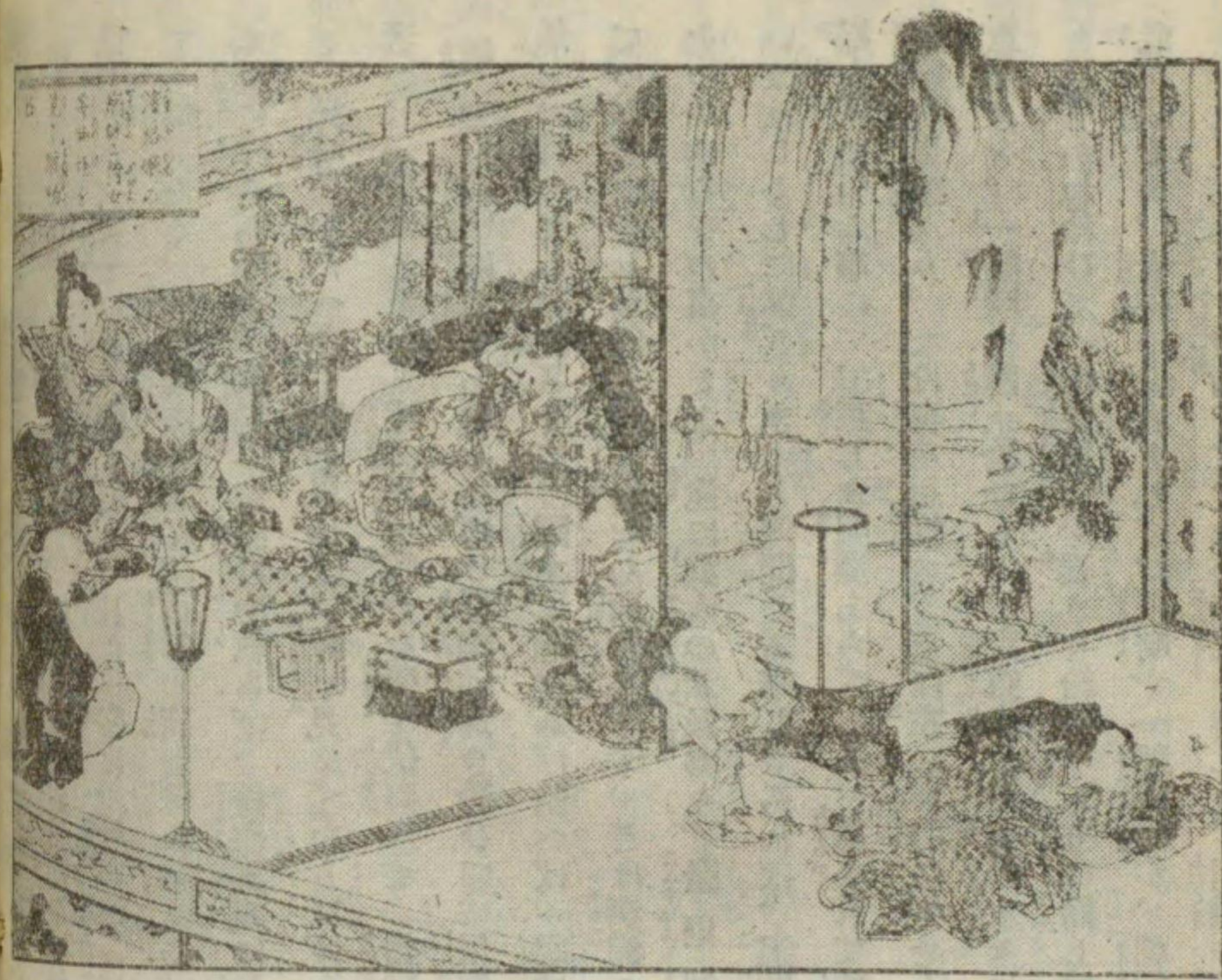
(人 不 入 山 柔 藤 妙 橋 に 逢 逢)

ま右さま又よく相るに、尙未時可なる、白綸子の小袖の、裾最長きを被て、黒縹子の、廣は五六寸なる帯を、前にて寛に結びたり。始て見たりし面影より、年十あまり少やきたるが、風もや感けん、圓頂の毛は、二分敷三分敷延たれば、天鷲絨の似く黒みたる、富士額際立て、化粧ぬ美目の馨やかに、愛敬づきたるも奇異なるを、權者なればと怪まざりける、素藤が先いふやう、尼姑は曩に苟且に、別れし後は信もなく、我那大江親兵衛に、生拘られて寄隊の陣へ、牽れしを知ざる歟。兀自妙術はありながら、始には似ず、かの折に、救ざりしは甚慶ぞや。憑甲斐なき人心、益なかりき。と怨ずれば、妙椿さこそ。と領きて情由を得知らぬ凡夫の臆斷、如右思ふは理りなれども、一朝にはいひ釋がたかり。先這方へ。と慰めて、寛の水を洗足盥へ、移して脚を濯して、卒として母屋へ請登すれば、素藤は地炕の邊に、やをら坐を占て四下を見るに、莽は都て三間にして、納戸あり庖福あり。坐席の正面に、六字の名號の巻幅を掲げて、御前の机案に香爐あり、兩個の竹の花筒に、太山茶と、山櫻の半開き

たるを、最も許多く活たるが、その六字の名號を、蒲無散散散散と、寫たれば、こゝろ得がたく思ふのみ、誠を聞んはさすがにて、訝りながら、敢詰らず、他が憚るよしありて、故意文字を異にしたるを、竟に悟らて已にけり。爾程に妙椿は、地炕に柴を折焼て、先素藤に茶を薦め、且早飯を差めたる、管待等閑ならざりければ、素藤總に心おちりて、又妙椿に云云と、いぬる頃義通を、仔囚にしたる始より、國守と鬪戰の爲體、且大江親兵衛の、武勇に城兵敵し得ず、謀りし事の晝餅に做りて、林を逐れし山の群猿、主に棄られし路の離猫に、似たる艱苦を云云と、告るを妙椿聞あへず、开は宣ふな、始より、咱儕は天眼通をもて、一事も漏さず皆知れり。いまだ曉得給はずや、曩に館山の城内より、諏訪の社頭の巨樹の榿まで、遠く地道を穿ちき、と見えたるも、咱幻術にて、城の士卒の那里へ追るを、凡夫の眼に見せざるのみ。この故に榿の内に、在りと見えたる地道の出口は、後に迹なくなりたる也。譬ば世にいふ仙術に、須彌を縮めて罌粟の内に、容るゝも皆這理りなるを、思はざりけん鈍ましきよ。然ば咱儕は別れて後も、月來おん身の影に立、形に添て幾回となく、助けし事の多かりしに、いかにせん、那犬江といふ神童には、孝烈備多からぬ、伏姫の神靈が、間なく時なく守れるに、剩那奴が未生より、感得の靈玉あり。鴻濛肇て判れし折、天地と共に生出たる、天津八尺の勾瓊なりしを、役小角が刻做て、最多角數珠に作りしより、その數識の八箇の大玉には、仁義禮智、忠信孝悌の八字を分ちて、おのづからにその一字、玉毎にある者なり。就中大江が持るは、徳を天地と共にすといふ、仁字の玉なるをもて、火にも焼れず、水にも溺れず、威勢鬼神を駆役ふべく、千軍萬馬も當りがたかり。この故に、おん身はさら也、城内の士卒、千百數名、那奴一個に威服せられて、阿容々々として降を請ひしは、素より是人力もて、敵しがたきによりて也。咱儕も亦この年來、祕藏の明玉なきにあらねど、那奴們が感得の、玉には及ぶべくもあらず、勝を攬ることかたければ、かの折におん身門を、助けも得せず、救ざりしを、うらむは比丘尼に翠丸の、なしとて不足にせらるゝと、又何を異なるべき。といひつゝ、吻々とうち笑へば、素藤も堪難て、腹を抱て笑ひしを、妙椿禁

めて、且听給へ。かの折おん身を觀面に、助けず救ざりしかども、おん身と俱に多かる士卒の、命を其里に執留めしは、咱儕が擁護したる也。那親兵衛は勇士なれども、未生よりして仁字の、玉を感得したるをもて、殺生を旨とせず、物を憐む心深かり。又義成も仁義を倡へて、暴戾の君にあらざれば、誅すべかりしおん身門を、殺さて追も放させしは、他們が主意のみならず、那守護神の隙を窺ひ、その心の緒を狂はして、思ふ處へ援よせたる、咱法術の所以ぞかし。然ば昨日墨田河にて、西の岸なる繫舟も、又義と割籠の飯も、皆是咱儕の方便にて、おん身の熟睡したる折、舟を這山に遠からぬ、浦邊にはやく漕戻して、悄々地におん身を領て來つゝ、喚も覺さて樹下に、そが儘臥させ置たりしは、咱精妙の手段あるを、おん身に知せん與なりき。みづからその身を見かへりて、搗鬼ならぬを知り給へ。始ありて終なき、浮たる人と同列にな思ひ給ひそ。と審めて、一五一十を解諭せば、素藤は、聞く毎に、意表に出る事のみなれば、始て夢の覺たるごとく、且感じ且羞て、亦いふよしもなかりしが、憶すも太息を吻て、現不可思議なる、女菩薩の妙術、恠る手段はありながら、那大江奴を厭勝の、手を空くすといはるゝを、思へば我身、士卒と俱に、鈍く手稱になりたるも、亦怪むに足らずかし。抑這里は執國にて、女菩薩は亦幾の時候より、這頭に葺を締びたる。勢ひいはるゝ如く也とも、我を幫助る術あるや。願ふは爲に會稽の、恥を雪るよし欲得。いかで。と請求れば、妙椿、然こそと慰めて、心弱しや、恠ればとて、我から胸を腐らすこと歟。咱儕おん身を資ん、と思はずはいかにして、遙々這里へ誘引んや。這地は則上總なる、羽賀館山の間に、人不入と喚做たる、殺生禁斷、斧斤不入の、故しもあれば恠まで、人迹絶たる太山に侍り。然ば昔より這山にて、禽獸を獲る事はさら也、樵夫造炭翁、草刈る童も、入らぬ處ゆくことしなれば、浮世を潛ぶ隱宅には、茲に優たる地方は侍らす。因て咱儕は、おん身の與に、擇て葺を締びたり。志願成就の折を得ば、遠近に散在しぬる、士卒を招き真ん事も、亦咱儕の法術に在り。事の成るまで這

也。那奴を主に、疑して、遠く他郷へ赴らしなば、手に唾して那城を、略ん事極めて易かり。その法術は、恠々也、筒様々々。と秘密の魂胆、思ひの隨に解示せば、素藤満面うち笑れて、うち領きつゝ應をしつゝ、奇也々々。と嘆唱しつゝ、速しく席を避て、妙椿を伏拜みて、女菩薩、我身の一大事は、既におん身の方寸に在り。只方便に儘するのみ。等閑になし給ひそ。と恠むを妙椿聞あへず、开は宣ふな。世間に、縁なき衆生は度しがたし。況おん身は知己なるに、憑れずとも然ばかりの、力を盡さて已べきや。と慰めつ、手を拿りて、扶起して、又上坐に、復してなほも果しなき、間談の時を移しけり。是よりして素藤は、養れて這弄に在り。人迹絶たる太山なれども、主の女僧が幻術もて、東西いと多く、貯たれば、野味魚肉さへ置しからず、喫めども竭ぬ酒さへあれば、毎日々々に管待されて、長き春の日も徒然ならず。且妙椿は、世人傳へて、八百歳といふめれど、うち見は四十許なりしに、幾の程にか少やぎて、誰に見せても三十には、いまだ至らじと思ふべき、面影の艶々しきに、男女席を俱にして、夜も亦臥房を異にせず。主と客と二人のみにて、且ても暮ても盃を、繞らす外に所爲もなし。然ば世の常言に、酒は必是色の、媒妁也、といへるぞ宜なる。素藤は早晩に、妙椿と狎親みて、或は巫山の雲と做り、或は楚臺の雨と做て、俱に鼻骸を抱きしより、妙椿に亦頭を刺せず、折々興に乗しては、調戯き涯りを盡せども、外に憚の關もなければ、樂み多しと思ふものから、宿望胸に絶されば、ともすればいひ出て、那法術を促す程に、既にして春深き、三月十日あまりになりけり。恠而有一日妙椿は、素藤に悄語くやう、日屬おん身に催促せられし、那大江奴を遠ざけて、館山の城をとり復すに、今は大抵好時候也。咱儕は聊投かたあれば、出て五七日還るべからず。久しきことにはあらざるに、留守し給へ。と苟且に、こゝろ得さしつ飄然と、往方も知ずなりにけり。この故に素藤は、人なつかしき山腹の、葺に獨日を彌れば、鳥の聲風の音にも、胸轟きて安からず、赦免に漏れし俊寛僧都が、單鬼界の島守に、なりけんも恠やと



(る怕駭て見を怪物等女侍に牀病の姫路濱)

え給ふ語次に、件の異人の教しといふ、事恠々と言
示して、この義先蹤ありといへども、畢竟女子の告訴
なれば、我半信半疑して、一日二日と過せしが、つら
つらと思惟るに、異人の虚實は、左まれ右まれ、良將
勇士の妖怪を、鎮たる事例多かり。就中昔堀河院、
物怪に魔れ給ひて、玉體安からざりし折、義家朝臣に
詔して、寢殿を衛らし給へば、義家朝臣奉り、装
束の下に身甲して、弓箭を携へ、その甲夜より、お
ん枕方に近づき奉り、既に御惱の折に在り、義家大
音に喚り給ふやう、鎮守府將軍、前陸奥守源義家、
勅詔によりて這里に在り。何なる天魔地妖也とも、
立地に退散せよ、と最も緊しく喚かけて、弓弦を三た
び鳴らし給ふ。その聲殿上に响直りて、听者毛骨も竦
立までに、最凄じかりけるが、是より物怪消滅して、
御惱癒らせ給ひしといふ、這事載て、舊記に在り。恠
れば今番親兵衛を、館山より召來して、姫の病牀を
衛らしなば、その效なしとすべからず、と思ふは誰何。
と、異文を、照文に及ぼして、異言に及ぼして、御惱癒

運りてこそ候へ。況異人の示現あるを、君にも知らせ給ふことと、
く懲せし奇特あり。然ば親兵衛は、身單にて、千百に餘れる大敵を、一時に降伏せしめたる、武功の神童に候へば、
人すらその年歳の多からぬを、忘れて侮るもの候はず。且犬は物怪の、怖るゝといふ因ある大江には、妖怪まれ怨靈
まれ、なてふ憚らぬことや候べき。速に召よせて、御病牀守護の義を、仰付られ候へかし。と薦め稟せば、義成主は、
然也々々。と點頭給ひて、しからば汝瀧田に退りて、大人にこのよしを聞えあげよ。與四郎も召よせて、他をば瀧田
へ遣さん。こゝろ得てよ。と抑すれば、照文は言承して、いそぎて罷出にけり。兩程に義成主は、猛可に四家老(杉
倉、堀内、東、荒川)を召聚合て、件のよしを議させ給ふに、皆しかるべし。と稟し、かば、隨即大江親兵衛を、當
城に召來たすべしとて、苦屋八郎景能に、御教書を持たし、加番として、俱に館山の城へ遣すべき、雑兵三百名を授
けらる。親兵衛が在らざる程は、守禦の士卒を増すべき爲也。且姥雪與四郎も、親兵衛も俱にかへりまわれ。老人の
事なれば、姑且瀧田へ遣して、休息の暇を給ふべしとて、その義も御教書に載られたり。寔に火速のおん使也ければ、
景能は雜兵們的、揃ふを等馬に乗て、一騎館山を投て走らしけるに、今朝辰牌に稻村の城を出て、この日未の初刻
に、那里へ著到してければ、親兵衛は、逸時良子、與四郎と俱に誑使を迎へて、御教書を賜り命を拜して、景能を管
待す程に、景能は、濱路姫の病著危殆の事の趣、夏曳が怨靈障導のよしを、簡様々々と告知すれば、大家ひとしく駭
嘆じて、安からぬ事に思ひけり。畢竟親兵衛が、與四郎と俱に、稻村の城へまゐりて、後の話説甚麼ぞや。开は次の
巻に、解分るを聴わかし。

東都 曲亭 主人編次

第一百十回

反問の術妙椿犬江を遠ざく
妖書の孽仁妙眞に辭別す

却説大江親兵衛は、濱路姫の鬼病のよしを、うち听しより毫も礙議せず、隨即守城の勤番を、自餘の三士(逸時、良子、景能)に儘しつゝ、遽しく身装して、立出んとせし折に、姥雪與四郎に悄語くやう、知らるゝごとく稻村より、恠猛に召させ給へば、我は青海波に乗走らして、はやく那里へ参るべし。翁は然したる御用にあらねば、寛に出て來給ひぬ。因て憑むべき事こそあれ。我身富山を出しより、憶はず執袴に暇なければ、いまだ大母(妙眞をいふ)に對面せず。今番稻城へ参りても、そが儘留置れん歟、是も亦知るべからず。しからんには更に又、等も不樂しく思はれん。我豫寫措きたる、消息一通致に在り。翁瀧田へ退る日に、這消息を大母に見せて、よしを告て慰め給ひぬ。目今火急の君命を稟て、言私に及びぬるは、忠臣の本意にあらねども、尙人竝に俸祿を、定めて賜る身にあらねば、恠ばかりの事は許されせん。等閑になし給ひそ。とこゝろ得さしつ、消息を、拿出して遞與すにぞ、與四郎やをら受收めて、いはるゝ趣こゝろ得たり。先度の夜行と同じからねば、在下は、和君の馬に、附て走るも無益ならん。既に晝は斜になりぬ。在下は歩行なるに、暮なば路にて歇店に就て、明日稻村へ参り候はめ。快々出させ給ひぬ。といふに親兵衛再露に及ばず、既にして遊時良子、景能門に別を告て、件當をばいそがせず、皆姥雪に従ふて、徐に來よ。と分付て、單騎獨走らして、首の玉の左側に、はやく稻村の城に來にければ、感て木音の甲乙に、感て感て聞えぬ。二時許に前走らして、首の玉の左側に、はやく稻村の城に來にければ、感て感て聞えぬ。しかば、義成主その著到の、神速なるを譽させて、遊侍にて夜飯を賜り、馬をば既役人に預けよとて、這宵親兵衛を、身邊近く、召よせて對面あり。然而宣ふやう、汝館山に在城してより、その地いよく無異なるよし、既にその聞えあり。歡ひ思ふ所也。今番猛可に召來たしぬる、所要の義は、使を兼て、加番の與に遣したる苦屋八郎に聞つらん。抑濱路姫が病著は、物怪の祟と聞ゆ。醫藥はさら也。驗者の祈禱も、今にその效驗を見ず。汝は武勇世に比類なく、且那仁字の靈玉を、感得したるよしさへあれば、件の物怪を鎮ん事、汝にしくものあるべからず、と人もいひ我も思へり。望しからぬ所行なりとも、今宵よりして濱路が臥房に、宿直して試てよ。勿論汝は、うち見には、十六七の後生なれども、實は九歳の童ならずや。然ば奥まりたる閨門に、通夜して看病の婦女輩と、共侶に待るとも、忌嫌ふべきよしもなく、人の譏誚もあらざるべし。什麼この義をよくせんや。と亦他事もなく聞え給へば、親兵衛は困したる、面色しつゝ稟すやう、御詔承り候ひぬ。千軍萬馬の大敵に、打向へとある御用ならんには、思ひの隨に克得ずとも、面目も候はん。然る類にはあらずして、煙の如く、影の似く、眼に見えても、手には捕られぬ、物怪ならばいかにして、輒く對治せられんや。術なき所爲に候へども、推辭奉らんは最も惶し。御意に隨ひまつらん事、勿論に候へども、姫上のおん枕方に、夜と共に侍らん事は、影護きを争何はせん。御病牀の次の間には、宿直仕るべうもや。といふを義成主聞あへず、开は左も右もの事ながら、就て又一條の所望あり。汝が持つる靈玉を、濱路が臥房の簀子の下なる、土中に深く埋措かば、いよゝその效速にて、後々までも障導なしといふ、異人の教誨ありとか聞にき。こは婦女毎の告訴にて、正しき照据あるにあらねば、半信半疑、決斷しがたし。なれども、嚮に館山の兇黨が、汝の玉の光に撲れて、轉倒氣絶したりと聞けば、その所以なしといふべからず。汝濱路が枕方に、近づく事を欲せずは、權且玉を我に貸ね。簀子の下に埋措して、その效をも亦試てん。然ばとて件の土中に、久しく埋措んとはあらず、那

物怪の對治せられて、濱路が病著癒りなば、拿出さして返すべし。這一椿事は、我意にあらず、婦女毎の云々と、願へばとても大人氣なし、と思ふものから談ずるのみ。苟且ながら靈玉を、土中に埋措れん事の、歎しくは借りずもあらなん。然らば坐席を擇ずに、縦濱路が枕方也とも、便宜に儘して、宿直をせずや。といはれて親兵衛、阿とばかりに、答難つゝ沈吟じたる、肚裏に思ふやう、この靈玉は、我身と俱に、親の胎内に在りし日より、自然と得たる寶具なれば、牡鹿の角の束の間も、人に貸すべきものならねども、君命なるを争何はせん。慈に姫上の、枕方に宿直して、外様の譏諷を受んには、優すべきものを、と尋思をしつゝ、頭を擡げて稟すやう、御諒の如く、這靈玉は、生れし日より片時も、身を放つことなかりしかども、祖母を年來御扶持の下に、召置るゝ御恩を思へば、獻つるとも惜しからず。況一霎時の御用をや。姫上瘳り給ふまで、埋措し給へかし。と承諾まうしつ項に掛たる、護身囊を開きつゝ、玉を拿出て、懐紙に、載て恭しくまゐらすを、義成やをら受とりて、後方に侍りし近習們に、燈燭を秉して、件の玉を、左さま右さま一霎時見て、聞しに勝れる奇妙の美玉、果して自然と仁字あり。奇也々々。と嘆賞しつゝ、鼻紙臺なる香匣に、裝攸め、臺に登して、奥隸の老黨某甲を遣し召よせて、玉を埋る事由を、解示して宣ふやう、這個玉を、香匣と、共に一箇の壺に納れ、又その壺を瓶に藏めて、濱路姫の臥篋の下なる、土中を穿ること三尺許、今宵速に埋させよ。こは世に兩個と得がたかる、奇貨なるぞかし。等閑にして碎くべからず。その事を做果るまで、濱路が病牀を外へ移して、埋る折に我に報よ。我みづからゆきて見ん。登時義成主は、又親兵衛に宣ふやう、目今汝が聞くごとく、を源與し給へば、奥隸の老黨は、こゝろ得果て退りけり。登時義成主は、又親兵衛に宣ふやう、目今汝が聞くごとく、玉を土中へ埋る折は、我みづから指揮をすべし。然らば心もなき事なし。權且遠侍に退りて、長途の疲勞を休らへよ。事整はば、濱路が臥房の、邊へ案内をするものあらん。その折宿直をせよかし。と叮嚀に課すれば、親兵衛は、歎びを、藪して遠侍へ退りけり。慈に程に、親成の夫人吾嬬前は、今宵大江親兵衛が、一輪兼助の城より來ぬ

事、及守の所帯に儘して、那靈玉を貸まゐらせ、嵩に異人の教しごとく、埋措るゝ事までも、具に傳聞給ひて、その歎び大かたならず、纏て専婦使をもて、親兵衛に果子を賜り、又美酒と餅數種賜りて、疲勞を慰め給ふ程に、夜は丑三の時候になりけり。浩處に、甲夜に靈玉を預けられたる、奥隸の老黨出て來つ、親兵衛にうち對ひて、大江生、さぞ徒然に候はん。願生が奉りたる、靈玉は埋果たり。館のおんみづからをはしまして、鬱したりければ、心安く思ひ給へ。因て五の君(濱路姫をいふ。事は既に前集に見えたり)のおん臥篋を、故のごとくに做し奉りぬ。今宵よりおん身近う、宿直を仕らせよ、とある御説也。卒給へ案内をせん。といふに親兵衛異議もなく、开は承り候ひぬ。しからば參り候はん。と答て纏て共侶に、濱路姫の病の牀の、次の間に來にければ、給事の老女出迎へて、今宵の夜務を勞ひなす。當下親兵衛は、濱路姫の病惱輕重、又物怪の障の有無を、云々と尋れば、老女答て、姫上は、黄昏時候に、當一たび、願せさせ給ひしのみ。おん身の館山より來ませし、と聞えし後は然る事なく、只今睡らせ給ひき。と答る間に、看病に通夜して侍る婢妾們が、數名敷、親兵衛を、物の隙より偷見て、仍なく聾く聲す。年三十可なるは、出て親兵衛に對面しにけり。左右する程に、短夜なれば、窓の隙より亮亘りて、庭に雀の聲する時候、親兵衛は暇を賜りて、又奥隸の某甲に、引れて罷出しかば、館の内なる編子舎をもて、休息所と定められ、這里にて早飯をたうべなす。豫臥篋を儲てあり。晝は勤務もなき身なれば、權且睡臥給ひぬ。と給仕兒們的薦るまに、纏て枕に就にけり。恁りし程は、姥雪與四郎は、この日巳の五刻過る時候、親兵衛が伴當の、後れたるを厮俱して、稻村の城に來にければ、堀内藏人貞行、東六郎辰相奉りて、問注所に召登し、則國守の仰を傳へて、富山以來の賞として、白銀五十枚を賜り、瀧田へ退りて、宅眷們を、慰めて在留すべし。月俸、この餘の賜は、犬田小文吾が親、文五兵衛の例をもて、那里にて宛行れん。且妙眞に對面の折、今番大江親兵衛を、館山より召來たして、當城に在勤の、事の趣を告知して、宜く他を慰むべし。と仰させ給ひしかば、與四郎は大かたならぬ、君恩を拜し賜を受とりて、

退きて親兵衛を尋るに、他は昨夜の宿直に疲勞れて、天明て後に睡に就きぬ、いまだ覺すと聞えしかば、敢又驚さず。昨日消息を遞與されて、いはれしよしは听果たるに、這里にて時を移すは要なし。異日又來て對面せん、と思ひにければ、親兵衛の、伴當を留置き、その身の伴當のみを領て、瀧田を投ていそぎけり。是より先に義成主は、田税力助逸友を使价として、瀧田の城へ遣して、大江親兵衛を召させし事、那玉の事夜勤の事、且親兵衛が宿直せしより、昨夜は物怪顯れず、濱路姫は丙夜より、睡らせ給ひし事までも、遣なくおん父義實主へ、聞えあげさし給ひけり。爾程に親兵衛は、未牌の時候に起出で、與四郎が來ぬ事、且白銀五十枚を賜りて、休息の爲、瀧田の城へ、遣されたり、と傳聞て、歡ぶこと斜らず、纏て浴湯し沐梳り、夕饌を賜る程に、君侯(義成)又夫人(吾嬬前)より、宿直衣と平生服と、必用の調度さへ、皆具て賜りければ、親兵衛は寵恩の、限なきを畏みて、その歡びを稟せしに、姑且して義成主は、親兵衛を召よせて、昨夜の宿直、慮しからず、その功ありし歡びを、云云と宣はするに、義通御曹司は、舍弟次丸と共に、嚴君の左右に侍り給ひて、親兵衛が事毎に、その功あるを褒美給はして、茶を賜り菓子も賜り、過ぎし館山の事をさへ、うち譚らはして興し給へば、親兵衛は、長き日の、鬨るを覺ず慰めまつれる、面目あまりありとぞ思ひける。却説この日も暮にければ、親兵衛は、又濱路姫の、臥房の次の間に宿直したるに、今宵も物怪顯れず。濱路姫は今朝よりして、面色も光澤やかにて、心地清々しく覺るとて、白粥を食ことの、兩三番に及びしかば、吾嬬前歡び給ひて、今宵は大江親兵衛と、夜勤の女房門に、東西を賜ふべしとて、午よりこの議を命ぜられ、赤豆飯、煮染物、剛鬚魚の鹽炙、石決明の膳、薄煮、濱防風の醋、蒸菓子餅などを、五六箇の折櫃に裝做て、その甲夜に賜りければ、婢妾們は歡びて、先親兵衛に分ちて薦め、各々賜りて、芽出たき宵とぞ思ひける。恚りけれども親兵衛は、暮るより且るまで、端然として外眺もせず。婢妾們が稍狎れて、ものいひ被るもなきにあらねど、纏に應をしたるのみ、要なければ這方より、ものいふことはなかりけり。この次の日に瀧田より、老侯の使として、

が、稻村の城へ來て、箇様々々と御意を傳へ、親兵衛が夜勤を勞らはして、錦茶と乾菓子兩盃を賜り、且五の君の癖著の、稍瘥らせ給ひぬる、歡びをなん聞え給ふ。義成この義を聞給ひて、照文を召よせて、老侯の安否を尋ね、親兵衛に東西たまはせし、歡びを云々と、聞えさせ給ふ語の次に、物怪退散したるに歎、思ひしに倍す濱路が容體、恚々と解示して、是またく靈玉と、親兵衛が、奇功也。是等のよしを嚴君に、詳に稟せとて、纏て暇を賜ひにければ、照文は退きて、又親兵衛に對面の折、妙眞は恙もなく、再會を俟事の情、又與四郎は、文五兵衛が、舊子舎を賜りて、音音と娘婦們と、兩個の孫と、俱に住へば、妙眞を、置るゝ舎と檐を比べて、僅に壁を隔るのみ、且夕迭に交加ぬれば、詞敵の多かるよしを、告知しなごせしかば、親兵衛は心おちみて、左にも右にも我二柱の君恩也。と稱へつ、今番又思ひがけなく、老侯より東西賜せし、この歡びを稟し給ひぬ。姫上いよ、瘥可り給はゞ、その折暇を給はりて、見參にこそ入るべけれ。といふに照文こゝろ得て、別を告て、伴當を、俱して瀧田へ退りけり。是よりして濱路姫の、病著いよ、平ぎ給へば、親兵衛が宿直せしより、纒五六日の程に、三たびの饌を生平にかはらず、氣力は日毎に清やかなれども、いまだ日數を経たるにあらねば、浴湯結髪はし給はて、なほ垂籠てをはしませば、親兵衛に對面し給はず。只他がものいふ折に、その聲を聞給ふのみ。遮莫那物怪は、夢にも見ゆることなければ、宿直の醫師、奥隸の甲乙には、夜勤を免し給ふものから、親兵衛をのみ初のごとく、夜は次の間に侍らしたり。然ばおん二親胞兄弟達の歡び、いへばさら也、給事の女房門の、なべて歡び勇まぬはなく、晝は雙陸歌骨牌、貝合などをして、長き日の徒然を慰めまらせ、夜は亦物よく讀む女房に、源氏物語を讀しつゝ、听給ふに、其の甲夜の程のみにて、約莫二更の左側より、曉るまで熟睡して、一たびも覺給はねば婢妾們的夜勤をも、大かたは退けて、枕方に侍るもの、一兩個になりしかど、其すら心怠りて、俱に睡りて曉る天を、知らざるも間ありけり。爾程に親兵衛は、宿直すること七夜さばかり、五の君既に瘥り給へば、在らずもがな、と思ふものから、いまだ暇を賜らざるに、自由にすべきよしのな

ければ、勤榮なき夜を守る間、やうやく氣は倦心疲れて、連りに盹を催せしを、勉めて睡らじと思へども、堪がたければ、譬近なる、雙陸局を引寄して、面杖衝て、寝るとも知らず、そが儘一霎時打盹みけり。然ば又、義成主も、吾嬭前も、多かる息女達のそが中に、濱路姫は、伏し時、暴驚の殃危にて、往方も知すなり給ひしより、世になき人と思ひ絶て、年來を過し給ひしに、料らず蟹崎照文が、甲斐國より俱しまるらせて、這地に還り給ひしかば、鍾愛自餘の七個の、姫上達より八入に増て、慈愛み給ひぬる、通ての親の情なるに、今番物怪の祟にて、命危かりし比、不測に異人の示現ありて、物怪は箇様々々の、怨靈也と聞えしかば、大山寺なる衆徒に課せて、夏曳が怨靈解脱の爲に、水陸の好事を執り行はし、且大江親兵衛を、館山の城より召來たして、宿直を命じ給ひしより、そが儘物怪鎮りて、濱路姫はいとやく、病惱平ぎ給ひにければ、隨即洲崎明神の社、及役行者の石堀、富山なる峰上の觀音、伏姫の墳墓へ、賽願の使者を遣して、後々まで障導あらて、姫上命運長久を、なほも祈らせ給ひし日より、吾嬭前はさらにもいはず、義成主も夜を安く、人定より枕に就きて、睡り給はざることなかりしに、親兵衛が參りしより、第七日といふ夜に迫りて、何となく寢苦しさに、睡りかねつゝ短夜の、深く隨に胸うちさわぎて、平ならず覺給ひしかば、こは濱路が病著の、更に危窮に及びしか、然らずは又物怪の、立顯れて惱す歟。什麼親兵衛はいかにしけん、近習門を遣して、安否を尋問せばや。と尋思をしつゝ、次の間に、臥たる近習某甲を、喚覺さんとして遽しく、頭を擡げ給ひしが、否、既に小夜深て、四更の土圭の方僅响きしに、慙に他們を遣して、問してさせる事もなくば、徒に這那の、人をさへ驚して、事に益なきのみならず、女々しくも疑ひの、心より暗鬼を出せしならん、と笑れもせば悔しかるべし。所詮我みづからゆきて、那里の安否を探り知るに、しくことあらざるべし、と思ひかへし給ひしかば、横を搦遣り身を起して、枕方なる腋挿の、刀を帯て、次の間なる、紙門をやをら推開きて、开首に有ける提燭を乘りて、行燈の火を移しつゝ、开を携へて進なる、幾間射場うち過ぎて、奥と表第の間なる、關の鎖を推し給ふに、思ふにも似

ず開きにければ、詭りながら採入りて、濱路姫の臥房なる、次の間に來て見給ふに、燈燭の光輝にて、親兵衛は這里に在らず、いよますます詭しければ、そが儘一霎時立在て、悄々地に四下を見かへり給へば、濱路姫の臥房にて、男女の聾く聲したり、淺ましき事今さらに、いふべうもあらざれば、退去んとし給ふ程に、弗憶く東物ありて、脚に掛るを又詭りて、悄と拏抗て、提燈の火光に、照してつら／＼と見給ふに、是則詭書也。標識は具ならねども、こは疑ふべくもあらぬ、濱路姫の手迹にて、親兵衛に贈れる也。義成主は勃然と、忽地怒りに堪ざれば、先那奴們を推並べて、手撃にせん、と只管に、惱る心をやうやくに、推鎖めたる君子の本性、胸に深念は、在曉の、月ならなくに這腕筒を、人には見せじ、と懐へ、夾めてなほも偷歩しつゝ、臥房へかへり給ひしを、那里に夜勤の婢妾們も、這里に當番の近習們も、短夜なれば貪睡くて、皆夢にだも知らざりけり。爾程に義成主は、單臥房にかへり入りて、坐して手を又み頭を傾け、熟思惟給ふに、親兵衛は、人に勝れて、身長こそ十六七の、後生の像くなれ、生年九歳の孺子なれば、縦婦女子の中に置くと、淫奔がはしき事はあらじ、と思ひしは我淺慮にて、形體と俱に心さへ、はや大人備て早晩に、色情は起にけん。約莫男女の密會は、俱に死刑に行ふべき、法律に明文あり。他們が情由を人知らば、我は許さんと欲りすると、助け得がたき罪過なるを、幸ひに人はしらずやあるらん。方僅這腕筒の我手に落しは、他們が與に主親の、恥を捺滅すよすがあり。濱路は左まれ右もあれ、親兵衛は、世に罕なる、豪傑の氣質あり、且八犬士の一人にて、自餘の犬士に先だちて、我に仕て、兩三番大功ありし者なるに、思案の外と俗にもいふ、這情慾の罪を糾さば、可惜犬士に疵を附て、後世までの遺恨なるべし。所詮中を裂き遠離て、他們が惑ひの醒し折、召返すにしくことあらじ、とはやくも主意決りければ、枕方に置給ひたる、提燭をやをら引よせて、件の腕筒を推圍め、燈燭の上に翳し給へば、發と起昇る灰と共に、提燭をはやく吹滅して、遠く搔遣り、脇挿の、刀を又枕方なる、刀架に掛互して、ふたゞび枕に就き給ふ。寛仁大度の賢君子、竟に睡らて明る天を、今かくと復寢の床に、不娛しさ涯りなかりけり。

愆而其詰且、義成主は、親兵衛を、召近著けて、左右なる、近習を退けて宜ふやう、濱路が病著瘳りて、物怪も亦退散せしは、またく汝が功にして、那靈玉の奇特もあらん。濱路はいまば浴湯せず、病の牀にありといへども、既に本復に及びしかば、今日より夜勤を免すべし。就て我思ふよしあり。汝は小りし時より、伏姫の靈の擁護によりて、富山の奥に生育たれば、關の東西なる諸國はさら也、這安房上總の地理だにも、知ざる所多かるべし。且自餘の犬士門は、年來汝が所在を索ねて、八人具足せるまでは、参りがたしと幾回か、推辭しよしの聞えたり。しかるに三四の犬士門は、去歳の冬より武藏なる、穂北の郷士、水垣某甲とやらんが家に寓居す。この餘、那大阪毛野胤智が、往方はいまだ知れずとぞ。又犬川莊助、犬田小文吾は、毛野が所在を索るとて、甲斐の石禾の指月院を、立出しより穂北へは、尙來會せざるよし、曩に登崎照文の、噂によりて聞知たり。那信乃道節、現八大角は、今もなほ穂北なる、郷士の宿所に淹留しぬるや、その後の事聞えねども、他們は年來汝の所在を、索難つゝ在るらん、汝が我が仕るよしを、告も遣らずは不義に似たり。我この春は照文をもて、件の宿所へ遣して、信乃門四犬士の安否を訪し、且毛野門三犬士の、來會せし歟。否、と問せんとこそ思ひしに、義通が身に禍鬼起りて、素藤を征伐の、軍陣に日を彌り、且濱路が病著、物怪の、祟に因て、三春を、空に過しつ、信乃道節門を、訪する暇あらざりき。恚れば汝穂北に行て、信乃道節、現八大角が、今なほ那里に在るならば、對面して恚々、その身の上を報知らすべく、那首に在らずは、往方を索ねて、犬士八人具足の日に、断伴ふてかへり参らば、單館山の城主になりて、上總に在るに勝らずや。因て汝に遊歴の、暇を只今取らす也。一には關の八州を、遣もなく歴覽すべく、一には七犬士を、索て俱に還り來よ。恚れば急に立去て、寛く還るを妙とすべし。然ば汝が祕藏の玉を、今返すべき該なれども、いかにせん、濱路はいまだ撤牀せず。且汝が這里に在らずなりて、復物怪の障りあらば、何をよすがに頼んや。縱汝は在らずとも、玉を那靈玉に措かば、然る障りなかるべし。尤無心の至りなれども、汝がかへり來ぬるまで、那靈玉を我に預けよ。知らるゝこと

く二重の瓶に、齧めて土中に埋められたれば、火災盜賊の患ひなし。擬是は納戸財なるを、鑿割の興に取らす也。この意を得よ。と叮嚀に、悄語き示して、黄金百兩、紙に包み折敷に載せしを、手づから拿出て興へ給へば、親兵衛は遽しく、膝を找め受戴きて、身を退かして稟すやう、御説の趣、辱く、都て承り候ひぬ。微臣一人七犬士に、先だちて恚までに、御恩を稟まつる事、實に本意に候はねども、嚮に老侯の御危難を、富山に拯ひまつりしより、素藤對治の事により、憶はず執務に繋れしは、心苦しく候ひしに、今遊歴の興に身の暇を、賜ふて自餘の犬士門を、俱して歸參れとある教命は、寔に臣等が幸ひなり。況路費のおん金を、御手親賜はする、寵恩懇篤、身にあまりて、醫を取るに物もなく、感涙の外候はず。又靈玉の事はしも、既に知せ給ふごとく、年來奇特多ければ、この身の護に候へども、君の興には一命を、獻るとも辭すべからず。然るを矧那玉をや。御用に達ば、是亦幸ひ、微臣かへり参るまで、埋措せ給へかし。しからば今日啓行を、仕らん事勿論なれども、大母が月來俟わびけんを、あはてこの儘別なば、後の歎きも不便也。一霎時瀧田へ立寄て、祖母妙眞に對面して、徑に發足仕らん。この義を許させ給はんや。と稟せば、義成主沈吟じて、开は亦餘議なき事ながら、瀧田に逗留すべからず。妙眞に對面せば、はやく退くを佳とせん。老侯には別人をもて、是等のよしを聞えあげてん。意ふに汝が遊歴に、伴當の多かるは、反て路次の煩ひならん。夥兵を擇て一兩名、俱してゆく義は便宜に儘せよ。快々退出候へとて、身の暇を賜ひにければ、親兵衛は額衝て、遺る事なき御懇命、肝胆に銘じて忘るべからず。願ふは貴體恙なく、猶良善の政事こそ、あらまほしく候なれ。といふに義成點頭給ひて、こゝろ得たるぞ、快退りぬ。と仰に親兵衛、阿と答て、賜の金、懐へ、收めて纏て立つ鳥の、跡は濁さぬ春の池、庭の嫋葉の樹下蔭、暗からぬ身に疑ひの、罹るや松に蔦蘿、墨畫の杉戸推開て、廊下よりぞ退出ける。爾程に親兵衛は、既に思ふよしあれば、この朝本番なる、甲乙にも別を告げず、猛可に仰を稟たれば、瀧田へ赴くとのみいひ知して、伴當門を召よせつゝ、青海波の馬を牽して、一二の城門を出る程に、吐裏に思ふやう、今日君侯の仰

こそ、左にも右にもこゝろ得ね。那物怪は退散して、濱路姫の病著の、稍瘥り給ひしかば、宿直の役を免されしは、しかるべき事ながら、又館山へ返されず、剩猛可に遊歴せよとて、身の暇を賜りて、瀧田の祖母の宿所にすら、一日も逗留すべからず、と掟させ給ひしは、故ありぬべき事ぞかし。言には出し給はねども、こは我を疑ふて、追放ち給ふならん。然ばとて身に取て、毫ばかりもおん疑ひを、受べき覺なきものから、餘の犬士に先だちて、大功ありしのみならず、更に閨門に立入りて、婢妾們と一列に、夜勤を仰付られしを、媚しと思ふ佞人が、讒言をしたりけん。君侯は素より賢明にて、候便利口の小人を、信容れ給ふべくあらねど、衆口は金を鏢し、市に三虎を致すといふ、古人の常言、以あるかな。功成り名遂て身退くは、是達人の用心にて、生涯無異の捷徑なるを、誰も知りたる事ながら、俸祿富貴を貪りて、退くことを忘るゝときは、獵禽盡て狡兎烹られ、平家亡びて義經讒死す、榮枯得失、今昔一致、こは驚くに足らねども、我里見家に仕へてより、いまだ三十餘日に過ず、はやく上總の館山なる、城を預けられしのみ、尙一撮士の采邑も得ず、坐席格式、一として、定められたる事なきも、朔折よりして兵糧を、一時に掌りしかば、忌るゝ事のありなまし。今よりの後幾程なく、我義兄弟なる犬士們に、環會ふ日のありとも、這身に受たる濡衣を、乾さずは這地に住りて、仕の途に入るべからず、と惜々地に胸を決めつゝ、第二の城門を出しかば、伴當們を見かへりて、我は火急の所要ありて、瀧田の城内に召置るゝ、大母許赴ぐ也。若曹は、我馬に、後れじとて走るべからず。十人の内中七人は、館山の城へかへりゆきね。伴若黨一名と、馬の鑢練奴は、徐に續きて瀧田へ來よ。その馬寄せね。と牽向させて、閃りと乗りて驀地に、瀧田を投て走らするに、素より駿足なるをもて、幾里の路の程を、思ひの隨に乗著て、はやく瀧田の城に來にければ、馳て馬より下立て、番卒們を喚ていふやう、我は大江親兵衛也。大母妙眞許赴くに、伴當の後れたれば、一霎時這馬を憑み侍る。妙眞の宿所へは、なほ程ある歟、那里ぞや。と問へば番卒毫も顧みせず。驚聞知る武功の犬士、親兵衛なれば、一兩名、速しく並出て、仰こゝろ得候ひぬ。妙眞尼姑の宿所へは、我門案内を仕らん。率給へ。と答つゝ、一卒は馬を牽入れて、城の内に繋留め、一卒は親兵衛の先に立て、郷導をしたりしかば、尋ねもわびず、二の城門を、うち過て又一町あまり、柳巷路と喚做す邊に、諸士の耳房多くあり、开が舍尻に空地あり。空地の北に茅葺なる、一座の小舎ありて、竹色を折繞らしたる、兩折戸の頭にて、番卒急に足を住めて、親兵衛を見かへりつゝ、尋ね給ふ妙眞尼姑は、即這里で候。と誨て馳て辭し別れて、走りて正門へ還りゆくを、親兵衛は勞ひて拮みたる野袴を、引伸しつゝ、兩折戸を、敲きて連りに喚門程に妙眞奥より立出て、應をしつゝ、戸を開きて、親兵衛を見て、訝しげに、那里よりぞ。と尋れば、親兵衛も左見右見て、おん身は是れ大母様ならずや。某は大八也、大江親兵衛で候ぞ。と名告るに妙眞胆を潰して、相ること約莫半响許。忽地に含泪で、原來和殿は、親兵衛なりし歟。六稔富山に在りし程、最も大きうなりにき、と人の噂に聞ながら、然まで大人備たらんとは、つやつや思ひかけざりき。嚮には姥雪翁をもて、消息を寄られて、相見ることく慰め侍り。先這方へ。と愛々しく、馳て坐席へ請登すれば、親兵衛は刀を解て、後方に閣き、恭しく、妙眞にうち對ひて、我うへはいぬる比より、傳へも聞せ給ひけん、曩には時の不祥にて、憶はず別れまつりしを、夢かと思ふ六稔歴て、浮世に出しは、神女の擁護。快見參に入らばや、と思はざる日はなきものから、仕の途に入りしより、我私を顧る、暇なければ昨日まで、空に過せし胸苦しさは、一日も千秋に異ならざりしに、やうやくに時至りて、恙も在らず、拜顔の、歡び何事かこれに優すべき。寔に芽出たく厚き、再會にこそ候なれ。といへば妙眞點頭のみ、涙にものをいひ難し、顔を背けて兩袖を、絞るばかりの行潦、ながらへてこそ相見ぬる、歡しさに就て又、深き歎きの杜も今、願事遂し對面に、泣じと腰目を拭ひて、嘯親兵衛、爾が二度の大功は、蟹崎主も、與四郎翁も、告知し給ひしかば、咱儂が年來二柱の、おん館に受奉りし、御恩を聊返しにき、と思へば然しも身の幅の、廣き世界に二人と得がたき、孫を思へば又その親の、事さへ胸に浮れて、得泣まじき事をすら、泣くは老女の愚痴ならん。爾の與には外大父様、覺てやをる、行徳にて、故の

へは、我門案内を仕らん。率給へ。と答つゝ、一卒は馬を牽入れて、城の内に繋留め、一卒は親兵衛の先に立て、郷導をしたりしかば、尋ねもわびず、二の城門を、うち過て又一町あまり、柳巷路と喚做す邊に、諸士の耳房多くあり、开が舍尻に空地あり。空地の北に茅葺なる、一座の小舎ありて、竹色を折繞らしたる、兩折戸の頭にて、番卒急に足を住めて、親兵衛を見かへりつゝ、尋ね給ふ妙眞尼姑は、即這里で候。と誨て馳て辭し別れて、走りて正門へ還りゆくを、親兵衛は勞ひて拮みたる野袴を、引伸しつゝ、兩折戸を、敲きて連りに喚門程に妙眞奥より立出て、應をしつゝ、戸を開きて、親兵衛を見て、訝しげに、那里よりぞ。と尋れば、親兵衛も左見右見て、おん身は是れ大母様ならずや。某は大八也、大江親兵衛で候ぞ。と名告るに妙眞胆を潰して、相ること約莫半响許。忽地に含泪で、原來和殿は、親兵衛なりし歟。六稔富山に在りし程、最も大きうなりにき、と人の噂に聞ながら、然まで大人備たらんとは、つやつや思ひかけざりき。嚮には姥雪翁をもて、消息を寄られて、相見ることく慰め侍り。先這方へ。と愛々しく、馳て坐席へ請登すれば、親兵衛は刀を解て、後方に閣き、恭しく、妙眞にうち對ひて、我うへはいぬる比より、傳へも聞せ給ひけん、曩には時の不祥にて、憶はず別れまつりしを、夢かと思ふ六稔歴て、浮世に出しは、神女の擁護。快見參に入らばや、と思はざる日はなきものから、仕の途に入りしより、我私を顧る、暇なければ昨日まで、空に過せし胸苦しさは、一日も千秋に異ならざりしに、やうやくに時至りて、恙も在らず、拜顔の、歡び何事かこれに優すべき。寔に芽出たく厚き、再會にこそ候なれ。といへば妙眞點頭のみ、涙にものをいひ難し、顔を背けて兩袖を、絞るばかりの行潦、ながらへてこそ相見ぬる、歡しさに就て又、深き歎きの杜も今、願事遂し對面に、泣じと腰目を拭ひて、嘯親兵衛、爾が二度の大功は、蟹崎主も、與四郎翁も、告知し給ひしかば、咱儂が年來二柱の、おん館に受奉りし、御恩を聊返しにき、と思へば然しも身の幅の、廣き世界に二人と得がたき、孫を思へば又その親の、事さへ胸に浮れて、得泣まじき事をすら、泣くは老女の愚痴ならん。爾の與には外大父様、覺てやをる、行徳にて、故の

古那屋の文五兵衛翁、今まで存命給ひなば、愛くつがへりて歡れんに、苦海愛河の世は定めなく、弘誓の船出遠ければ、別れてゆくも住るも、假の宿りと知りながら、返らぬ人のなつかしきは、恚る像身のあれば也。喃親兵衛、いふて益なき事ながら、見れば思へば、彌の面影、幼穉貌は耗ねども、鼻梁のいとよく融りて、特に眼晴の清やかなるは、房八に肖たりけり。又ものいふて笑折に、片麿の見はるゝは、阿沼蘭に肖たり。四個の親身、父さへ母さへ、外戚の、祖父さへ黄泉の行客と、なりて五稔六稔の今日まで、残るは我這身單に、思ひ難たる哀歡苦樂、遣る瀬もなきは恩愛の、彌にこそ、といひかけて、又潸然と泣沈めば、親兵衛、然こそ。と慰めかねて、目を數瞬き、鼻をうちかみ、やよ大母様、爾思召すおん歎きは、理にこそ候なれ。我身二親を喪ひしは、僅に四才の比かよ。名をのみ知れど、面影を、照すよしなき水鏡、深き懐を汲てこそ、父とも母とも大父とも、見奉るおん身のみ。益なき悲泣に心を屈して、病な煩ひ給ひそ。といへば妙眞頭を擡げて、然也々々。爾ぞかし。噫鈍ましや。言に紛れて、また茶をだにもまもらせざりき。那炊妾は、那里に在る。親兵衛、阿饌は欲しからずや。先盃をまもらせん。といひつゝ立を推禁めて、否聞し給へかし。いまだ何も欲しからず。偶參り候へば、緩やかにうち譚ふて、慰めまうす該なれども、いかにせん、猛可に君命を奉りて、今より他郷へ赴き侍れば、立かへり來ぬる日に、又見參に入るべけれ。といふに妙眞呆貌して、开は亦本意なき事なりき。濱路姫上は、おん病著の、瘥らせ給ひし歟。他郷へ御用は怎麼なる事ぞ。と問れて親兵衛、然候。那物怪は鎖りて、姫上瘥り給ひたり。因て某と同因果の聞えある、小父大田主はさら也、犬塚犬山、犬川大飼、犬村と俱に六犬士、或は武藏の穂北に在り、或は甲斐の石禾にあり。猶犬阪毛野胤智と喚做たる、一犬士の所在知れずといへども、尋て遺なく將て來よ、と仰付られ候ひき。といへば妙眞領きて、开も亦餘義なき事なりき。武藏へいなば、便路ならん。彌の舊里、下總なる、市河へ立寄て、依介許訪ひ給へ。水澤は咱們的の姓なれば、彌の與にも親族也。件の夫婦が正首に、折々簡讀もて、安否を問し、東西など贈來したりき。よくこゝろ得て給ひねかし。

といふに親兵衛異言もなく、开はこゝろ得て憐る也。代懸上の御堂の、宣稱給ひしかば、御分が事はしも、御分候侍りにき。然らても兩尊の墓參を、必ずべく思ひ侍れば、那里へ立も密ん事、勿論に候かし。叔花咲の翁媼(與四郎と音音也)と、媳御孫達は恙もなきや。宿所は近く候歟。と問へば妙眞領きて、然也。那人々を置るゝ處は、壁一隔隣にて、内に通路も侍るから、一家兒に異ならねども、今日は富山なる、伏姫上のおん墓へ詣つべく、峯上の親音へも參らんとて、老夫婦が兩個の媳婦と、兩個の孫を伴ふて、早旦に出て行給ひき。音音の刀自も、曳手單節の、胞姉妹も懇切に、間なく時なく交加て、六稔彌と共に、富山に曉しくらせし事を、説も示して慰められしに、折の歹くて一人だも、宿所に在らず。かへり來て、よしを听なば最酷う、遺憾ぞ思はれん。といふに親兵衛眉を蹙めて、开は最殊勝の事なりき。那人々が還りなば、親兵衛は君命を稟て、他郷へ赴き候ひき、と傳へさせ給へかし。といふ間に炊妾が、茶を沸らしつゝ汲もて來て、先親兵衛に薦めたる、茶頓は鹹き鹽打の、豆炙は、今も世話にいふ、實房州の災倒れ、地方がらとて東西もなき、質素に過ぎたる款待は、婦人東道の無造作に、意の介なかりけり。姑且して親兵衛は、靱肛の財囊より、金一裏拿出して、これを妙眞に薦めていふやう、今番は猛可の見參にて、まゐらすべき東西候はず。こは我君より賜りたる、一百金の半分也。卒福分を仕らん。欲かる東西もあるべきに、是もて求め給へかし。といふを妙眞聞あへず、开は亦要なき事ぞかし。當御館より這年來、扶持賜りて、奴婢までも、隸置し給ふから自由ならざることもなし。況往日稻村様の、這里へ凱陣なされし折、咱儕を近く召出され、彌の武功を譽させ給ひて、多く白銀巻絹を、賜りたれどそが儘に、使はて今に有るぞかし。然るをその金何にせん。と推辭を親兵衛なほ薦めて、开は然る事も侍らんが、盤纏多きは、盜賊の、殃危を惹く媒姪なれば、姑且く預け奉らん。彼め置給へかし。といふに妙眞固辭難て、澁々金を受取りけり。登時親兵衛意うち仰ぎて、日のいと永き時候ながら、憶はず時を移しけん、晷は酷く敲きぬ。左ても右ても盡せぬ名残、身の暇を賜るべし。といふに妙眞含泪て、等に等つゝ貌見ても、切て一



宿留めもせず、世に武夫の沿習とて、苦しきものは仕
 の途。是を思へば又原の、船長の母と喚れんこそ。倒に
 樂しかるべけれ。喃親兵衛、今宵出船に乗るにやあら
 ん。幾比かへり來ますべき。と問れて親兵衛、阿とば
 かりに、答難たる身の往方、那濡衣を乾すよしなくば、
 安房の浦邊に立かへり、寄る白浪はありとて、我還
 る日はなきものを、と思ふものから然氣を見せず、沈
 吟じたる頭を擡げて、然也。今より去向を料るに、武
 藏と甲斐は隣國なれば、往還輒く候はん。但大阪の在
 る處、速に知れずは日を過さん歟、遅速は定めがたけ
 れども、然ばとて歳月を、累る事は候はじ。寛に等せ
 給へかし。といひつゝ刀を掻拿て、衝建てはやく身を
 起せば、妙眞は、ゆく人を、涙と俱にとどめかねて、
 端近う送りつゝ、伴當なきを訝れば、親兵衛急に見か
 へりて、否、乘馬も候へば、伴當は、正門なる、塙城
 に等し置にき、といふに妙眞領きて、いふまでにあら
 ねども、偏は萬事に心術の、神々しくはあるものから、
 初旅なれば心もとなし。餘の犬士達に環會ふまでは、

旦夕の食物、足敷の山嶽、海川の、津に小心し給へ。と心を勵れば親兵衛は、一語に及ばず請ひて、并はこゝろ得て
 候也。みづから愛して恙なく、かへり來る日を等給へ。復見參に入るべけれ。といふも答も、隱口の、果し名残は、
 血筋の誠、親の又親、子の又子には、愛も情も厚氷、解て流れゆく水と、人の往方の定めなき、盈虚に迷ふ濁を无み、
 夜の鶴より哀れ也。

第一百一回

妖尼庭に衆兇を聚ふ
素藤夜舊城を襲ふ

却說犬江親兵衛は、祖母妙眞に辭し別れて、城の正門まで來ぬる程に、路に後れたる三個の伴當が、折よく這里にて
 趕著けり。是により親兵衛は、正門の守屋に立寄て、那兩個の番卒に、歡びを演などして、預けし馬を鑣奴に、牽出
 さしつ、乗はせて、そが儘に浦曲のかたに、ゆくこと纔に一町許、伴當們を見かへりて、若們はいまだ知ざるべし。
 我は今朝悄々なる、君命を稟たれば、單他郷へ赴く也。恁れば去向に伴當ありては、倒に宜しからず。因て若們三名
 は、又稻村の御館へまゐりて、左右兒們に件の義を、報て館山へ還るべし。却這馬は、稻村なる、厩役人へもよしを
 告て、初のごとく預け置ね。こはいぬる比老侯より、拜領の名馬なれば也。若們路にて日の暮るゝとも、必歇店に就
 べからず。夜は深たりとも那里へまゐりて、人尙間はゞ、親兵衛は、妙眞許はやく立去りて、その投方へ罷りにき、
 と有つる儘に答へよ。と言語せわしく吩咐れば、大家これをうち聞て、仰こゝろ得候也。遮莫密事のおん使也とも、
 身單にては不便にをはさめ。切て一人は俱し給はずや。といふを親兵衛聞あへず、并は益もなき口誼也。俱すべくは
 誰にかも、憚て俱さざるべき。快々ゆきね。といそがせば、大家やうやくこゝろ得果て、立別れ馬を牽て、稻村を設
 てかへり去を、親兵衛一霎時目送りて、今はしも心安し、と思へば便宜の港口なる、崩公の宿所へ赴きて、今宵下總

の市河へ、出船あるや。と尋るに、船公答て、出船はなし。なれども幸ひに追風よければ、賃銀多く賜りね。目今船を出すべし。といふに親兵衛再議に及ばず、いはる、隨に銀を取らして、件の船に乗まくす。登時篙工兩三名、飯糶新、飲水の桶ななどを携て、卒とて馬頭上へゆく程に、親兵衛は開が後に跟て、俱に水際に赴きて、他們が船を繋るを、等つゝ獨鶴立處れば、長かりし日の沈果て、黄昏時候になりけり。怒りし程に親兵衛は、吐裏に思ふやう、現に人の榮辱得失は、宛一炊の夢に似て、秋の天の瞬間に、晴曇るより猶果敢なし。抑我身昨日までは、數百の士卒に將として、鎗山の城主なりしに、今日は僕身に從はて、萬里の孤客となりけり。それを憂るにあらねども、那靈玉は、我未生より、自然と得たる寶貝にて、年來這身の護にあなるを、主君の與とはいひながら、薄情や土中に埋れて、又見ることのかたかるは、我命運も、玉と俱に、長く光を喪ん、祥なりけん歎、といへばえに、いはぬ心の慨しさを、遣る方もなく思ふ折から、忽然として後方より、光明颯と見めて、投石の似き物にやあらん、項に敵と中るとそが儘、はやく衣領より滾墜て、九の爺の邊に住りしを、親兵衛、吐壁と駭きて、遽しく手を衣の、内に入れつゝ、掻撈るに、果して木樂子の大きなる物、只一顆背にあり。訝りながら拿出して、見ればこは別物ならず、擲に君侯に貸まるらせ、濱路姫の臥房の下なる、土中へ深く埋置れし、仁の字の玉なりければ、こは乍麼いかに、とばかりに、一たびは訝りあやしみ、又一たびは歡びて、つらくと思ふやう、擲には我這玉を、毫ばかりも惜むことなく、君侯の所望に從ひまつりて、那里に留め措きたりしに、靈玉我を慕へる歎、二重の瓶、三尺の、土中を出て路遙なる、我懐に入りたるは、嗚呼神なる歎、靈なる哉。姫上病著瘥り給ひて、怪物も亦鎮りたれば、這玉那里に要なしとて、伏姫神の神謀りに、計りて返させ給ひし歎、それかあらぬ歎、奇也妙なり。この事稻村殿にては、知し召さてはさんに、縦こは我玉也とて、恚る奇特を告まうさて、この儘藏置くならば、影護き所あり。後に又おん疑ひを、受奉る事あるべき歎。然ばとて今さらに、又稻村へ歸るるに、稟上んは面伏也。左まれ右まれ、吉凶禍福を、神の隨意に任するに、

しくことあらじ、と尋思をしつゝ、懐にせし護身鏡の、細解ひらきて件の玉を、攸めて項に掛る程に、篙師飯が高やか、に、客人、船は整ふたり。追風はいよ／＼宜しきに、快乗り給へ。と喚聲かどふ、浦波暗む玉莖時、親兵衛は、應々。と答も果ず、歩を早めて、歩板架を渡りつゝ、件の船に乗移る。その間に篙工毎は、帆装しつ歩架を退て、はや漕出、す大洋に、浮宿の鷗兒靜なる、淺瀬は上敷、下つ總、市河を投て走らしけり。案下再説、この日稻村の城内には、義成の主千慮を盡して、既に犬江親兵衛を、他郷へ遣し給ひしかば、隨即奥録の老黨某甲を召よせて、濱路が病著瘥りて、物怪も亦鎮りたれば、今日より犬江親兵衛に、夜勤の役を免したり。且恚々の所要あれば、又親兵衛に吩咐て、他を他郷へ遣しにき。水路を行は今宵必、纜を解くならん。這義四個の家老はさら也。有司給事の老女們に、傳てこゝろ得させよ。と仰渡させ給ひしかば、件の老黨承りて、退りて君命の趣を、遣もなく徇傳へしかば、堀内貞行、東辰相、杉倉荒川、四個の老黨、有司近習の輩まで、事情を知るよしなければ、訝り思はざるはなく、那犬江親兵衛は、大功の賞として、往日他を鎗山の、城主になされたりけるに、若七犬士の所在を索ねて、伴ひ來たさん爲のみならば、始よりして件の一義を承りたる十一郎、照文などこそ相應しからぬ。重く用ひたる親兵衛に、又輕々しく然るおん使を、仰付させ給ひしは、抑是甚麼なる故ぞ。と咄くものも多かりけり。恚而この次の日に、濱路姫の徹床の壽祝あり。是により、上總の殿臺なる、兩八幡諏訪、三社の神主は、忠告紛れなければとて、上總へ還ることを許され、又いぬる比、瀧田の城より、牽渡されたる五個の罪人、安西出來介、滿呂復五郎、天津九三四郎、荒磯南彌六、椿村隆八門は、亦復獄舎に籠置て、虚實を糾し問れしに、都て他們が陳する趣、始終毫も違ふことなく、且普善蘇々利の村人們が、稟せし義と啗合して、歸降の情願實事なるよし、その聞えありしかば、恚る愛たき折なればや、義成主有司に下知して、件の罪人們を赦免あり。この義は瀧田の老侯の、仁慈なるよしをいひ渡さる。又上甘理墨之介は、天津九三四郎が故主といへども、素より是廢人にて、曩に素藤に吩咐られたる、密義には干からず。且他は神餘光弘の、

落胤なる事も、亦普善村の民母の、口碑に紛れなく、當郡舊家の後裔なれば、義成特に憐み給ひて、長狹郡神餘村は、他が唐字の地なるをもて、那邊にて、二百貫文の采邑を賜り、天津九三四郎後見して、生涯を送らせよとて、諸役免除、本領安堵の、御教書を成し下されければ、九三四郎は天に歡び、地に喜び、國主の恩を拜しまつりつ、墨之介に、俱して神餘村に赴きしが、幾程もなく墨之介の、宿所を造り、奴婢を使はせ、その身は生涯後見して、徐に光陰を送りけり。是、併、瀧田の老侯。并に當主の仁恕に出て、九三四郎が這年來の、孤忠の善報なるべしとて、近きはさら也、遠かるものも、聞傳へ語り續て、後まで美談にしたりけり。墨之介、九三四郎が事、この下に話なし。又この恩赦の日に、出來介復五郎、南彌六、八にも、有司赦免の義を示して、若們が事はしも、縦大赦の折也とも、數まへがたき大罪なれども、老侯の格外なる、御仁心をはしまして、守に宣はせしよしもあれば、都て命を助らる。上總へかへり去まき思はゞ、速に退り立ね。又這地に在まき願ひ稟さば、月俸を賜りて、城内に留置れ、異日もし功あらば、提立給ふべし。とありければ、四個の罪人皆歡びて、恩を稱へ額を衝て、御説承り候ひぬ。當國は、我們が舊里で候へば、上總へいなんことを欲せず。況以後の露命を繋ぐ、月俸をさへ賜るをや。願ふは、大馬の力を盡して、再生意外の洪恩を、報ひ奉らんとぞ稟しける。そが中に墜入のみ、上總に老母の候へば、椿村へかへりゆきて、親を慰め候はんとして、身の暇を乞まつりしを、有司恠々と聞えあげしかば、義成主憐愍給ひて、墜入が情願は、九三四郎にこそ及ばざらめ、是亦孝子の心也。宜しく路費を取らせよ。と仰示させ給ふにぞ、有司は又這仁政を、歡び承て退出つ、儀のごとくに行ひければ、出來介、復五郎、南彌六は、當城に住ることを許され、墜入は路費を賜りて、椿村へ返し給ひぬ。然ば行く者も住る者も、轍の魚の江に還り、枯たる苗の雨にあふ、幸なるかな。と歡び唱て、長く良善の人となりけり。爾程に墜入は、南彌六、出來介、復五郎に、別れて家路に赴きしが、罪障眼前の活地獄に、懲りて俠客の交を要せず。上總の宿所に還りては、昨作の暇ある毎に、よくその母に仕るのみ、後々に至りては、

も聞えずなりしとぞ。恠て又義成主は、件の五人を赦免の朝、瀧田へ使者を遣して、九三四郎門、五衛の罪人を、赦免し給ひし事の趣、并に犬江親兵衛に夜勤を免して、七武士を、招き來たすべき與に、昨日他には遊歴の、暇を給はりたりし事、濱路姫散林の、歡びをさへ恠々と、老侯に報給ひしかば、義成主うち听給ひて、或は歡び或は訝り、什麼犬江親兵衛を、獨然る使には、只今猛に出し遣りけん。こゝろ得がたき事なりき。とうち咄き給ひつ、先照文を召よせて、よしを示して問給ふに、照文も亦驚くのみ、竟にその意を得ざりしかば、他を稻村へ遣して、義成主に事の情を、尋ねさせんはさずがにて、そが儘黙止給ひけり。話分兩頭、爾程に藝田素藤は、單人不入の山の庵を、守りて妙椿の還るを等しに、件の女僧が出てゆきしより、約莫十有三四日を歴て、三月も既に盡る時候、その朝妙椿は、忽然とかへり來て、獨縁頬に在りしかば、素藤驚き、且歡びて、迎入れつ、計りし事の、成就したる歟、否、と問へば妙椿含笑、惱り給ふな。問れずとも、詳に告て歡ばせん、と思ふてかへり來ぬる也。といふに素藤も亦うち笑て、そは憑しき事也かし。鳥の聲水の音、耳に聞くのみ、友もなき、這人不入の山守に、做りて等たる甲斐ありけるよ。といへば妙椿領きて、然ばとよ聞給へ。豫おん身に示せしごとく、咱齊稻村へ赴きて、法術をもて城内に、妖孽をいでかして、竟には犬江親兵衛を、遠く他郷へ逐遣らしたり。その手段は箇様々々と。那假夏曳の冤鬼に、濱路姫の魔れて、遂に病著になりし事、又役行者と見せたる、假異人の示現の事、是により館山より、犬江親兵衛を召來たして、濱路姫の宿直として、七日夜勤をさせし事、その折那靈玉を、病の牀の簀子の下なる、土中へ埋めさせし事まで、説示して又いふやう、姫の病著瘥りの時候、一夕義成に疑心を起さして、更關て、那身一個、濱路姫の臥房に行く折、次の間に宿直をしたる、親兵衛をば咱術をもて、その夜半より打盹らして、義成には他を見せず、是等の所行も那靈玉を、他が懐にあらせずして、土中へ埋めさせたる故に、思ひの隨に行ひ易かり。倘玉を初のごとく、親兵衛が身に附てあらば、いかにしてよくせんや。手段の妙なるを思ひ給へ。然而義成には、姫の臥房にて、男女の悄語

く聲を聞き、且濱路姫が、親兵衛に、贈りし假遣艶簡を拾はせしかば、義成怒りに堪はずして、件の男女を推並べて、手撃にせんと性起りたり。この折をもて親兵衛を、結果なば愉快れど、濱路姫さへ殺さしては、おん身の與に妙ならじ、と思ふものから禁難しに、義成は性として、短慮の猛將ならざれば、立地に思ひ復して、敢その氣を顯さず、拾ひし艶簡を懐に、夾めて臥房に還りしが、件の男女の中を裂て、いかで人には知らせじとて、艶簡をば讀まで、棄たり。その艶簡は、いぬる比、堀内藏人貞行と杉倉武者助を欺きて、大樟村より稻村へ、旨くも還し遣したる、御教書と同じ手段にて、次の日再開すれば、素紙になるものにしあるを、燻棄られしは、こも亦妙也。又那回義成が、夜深て單濱路姫の、病牀へ赴く折、表第と奥の關の戸の、鎖は必固かるを、輒くも開かせしは、咱法術で侍れども、義成は訝りながら、後にその義を糾しも咎めず。是も亦親兵衛が、所爲なるべし、と思ひしならん。這一條は、遠からぬ、大隔昨の夜の事ぞかし。その詰朝義成は、親兵衛を召近著て、いまだ招きに應ぜざる、七犬士の所在を索ねて、俱して來よとて、遊歴の、暇を拿せたりけるが、瀧田の祖母の宿所にだにも、逗留を免されず、急ぎて逐立られしかば、親兵衛は水路より、其宵他郷に赴きにき。那奴が在らずなりたれば、館山の城を略すには、又是甚麼なる妙計あるや。とならず。非除又年を歴て、親兵衛がかへり來ぬるとも、那玉をだに還されずは、水母の小鯢に離れし似く、要なき人にならんのみ。奇々妙々に侍らずや。と鼻竇めかして説話れば、素藤怡悦に勝ずして、耳を故け膝を找めて、听惚ること半晌許、憶ずも止息を吻て、適愛たき、尼姑の神術。抑館山の城を略復すには、又是甚麼なる妙計あるや。と問ふを妙椿聞あへず。开も亦手段ならずや。嚮に寄隊の陣へ牽れて、追放せられし躬方の士卒、願八益作、本膳碗九、及雜兵們、いへばさら也。當日副門より落亡たる、士卒も都て法術をもて、いぬる日より這四下なる、太山に潛せ置たれば、期に莅て、この處へ喚聚合んこといと易かり。且前祝に酒うち喫て、姑且俱に樂むべし。酒菜は咱儕が準備して、五六種應湯に在り。快拿出し給ひね。といふに素藤訝りながら、這しく身を起して、應湯の飯を覗て見れば、果して饈あり平魚あり、或は、葡萄酒卵まで、皆悉調理して、五六箇の青磁の碟子に、裝做してありければ、呆るゝまでに喜び感じて、手ばやく酒を盥めつゝ、坐席へ饋を出し來つ、所歎まで安排べて、妙椿と共侶に、饌々盃を遶らす程に、又稻村にてありし事を、听もしつ問れもして、酔て俱寐の假枕、結ぶは夢の變語、樂み涯りなかりけり。左右する程に日は斜きて、下晡になりしかば、素藤は又妙椿に、館山の城をとり復す、策術を問つ、催促す。登時妙椿は、枕掻遣り身を起し、一霎時外面を瞻仰て、現今は好時候ならん。豫那這に潛せ置きたる、躬方の士卒を喚集ん。いでく。といひつゝも、縁頬に立出て、寛の水もて手を淨め、口を漱ぎて外面に、立向ひ眼を閉て、口に呪文を唱果て、臆て坐席に入りしかば、素藤はそのころを得ず、よしを問んはさすがにて、いかに／＼と思ふのみ、俱に外面を長視てをり。姑且して迥前向なる、樹の間巖の蔭よりして、近づき來ぬる居多の人响、蹇然として聞えしを、と見れば、素藤が故隊兵、礪時願八、平田張益作、奥利本膳、淺木碗九郎門を先に立して、一隊約莫三四百名、奔の庭に聚合たる、身皮都て寶果て、一刀だにも帶ざりけり。素藤は這衆人を、うち見て臆て縁頬に、走り出聲を掛て、先願八門に對面して、別後の苦樂を尋るに、願八益作、本膳碗九、甲乙四個の老兎は、言語齊一告るやう、往日に我門は、分ちて船に乗せられて、武藏或は相摸の浦へ、追放されたりし折、八百尼公の法術にて、雜兵奴隸に至るまで、這頭に近かる奥山へ、皆悉領て返されき。その事は幻にて、水路を渡り來にける歟、或は雲に乗せられて、飛行して來にける歟、我上ながら夢の如くて、楚とは覺候はず。然るにより料らずも、兪這四下へ返されしかども、太山なれば、食物なし。剪徑して行客の、盤纏を略まく欲するに、身に寸鐵を帶ざれば、思ふのみにてせん方あらず。只草深き地方には、山蛤の多かれば、日毎に各捉咬ひて、才に饑を凌ぎて在り。爾程に相公も亦、八百尼公の法術もて、はやく這頭へ將て返されて、這草庵に御座すよし、尼公の示教によりて聞知るものから、いまだ對面を許されねば、間近き山に在りながら、一たびも訪奉らず、各俱に艱苦を忍びて、尼公の幫助を等たるに、今朝しも尼公は、稻村の、

く聲を聞き、且濱路姫が、親兵衛に、贈りし假遣艶簡を拾はせしかば、義成怒りに堪はずして、件の男女を推並べて、手撃にせんと性起りたり。この折をもて親兵衛を、結果なば愉快れど、濱路姫さへ殺さしては、おん身の與に妙ならじ、と思ふものから禁難しに、義成は性として、短慮の猛將ならざれば、立地に思ひ復して、敢その氣を顯さず、拾ひし艶簡を懐に、夾めて臥房に還りしが、件の男女の中を裂て、いかで人には知らせじとて、艶簡をば讀まで、棄たり。その艶簡は、いぬる比、堀内藏人貞行と杉倉武者助を欺きて、大樟村より稻村へ、旨くも還し遣したる、御教書と同じ手段にて、次の日再開すれば、素紙になるものにしあるを、燻棄られしは、こも亦妙也。又那回義成が、夜深て單濱路姫の、病牀へ赴く折、表第と奥の關の戸の、鎖は必固かるを、輒くも開かせしは、咱法術で侍れども、義成は訝りながら、後にその義を糾しも咎めず。是も亦親兵衛が、所爲なるべし、と思ひしならん。這一條は、遠からぬ、大隔昨の夜の事ぞかし。その詰朝義成は、親兵衛を召近著て、いまだ招きに應ぜざる、七犬士の所在を索ねて、俱して來よとて、遊歴の、暇を拿せたりけるが、瀧田の祖母の宿所にだにも、逗留を免されず、急ぎて逐立られしかば、親兵衛は水路より、其宵他郷に赴きにき。那奴が在らずなりたれば、館山の城を略すには、又是甚麼なる妙計あるや。とならず。非除又年を歴て、親兵衛がかへり來ぬるとも、那玉をだに還されずは、水母の小鯢に離れし似く、要なき人にならんのみ。奇々妙々に侍らずや。と鼻竇めかして説話れば、素藤怡悦に勝ずして、耳を故け膝を找めて、听惚ること半晌許、憶ずも止息を吻て、適愛たき、尼姑の神術。抑館山の城を略復すには、又是甚麼なる妙計あるや。と問ふを妙椿聞あへず。开も亦手段ならずや。嚮に寄隊の陣へ牽れて、追放せられし躬方の士卒、願八益作、本膳碗九、及雜兵們、いへばさら也。當日副門より落亡たる、士卒も都て法術をもて、いぬる日より這四下なる、太山に潛せ置たれば、期に莅て、この處へ喚聚合んこといと易かり。且前祝に酒うち喫て、姑且俱に樂むべし。酒菜は咱儕が準備して、五六種應湯に在り。快拿出し給ひね。といふに素藤訝りながら、這しく身を起して、應湯の飯を覗て見れば、果して饈あり平魚あり、或は、葡萄酒卵まで、皆悉調理して、五六箇の青磁の碟子に、裝做してありければ、呆るゝまでに喜び感じて、手ばやく酒を盥めつゝ、坐席へ饋を出し來つ、所歎まで安排べて、妙椿と共侶に、饌々盃を遶らす程に、又稻村にてありし事を、听もしつ問れもして、酔て俱寐の假枕、結ぶは夢の變語、樂み涯りなかりけり。左右する程に日は斜きて、下晡になりしかば、素藤は又妙椿に、館山の城をとり復す、策術を問つ、催促す。登時妙椿は、枕掻遣り身を起し、一霎時外面を瞻仰て、現今は好時候ならん。豫那這に潛せ置きたる、躬方の士卒を喚集ん。いでく。といひつゝも、縁頬に立出て、寛の水もて手を淨め、口を漱ぎて外面に、立向ひ眼を閉て、口に呪文を唱果て、臆て坐席に入りしかば、素藤はそのころを得ず、よしを問んはさすがにて、いかに／＼と思ふのみ、俱に外面を長視てをり。姑且して迥前向なる、樹の間巖の蔭よりして、近づき來ぬる居多の人响、蹇然として聞えしを、と見れば、素藤が故隊兵、礪時願八、平田張益作、奥利本膳、淺木碗九郎門を先に立して、一隊約莫三四百名、奔の庭に聚合たる、身皮都て寶果て、一刀だにも帶ざりけり。素藤は這衆人を、うち見て臆て縁頬に、走り出聲を掛て、先願八門に對面して、別後の苦樂を尋るに、願八益作、本膳碗九、甲乙四個の老兎は、言語齊一告るやう、往日に我門は、分ちて船に乗せられて、武藏或は相摸の浦へ、追放されたりし折、八百尼公の法術にて、雜兵奴隸に至るまで、這頭に近かる奥山へ、皆悉領て返されき。その事は幻にて、水路を渡り來にける歟、或は雲に乗せられて、飛行して來にける歟、我上ながら夢の如くて、楚とは覺候はず。然るにより料らずも、兪這四下へ返されしかども、太山なれば、食物なし。剪徑して行客の、盤纏を略まく欲するに、身に寸鐵を帶ざれば、思ふのみにてせん方あらず。只草深き地方には、山蛤の多かれば、日毎に各捉咬ひて、才に饑を凌ぎて在り。爾程に相公も亦、八百尼公の法術もて、はやく這頭へ將て返されて、這草庵に御座すよし、尼公の示教によりて聞知るものから、いまだ對面を許されねば、間近き山に在りながら、一たびも訪奉らず、各俱に艱苦を忍びて、尼公の幫助を等たるに、今朝しも尼公は、稻村の、

城より出てかへるさ也とて、在下門が懸在る、山蔭に立寄り給ひて、妙術をもて大江親兵衛を、逐遣らはし給ひたる、事の顛末を解示され、恧れば今宵館山の、城をとり復さんと思ふ也。下哺にならん時候、汝達は威相俱に、咱奔の庭へ來よかし、と其期を知らせ給ひしかば、在下門天に歡び、地に喜びて、時を移さず、這里那里に潛居る、夥家の兵毎に狗傳へて、日の歪くを等たりしに、只今尼公の喚せ給ふ、と思ひし隨に忽然と、都て這山へ來にければ、尋も惱ず、見參に、入り奉る一期の幸ひ、何かは是に優すべきやとて、甲唱れば、乙續きて、心も似たる四個の兇黨、互り聯辯の拍子よく、一五一十の話を、素藤听つゝ、歡び感じて、今さら思へば、乙も甲も、始よりして尼姑の幫助に、漏たるはあらざりき。恧れば今宵會稽の、羞を雪んと欲するに、我はさら也。兵毎に、大刀もなく鎧もあらず。恧麼何をもて一城の、大敵を伐べきや。といふ間に妙椿は、奥より徐に出て來つ、素藤にうち對ひて、その武器も咱術あり。曩に館山の城内にて、大江親兵衛に刺捕られたる、躬方の鍔鎧刀鎧は、今もなほ那城の、兵庫に藏めてあり。今宵先法術をもて、开を咸とり復して、隨即夜撃に用ふべし。然ば咱儕がこの年來、特に祕藏の寶具あり、獲襲の玉と名づけたり。這玉をもて風を祈れば、猛風俄頃に吹暴れて、屋を覆し樹を倒す、效驗一たびも差ふことなし。因てこの寶具をもて、風を起して、館山なる、兵庫を吹壞らして、那武器をとり復さん。はや黄昏になりたるに、先や效驗を見給へ。と説示しつゝ、懷より、錦の曩に收めたる、獲襲の玉を拿り出して、それが儘異方にうち朝ひ、額に推當うち念じて、一霎時呪文を唱れば、疾風颯と吹起りて、砂を飛ばし樹を鳴らす。奇特に駭く賊兵們は、吹倒されじ、と岳稜に、各携り俯果りて、頭を擽げ得ざりけり。恧りし程に日は暮て、這夜中の左側に、怪むべし風のまに、莽の庭へ瓦刺々々と、音して天より墜る東西あり。その數幾百なるを知らず。大家さては、と意中に曉得りて、避て撲るゝ者もなく、驟果し折これを見るに、曩に親兵衛に刺れたる、躬方の武器なりければ、衆兇都て、妙椿の、奇術を感ぜぬ者もなく、先素藤の武器を、尋奪て、縁頼に、登し置き、爾後各々認得あるは、手に、いそしく擽奪て、鎧を

擽つゝ、大刀を佩き、鎧肩尖刀を擽て、逆愛たき武者態やとて、齊一笑局に入りけり。然ば當晩の戰飯は、各豫山嶺を、多く捉り、灸りなどして、腰にしたるを拿出しつゝ、或は樹の根に尻を掛け、或は草を折布き坐して、飽までにうち咬ひけり。他們は蠶田の隊兵なるに、主の家號に相似たる、蛙を食としたる事、實に是獅子身中の、虫に等しき者とやいはん。名詮自性思ふべし。間話休題、爾程に素藤は、黒草縵の甲一縮して、臂縛蹠纏に身を固め、黄金裝の大刀の、二尺八寸なるを、鴈尻に佩做て、刻室なる七首を挿添え、右手に戰麾を携て、奥より徐々と出て來つ、縁頼に建させたる、発兒に尻をうち掛て、先著到を問などす。登時妙椿は、素き夾衣小袖の、尙巳の時許なるに、黒き天鷲絨の帯を前にて結び、黒純子の袷袢を掛て、故意法衣を著けず、水白紋紗の阿高祖頭巾を、最も目深にうち被り、手に一口の戒刀を引提つゝ、縁頼に立出て、願八盆作們に對ひていふやう、咱儕這箇の水に、今朝より屢加持したれば、兵毎に快い傳へて、人別に這水をもて、兩眼を洗せなば、恧野干玉の烏夜也とも、物を見ること明亮ならん。今日は四月朔なれば、月を得がたくて不便也。然るを躬方の士卒們が、烏夜にも眼明ならば、猫兒の鼠を捕るにも勝りて、敵を撃つに自由なるべし。咱儕も蠶田大人と俱に、館山へ赴きて、悄々地に術を行はん。既にその準備して、輜子は背門に在り。雜兵們に吩咐て、咱儕を乗せてゆきねかし。といふに願八盆作は、一議に及ばず、こゝろ得果て、時を移さず隊の兵毎に、件の義を傳へしかば、皆歡びて先を争ひ、はやくも寛の水をもて、各眼を洗ひけり。この折風は既に止て、夜は子二刻の時候になりぬ。素藤星を瞻仰て、時分は今ぞ、兵毎立ね。快々找め。と下知しつゝ、發兒を放ちて下立たり。その間に雜兵們が、背門なる輜子を吊もて來て、卒とて縁頼に昇寄すれば、妙椿懸てうち乗るを、擽起しつ、素藤の、後に跟きてぞ俱したりける。恧而蠶田素藤は、その隊の賊兵三四百名、先鋒後陣と隊伍を整へ、願八盆作、本膳碗九、并に本膳が獨子にて、奧利狼之介出高と、喚做たる、今茲十八の後生們を、前後左右に従へて、山路を連りに急ぎゆくに、いと闊けれども、那水にて、眼を洗ふたる效驗なりけん、衆兵一個も後るゝもの

なく、思ひしよりもはやく来て、館山の城の後門に、推寄する折、撃々と、譙樓の太鼓の音聞えて、丑の初刻にならにけり。話 表、館山の城内には、この日稻村殿（義成をいふ）の御教書到来して、大江親兵衛仁には、夜勤の役を免し給ひて、七犬士を迎へ、隔昨猛可に起行して、その投方へ遣されたり。是により逸時良于景能門、俱に館山に勤番して、彌滋由断なく、よくその城を守るべし。と仰渡されたりければ、件の三士は訝りながら、親兵衛が這里に在らずとて、守るにかたき事かは、と俱に思へば懸念せず、懸て承書をまららせて、下知を士卒に傳へつゝ、その意を警めけり。恚りし程に、この夕、暴風吹起りて、或は城下の廬舎を倒し、或は城内の樹木を覆す、風の勢ひ凄く、現平ならぬ宵也ければ、城下並に普善蘇々利の村人は、各戸を閉、風を害怕れて、外に出るものなかりけり。況館山の城内には、田税逸時、登桐良于、苦屋景能門、いよく士卒を警めて、毫も睡らざりけるに、風はますます烈しくて、這夜東の郭なる、兵庫兩座許、壞れたるよし聞えしかども、黑白もしらぬ鳥夜なれば、今さらに何とかすべき、天の明るを等てこそ、と敢驚き謀く者あらず。要なき武具なれば也。恚而子時過る時候、猛風のやうやく止にければ、士卒們俱に心おちみて、各睡りに就にけり。爾程に、藤田素藤は、三四百の賊徒を領て、既に城の後門へ寄せ來にければ、妙椿は轎子より、やをら立出て、素藤に弄くやう、這城内には、昔より一箇の脱路ありといへども、今は人これを知らず。其里より入らば、便宜なれども、年來千曳の石をもて、出口入口を塞ぎたれば、目今せんすべあらず。恚れば暫へ架梁を、渡してはやく入らんのみ。いでく。といひつゝも、懐より一條の、麻索を拿出して、城に向ひて擲ちければ、その索長く閃き直りて、八九丈前面なる、塀の上に掛るとそが儘、忽然として巧成す、雲の梯にぞなりにける。工妙魯般も及ざるべき、手段に駭ざるものなく、一霎時長視て、左右なくは、渡るものなかりしを、素藤頗に焦燥て、既に渡の就たるに、快々找め。と下知すれば、性急雄の賊徒五七名、各鎗を挟みて、這架梁を渡ゆくに、危氣もなく見えしかば、大家俱にうち續きて、颯々渡り果る程に、妙椿は、素藤を、先に立しつゝ、

侶に、渡りて城にぞ入りにける。然ば賊徒は豫より、案内知たる事なれば、第二郭迄潛び入て常夜燈を打滅々々、鬨を咄と發りつゝ、諸役所に殺入て、短兵急に攻立れば、睡端なる城の士卒は、俱に駭き起出るに、鎧振る間あらざれば、各素肌に短鎗を引提、或は弓箭を携て、稠入る敵に立逆ひつゝ、齊一防ぎ戦ふものから、如法闇夜の進退便なく、敵の多少も量り難しに、賊徒は目子明亮にて、鳥夜にも迷ふ者はなきに、又妙椿が幻術にて、其勢數千に見えたりし、敵城内に充滿て、錐を立べき地もあらねば、城の士卒は妨禦に由なく、驚き惶度を喪ひて、撃るものぞ多かりける。當下願入盆作は、眞先に找む聲高やかに、當城の奴門、いまだ知らずや。我主藤田頭の相公、會稽の恥を雪んとて、當晩數千の逞兵を領て、當城を拿復し給へり。番士の頭人田税逸時、登桐良于門は那里に在る。命惜くば面縛して、降參せよ。と喚りたる、勢ひ潮の沸く似く、古昔の義秀親衛也とも、適すべうもあらざりけり。恚りし程に城の頭人、田税戸賀九郎逸時、登桐山八郎良于、苦屋八郎景能は、夜撃入りぬ、と聞しより、はやく兵具に身を固めて、刀鎗引提走出、烈しく士卒を罵勵したる、三士齊一敵を拵えて、瞬息間に幾人歟、早鎗下に刺伏たれども、敵は視に餘る大勢なれば、素藤を擡撃に、せまく思ひし甲斐もあらで、各々淺痕を負ながら、這里を先途と戦ふ程に、登桐山八郎良于は、本膳碗九郎を左右に受て、連りに戦ふ大刀風に、當るべうもあらざりけん、件の二賊は、後より找む、躬方に譲りて引退くを、良于はなほ脱さじとて、焦燥つ隨に脚下なる、屍骸に撲地と跌きて、忽地撞と輾びしかば、賊徒は得たり、と幾人か、推累りて生拘りけり。この折逸時景能は、一所に敵を拵えてなほ一步も退かざりしに、士卒は過半撃捕られて、良于膚になりしかば、怯れたるにあらねども、逸時佐と尋思をしつゝ、找む景能を推禁めて、俱に退きて談ずるやう、やをれ、八郎、苦屋氏、目今戦歿したりとも、落城の不覺は償ひがたかり。所詮命を免れて、異日賊將素藤を、狙撃なば、倒に、忠臣勇士の名を揚やせん。和殿の意見甚麼ぞや。といふに景能點頭て、足下の主意、寔に理あり。事一旦の恥を忍ばて、狗死をしたらんは、大丈夫の本意にあらず。快落給へ、卒共俱に。と悄語きつ、鎧を

脱棄て、落る躬方の雑兵の、中に交りて後門より、出て往方も知らずなりけり。然ばこの夜の戦ひに、城内の士卒、都て五六百名、僅に命を免れしは、二百名に過ぎるべし。この它是賊徒に撃捕られたる、血は流れて盾を流し、屍は積れて累々たり。愆而夏の天明しかば、素藤は先士卒に、城の四門を守らして、首實檢をしたりしに、宗徒の城兵、田税逸時、竝に苦屋景能は、幾間にか落亡たりけん、それかと思ふ首級はあらず。單登桐山八郎良子を、願入益作が隊に生拘りて、重索掛て、雑兵に、牽して廣庭に推居たり。當下墓田素藤は、発兒に尻をうち掛たる、左右には本膳碗九郎、以下の兇黨を侍らして、意氣揚々たる面色しつゝ、良子を乞と見て、爾は登桐山八郎。謹て我いふよしを听け。原道城地は、我義兵をもて、自然と得たる所にて、義成が城にあらず。且我はこの年來、里見に忠あり功ありしに、義成敢その義を思はず、慢に我を侮りしより、事遂に干戈に及びて、嚮に籠城したる折、那大江親兵衛が、幻術に眩惑せられて、一旦俘になりしかど、我英雄を虐くせざる、天の惠神の助あり。この故に義成は、我を誅すること克はせて、士卒と俱に追放ちにき。こゝをもて我又來て、亦我城に據れるのみ。纔に三十餘日の内に、はやく數千の士卒を聚合て、會稽の恥を雪めたる、武略に胆は潰れけん。志を傾けて、今より我に従はば、功あらん折重く用ひん。恁ても命は惜からずや。といはせも果す良子は、眼を瞪らし聲ふり立て、やをれ、素藤過言也。爾は原是刑餘の山賊、曩に奸計を旋らして、小鞠谷の所領を奪取りたる、その惡近曾露れしより、人愈これを知らざるはなし。況國主の恩に叛きて、御曹司を捕り牽り、虎狼蛇蝎の威を振ひしも、我神童大江が爲に、若們兇黨數を盡して、既に俘にせられしを、大江親兵衛が意見によりて、國主の仁慈、如來に等しく、首を續し給ひしに、なほも虎狼の心をもて、事今こゝに及ぶとも、國主の大軍うち向はば、朝日に霜の解る像く、誰か一人も漏さるべき。覺期をせよ。と勇士の奮激、思ひの隨に罵れば、素藤勃然と怒に得堪ず、其奴甚無禮也。先その舌を引拔きね。快々せよ。と教圍きしを、妙椿聞て、速しく、颯風の背より走出て、素藤に諷るやう。良子が非禮過言、最憎むべきものといへども、怒に乗して殺すは要なし。雖且獄舎に繋して、志を改めなば、許して用ひ給へかし。又日は經ても歸伏せずは、その折謀戮せられんのみ。急ぐは短慮に侍らずや。といふに素藤怒を鎮めて、現他は然る者也。萬卒は得易くて、一將は極に獲がたし。兵毎かの良子を、牽立ゆきて、獄舎に繋ぎね。由斷して取りな脱しそ。と言語急迫しき下知に従ふ、賊兵門は、承りぬ。と答て聽て良子の、索拿縮て牽立れども、良子はなほ罵り已まず、聲潤るゝまで哮りしを、本膳碗九以下の兇黨、聞くに得堪ず目を注して、いとく憎しと眩きけり。恁て又素藤は、嚮に夷濶の軍民の、強顔く當りし報ひにとて、礪時願八、平田張益作に、居多の雑兵を従して、普善蘇々利の諸村へ遣し、嚮に出し遣られたる、兇黨の妻子はさらし、初城内に在りけると、在らざりしとに管らず、年少く顔美しきは、威拿入れて、賊徒に這同の賞に取せ、又後堂にも召入れて、妙椿の使用とす。又只この事のみならず、豪民に催促して、戰粟軍要金を多く贖取り、又十六歳より五十歳までなる、民二三百名を、城内に驅入れて、都て軍役に使ひしかば、其勢六七百になりたるに、武田信隆、千代丸豊俊の殘黨の、尙近郡に潛居たるもの、素藤復起りぬ、と聞知りて、兩黨都て六百餘名、野幕砂雁太、仙駝麻嘉六と喚做す者を頭人として、倉館山の城に來て、素藤が隊に屬ししかば、素藤勢ひ壯になりて、敢國主を憚らず。隨即妙椿を軍師として、天助尼公と尊稱し、軍議の外は後堂を、掌らせて夫人の似く、夜は悄々地に枕を並べて、その徒の思はんことを羞もせず。却願八益作、本膳碗九郎に、祿を多くし夥兵を授けて、重用始に彌倍し、かば、件の四個は、素藤に、薦めて、夷濶の豪民の、米錢を責拿るに、倘推辭む者あれば、立地に推寄せて、屋廬を破却し、資財を奪ふ、亂妨涯りなかりしかば、豪民們は驚き恐れ、僅に宅眷を携て、逃て他郷へ走るも多かり。然ば近郡騒動して、風聲今朝より囂しく、稻村へ注進の、人馬は櫛の齒を挽く像く、將門叛きて、東路に風噪き、純友起りて、西海の、浪暴かりしも恁ありけん歟、と思ふ可の人心、陸まぬものなかりけり。單表、上總の殿臺なる、八幡諏訪三社の神主、梶野葉門們は、隔昨上總へ、還ることを許されて、昨日殿臺なる、宿所に歸著きたりけるに、この夜館山の城に凶變

し。雖且獄舎に繋して、志を改めなば、許して用ひ給へかし。又日は經ても歸伏せずは、その折謀戮せられんのみ。急ぐは短慮に侍らずや。といふに素藤怒を鎮めて、現他は然る者也。萬卒は得易くて、一將は極に獲がたし。兵毎かの良子を、牽立ゆきて、獄舎に繋ぎね。由斷して取りな脱しそ。と言語急迫しき下知に従ふ、賊兵門は、承りぬ。と答て聽て良子の、索拿縮て牽立れども、良子はなほ罵り已まず、聲潤るゝまで哮りしを、本膳碗九以下の兇黨、聞くに得堪ず目を注して、いとく憎しと眩きけり。恁て又素藤は、嚮に夷濶の軍民の、強顔く當りし報ひにとて、礪時願八、平田張益作に、居多の雑兵を従して、普善蘇々利の諸村へ遣し、嚮に出し遣られたる、兇黨の妻子はさらし、初城内に在りけると、在らざりしとに管らず、年少く顔美しきは、威拿入れて、賊徒に這同の賞に取せ、又後堂にも召入れて、妙椿の使用とす。又只この事のみならず、豪民に催促して、戰粟軍要金を多く贖取り、又十六歳より五十歳までなる、民二三百名を、城内に驅入れて、都て軍役に使ひしかば、其勢六七百になりたるに、武田信隆、千代丸豊俊の殘黨の、尙近郡に潛居たるもの、素藤復起りぬ、と聞知りて、兩黨都て六百餘名、野幕砂雁太、仙駝麻嘉六と喚做す者を頭人として、倉館山の城に來て、素藤が隊に屬ししかば、素藤勢ひ壯になりて、敢國主を憚らず。隨即妙椿を軍師として、天助尼公と尊稱し、軍議の外は後堂を、掌らせて夫人の似く、夜は悄々地に枕を並べて、その徒の思はんことを羞もせず。却願八益作、本膳碗九郎に、祿を多くし夥兵を授けて、重用始に彌倍し、かば、件の四個は、素藤に、薦めて、夷濶の豪民の、米錢を責拿るに、倘推辭む者あれば、立地に推寄せて、屋廬を破却し、資財を奪ふ、亂妨涯りなかりしかば、豪民們は驚き恐れ、僅に宅眷を携て、逃て他郷へ走るも多かり。然ば近郡騒動して、風聲今朝より囂しく、稻村へ注進の、人馬は櫛の齒を挽く像く、將門叛きて、東路に風噪き、純友起りて、西海の、浪暴かりしも恁ありけん歟、と思ふ可の人心、陸まぬものなかりけり。單表、上總の殿臺なる、八幡諏訪三社の神主、梶野葉門們は、隔昨上總へ、還ることを許されて、昨日殿臺なる、宿所に歸著きたりけるに、この夜館山の城に凶變

あり。間近かる事なれば、素藤が再叛きて、件の城を攻略りしといふ、風聲を、その詰且、甲乙俱に聞知りて、駭くこと大かたならず。素藤又館山の、城に據りて猛威を振はゞ、嚮に我々が逸早く、國主へ注進したりしを、憎みて必害するならん。今番もはやく、稻村へ走りまゐりて、事の趣を注進すべく、且は那里に在留して、賊徒の害を免るべけれ。と示し合しつ共侶に、その且開きに宿所を出て、勉て路次をいそぎしかば、這回も又稻村へ、注進の第一番にて、その忠告を賞せられ、則他們が願ひのまに、城内に留置るゝ程に、處々より注進多く聞え、又館山なる躬方の城兵の、撃漏されたるが二百名許、漸々に、脱れ來て報るを聞くに、昨夜藤田素藤に、城を落されたる事の顛末、城の頭人、登桐山八良子は生拘られ、田税逸時、苦屋景能は、落亡たるか、戦歿せし歟、その存亡は詳ならず。賊徒は數千の大勢にて、郭内錐を立る地もなく、八面威敵なりしには似ず、いかにして繰入れたりけん、第二郭にて起り立つまで、音もせざれば、城の士卒は、夢にだもこれを知らず。是故に度を失ひて、落城に及びし事、又その甲夜より猛風起りて、兵庫を壊られたる、其頭の事まで具なる、衆口錯ざりしかば、君臣上下驚き呆れて、既に評議區々也。しかるに、義成主は昨夜より猛可に脚疾あり。醫師們脈を診ふて、これは脚氣にをはしますとて、隨即連りに湯薬を、薦めまゐらす折也ければ、評議の席へは出給はず。先上總の諸城主へ、御教書を遣すべしとて、その書に載られたる一箇條は、素藤再叛の聞えありといふとも、各々は先度の如く城を守りて動くべからず。此より征伐の使をもて、速に誅戮すべし。軍兵那里に在陣の間、倘戰米の所要あらば、その折下知に隨て、はやく本陣へ運送せられよ。と示させ給ふ。諸方へ急脚の使者を部して、この日齊一當城より、出し遣り給ひけり。恁て又義成主は、杉倉氏元、堀内貞行、東辰相、荒川清澄と、俱に四個の老黨を、便室に招き寄せて、然而宣ふやう。今番素藤が再叛の事、賊徒大勢也といへども、先度のごとく拿られたる、人質の愛ひもなし。我速に打向ふて、那城を攻落し、素藤並に兇黨を、誅せんこと願がるべきに、いかにせん、我身に昨今病者あれば、馬に乗らん事不便也。然ばとて我病者の、瘥るを等ならば、

賊徒にいよ／＼勢ひ馮て、民の塗炭に及びやせん。汝達各意見あらば、稟すべし。とぞ仰ける。這回いまだ盡さねども、稽數こゝに定限あり。是より下の話説は、又卷を更めて、第一百十二回に、解分るを聴ねかし。

第一百十二回

君命を稟て清澄再叛の賊を伐つ
機變を施して素藤牛狼の囚を易ゆ

再説、義成主は、素藤を征伐の事に就て、氏元貞行、辰相清澄の、四家老を召聚會て、事の意見を問給ふに、四家老は、先主君の、病著を問奉りて、然而評定に及びたる、當下東辰相がいふやう、恚稟さば益もなき、諄言に似て候へども、いぬる日大江親兵衛が、素藤を捉へし折、はやく誅戮し給はゞ、彼の思ひはなかるべきに、怒に親兵衛が、憫意を旨として、恩赦を稟薦めしかば、我君素より寛仁大度の、大御心をもて容させ給ひて、赦すまじき逆賊の、首を接し給ひたる、仁政反て仇となりて、事ふたゞび茲に及びり。はやく親兵衛を召かへして、討手に差向け給はずは、誰かよく他が幻術を、拉ぐ者候べき。といへば、氏元、貞行、清澄、皆共侶に諾なひて、臣們が愚意も辰相と、異なることも候はず。嚮に親兵衛が、御説を稟て、起行にき、と聞えしより、然ばかり日敷を歴たるにあらず、兩三日の程なるに、快部して追し給はゞ、他が往方を涉獵得て、領て來ることも候はん。賢慮其麼。と正首達て、齊一意衷を節しかば、義成熟うち听給ひて、現六郎がいふごとく、嚮に素藤を追放せしは、單親兵衛が意見に依りたる、我柔弱の失也、と思ふ者も多かるべし。しかれども、初素藤は従事して、當家の與に功なきにあらす。但他が分に過ぎたる、婚姻の望、稱ざりしを、執念深恨み、謀叛して、剩義通を捉籠たりしに、女兒の神靈と、親兵衛が、奇しき功により、那逆賊を、我陣營に牽せし折、那儘はやく誅戮せば、後の患はあるべからず、と思ふは通ての

こゝろなれども、倘素藤を鼠兎者あらば、憎々に必いはん。他は最初に、當家に功あり、望稟せし婚縁を、無心に許されざりしかば、恨みて野心を起したり。开を憎しとて一人も漏さず、都て梟首し給ひしは、罰重くして恩薄かり、と異論を做すことなからずやは。那折この義を思ひしかば、酒親兵衛が諫る隨意、赦すまじき素藤門を、追放せしは我仁政、叛くまじき再生の、恩は思はて又叛きしは、則他が重罪也。こゝに至て是非邪正、判然として明亮ならずや。縦是非の間に惑ふて、他を鼠兎まくする者ありとも、今更にその背を、容るゝ處なかるべし。又親兵衛が事はしも、我思ふよしあれば、自餘の犬士の所在を索ねて、遣なく俱してかへり來よとて、嚮に游歴の暇を取せしに、この義によりて召返さば、嚮に一個の叛賊を、這回も征する事克はて、那神童を召よせし歟、と世の人は武門の瑕瑾、最朽惜き事なるべし。因て再按ずるに、いぬる比素藤門を、誅戮せんとして、議せし折、單親兵衛が恩赦を請ふて、他復叛く事あらば、人手を借らず身單にて、誅伐すべし、といひし事あり。恚れば亦親兵衛も、那折既に素藤が、ふたゞび叛ん事を知れども、他們を懲して降し、折、兪立地に降參せば、恩赦を請ん、と諭せし言を、食ざらん與にして、則勇士の眞面目、信義を旨とすれば也。是によりて他を思ふに、今も親兵衛がこゝに在らば、必人手を借らずして、誅戮の術あるべきに、茲に在らぬを争何はせん。他路にして、素藤が、復叛きしを聞知りて、立かへり來ば幸ひならん。今さら召も返しがたかる、情由は只今いへる如し。曩には我那叛賊を、征伐のいと緩やかなりしは、只義通の安倚を思ふ、辰相們に諫られ、且神と親との教を悟りて、本意ならぬ日を過せしかども、這回は又素藤に、拿られたる保質なし。我身に脚の疾なくば、速にうち向ふて、賊徒を遣なく夷けて、民の塗炭を救ん事、かたくもあらぬ所行ぞかし。然ばとて病著の、瘡るを等て征伐遅礙せば、寇の英氣を頤ふて征しがたきに迫りやせん。誰か今我與に、憂を分ちて叛賊を、夷る者あるべしや。といひつゝ、嗟嘆し給へば、慰め難たる四個の老黨、共侶に眉を蹙て、御説寔に理り也。臣們が短才淺智なる、然まてには思はざりける、親兵衛が事はしも、今さらこゝに議すべからず。素藤

幻術ありといふとも、邪は正に克ことなし。この時尙命を惜て、他人に譲りなば、そは祿を偷める也。臣們館山に推
 寄て、賊徒を夷げ候はん。賢慮をな惱し給ひそ。といへば義成主頭を掉て、否汝們は冢宰也。政事を任する者なるに、
 願へばとても推立て、四個は討手に遣しがたし。木曾介は智勇あれども、この中の極老にて、桑楡の暮景に及びたり。
 縦ゆかまく欲りするも、軍陣に莅むべからず。又藏人と六郎は、既に先度の軍勢あり。兵庫助は甚麼ぞや。問れて
 清澄忻然と、膝を找めて稟すやう、微臣不能を見かへらて、重任を承まつること、年來になるものから、いまださせ
 る軍功なし。願ふは素藤征伐の、おん使を奉りて、斧鉞を加え候はん。この義を許させ給へかし。といへば義成主
 點頭て、汝は思慮あり、武藝あり。且その性急ならで、功を貪るものにあらねば、這回素藤を討手には、究竟の大將
 なるべし。汝いよくゆかまく欲せば、我左右の三勇臣、田税力助逸友、及小森但一郎高宗と、浦安牛助友勝をもて
 副として、一千五百の士卒を授ん。賊徒は素より妖術あり。嚮に館山の城内より、殿臺なる樟の榿まで、地道を穿て、
 伏兵の、出沒自由なりけるに、幾日もあらでその地道の、あらずなりしは、いと奇也。這回も亦更闕て、館山の城を
 襲ふ折、賊徒の數千に見えしといふは、开も亦他們が幻術にて、實に然ばかりの多人數を、從へたるにはあるべから
 ず。那幻術を折くには、糞汁大蒜、獸の鮮血、汚穢れし物を澀ぎ掛るに、しくことなし、と漢籍に見えたり。嚮には
 我その準備をしたれど、賊徒を征伐しぬる折、怪しと思ふ事はなかりき。然りとて這回準備なくば、不覺を取る事あ
 りもやせん。豫其頭に用心して、速に進發せよ。時日を過すべからず。といそがし給ふ征伐の、軍議はやくも決著
 して、皆言承をしたりける。开が中に清澄は、單面目身にあまりて、隨即軍兵催促の、御教書を賜りつ、退りて人馬
 を整るに、武備怠慢なき家風にあなれば、士卒立地にうち揃ひて、明日出陣と聞えたり。登時荒磯南彌六は、安西
 出來介、滿呂復五郎と共侶に、荒川兵庫助清澄が隊に就て、這回素藤征伐の、軍陣に従ひ行んとて、只管に請ひ稟し
 しを、清澄隨即聞えあげしに、義成主宣ふやう、現他們は、再生の、恩を思ふて軍役に、從ん願ふ事、そのよし

なきにあらねども、南彌六は武士にあらず、但その依氣あるのみにて、原是上總の町人ならずや。然るを出來介復五郎
 們と、俱に今番の軍役に、從んと欲するは、事を好むに似て、相應しからず。且他們三名は、既に舊惡を洗除して、
 今良善の人と做るとも、始を推せば、素藤が、腹心の間者也。开を三人俱に領てゆかば、躬方の士卒疑ひて、快ら
 ず思ふ事あらん。恚れば出來介復五郎は、軍役に從せよ。南彌六はなほ城内に、留置くこそよかめれ。と仰させ
 給ひしかば、清澄聽て退り出で、則件の三人に、御説恚々と聞え知らするに、南彌六望を失ひて、堪ずや單找み出で、
 又清澄に對ひていふやう、御説を推辭奉るは、罪得がましく候へども、我、守の御恩を稟しを、寸功もて報ひまつ
 らん、と思ふは一致の志のみ。小可一個異なるに候はず。縦這身は町人でも、今戰國の貴賤を思ふに、武門名家の
 子孫まれ、家衰へて、民間に、降る者いと多かり。又莊客市人にて、志氣ある者は、竟にその身の擲きにて、武
 士に做りて家を興すも、勢からず候に、小可のみ町人也とて、願ひを袂け給ふ事、然りとては情なし。この義をな
 ほ幾回も、聞えあげさせ給ひね。と怨じて只管庶幾へば、清澄頭をうち掉て、志は然ることながら、三人を都て軍
 役に、從はしなば、躬方の士卒に、疑ふ者あるべしと、思食たる賢慮なるに、強て願ふは不敬也。汝は別に用ひさせ
 給ふ事もあらんかし。姑且思ひ住るべし。と諭せば出來介復五郎も、俱に南彌六を慰めて、云云といひけるを、南彌
 六听かず、眼を睜りて、各こそ情願遂て、我をば何とも思はざるらめ。非如這身は町人でも、昔は人に知られた
 る、洲崎の無垢三が外孫なるに、今この時を失ひては、何をよすがに外祖父の汚名を雪むべき。無益の餘命を貪り
 て、懣に物を思んより、我只死ん。と教留ししを、なほも諫めつ推立して、俱して外面へ出にけり。爾程に、荒川
 兵庫助清澄は、人馬はやくも整ひて、出陣の暇を賜り、小森高宗浦安友勝、田税逸友們と共侶に、一千五百の軍兵を
 引率して、その曉天に、稻村の、城を出て上總なる、館山を望て進發す。然ば安西出來介景次、滿呂復五郎重時も、
 雜兵にうち交りて、俱に先隊の中に在り。最も日永き時候なるに、清澄連りにいそぎしかば、十餘里の路の程を、只

一日に推寄来て、この夜は羽賀に屯しつ、後れていまだ聚合ざる、後陣の士卒を等程に、先細作兒をもて、館山の城の虚實を探らせしに、籠城の賊兵は、一千四百名あるべし。そが中に、千代丸豊後、武田信隆の殘兵五百名、野幕沙雁太、仙陀麻嘉六と喚做たるを頭人として、兪素藤が隊に屬きたり。又妙椿と喚做す女僧あり、八百比丘尼の綽號を偷みて、年齢は八百歳に、なりぬといへども、面影は、美しうして尙少かり。這女僧、素より幻術ありて、素藤を幫助るにより、天助尼公と尊稱せられて、賊中の軍師たり。普善蘇々利の村人們が、風聲都てかくの如しといふ、崖略はやく聞えしかば、清澄は、準備をしたる、糞汁大蘇獸の血を、多く龍骨車に分ち湛さして、賊兵幻術ありと見ば、速に射ぎ掛て、破るべしとぞ下知したる。這夜は人馬の脚を休めて、その詰旦辰の左側に、館山の城へ推寄するに、この時後れし軍兵も、皆悉、後陣に在り。一千五百の兵を三隊に分ちて、田税逸友、浦安友勝を先鋒として、小森高宗を後陣と定め、清澄は中軍に將として、隊伍を亂さず找みけり。爾程に、館山の城内には、寄隊近づきぬと聞えしかば、素藤も亦細作兒をもて、敵の多少を探らするに、國守は病著に臥て、稻村の城に在り、老黨荒川兵庫助清澄を大將として、その勢一千五百餘騎、羽賀の曠野に屯して、明日快城を攻んとすといふ、注進孟浪ならざりしを、素藤听つ、冷笑て、那大江奴が在らずなりては、義成が又推寄するとも、鹽にすべかるに、況荒川清澄など、我敵手に足る者ならず。先や明日逆寄せして、這奴們に胆を潰させん。兵毎明日の朝駈の、準備をせよ。と下知しつ、謀く氣色はなかりけり。却説その次の朝、清澄は羽賀よりして、士卒を找めて、館山の、城稍近く寄來る程に、素藤も亦一千有餘の、賊兵を從へて、中途に敵を逆へたり。兩軍迭に近づく程に、と見れば賊將素藤は、重青の錦の鐵鎧戰袍に、鶯像打たる龍頭の、五頓項鐵盔を猪鬃に戴き、紫金裝の大刀に、豹の皮の尻室掛て、二十四挿たる鷲羽の征箭を、箆高に駈做したる、左手に、重藤の弓の握太なるを、腋局に披著て、驢馬にぞ乗たりける。右に嘯時颯入あり、左に平田張益作あり。この夕、腹心虎狼の賊兵、稻村の嶺に立並びて、鹽籠に白く、月中の

御簾を窺出したる、塵埃三四塵、朝風に吹散したる、後方には妖尼妙椿、白輪子の夾衣に、純黒の錦の嬰袋を掛て、一口の寶劍を、背に斜に駈搭して、鐵聽馬に跨たるが、故意武器を著けざりけり。清澄適にこれを見て、怵へず馬を找めたる、是甚麼なる打扮ぞ。但見る、清澄この日の戰裝は、綠線線的好葉子甲身に、同細の胡瓜盔を眉首に戴き、絳と黄と、白の三色を、細目の如く縫做したる胞羅披て、二尺五六寸なる大刀を佩き、素柘の弓に、關弦掛たるを、左手に握持ち、連錢聽の、太く逞しき馬に、鞞鞍措て、優にうち乗り、右手には三年釣の節短なる、磨白の鞭を執て、前面を佐と見互したる、右に田税逸友あり、左に浦安友勝あり。中黒の白旗、花菊の馬標、齊々整々として、隊伍正しく、騎馬武者歩兵、次第を衛りて、魚鱗の像く備たり。登時荒川清澄は、持たる鞭もて、素藤を、差招き聲高やかに、やをれ再叛の賊、正可に听け。恩を稟て恩を思はず、報ふに寇をもてする者は、心禽獸にも劣りたり。爾は五逆の罪人にて、既に處になりたるを、我君仁慈の御心篤く、大江親兵衛が請まうせしまに、赦すまじき首を接して、遠く追放ち給ひしに、幾程もなくかへり來て、妖術をもて舊城に、ふたゝび據らんと欲するとも、大兵既にうち向へば、今番は免るゝ所なし。頭鎧を脱て、縛縛の、索を受よ。と責罵れば、素藤呵々とうち笑ひて、嗜きたりな、瘦老黨、夷霧は素是我封疆、館山の城も亦、里見を憑て得たるにあらず。然るを義成時運に乗して、人を侮る非義多かり。この故に我獨立の、武運を專試しに、時早かりけん、大江奴に、一旦俘にせられしかども、その罪にあらざれば、義成我を害し得ず。こゝをもて我又來て、我城郭を拿復せしを、恩に叛くといふよしあらんや。兵毎那奴を擊捕りね。と戰塵連りにうち揮れば、咄と揚たる鬨の聲と、共に前後を争ひ競ふ、礮時颯入、平田張益作、躬方を找めて撃んとす。寄隊はこれに毫も噪がず、開き合せし逸友友勝、馬上に鎗を打振々々、縦横無尋に刺崩せば、得たりと找む、その隊の軍兵、射れども撃ども、怯まず去らて、最も烈しく攻立れば、清澄こゝぞ、と麾うち振て、軍は既に克たるぞ。この圖を抜かて素藤を、擊捕すや。と喚りたる、聲勇しき修羅鬪場。寄隊は奮勇十倍して、克に乗たる



(る 破 を 澄 清 精 妙 て し 起 を 風 魔)

勢ひに、賊徒は懐へず浮脚に、なりつゝ、亂れ噪きたり。當下妙棒、後陣に在り、躬方は既に負色に、なりたるを見て、遽しく、懐より襲襲の玉を、拿出し額に當て、一霎時呪文を唱れば、怪むべし、忽然と、結陰る天の起住ひ、疾風颯と吹き暴れて、砂を飛し樹を倒す、勢ひ面を向べからず、世は常闇となるまでに、黑白を判べきよしなければ、然しも勇みし寄隊の軍兵、人馬齊一吹倒されて、其身其身の大刀眉尖刀に、劈れ深槍を負て、矢庭に死するも多かりければ、豫準備の糞汁大蒜、獸の鮮血ありといへども、濃き掛べき標識なく、脚下暗きに度を失ふ者、その龍骨車に足を踏入れ、うち覆し轉輾びて、汚穢れし物を頭より、浴みて嘔も妙からず。この故に後陣なる、高宗も、兵を、找めて躬方を拯ふに由なく、約莫剛きも猛からぬも、兪總崩れに敗走りて、雑兵の撃るゝ者、幾名といふ涯りも知られず。清澄は辛じて、逸友們と共に、馬を走らし風を避て、退くこと七八

時、魔に狂風驟にければ、散れし士卒を等程に、天晴れて、日光洞なり。この時小森高宗も、件の魔風に士卒散れ、四零八落になりしかば、僅に七八個の雑兵を従へて、免れて這里に集合にけり。恁りし程に、風に撲れ眼を腫して、命を免れたる躬方の士卒、旌旗馬標をはやく見て、這里那里より走り來つ、一千有餘になりしかば、清澄は茲までも、敵の長趕することあらば、又一戦すべけれど、備を立て等たりけるに、賊徒は既に城内に、かへり入りぬ、と聞えしかば、清澄も亦羽賀へ退きて、躬方の金瘡兒と、戰歿の士卒を數るに、撃れたる者二百餘名、金瘡兒は、滿呂復五郎を首として、雜兵八十餘名也。开が中に、浦安半助友勝のみ、日の暮るゝまでかへり來ず、存亡量りがたければ、清澄頻りに嗟嘆して、我賊徒征伐の、おん使を奉りて、戦ひの開場に、妖尼の魔風に折かれて、多く士卒を撃したる、剩名ある一勇士、浦安半助を亡ひては、兵馬の歎き想像られて、左にも右にも面伏也。友勝が存亡を、知れる者はあらずやとて、陣中限なく問せしに、一個の雑兵が、いふやう、浦安主は、風の爲に、乗たる馬の倒れにけん、憶はず足を傷りたりとて、左右なく身を起し難しを、賊兵居多走來て、捕捕て將て去にき。その折に小可も、亦那風に吹倒されて、叢の中に在り、幸ひにして敵の視に、かゝらざりけん虎口を免れて、御陣へかへることを得たり。と報るに清澄高宗逸友、遣恨に堪ねば慨然と、俱に歎息したりけり。姑且して高宗は、清澄に對ひていふやう、いと憚りなる助言に似たれど、久しくこの地に屯せん事、進退共に不便の義あり。何となれば、這地方は、なほ敵の城へ遠かり。且里の名を羽賀といへり。羽賀は剝るゝといふに通ひて、盜泉勝母の忌べきに似たり。尤愚按に候へども、殿臺は、その地高く、敵城へ遠からず。只その進退に、便り宜しきのみならず、その名も亦相應しく、國主の軍兵屯せば、新に名づけし如くなるべし。願ふは宿老殿臺へ、御陣を移し給へかし。といふを清澄うち聞て、开はよく心つかれたり。人を愚にする幻術也とも、神の威靈に勝ことなし。明日は那里へ陣を移して、兩所八幡大神宮、並に諏訪明神へ、詣て妖賊降伏の、冥助を祈り奉らん。就て我又思ふよしあり、力助も所給へ。素藤今日の戰

ひに、十二分の捷勝を得たれば、いよ／＼進む心あらん。然ば我敗軍の、疲勞を料る兇黨が、今宵夜撃に推寄來つべし。日暮なば細作をもて、城の動靜を覘して、然る事ありと知るならば、伏勢をもて撃果さん。那妙椿がその隊にありとも、思ひの隨に引著けて、急に起て拉がば、術を行ふ違あらで、魔風の孽なかるべし。その隊配は、筒様、恁々也。と葺き示せば、高宗逸友歡び感して、その議定に圖に當れり。然ば準備をすべけれど、先細作をぞ遣しける。爾程に、墓田素藤は、走る寄隊を迫捨て、兇徒を纏めて徐々と、館山の城にかへり入りしが、約莫この日の戦ひに、撃捕りしは敵の雜兵のみ。但清澄が先鋒の頭人、浦安牛助友勝と喚做す者を、生拘たりと聞えしかば、素藤斜ならず歡びて、然ば先開奴をもて、軍神を祭りてん。快牽出して研るべしとて、願八門に吩咐るを、妙椿聞て、禁めていふやう、今友勝を欣し給ふとも、總大將清澄は、なほ一千餘の殘兵を領て、羽賀の屯に在るなれば、躬方の軍威を増すにもあらず。恁れば又友勝をも、嚮に生拘り給ひたる、登桐山入良子と、等しく獄舎に籠置て、又後の戦ひに、清澄を首として、名ある寄隊の奴們を、斬にしたらん折、件友勝良子を、斫らして俱に軍門に、梟竝べ給ひなば、嚮におん身主従が、遺なく大江親兵衛に、牽れて陣門に曝されたる、恥を雪るに足りぬべし。這義を思ひ給はずや。と詞急迫しく諭すにぞ、素藤屢點頭て、然ばその友勝をも、緊しく獄舎に繋置きね。と下知して權且他を斫らせず。先勝軍の壽祝せんとて、その曠野より廣書院へ、有功の兇徒を聚へて、盃を取らしつゝ、酒半酣に及ぶ程に、奧利本膳が獨子なる、奧利狼之介出高は、席末より膝を找めて、素藤に對ひていふやう、弱冠の憚氣もなく、諸老臣をうち踰て、軍議に及ぶは烏滯に似たれど、料るに今日の戦ひに、寄隊は痛くうち負て、羽賀の屯に退きたれば、金瘡兒も多く候はん。然ば那身に疲勞果て、事の役には達べからず。願ふは今宵小臣に、溼兵三百名を貸給へ。眞夜半時候に推寄せて、清澄を撃捕るべし。といふを素藤うち聴て、爾が意見、理なきにあらねど、清澄を凡庸なる、敵手と思はば、失ふあらん。已ね／＼と辭るを、出高聴かず、眼を睜りて、御説に悖るは無體

なれども、小臣は遊伴にて、是までさせる御用なければ、人に知らるゝ功名を得ざりき。然ばとて、做す事もなく、倘この折を喪ひなば、臍を噬むとも及んや。枉て饒させ給ひね。と只管乞ふて已ざりければ、願八他を勇悍として、素藤に薦るやう、狼之介が夜撃の軍議は、寔にその圖に當りたり。尼公の術を借らずとも、功あらんこと疑ひなし。心もとなく思ひ給はば、微臣も亦出高を、幫助て功を奏すべし。快々出し遣らせ給へ。といふに素藤點頭て、願八、和殿が俱に行かば我何をか咄むべき。然らば兵卒五百名を授けん。狼之介は、三百名を領て先に找み、願八は、二百名を従へて、その鬪戰を授けなば、必失なかるべし。なほ小心こそ緊要なれ。準備をせよ。といそがせば、狼之介は忻然と、歡びを舒席を辭して、願八と共に、退りて人馬を汰へける。然ばこの條の趣を、側聞せし本膳は、その子を知あり勇あり、と思ふ歡に堪ざりけん、人に譲らて盃を、引受々々喫しかば、酔て曉るも知ざりけり。問話休題。却説奧利狼之介は、礪時願八と共に、五百個の隊兵を領て、この夜子の左側に、悄々地に館山の城を出けるが、馬には鐵子を掛たれば、鐵轡の音もなく、人には枚を銜して、ものいふことを許さず、戰號を定め、進退を示し合し、單炬を提さして、速りに路をいそぎしかば、丑三刻の比及に、清澄が屯せる、羽賀の陣所に來にければ、願八は二百個の、賊徒を領て、後方に續き、狼之介は隊兵三百名を従へて、清澄が本陣へ、はやくも潛び近づきつゝ、咄と嘘で、堀樋もて、はや陣門を打破らして、眞先に馬を乗入れしに、内には一個の敵もあらず。こは什麼、と訝りて、原來敵は臆病鬼に、誘引れて安房へ退きし歟。しからずば、躬方の夜撃を、猜して備を儲けしならん。衆皆出よ。と喚りて、そが儘馬を乗透巡らして、退き去んとせし程に、左右に繁き茂林の内に、陣鼓をうち鳴らして、顯れ出る兩個の騎馬武者、士卒を找る聲も等しく、再叛の賊、那里へ逃るや、恁あらんと思ひしかば、甲夜より等しを知ざる歟。小森高宗茲に在り、田稅逸友こゝにあり。刃を受よ。と罵りて、鎧を素抜て走り蒐れる、兩隊の精兵四百名亂れ立たる兇黨を、推包て攻撃つ大刀風、當るべくもあらざれば、賊徒はいよ／＼慌謀て、一柱も支得ず、

路を索て逃んとしつゝ、撃るゝ者ぞ多かりける。そが中に狼之介は、後陣の補助を心に憑みて、姑且挑戦ひつゝ、左右に近づく敵の雜兵を、鎗もて刺伏せ敵き倒して、稍退んとせし程に、憶ず小森高宗に、去向の路を塞れて、一霎時雌雄を争ひしに、克ふべくもあらざれば、逃んとしつゝ、高股を、刺れて苦と叫びもあへず、馬より墮と墜しかば、高宗の隊兵們、走り蒐りつ、狼之介を、起しも立す推伏せて、索を掛てぞ牽立ける。爾程に、礮時願八は、狼之介が後方より、賊徒を找めて、清澄を、翼ひ撃んとせし程に、敵にも準備ありしとおぼしく、陣鼓の音烈しく聞えて、躬方は多く撃るべき、勢ひ胸に應しかば、心駭き胆落て、原來敵に備あり。怒に出高を、搦んとせば我も亦、捕圍れて、難義に及ん。先この地方を退きて、又せん術もあるべけれ、と尋思をしつゝ、乗たる馬の、鑢面を推遷らして、退き去んとせし程に、思ひがけなく後方より、清澄が一隊の伏兵、忽然と起り立て、その勢約莫五六百名、四下の草木に火を放て、咄と揚たる鬨の聲に、願八いよく、駭怕れて、躬方の撃るゝを見かへらず、路を索て逃んとせしに、清澄はやく士卒を找めて、他擊留よ。と下知すれば、性急雄の壯武者們、各先を争ふて、殺騰けたる刀尖は、只是芋の葉を刈る似く、賊徒の首を喪ふ者、幾名といふ數を知らず。そが中に願八は、敵と猛火に路を堰れて、脱るゝ隙を得ざりしに、剩田稅逸友が、逃走る賊徒を趕て、去向の方より來にければ、願八は、懐難て、滾ぶが像く馬より下りて、逸友が馬前に、跪き命を乞ふて、復降參をしたりしかば、逸友は隊兵に、願八を結紐らして、然而清澄に報しかば、清澄は、逸友高宗の、功を賞て共侶に、なほも賊徒を撃果したる、その首三百餘級を得たり。怒りし程に天の明たれば清澄は、諸隊の士卒に、腰纏戰飯を開して、高宗逸友と共侶に、生口願八狼之介を、雜兵に牽しつゝ、屯を殿臺へ移しけり。その手配神速なれば、館山の賊徒は、いまだ是を知らず。然而那里へ到りては、山林の竹木と、藤蔓を伐拿らして、はやく陣屋を組建るに、士卒愈老實にて、使るゝこと、手足のごとく、只一日に成就して、長陣の準備等閑ならず。昔這地方は、上總介平廣常が、館ありし迹なれば、殿臺と喚做たる、實に究竟の要害也。爾程

に清澄は、修造を高宗に任用し、又館山の兇黨が、推寄來ることあらん敷とて、逸友に五百個の、兵を授けて守らしつ、その身は伴當二三十名を將て、當所に故りたる三所の神社、正八幡宮宇佐の神、諏訪明神へ參詣して、逆賊誅伏、當陣無異の、神助を默禱したりける。然ば又この朝、館山の城内には、昨夜願八狼之介們に従ひて、羽賀へ夜撃に赴きたる雜兵が、幾名か脱れ來て、躬方敗軍の事の顛末、狼之介も、願八も、果敢なく俘にせられたる、爲體を報しかば、素藤太く驚きて、益作本膳、碗九郎、沙雁太、麻嘉六們を召聚て、事の趣を言示し、ふたゝび羽賀へ推寄て、いかで願八狼之介們を、搦拿ん、と敦囑けども、大家俱に驚き呆れて、早に應をする擬勢もなし。そが中に本膳は、最愛の獨子が、敵の虜になりたるよしを、聞くにも堪ず胸潰れて、恨の涙やる方なく、單只管素藤に、薦めて又清澄を、攻撃んとて請ひしかど、衆議竟に一決せず。この故に素藤は、細作兒を遣して、敵の虚實を覘せんとして、黄昏時候より出し遣りしに、その者夜中にかへり來て、清澄は、今朝未明に、殿臺へ屯を移しぬ。羽賀には敵一人も候はず。と報しかば、素藤いよく後悔して、我もしその義をはやく知らば、そが路に埋兵して、清澄を撃捕るべきに、縱其首までに及ばずとも、他が戰米は、幾十疋の、馬に駝して運しけんを、奪略ざりし悔しさよ。然るにても、願八と狼之介は、殺されたる歟、甚麼ぞや。と問へば答て、然候。件の二人は、そが儘に、殿臺へ將てゆかれしを見たる者ありと聞にき。恚れば緊しく禁獄せられて、那屯にこそ候はめ。といふに素藤慰められて、細作兒を遣かしつゝ、その終夜枕を碎きて、思ひ得たる事ありければ、明るを遅し、と益作本膳、碗九郎們を召聚て、清澄は、昨日未明に屯を殿臺へ移せしと聞えし事、竝に願八狼之介は、今なほ命恙なくて、獄舎の中に在りといふ、細作兒の注進を、解示して又いふやう、我思ふに、願八は、我股肱の老黨、狼之介も亦、智あり勇ある後生なるに、他們を敵に保質に、略られては後の戦ひに、影護き所あり。況首を刎られもせば、我隻腕を失ふに異ならず。因て他們を救援るべき、我に一箇の籌策あり。今日殿臺へ軍使を遣して、嚮に我虜にして、今も獄舎に繋置く、登桐山八良子と、又

いぬる日生拘たる、浦安牛助友勝をもて、願入狼之介に換んといはせば、清澄歡びて交易すべし。この義はいかに。と説誇れば、大家ひとしく感服して、そは特更に奇妙なる、おん計ひにこそ候へ。件の二人を交易して、後安くなりての後、亦復尼公の妙術を、借りて清澄を破るときは、良子まれ、友勝まれ、二度虞にすべき事、囊中の東西を探るより易からん。先その使者を擇ませ給へ。といふに素藤領きて、使价を擇むはかたくもあらねど、まだ妙棒に、この義を談ぜず。後悔なからん爲なれば、尼姑の意見を聞くにはしかじ。一霎時等わ。と推留めつゝ、そが儘奥へ赴きて、然而妙棒に、恁々と、件の計議を解しせば、妙棒听つゝ、微笑て、その計略歹きにあらねど、甲と乙とをとり替へは、一互りにて損益なきを、妙也とは尙いひがたかり。良子をも友勝をも、返さて這方の二人をのみ、とり復す手段あり。そは咱儕が法術もて、敵の眼睛を瞞さん、箇様々々に相計ひ給へ。と耳を引よせて聳けば、素藤満面うち笑れて、感ずること大かたならず。开は又我籌策の、上をゆくこと遙にして、大奇精妙、至極の手段、おん身ならで、誰かよくせん。その期を忽ち給ふな。と示し合はつゝ、遠しく、故の坐席に出て来て、然而益作本膳門に、妙棒にいはれたる、奇術の手段を聳き示せば、大家よく歡び感じて、快々計らせ給ひね。と又他事もなくいそがしけり。恁而藤田素藤は、野暮沙雁太、仙駝麻嘉六に機密を示して、殿臺なる、荒川清澄が、陣屋へとて遣しければ、件の二人は、密議を稟て、伴當才に四五名を、俱して件の屯に赴き、先小森但一郎高宗が陣所に到て、恁々と名告しかば、高宗は訝りながら、みづから出て對面しけり。登時沙雁太がいふやう、在下門は、藤田權頭が使价にて、野暮沙雁太、仙駝麻嘉六と喚るゝ者なり。鬪戰の沿習にて、互に勝負ありといへども、俘にせられ虜にしたるは、俱に是二人のみ。こゝをもて、館山の獄舎に囚置く、登桐浦安兩個をもて、いぬる日より當陣に、捕籠置るゝ、礪時願入業當と、奥利狼之介出高に換ま欲す。こは素藤が情願也。許容あらば、登桐生と、浦安生を送り返すべし。この義をもて荒川主へ、まうし給へ。とぞ解たりける。高宗これうち听て、雜兵に兩個の使者を、衛らしつゝ、退きて、遠しく本陣へ、ゆき

て件の趣を、清澄に告しかば、清澄听つゝ、眉を蹙めて、自他の生口を交易の事、和漢に例なきにあらねど、素藤が詐欺多き、輕々しく許容すべからず。先逸友を招き寄せて、衆議の上にて應をせんとて、雜兵を走らして、田税逸友を招しつ、件の上しを恁々と、聞え知して意見を問ひしに、姑且して、逸友がいふやう、現素藤は、詐欺多かり。なれども先貞子と、友勝を受拿て、爾後に業當と、出高を遞與し給はゞ、一切後悔なかるべし。貴老の知せ給ふごとく、牛助友勝は、浦安兵馬乗勝が弟也。兵馬は、囊に御曹司に俱し奉り、當所諏訪の社頭にて、賊徒の火銃に撃れしに、幸ひに神の資助あり、蘇生して今に在りといへども、歩行不便の人となりにき。然るを又友勝も、寇の俘となりしより、獄舎の艱苦さぞあらんを、恁る便宜に救れずは、忠戦義烈も、甲斐なきに似たり。又良子も忠義の本性、素より名ある士なるに、俱に劇態にせられん事は、君のおん爲にしかるべからず。なほ及賢慮を旋らし給へ。と憚る氣色もなく議し、かば、高宗も亦いふやう、不佞が臆断も、田税生と異ならず。非除目今兩個の生口、願入狼之助を交易して、返し遣し給ふとも、素藤誅伏せん折に、他們いかにして免るべき。只その天罰の至る所、速かると遅かるのみの、躬方の勇士を喪はゞ、悔とも及びがたかるをや。と俱に意見を盡すにぞ、清澄然なり。と點頭て、しからば使价の兇黨に、箇様々々に答給へ。疎忽の應對すべからず。といふに高宗こころ得て、退りて馳て沙雁太と、麻嘉六にうち對ひて、來意の上しを總大將に、具に傳へ候ひしに、敵射方の生口を、交易の事はしも、その例なきにあらねば、枉て所望に依べきなり。先良子と友勝を、本陣へ送り來しね。他們が命に恙もなくば、對面してその後、業當出高の二名を遞與すべし。この義倘相違あらば、交易破談に及んのみ。立かへりてこの趣を、藤田に傳達候へかし。といはれて沙雁太麻嘉六は、こゝろ得貌に額を衝て、御返答承りぬ。然らば兩個の生口を、俱して亦復まゐるべし。何てふ相違あるべきや。と答へ出てゆきにけり。恁て又高宗は、本陣へ赴きて、素藤が兩個の使价の、承諾しよしを清澄に、報て逸友と共侶に、館山より良子友勝を、送り來ぬるや、と等程に、那城内には豫より、用意をしたりけ

ん、約莫一時あまりを経て、又那沙雁太麻嘉六は、登桐山入良子と、浦安牛助友勝を、篋輜にうち乗して、昇してはやく來にければ、高宗隨即雜兵に出迎せ、案内の輿に、その身も俱に立出て、本陣へ伴ひけり。登時荒川清澄は、逸友をもて、友勝と、良子を受奉らするに、他們は金瘡に惱る歟、然らずは獄舎に疲勞れたる歟。速には輜子より出難しを、聽て雜兵們が扶出しつ、二人の左右より手を掖て、綠頬へ推登するに、果敢々々しくはものも得いはず。清澄は是を見て、先良子と友勝を、奥の方なる、帷幕の陰へ遣して、雜兵に勦らせ、鑿師を召て、他們が安危を尋れば、鑿師は先良子友勝、兩個の脈を診ふて、金瘡は、二子俱に愈たり。氣力に疲れあるのみ。といふによりて疑はず、即便雜兵に下知しつ、生拘の賊徒、礪時願入、奥利狼之介を、獄舎より索出さして、綁縛の索を解すれば、高宗逸友こゝろ得て、沙雁太麻嘉六に遞與す折、交易相違なきよしを、云云といひ知らすれば、沙雁太と麻嘉六は、歡びを符、件の二人を、受とりつ伴ふて、外面へ退るとやがて、吊し來たる輜子へ、乗して伴の輜夫に、昇して卒とばかりに、飛が如くに走りけり。姑且して清澄は、良子と友勝に、敵の虚實を問んとて、高宗逸友們と俱に、奥へいなんとせし程に、人の駭き叫ぶ聲、平ならず聞えしかば、他は奈何。とばかりに、迭に面を指しつ、俱に訝しく思ひたり。浩處に、鑿師と兩三個の雜兵が、奥より慌しく出て來つ、清澄等にうち對ひて、敵の使价の俱して來たりし、登桐主浦安主に、目今湯液を薦んとして、謬て藥碗を、とり落しつ、那人達に、濺ぎかけ候ひしに、怪しむべし。件の兩個は、登桐ならず、友勝主にも候はず。變じて兩個の草偶兒に、なりてこそ候なれ。と報るに清澄、高宗逸友、驚き呆れて辨よしもなく、遠しく身を起して、齊一其首に行て見るに、果して兩個の草偶兒、臥し横たはりて薄團の上にある。原來良子友勝と見えたるは、此なりけり、と悟れども、悔て甲斐なき一期の不覺に、且恥且憤りて、眼を睜り手を叉き、尋思も似たり、三個が當惑、今さらせん術なかりけり。そが中に逸友は、恨に堪はず、聲高やかに、應答し、館山の妖尼奴が、兩個の生口を奪略らんとて、幻術をもて恠まで、人の眼を瞞したり。遠くはゆかじ、使

价の奴們、趕住めて、願入と、狼之介を捉復さん。兵毎、馬を牽出さずや。と教留き暴く叫立れば、高宗も、共侶にとて、身を起さんとしてけるを、清澄急に推禁めて、小森田税、さのみな憚りそ。かくの如き幻術をもて、人を欺く金剛禪門を、駿馬に乗て赶ふたりとも、いかにして及ぶべき。恠に手を出さば、いよく胡盧にならんのみ。知力をもて征しがたかる、無邊無量の敵と知りつ、性起らば、他們が圈套に、又乗せらるゝ事もあらん。先稻村へ注進して、上の賢慮を伺はゞ、幸ひにして後難を、免るゝよすがにならん。世に大將たるもの、軍陣に莅みては、天子の命だも俟ずといふ、唐山の制度はあれども、そも亦時宜に依るべき也。進退賞罰、心を師として、己が隨意做さん事は、臣たる者の本意にあらず。この義に儘し給はずや。と嘲語がましく諭すにぞ、逸友も高宗も、當然る理に勢ひ折けて、沈吟すること半响許。憶ず俱に太息を吻て、現貴老の御主意、その上や候べき。はやく是等の顛末を、稻村へ報奉りて、おん下知に依るこそよけれ。快々脚力をまゐらせ給へ。と異口同意くいそがせば、清澄いよく心決して、高宗に筆を執らしつ、這回闘戰の始より、今日妖賊の機變の事まで、幾箇條にか識ざしたる、事遣もなかりしかば、清澄は遠しく、安西出來介景次と、その身の年來使ひぬる、詰茂佳橋といふ一箇の若黨を召よせて、稻村へまゐるべき、火急の脚力を吩咐て、書翰を出來介に遞與していふやう、この書は、東六郎の宿所へもてゆきて、おん旨を伺ふべし。我汝達に好馬を借さん。佳橋も俱に騎馬たるべし。努々遅緩すべからず。と嚴に課すれば、高宗逸友も、亦心を屬けて、館山なる那女僧が、幻術は料りがたかり、曩に藏人武者助すら、欺れたる事あれば、路次には俱に小心して、馬を間斷なく走らすべし。快々立ね。といそがせば、出來介は欣然と、承歡びて、且いふやう、嚮には在下門が志願のごとく、今番の役に立られしに、復五郎は、初度の戰ひに、痛瘻を負て、いまだ得起す。身も亦させる功なきを、慨しく思ひ候ひしに、恚る火速のおん使を、承り候は、面目何事かこれに優すべき。今宵終夜騎走らして、明日は未明に大城へ、著到仕り候はん。この義御心安かるべし。と答て聽て佳橋と俱に、遠しく退きて、

身装しつ、書簡を、項に掛け、二騎相並て、稻村を投ていそぎけり。この時暮は斜きて、下晡なりければ、出来
 介佳橋は通夜、連りに馬を走らしつゝ、その詰且いと早く、稻村の城に來にければ、酒正門の番卒に、上總なる殿臺
 の陣中より、荒川清澄がまゐらせたる、脚力也、といひ知らして、二疋の馬を茲に駐めて、東六郎辰相が、宿所に赴
 き、對面を請ふて、館山攻の勝敗恚々、と來意を告て、清澄門が、連署の書翰を遞與しけり。是により辰相は、出来
 介佳橋を勞ひて、そが儘宿所に留置き、件の書翰を、書簡に、藏たる儘伴若黨に、持して君所へ出仕したるに、姑
 且して杉倉氏元、堀内貞行も出仕せしかば、隨即件のよしを告て、俱に披露に及びし折、義成主は、その書翰を、近
 習に讀して听給ふに、第一箇條は、初清澄門が、館山へ推寄て、素藤と戰ふて、躬方は勝に乗たる折、素藤が陣中に、
 妙棒と喚做たる、一個の怪異女僧ありて、はやくも行ふ幻術に、魔風猛可に吹暴れて、沙を颯げ樹を覆し、天地
 晦冥になりしかば、御方は是に辟易して、雜兵は多く撃れ、金瘡兒は、滿呂復五郎門、七八十名に及びたる、そが中
 に浦安牛助友勝は、落馬して脚を傷りし故に、敵の虜になりしといふ、條を下まで讀しも果す、義成主は、駭き嘆じ
 て、嗚乎危哉々々。果して是素藤を、幫助ぬる惡物あり。曩に貞行門を魅りて、中途より返せしも、地道を穿て、諺
 訪の巨樹の、樞より伏兵を出せしも、その女僧が所行也けん。然而その次は甚麼ぞや。と問せ給へば又讀む二箇條、
 然れども清澄高宗、逸友門は薄瘼も負はず、速に殘兵を、聚合て羽賀へ退きしに、當晩礪時願八業當、奧利狼之介
 出高、と喚做たる兩個の賊徒が、五百個許の兵を領て、羽賀の屯を襲ひし折、清澄早くその機を猜して、伏勢をも
 てうち破り、賊徒の頭人、出高業當を生拘て、次の日屯を殿臺へ移せしよしを、詳に載しかば、義成主含笑て、連
 愛たく計りにけり。然ては晝の敗軍の、恥を早くも雪めたり。而その次は。と第三箇條を、亦復讀して听給ふに、
 素藤門が機變の事、いぬる夜本陣に生拘たる、賊徒礪時願八業當、奧利狼之介出高と、御方の俘囚、登桐山入良于、
 浦安牛助友勝と、換ましく欲する素藤が、情願のよし聞えて、今朝館山の賊寨より、素藤兩個の使价をもて、只管

に乞ふにより、なほ又再四詮議の上、相違あるべうもあらざれば、則素藤が所望を許し、先良于と友勝を受拿て、
 しかして後に、業當と出高を、素藤が使者に遞與して、還し遣したりけるに、豈思んや、良于友勝は、眞のものに
 あらずして、草偶兒て候ひき。

と讀むに主従胸を潰て、开も亦女僧が幻術ならめ憎むべし。と義成憶ず致圍給へば、側聞する三家老氏元貞行辰
 相も、俱に呆れて嘆息す。是よりして下の條は、清澄門が意見を寫て、

素藤既に恚までに、怪異女僧の幫助を得て、人を愚に做す手段あるを、只力をもて克んとせば、又幻術に中られて、
 反て不覺を取るのみならず、多く御方を喪ふべし。恚れば先度の吉例に違ひまつり、權且寛の一字を守りて、遠圍
 にして日を彌らば、賊徒必戰米竭ん、その時急に攻伐たば、一撃して素藤を、虜にせん事疑ひなし。但生口の賊
 徒二名を、奪略られしそが上に、攻伐遅延に及びなば、怠慢のおん咎、影護く候へば、おん旨を請まつりて、以後
 の進退仕るべく候。因て注進の狀、件の如し。四月日、晋上、杉倉木曾介殿、堀内藏人殿、東六郎殿、田税力助
 逸友、小森但一郎高宗、荒川兵庫助清澄、各名の下に
 花押あり

とありければ、義成屢點題て、三家老門に宣ふやう。老輩いかに思ふらん。清澄が主意甚佳。寛の一字を守る事
 は、先例既に上吉也。姑且賊の妖氣を避て、他が戰米竭たる折に、伐たば必ず功あるべし。なれども又その間に、妖
 賊手段を旋らして、躬方を惱す事あるべき歟、是も亦知るべからず。こゝをもて我思惟るに、大江親兵衛が感得した
 る、那仁字の靈玉は、よく邪を退け妖を征す。應驗の灼然なるを、人の知る所也。件の玉は往る比、我親兵衛に借得
 てより、今猶埋めて土中に在り。濱路が病著瘳りて、那物怪も絶たれば、只今玉を穿出さして、權且清澄に貸與へな
 ば、今親兵衛が在らずとも、件の女僧が怪しき手段を、破る身の衛になりぬべし。この義は何麼。と問ひ給へば、氏
 元貞行辰相門、一議に及ばず承諾ひて、御説寔にその理あり。然るべし。と稟し、かば、義成則近習を立して、嚮

に玉を埋る事を、奉りたる奥録の、老黨を召よせて、目今那玉所要あり。速に奴隷を聚合て、簀子を放ち、穿出さして、瓶もろ共に疾もて來よ。快々せよ。といそがし給へば奥録の老黨は、承りぬ。と應つ、慌しくぞ退出ける。

第一百十三回

三段の瓶見候を醒す
一級的首南彌六を愈つ

義成主は、那靈玉の、瓶を等給ふ程に、又三個の老黨と、素藤征伐の得失利害を、云々と討論しつ、他が機變の怪しかりしに、就て又宜ふやう、机上の理論は、儒の虚文、多辯は要なきことながら、名詮自性なきにあらず。那素藤が狡獪なる、牛助をもて狼之介に易、登桐をもて礪時に易ん、といひ哄えたる、即これ也。汝們は、心もつかずや。夫牛は仁獸也。狼は惡獸也。又桐は直木也。礪は磨石にて、疎砥也。仁獸の牛、惡獸の狼に敵しがたく、直木の桐、疎砥の礪きに及ざるは、猶孔子の盜跖に怒罵られ、孟軻の臧倉に譏誚られたるが如し。盜跖、孔子を罵るといへども、孔子の聖人たるに害なし。臧倉、孟軻を誚るといへども、孟軻の大賢たるに害なし。此に由て他を思ふに、二賊が昨日拯れて、躬方の禁獄を免れしは、實に免れたるにあらず、機變をもて人を欺きしのみ。又良子と友勝が、敵の俘囚を免れたきは、いまだその解厄の、時の至らざるならん。素藤、既に詐の、謀行れて業當出高を奪得たりしかば、縦良子友勝を、久しく囚置くとも、急に害する事はなからん。はその望を遂たる故也。然は思すや。と論じ給へば、氏元貞行辰相は、感じて膝の找むを覺す、俱に主君の宏論を、稱賛しつ、なほ這那と、論議に時を移したり。浩處に、那奥録の老黨某甲は、方寸土中より穿出したる、靈玉の瓶をそが儘に、兩個の青侍に吊運して、もて來て且縁頼に、やをら掛しつ、找み入りて、よしを恠々と報稟せば、義成適に驚して、その瓶には環の點

たるな。内なる壺を拿出せよ。と仰に老黨、縁頼に、退りて青侍們と共に、八重藤せし襪索を、左右して解捨て、内なる壺を拿出して、兩手に捧げてまゐらせける。壺には襪に埋めし折、義成手づから封じ給ひし、封皮は土氣に濕りたれども、舊の儘にてなほありけり。爾程に青侍們は、亦空瓶を吊起して、縁頼より退きつ、奥録の老黨は、辰相們が後方に坐り、登時義成主は、四個の老黨に宜ふやう、汝們はこの靈玉を、いまだ一覽せざりしならん。よき折なるに、見よかし。と仰に大家額を衝て、御錠の如く其玉は、人の噂に聞知るのみ、現拜見こそ願しけれ。と答る間に、義成主は、壺の封度を拿放ちて、内に籠たる香盒を、拿出しつ、左なる、掌にうち乗して、然ば見せんず、愈找みね。といひつ、右手を蓋に掛けて、やをらうち開き給へば、内には、那玉なかりけり。こは何れいかに。と駭きて、膝の下を那這と、索難つ、又壺を、拿揚つ、うち覆して、看れども見えぬ玉の往方に、呆れて手を又み頭を敲け、思ひ不娛させ給ひたる、今この事の爲體に、俱に訝る四個の老黨、就中奥録の、某甲は項を鶴して、我愈にあらずや、と思へば胸の安からねども、問まつらんはさすがにて、等しく口を餅みたり。姑且して義成主は、憶はずも太息を吻て、老毎、この香盒を見よ。嚮に我この内へ、容たる玉のあらずなりしは、不思議といふもあまりあり。只這香盒のみならず、又是この壺へ斂め、壺へはこの封印を、我手づから斂たりし、封皮は故の儘なりければ、人を疑ふよしもなし。那瓶と共に三重なるを、濱路が臥房の簀子の下の、土中へ埋措せしかば、紛失すべき東西ならぬに、見えずなりしは、甚麼なる故ぞ。是を今我心に問へば、靈物自然とその主を、慕ふてはやく飛去りし歟、昔も恠や水江の、浦島子が不樂しらに、悔も憾も後竟に、返らぬ玉と玉手匣、盒のみありて何にせん。不覺なる所行してけり、と悔の八千度百千度、思へどもおもひ難給ふ、惑ひを釋んよしもなき、氏元貞行辰相們、及奥録の老黨も、只云々と慰めたる、そが中に氏元は、貞行にうち對ひて、和殿は何と思ふやらん。上の賢查違ふことなく、靈玉自然とその主を、慕ふて飛去りたらんには、勿怪の幸ひなるべけれども、或は妖怪變化の、玉を欲するものありて、开が偷拿りなどせ

ば、往方を知ることかたからずや。といへば貞行沈吟じて、恠る非常の事はしも、今さら凡夫の臆度をもて、思ひ得べきにあらねども、疑へば然る事の、なきにしもあるべからず。なれども鬼魅妖怪は、世に名だたる剣を怕れ、故りたる鏡を怕るゝとぞ。然るをいはんや神々しき、那靈玉に憚らで、何物歟竊奪べきや。と論すを辰相見かへりて、各の論議、そのよしあれども、俱に推量の外を出ず。願ふは大江親兵衛を、召返して問せ給はゞ、萬に壹おん疑ひを、解るゝよしのありもやせん。といふを義成主听給ひて、三個の論議皆由あり。木曾介が疑ひも、その事なしといふべからず。又藏人が論するよしは、寔にその據あり。然とて當否は定めがたかり。唯六郎がいふ所、事の捷徑に似たれども、嚮に我思ふよしありて、權且親兵衛を遠離たるに、他に借りたる靈玉を、その折に得返しはせて、埋めし儘に喪たりとて、今遽しく親兵衛を、召返さんはさすがにて、女々しき者と思はれん。因て熟思惟るに、那玉は親兵衛が、母の胎内より感得して、靈驗ありと聞えしに、非除異人の致也とも、他が衛を拿放させて、濱路姫が身の衛に、せんとて土中へ埋めしは、我第一の恠なりき。總て名劍、古鏡の類も、その人によりて、身の衛と做り、又その人により崇を受く、例は和漢に多かるを、枚擧るに遑あらず。恠れば那靈玉も、親兵衛にこそ身の衛に、なりて應驗多かりけり、濱路が與になるものならねば、自然と亡せしもあるかな。开をいかにぞや我ながら、いよゝ迷ふて悟るによしなく、今その玉を拿出して、荒川兵庫に貸與へ、女僧妙椿が幻術を、折んと欲りせしは、是恠に恠を、こゝに累ねし私情のみ。大人君子の苟且にも、得まじき事なるを、今まで心つかざりしは、我も亦鬼魅妖怪に、志を奪れし歟。弓箭八幡、饒させ給へ。是に由て又思ふに、我が親兵衛を疑ひしは、开も亦心の惑ひなりし歟、それかあらぬ歟。と計りに、いふに岳間の苔清水、流れながれて入る大洋の、脈廣かりし名將も、測り難たる妖孽障、覺んとしつゝまだ醒ぬ、无明の醉を深かりける。然ば四個の老黨は、召返されぬ親兵衛に、情由ありけん、と猜するのみ、明君みづから恠を、飾り給はぬ懺悔の義を、理り也とも、慰難て、感心の外なかりけり。姑且して義成主は、

又辰相們に宣ふやう、靈玉の事はしも、何ばかり悔おもふとも、今さらに術もなきを、長詮議は無益也。又大江仁が事は、我なほ思慮を旋らして、召返すとも返さじとも、目今こゝに議すべからず。只要緊は、素藤を、征伐の一議也。我脚の病著の、恠まで過半瘡りたれば、出陣はかたくもあらねど、然てはなほ軍功なき、清澄が面なかるべく、我も亦那幻術を、急に拉ぐ術はあらず。恠れば清澄が請ふに儘して、寛の一字にしくことなけん。躬方にも二三百の、戦歿金瘡あるよしなれば、加勢の軍兵五百名を、殿臺へ遣すべし。と宣授給ひつゝ、近習に硯筒を拿來たさして、墨を磨らし筆を染て、傍に措れし扇子を開きて、手づから寛の一字を寫して、これを辰相に遞與して、又宣ふやう、這扇子は、清澄們へ、我命令の照据也。坐右に掛てこの議を守らば、事速に軍功なくとも、躬方を損せず、敵を押えん。汝們連署して、清澄們に、我這旨を傳へよかし。又那靈玉の亡たる事は、各秘て人にな知らせ。恠る折に人聞知らば、怪に驚き奇を唱て、牽強傳會の評をや做さん。就中女子毎には、兎毛許も聞せぬぞよき。この義も都てこゝろ得よ。と最町嚙に示し給へば、大家俱に言承して、うち連立てぞ退りける。爾程に、安西出来介景次は、詰茂佳橋と共に、東六郎辰相が宿所に留められて、下知状を等程に、姑且暇ありければ、佳橋は、主の清澄が、宅眷に陣中の趣を、告知せんとて出てゆきぬ。又出来介は、この年來、淺からず交りたる、荒磯南彌六が安否を訪ふて、今番館山攻の勝敗を、告て他を慰めばや、と思ひにければ、こも只身單、荒磯が宿所に赴きしに、折よく南彌六は宿に在り、遽しく出迎へて、先その恙なきを、祝し祝され、饗應は外飾もなき、灶兒に蒼柴折燒て、茶を薦め酒を盪め、日刺鯛を酒菜にて、一霎時は憂を遣替す。盃の間毎に、南彌六は出来介に、陣中の得失を、問へば答て、然ばとよ。いぬる日初度の鬪戦に、御方は勢ひ克べかりしに、敵の軍師と聞えたる、女僧妙椿の魔風に撲れて、浦安牛助友勝は生拘られ、満呂復五郎は、深瘡を負ひぬ。當晩賊徒は夜撃に寄せしを、荒川主が伏兵をもて、夜撃の頭人と聞えたる、礪時願入業當と、奥利狼之介出高を生拘りしに、その後自他の生口を、交易の義によりて、鈍や、業當出高

を、賊徒に騙略られたり。是等の故に、急脚の、使价に、我と荒川の、若黨佳橋を差來されしが、おん下知を等程に、聊暇あるをもて、哥々、和殿にあはましく思ひて、悄々地に出て來つる也。といふを南彌六聞つゝも、憶ず腕を扼りて、それは完からぬ事にこそあれ。然るに敵に謀られながら、推寄て攻撃もせて、遙々這里へ脚力三昧、我陣中に在るならば、一個なりともうち向ふて、花々しく戰致せんに、孰も命の惜かるよ。と譏るを出來介推禁めて、さなひそ。那女僧は、神出鬼没の手段あり。力技にて勝れんや。といへば南彌六冷笑ひて必勝べき敵に克、必落べき城を屠るは、誰も皆よくすべし。その克がたき敵に克、落しがたき城を抜くを、寔に勝といはましくのみ。和主、年來の好を違へず、縦命を捨るとも、我を資けて共侶に、忠臣義士と喚れんと、思はゞ機密を談ずべし。又人並に命を惜みて、急遞脚の一役を、面目也と思ひなば、和主を憑ず。とくくゆきね。といふを出來介聞あへず、哥々は痛く醉たるな。いはでもしるき事ながら、我先祖は當國にて、世々一郡の主なりしに、景連が不義により、家は迹なく亡びしを、我その流を汲む甲斐に、切て昔の錢ばかりだも、いかで再興さん、と思ふ心を知らず貌に、しかいはるるこそ恨みなれ。初我認て、素藤に従ふて、勉が與に刺客と、なりて瀧田の老侯を、狙撃まくせし折に、和殿も俱に義の與に、命を惜まて幫助となりしに、今又和殿の一大事を、資けずは男子にあらず。何事まれうち出しね。不忠不義の伎倆ならずは、憂を分ちて、死を俱にせん。さのみ疑ふことかは。と誓ひを示す心の誠に、南彌六面を和けて、外面見出し、門の戸を、闔てふたたび坐を占て、額を合して悄語くやう、和主もおもへ、我々が、曩に富山で神童に、生拘られたりし時、命は既になきものなりしに、老侯御父子の仁心深く、罪を宥め頸を接して、月俵をさへ賜りぬる、這再生の大神恩を、稟つゝ人に捷れたる、忠も盡さず義に仗らずは、富山で大江に撻れし折、那儘死ぬるを優りとせん。此は是我日屬の、志なるものから、當初和主門は、素藤に従ふて、富山の情由さへあるなれば、御方の士卒が疑んとて、三人を一人遣されて、この時、軍役に、漏れしは我身の貧乏。武士ならねばとて、心まで、見

貶されしは情なし、いかで我、素藤を、撃捕る事のあるならば、君侯はさら也、家老達、猫見も鵜氏も眼を潰して、稀なる義烈、と翫て思はん。しからんには貳なき、命を其首に喪ふとも、名は後の世に遺るべし、とは思へども素藤に、仕へし事なき我身なれば、那兇黨に相識あらず。何をよすがに館山の、城内へ入ることを得て、謀りて素藤に近づくべき、と獨肺肝を摧きしに、今日究竟の便宜を得たり。なれども我身單にては、なほ事足らぬ所あり。いかで和主を相譚ん、と思ひし折に訪れしは、大望成就の祥なれ。忠義の與には百稔の、命もいよく惜からずや。とふたたび問ふを聞あへず、开は又諄し、我も武士也。火を踏み水に淪むとも、なてふ和殿を資ざらんや。快々機密を告よかし。といふに南彌六點頭て、便宜といひしは、別義にあらず。和主も而善りてあらんずらん。いぬる比我々が、久しく禁獄せられし程、同じ獄舎に繋れたる、鳶野戸郎六、と喚做たる罪人は、人を殺せし強盜也。積惡既に分明なれば、今日長須賀(安房郡)に在り稻村を距ること西北一里許なり)の申明亭に、梟首せらるゝと聞えたり。しかるに件の戸郎六は、俗に云他人の猿背にて、その面影は、左なる、頤の黒子まで、荒川主によく肖たり。年の齡も相應しくて、五十許に見えたれば、こは我與の奇貨、今宵我はその首級を、竊て館山へ赴くべし。和主も亦殿臺なる、御方の陣屋へ還りなば、先館山の城内へ、内應の箭書を射入れて、筒様々々にいひ誘へ、同志の乾兄、荒磯南彌六と喚做す者と、俱に清澄の寢首を捕て、今宵夜半に持參せん。その折はやく城門を開きて、入れさせ給へ、とその書に寫さば、素藤必信容れて、首級實檢をすべしとて、我々兩個に對面せん。その折俱に七首を、懷に躲し近づきて、素藤をだに撃捕らば、その餘の奴們幾名ありとも、殺散さん事易かるべし。恁て火を放て暗號を做さば、荒川主その火烟を見て、こは敵城に變あるならん、と猜してかならず攻入るべし。かくの如くなるときは、事十二分の造化なるを、那妖尼がその機を査して、敵に毫も由断なく、其頭の田地に至らずとも、對面だにせば、素藤を撃果して戰致せん。哄計りて那城内へ、入ることは和主に在り。既に入て、素藤を、撃捕ることは我にあり。機密といひしは、只是のみ。

甚願この義をよくせんや。と又他事もなく弄き示せば、出来介听つゝ歡びて、そは又得がたき妙策也。箭書の事はころ得たり。和殿明日那地に追らば、普善の邊の蘇々利なる、葦野にて我を等わ。翌の夜艾共侶に、館山の城へ赴ん。とはいへ、人の心術はかり、安定ならぬものはなし。始は我、素藤が、與に老侯を刺まく欲りし、今は國守のおん與に、又素藤を刺まくす。善悪その差ありといへども、行ふ所は異ならず。俗に云内股膏藥に、似たりとて譏る人もやあらん。といふを南彌六推禁めて、人は何ともいはばいへ、暗きを去て明きに就く、昨は非にして、今は是也。一善一惡、我在り、世の褒貶に拘づらはんや。行ふ所は似たりとも、惡を資けて榮んより、善に與して死んこそ、大丈夫とはいふべけれ。後を見かへることかは。と諭せば出来介又異議せず。然らば和殿は、明日悄々地に、郡首級を携て、黄昏までに迹より來よ。我は守の下知狀を、賜りて又通宵、騎馬にて還る路なれば、翌の且開に御方の陣へ、歸著せん事疑ひなし。約束をな違へそ。と示し合しつ、立別れて、東の宿所へ退りけり。爾程に、東六郎辰相は、この日申牌の左側に、稍宿所へ退きかへりて、隨即出来介佳橋門に、下知狀を遞與していふやう、這個の書簡の内には、館のおん自筆の扇子もあれば、いよく路次に小心して、兵庫助に遞與すべし。この餘の事は恁々と、町寧にこゝろ得さして、身の暇を拿らせしかば、出来介は書簡を、項に掛け別を告げて、佳橋と俱に又騎馬にて、始のごとくその通宵、速りに路をいそぎけり。然ば又南彌六は、今宵上總へ走るべき、用意を做す程に、先市に立出て、刃を擇て、一口の、七首を買とりたるが、倘宿望を得遂すして、命を喪ふ事あらば、我志空となりて、人は逐電せしと思はん。一筆遺すにしくことなし、と深念をしつゝ、素藤を、撃まく欲する宿意を寫して、硯宮の底に藏め、物既に整しかば、長き腋挿の刀を帶て、身甲をば袂に、包みてみづからは是を搭駝ひ、その曠昏に正門より、出て長須賀に赴きつ、申明亭に來て見れば、果して高野戸郎六は、既に首を刎られたる、首級は櫓に掛て在り。尙甲夜なれば、弁を成る乞兒に、憐りて手を下さず、其頭を徘徊せし程に、短夜はやく深初て、子一刻時候になる隨に、乞兒門

は退きて、守舎に入りけん在らずなりたり。南彌六これに便りを得て、溜びよりつゝ、戸郎六が、首級をやをら拿御して、手ばやく準備の編襖に、推裏み腰に附て、ゆくこといまだ幾ならず、思ひがけなき歧路より、突然と走り來るものなり。南彌六心驚きて、誰そや。と透し長視れば、怪しむべし一個の女僧、いと美麗しき少女子に、布囊を銜せしを、腕腋に楚と抱きたり。當下南彌六おもふやう、這奴は出家に似げもなく、必是拐兒にて、良家の女兒を竊みしならん。唯やは遣らん、と怵へぬ俠氣、近づく隨に立塞りて、鷹兎兒等。と喚禁めつゝ、肩尖抓て掖寄するを、女僧は鼻がず振放ちて、透さず中たる修練の拳に、南彌六は憶ずも、膝を撲して、苦と叫ぶ、聲もろ共に兵兵て、臂坐に撲地と仰反たり。浩處に一個の乞兒、捍棒を抜みて、南彌六が迹を跟て來つ、方僅這女僧が光景に、怯としながら持たる棒を、拿直し振抗て、耶と聲被けて撃んとせしを、女僧はやくも見かへりて、口に唱る咒文と俱に、乞兒は棒を持たる儘に、劬斗りつ二三間、後さまにぞ倒れける。恁ても女僧は少女子を、左に抱きて毫も放さず、右の手をのみ押らかして、腰に帶たる戒刀を、晃りと拔て、南彌六を、結果んと、立寄る折から、奇なるかな一個の神女、最大なる狗兒の背に、立つゝ富山のかたよりして、瞬息間に影向の、快こと宛箭のごとく、降集る雲を颯かして、忽然として件の女僧の、目前に立給ひしかば、女僧は吐嗟、と駭き怕れて、已ことを得ず戒刀もて、殺拂んと晃めかす、那時遅し、這時速し、神女は右の脚をもて、透さず女僧の胸前を、丁と蹴給ふ神罰觀面、女僧は一聲叫びも果す、搔抱きたる少女子を、放ちて仰さまに倒れけり。登時神女は、少女子を、狗兒の背にうち乗して、又雲を踏み、中天に、うち升りつゝ身を翳して、往方も知すなり給ふ。恁りし程に南彌六も、乞兒も俱に我に復りて、神女の奇特を見てしかば、いよく驚き且畏みて、一霎時は仰き瞻送りしが、那女僧も亦執地ゆきけん、搔滅す似く見えずなりたる、外の奇怪に空骨折ぬる、乞兒は、なほも南彌六が、立ち得去らでありけるを、星の光りに透し見て、撃ん、と棒を搔拿て、走り蒐るを、南彌六は、閃りと避て兩三番、空撃させて衝入る剽姚、足を飛して蹴と蹴る。蹴



(む 挑 に 夜 烏 人 三 ず ら 知 も 惡 善)

られて乞兒は阿とばかりに、死活は知らず轉帳を、見かへりもせぬ南彌六は、足に信する星月夜、鎌倉山にあらねども、奇異にあふぎがやつ鐘、數へもやらず夏の夜の、いと深ては明易き、七ツと六は十三里、熟れし路とて遙なる、上總を投て走りけり。不題再説。素藤は、妙棒が、幻術の幫助により、討手の大將清澄門を、思ひの隨に眩惑して、前日那隊に生拘られたる、願入と狼之介を、略復したりければ、歡ぶこと大かたならず、この勢ひを拔ずして、殿臺へ推寄て、清澄を撃捕てん。尼姑も俱に出陣して、例の風もて敵の士卒に、息をな吻し給ひそ。といふを妙棒推禁めて、惱り給ふな、开は夕かり。咱儕が起す猛風は、野戦に利あれども、屯を撃つに妙ならず。且殿臺は、その地高くて、敵を隈なく直下せば、箭を發ち石を擲つ、他に利ありて躬方に利あらず。況三社の名神あり。就中正八幡は、源家の氏神なるをもて、我術も亦思ひの隨に、行ひがたきよしも

ありなん。清澄鋭く謀られて、生拘二名を復せしかば、必怒りて推寄せ來つべし。その折に又風を起して、颯るゝ處を攻撃たば、漏すことなく颯にせん。既に奇隊を殺拂はゞ、その勢ひをもて稻村へ、攻入らんこと易かるべし。と諭せば素藤感服して、敢又兵を出さず。馳て礪時願入と、奥利狼之介を召よせて、那陣中の虚實を問ふに、件の兩個は、再生の、恩を稱て答るやう、清澄多勢にあらねども、士卒號令をよく守りて、使ふこと手足の如し。矧又高宗逸友們的勇士あり、侮りがたく候。といふに素藤領きて、然らば他が推寄來ぬるを、等て中途に逆撃ん。細作兒を遣して、敵の動靜を撈らせよとて、をさく準備をしたりしに、清澄は、推寄せても來ず、城中姑且無事なりければ、素藤は退きて、且も夕も後堂に在り。小人粵に暇あれば、妄想慾火と俱に起りて、遣るかたやなかりけん、うち戯れたる語次に、妙棒に弄くやう、恚いはゞおん身の與には、情薄きに似たれども、嚮におん身の法術をもて、大江親兵衛を追遣らせしより、我復此に據ることを得て、里見と牛角の軍はすれども、いまだ濱路姫を見ることを得ず。こも亦例の妙術にて、搔擾ひもて來給はゞ、我本來の望足りて、おん身は正室、他は側室、玉と黄金を左右の手に、持るよりなほ樂しからんを、まだ其田地に至りがたきは、抑甚麼なる因果ぞや。と諍説くを妙棒慰めて、しかおもはるゝは理り也。咱儕何てふ世間の、婦女子に等しく喫醋せんや。那少女を搔擾ふて、おん身の望を稱ん、と思はざるにあらねども、旌揚の始より、又大敵を引受て、日毎の軍議に暇なければ、まだ手の届かて黙止せしに、敵寄すべくもあらざれば、今宵稻村へ赴きて、翌の旦開に領て來なん。臥簾儲けて等給ひね。と輒きまでにいひ誇りて、出てゆく折告もせず、妙棒はその黄昏より、忽然と見えずなりしかば、素藤は、いはれし事の、違ひあらじ、と憑しくて、曉るを遅しと等たるに、次の日に至りても、妙棒はかへり來ず。こは那濱路姫の臥房の下へ、埋措せしと聞えたる、大江が靈玉ある故に、輒く便りを得かたき歟。いかに、と思ふのみ、人に問ふべき事ならねば、胸安からずありける程に、この日未下刻、後門を成る雜兵が、箭書を拾ひたりといふ訴あり。そは奥利本膳が夥兵なりければ、本

膳その箭を携來て、よしを素藤に告知らせしを、素藤は訝りながら、箭書を本膳に讀して听くに、こは安西出來介が、内應の密書にて、その書に云く

在下門、曩に安房の富山にて、里見義實を狙撃まくせしに、不幸にして犬江親兵衛に生拘られて、久しく獄舎に繋られたりしに、舊家の子孫たるをもて、義成竟に在下門を、饒して這回の軍役に従はしたり。この故にいぬる日より清澄の陣中に在り。しかれども、胡馬の北風に嘶き、烏鵲の南枝に巢るよしは、故を忘れざれば也。在下門已ことを得ず、姑且寛家に従ふものから、君に受たる年來の、洪恩を忘れんや。脱れ去てその大城へ、還りまらんと思へども、功なくば饒されがたけん。この義も計較はありながら、滿呂復五郎重時は、いぬる日の鬪戦に、流箭に傷られて、存亡不定なるをもて、商量敵にすべくもあらず。粵に同盟の義兄弟、荒磯南彌六と喚做す者あり。他は名だたる任侠にて、昨日安房より來にければ、隨即南彌六に密議を示して、遂に幫助に做す事を得たり。是により、今宵清澄の睡頸を捕て、陣屋に火を放て、暗號とせん。殿臺に火の起るを見給はゞ、はやくおん勢を找め攻撃て、岨にし給ひね。倘火を放つ暇なくば、清澄が首級を携て、南彌六と俱に推參せん。その折賞檢あるべきもの歟。愚衷寸楮に罄しがたかり。餘は拜謁を期しまつり候。誠惶々々、謹言。

とありけるを、素藤は兩三番、くり復さしつゝうち听て、現出來介が返思は、搗鬼ならず聞ゆれども、今の世の人心必とすべからず。衆議に依ることよかめれとて、益作願入、碗九郎、沙雁太、麻嘉六、狼之介們、この餘も都て頭達たる、兇黨を召聚會て、よしを告箭書を見せて、その意見を問けるに、大家半信半疑して、虚實を安定にいふものなく、評議區々なりけるを、平田張益作推禁めて、各何ぞ狐疑多きや。敵に伴りて、反忠の、内應を做す者の、火を放ちて暗號とせんとて、敵を切處に哄引寄せて、伏兵をもて撃破る、手段は和漢の軍書に多かり。恁れば安西出來介が、火を放ちて暗號にせんといふとも、這義は決して信すべからず。他則清澄の頭顱を捕て、南彌六共偕、身を脱れ

て、今宵當城へ來るならば、則是照照あり。強入れて實檢に、備ていよく相違なくば、はやく殿臺へ推參て、攻撃ときは射方の大利。敵に備なきのみならず、主將の横死に驚噪く、士卒は狩場の野雞に似て、逃るを緊く起稠て、岨にこそすべかんめれ。疑ひ惑ふことかは。と席を拍て論ぜしかば、大家俱に然也と答て、更に異議するものなし。就中素藤は、歡び信て、感じて已まず。益作にうち對ひて、與多論論せしな。然らば今宵更關て、那出來介が南彌六と、共偕に來て城門を敲かば、よく問極め内へ入れて、速に我に報よ。齎したる首級を實檢して、清澄に疑ひなくば、そは天の錫也。立地に出陣して、残る奴們を殺拂ん。其頭の準備もせよかし。と下知して評議は果しかば、兪こゝろ得て退出ける。話分兩頭。爾程に安西出來介景次は、詰茂佳橋と共偕に、稻村の城を辭し去りしより、その夜も歇はず馬をはやめて、次の日の朝未明に、殿臺へかへり來にければ、清澄によしを報て、下知狀をぞ遞與しける。これにより清澄は、逸友高宗們を招き聚合て、俱にその書を披き見るに、清澄們が請ふに儘して、急に城を攻伐つべからず。宜く寛の一字を守りて、敵の懈るを等べしとある、君命を傳られ、且義成主の自筆にて、寛の一字を寫せ給ひし、扇子を命令の證據にとて、清澄們に賜ひしかば、清澄は、高宗逸友們と、俱に賜を拜し相權びて、よしを士卒に洵示し、固く屯を成らして、一騎既の鬪戦を許さず。出來介佳橋を勞ひて、休息の暇を取らせけり。恁而安西出來介は、昨日南彌六に相譚れたる、約束を錯へじ、と思へば兩夕睡らざりける、長途の疲勞を醫してこそ、と尋思をしつゝ退きて、一霎時假寢の枕に就きしが、午後時候睡覺て、更に又思ふやう、今宵計りて、敵城に入るとても、敵にも亦その備ありて、計略行れずは、生て二たび還りがたかり。然るを御方に知るものなくば、忠義の與に棄し命の、狗死にならんのみならず、御方に今猶必勝の勢ひなければ、首鼠兩端の思ひを做て、又素藤に降參せし歟、と疑れもせば朽惜からん。然ばとて這回の機密を、人に告ぐべくもあらず。我子は一箇ありながら、尙總角にて、弓折塚なる、遠山寺に在るなれば、言遺すべき便りもなく、今般の對面は、いよくかたかり。只滿呂重時のみ、年來

貳なく交りたる、同憂中の友なれば、他に悄々地に告ずして、出てゆきなば我上の、聞えし折に恨みやせん、と思ふものから金瘡見なり、告なばおもひを増せんのみ。要こそあれ、と深念をせし折、傍に人のなかりしかば、館山の城へ射入るべき箭書と、今番南彌六に相譚れたる、忠義の趣恁々と、寫す遺書一通を、悄々にものしつゝ、重封皮しつ、それを懐にして、満呂復五郎が病牀に赴きて、稲村よりかへり來にける、事由を報知して、病痾の安危を尋るに、復五郎は深痕なれども、都て窮所にあざれば、死ざることを得たりしに、陣中は透間多くて、夜風を禦ぐに便りなければ、遂に破傷風になりしより、面色痛憔悴して、みづから身を起すこと得ならず。復五郎は、出來介が、火急の使价に擇れて、稲村よりかへり來ぬる、那里の首尾をうち聞くにも、人の功績の羨しさに、身の薄命をうち歎けば、出來介さこそ。と慰めて、昨日南彌六が宿所を訪ふて、對面せしよしを告れども、密議は秘して、些も知らせず、退き去らんとしたる折、復五郎が枕に建たる、小屏風の故たるが、外面破裂たるあり。こは究竟とおもふにぞ、懐にせし遺書を、手ばやく又取出て、件の屏風の、敗れたる處より、悄々地に裏へ挿入れつゝ、速しく退きて、休息所に見て見れば、明輩の雜兵兩三名、鏢膠放れたる弓を粘てをり。出來介他們にうち對ひて、酒家は火速のおん使价を、勤果したるにより、權且休足の暇を賜ひぬ。一兩日は所役なきに、いでや近き野に出て、求獲て野鶏を射て捕りてん。獲あらば和主們と、俱に今宵の酒菜にせん。酒調へて等給ひぬ。と實しやかにいひ誘へて、縲甲を著振、臂縛纏綴して、獵箭を腰にし、角弓を携て、外面投て出たるが、素より獵の爲ならねば、悄々地に小徑をうち遶りて、館山の城に近づきつゝ、樹柵の際より那這と、便宜の處を覘ふに、副門の乾に當りて、崖岸のいと高き、究竟の要害あり。這頭は都て切所を憑みて、成るその隊の兵の、多からじと見えければ、出來介はなほ那這と、樹間立潛き近くよせて、箭勢を量りて、準備の箭書を、三條まで射て入れまくせしに、そが二條は得届かず、一條は、擲を串き、又一條は、空懸の、頭へ果敢なく落ちたれども、最後の一條は、思ひの隨によく走りて、城の内に入りしかば、今は心

安かりき、と思へばはやく退きて、この日の暮るゝを等程に、近き普善藤々利村には、假來相識多かれども、然るに他們を訪はゞ、疑はるゝことありもやせん、と尋思をしつゝ、人煙なき、山邊を獨徘徊して、この日を工夫に消しけり。單表荒磯の南彌六は、昨宵安房なる長須賀の申明亭にて、梟首の盜兒蔦野戸郎六が、首級を擲獲たりしより、通宵路次を急ぎて、この日未下刻時候、上總の館山の城近き、普善村に來にけるが、這里なる枝村に、字を乙接と喚做すあり。この地方の農戸に、阿彌七と聞えしは、南彌六が弟なり。他はその心術、兄南彌六と同じからず、最老實なるものなれば、畔作にのみ身を入れて、要なき友を得まく欲せず。こゝをもて家兄の荒磯が、年來左右に事を好みて、専々俠氣を旨とすなるを、よからぬ所行ぞと思ひしかば、折に觸ては諫めしを、南彌六は歡ばず。是より迭に疎濶になりて、又年來を過すものから、南彌六は今さらに、骨肉の情なきにあらねば、肚裏に思ふやう、今宵我計れる如く、賊首素藤を討捕獲ずは、命は其里になきもの也。這里まで來つゝ我弟に、逢はてこの日を空しく消さば、後に悔しき事もあらん。一霎時那里に立寄て、暮るゝを等ば、一事兩用、これに優たる便宜はあらじ、と尋思をしつゝ、然氣なく、乙接村に赴く程に、阿彌七は野田拵ぎして、晝食たうべに還る折、料らず南彌六に逢ひしかば、迭に歡び無異を祝して、纏て宿所に相伴ひけり。然ば又阿彌七が妻は、這胞兄弟の從母妹にて、名を落間と喚れたる、心操歹からず、萬事に誠あるものなれば、絶て久しき良人の兄の、來ぬるを歡び出迎へて、手ばやく先上坐に、花筵を布き、請登して、猛可に酒を盪め饌を調へ、良人と俱にこの日屬、人の噂に聞たるよしを、いひも出、又問ひ慰めて、恙なかりしを壽きたる、欸待等閑ならざれば、南彌六も亦歡びて、その身安房にてありし事、國主御父子の仁慈にて、助りがたき命さへ、饒されたりける洪恩德義の、首より尾まで、簡様々々、と説示せば、阿彌七落間は聞く毎に、且驚き且感じて、是に就ても叛逆人の、速にも滅亡ざるを、愷しとのみ思ひたり。却這阿彌七夫婦の中に、兩個の男兒あり。そが冢子を阿彌太郎、次を増松と喚做したる。阿彌太郎は十三歳、増松は十一歳になりぬ。折から普善村なる

何がし院へ、手習にゆきたりけるが、目今かへり來にければ、二親は云云と、告て給仕に侍らしつ、兩個の兒子が手習の、做書冊子をうち開かして、南彌六に見せなす。登時南彌六は、久しく見ざりし兩個の侄の、思ふに優ていといたう、大きうなりしに胆を潰して、そが做書を左見右見るに、弟の手筋優りたり。且阿彌太郎は、農業に疎からず、又増松は、武藝を好みて、その師を得まく欲すれども、相應しからぬ技なれば、親は只顧推禁めて、許さるべくも侍らず。と問すがたりに母親の、告るを南彌六うち聴て、そは憑しき事なりかし。就て我亦思ふよしあり。阿彌七も聴給へ。知るごとく身は孤獨にて、娶らざれば子はあらず。然ばとて後なきも、亦是人たる道ならねば、願ふは増松を我に取らせよ。我身今は幸ひに、稻村の城に召置れて、月俸を賜れば、功あらん折御家臣に、なされん事疑ひなし。這回この地にかへり來ぬるも、守の密旨を奉りて、殿臺の陣中へ、おん使に立たる也。恁れば逗留久しからず、明日は稻村へかへりまゐらん。非如約束したればとて、今番伴ひゆくにはあらず。我發迹る日のあらば、その折にこそ喚喚るべけれ。甚麼この義を饒さんや。と他事なくいはれて、あるじ夫婦は、理り也。と承歡びて、更に又異議に及ばず。俱にその意に儘せしかば、南彌六は懐にせし、勅吐の財囊より、圓金十兩とり出して、阿彌七夫婦に與へて、圓金四五兩出し薦めて、こは和主們へ土産の代也。受收め給ひぬ。といふを阿彌七左右なく取らず、なほ云云と推辭しを、南彌六聴ず、頭を掉て、そは又無益の口誼也。咱家年來那這となく、許多の友に交りたれば、錢財を喪ひしことも少からず、得たることも多かりしに、今は爾る友のあらねば、喪ひもせず、得ぬることなけれど、稻村殿に召置れて、俸祿を賜る身にしあれば、恁ばかりの貯祿は、あらずとて事を缺んや。推辭む事かは。といひ諭して、頻りに薦めて已ざりければ、阿彌七落間は辭難て、受載きつゝ歡びを、陳てやうやく收めけり。恁而南彌六は改めて、先づ松に、盃を取らして父子の義を結ばば、實父母さへうち笑れて、千飲樂とぞ稱ける。是より饒る盃の、數幾

番か異なる間に、南彌六驚く辭たりければ、おもはずも懸臥で、田の暮ぬるをしらざりけり。臥にして南彌六は、懸臥の時に覺しかば、遽しく身を起して、阿彌七を喚ていふやう、不覺なりき、痛醉けん、憶すもはや日は暮たり。我私の旅ならねば、今宵を這里に曉がたかり。快罷らん。と告別して、立出んとせし程に、落間がはやく聞著て、準備の饌をもて來つゝ、一霎時と留めて薦めぬる、夜食の箸を拿ざらんも、人の情を思はぬに似たり。陽には急ぐ面色すれども、時なほ早しと思ふにぞ、更に又坐を占て、飽までにたうべ果しかば、歡びを述、再會を、契りて遽しく出てゆくを、阿彌七落間は、兩個の兒子と、俱に門まで目送りけり。爾程に南彌六は、駝搭來ぬる身甲、掩膊脛盾の一裏と、又那野野戸郎六が首級は、嚮に阿彌七許ゆく折に、往還稀なる山蔭の、舊朽木の樞の内に、深く秘し措たりければ、先その處へ赴きて、裏を開き身装して、首級を携へ、夜に紛れて、安西出來介に約束したる、董野に來て見れば、出來介はやく等てをり、迭に歡び相近著て、準備恁々と聶き示す、閑談に時も移りて、夜は子の時候になりしかば、卒とてそが儘うち連立て、館山の城へいそぎけり。畢竟南彌六出來介が、計りて敵城に入るに及びて、事の勝敗甚麼ぞや。开はこの處の出像を看ても、大略は猜せられんを、猶も具に知まく欲せば、又這次の卷に、解分るを聴わかし。

第一百十四回

義俠元を瘞て郭號を遣す
神靈魔を懲して處女を全す

却説安西出来介は、荒磯南彌六共侶に、當晩館山の城の副門に來にければ、城門を遽しくうち敲きて、やよ當城の人々にもものいはん。是は安西景次と、荒磯南彌六們て候也。嚮に忠告の箭書をもて、案内仕て候へば、事情を知られたるべし。稟しよしの錯ふことなく、寄隊の大將清澄が、寢首を捕て來ぬる也。快々内へ入れ給へ。やよ頭の殿(素藤をいふ)へこれらのよしを、稟し給へ。と喚りけり。登時這隊の雜兵們、闖の窓より透し見るに、豫面善れる出来介にて、その餘は件の南彌六なるべし、兩個の外に潛び來ぬる、敵ありとしも見えざれば、則ち腰問料すに、疑ふべくもあらざりけり。因て這隊の頭人たる、奥利本膳に報知して、總て出来介南彌六を、城内へぞ入れにける。有恚し程に本膳は、隊兵を領て出て來つ、即便兩個の降人なる、安西荒磯に對面して、その來路を尋るに、いよ／＼紛れあらざりけり。然ば又素藤は、嚮に安西出来介が、返忠の報ありしより、然しもたのもしからぬにあらねば、更闖たれどもいまだ睡らず、専々事の準備を下知して、吉左右什麼、と等程に、果して子の半を過る時候、出来介南彌六共侶に、荒川清澄が首級を齎して來ぬるよし、その聞えありしかば、歡ぶこと大かたならず。しからんには我實檢して、殿臺へ推寄せてん。先實檢を急ぐべしとて、股肱の兇黨を召集合るに、各準備の事なれば、平田張益作、時願入、淺木院九郎、奥利狼之介、名幕沙雁、太仙歌、麻嘉六に至るまで、愈身甲に軀を固めて、問注所に集合たる、局の内に

は免竟の、雜兵三四十名、器機執て非常に備ふ、用心素より等閑ならず。極刑たる殿臺は、兇星の衝く懸懸突て、滯す限なく明かりける。上坐なる重席の上に、錦綉の柵兒の、可已時なるをうち布て、大將著坐の備とす。素藤も立出て、はやく席に就く程に、奥利本膳盛衛は、出来介南彌六を相俱して、既に問注所の縁頼に來にけるが、相從ふ力士五六名、件の降人們が左右に立て、止々と禁めて推縮坐るを、大家ひとしく見かへれば、降人の沿習にて、腰には寸鐵だも、帯ることを饒されねども、南彌六が面魂、一癖あるべき者とおほしく、年紀は四十許にて、骨逞しく身長印かり。身には仁田山袖の、紺と褐と二條を、迭代に染做たる、繩目形なる夾衣の、下には兵庫鑲衣の、帛布裏なるを被籠て、毘舍門掩膊の鞆掛なるに、十玉頭の脛衣して、煤竹色なる、圓括の帯を三重繞らして、鴨尻にぞ締びたる。右手に抱きし、袱包は、清澄の首級なるべし。前面を信と見互して、阿容たる氣色なかりけり。又安西出来介も、身甲に針臙盾して、遠山形なる身纏を被たるが、此も亦腰刀は、入る折本膳に遞與せしかば、既にして無刀也。登時臺田素藤は、本膳が披露を等す、眼を睜り聲を被て、返忠の降人安西景次、又一人は、同志の降人、荒磯南彌六とやらなる歟。曩には若們我與に、安房の瀧田に赴きて、里見義實を刺まくせしに、反て敵に擄捕られ、剩那隊に從ふて、我に向ひて弓を彎きしは、獅子身中の虫に等しき、悖逆の罪饒しがたかり。しかるをやうやく先非を悔て、みづから新にせん爲に、寄隊の大將荒川兵庫清澄が首級をもて、歸降の饗にせまく欲する。返忠に詭りなくは、罪を宥め功によりて、舊のごとくに做養れん。件の首級を齎したるや。と問へば出来介額を衝て、然候。愚衷のよしは箭書をもて、嚮に聞えあげたれば、今又具に稟さんは要なし。相俱したる刎頸の一人、荒磯南彌六が、幫助によりて、清澄が首級を持参せり。いかで實檢に備まつらんとす。嚮し給へかし。といふに素藤領きて、そはこゝろ得たり、快もちね。快々。といそがせば、南彌六は阿と答て、持たる裏を解かけて、找近づかんとせし程に、本膳はやく遮り止めて、やをれ南彌六不敬也。首實檢には法式あり、自身の披露を許されんや。そが儘酒家に遞與しね。といふ

を南彌六冷笑ひて、驚たる事をいふ人かな。陪臣なりとも清澄は、則國主の名代にて、當所討隊の大將なるを、我門纒に兩個にて、人にしらせず開が首捕て、當城に來ぬる押きは、類なかるべき大功なるに、人傳に見せまらせんや。烏辭なることを。と敦圀くを、本膳听かず、頭を掉て、禮儀に疎き田野の匹夫、這里にて自由は做しがたかり。實檢を透られて、虚實分明ならんには、大功ともいふべけれ。然ば虚實を知らるゝまでは、誰か小心せざるべき。そを遞與さぬは價首敷。烏辭なることを。とやりかへすを、素藤聞つゝ聲を被て、本膳が遠慮、その理あり。然とて他を怕るゝにあらず。南彌六は首級を遞與して、共侶に近く找みわ。問ふべき事のありもやせん。饒々。と鷹揚に、いはれて南彌六欣然と、應をしつゝ復礙議せず、裏みし首級をうち開きて、卒とて遞與すを、本膳は、準備の首函にうち乗して、捧げて找む後方より、南彌六も亦膝を找めて、素藤に近づくこと、間六七尺になりしかば、沙雁太麻嘉六推禁めて、こは不覺也、且扣よ。席を犯すは無禮也。やよ扣えずや。と制したり。爾程に素藤は、首函を曳よせて、熟視つゝ肩を擧めて、いぬる日我戰場にて、清澄を見たれども、その間遙なるに、他も兜を戴きたれば、面を認るに足らざりき。願八と狼之介は、潮に俘囚にせられし時、那陣に在りしかば、清澄を面善りたらん、近く寄て見よかし。といふに業當出高は、共侶に找み出て、件の首級を左見右見て、御説では候へども、我門那里にありし折、清澄が面前へ、牽れしは夜分にて、その後對面せし事なければ、這首と那面影と、似たることは似たれども、眞偽は稟上がたかり。といへば素藤點頭て、しからば沙雁太麻嘉六は、往る日使价に立し折、清澄に對面せしならん。好檢て眞偽を決めよ。と指揮に件の兩人も、膝を找めつ左右より、見ること約半响許、言語齊一稟すやう、いぬる日我門殿臺へ、赴きし折對せしは、高宗と逸友のみ。清澄は上坐にあり、正しく對面せしにあらねば、他なるべき歟、他ならざる歟、眼力届かず候。といふに南彌六焦燥て、噫鈍ましき人々かな。清澄は願八に、大きな黒子あり、こは昔人の知る所、其頭に心づかれずや。といはれて願八沙雁太麻嘉六、現その黒子は遠外ながら、正可に見おほえ候

ひき。といへば素藤、しからんには、其にましたる證據はあらじ、そは那里ぞ。と首函を、又賜寄する程しもありせず、南彌六はやく膝を找めて、黒子は左に候。といふよりはやく懐に、隠し持たる短刀を、見りと拔て了と撃つ、拳尖く素藤は、額を研られて仰反りしを、疊掛て撃んとすれば、大家ひとしく駭嘆きて、原來應危兒逃すな。と叫び群立つそが中に、沙雁太と麻嘉六は、南彌六が前後より、遮隔て組留るを、南彌六透さず振放つ、修煉の剽姚、怒氣奮勇、先に立たる沙雁太が、細頸撲地と擊落せば、柱難たる麻嘉六も、深痕を負ふて仆れたり。恚りし程に出來介も、懐劍はやく拔持て、俱に找みて南彌六を、資けて素藤を撃んと競へば、遣らじと柱る力士們を、當るに儘して殺拂ふ、這那必死の擇きに、願八益作碗九郎、本膳父子も度を失ひて、皆素藤を撃せし、と扶起しつ逃迷ふ、周章大かたならざれば、南彌六と出來介は、いよく機に乗る勢ひ猛く、敵手を擇まず殺結ぶ、然しも烈しき大刀風に、力士は多く痕を負ふて、仆るゝもあり俯すもあり。願八益作碗九郎、及本膳も狼も、猫も杓子も殺立られて、素藤主僕方に今、擊果さるべう見えたる折から、突然として金屏風の、蔭より顯れ出る者あり。是則別人ならず、八百比丘尼妙棒也。今這事の爲體を、見れども驚く氣色なく、手に先結ぶ祕密の印、口に呪文を唱る程に、南彌六倍と見かへりて、殺拂んと振抗る、刃は千曳の石より重く、手足猛に麻痺れて、眼眩きけん兵兵つゝ、臀居に挫と輾轉ぶ、响に駭く出來介も、術に中られ度を失ひて、筋斗りつ仰反れて、速には起も得ざりけり。恚る奇特に賊徒の老兵、狼之介們に至るまで、皆見かへりつ、機をとりなほして、得たりや應と共侶に、走り蒐れば南彌六出來介、身を起さんと悶搔けども、女僧の魔術に柳掛られて、脚なき蟹に異ならず、眼を睜り泡を吐く、遺恨遣るかたなかりける。そが中に南彌六は、刃を突き立、氣を勵して、立あがらんとせし程に、振閃かす衆兇の、白刃の光は夕立の、雨より繁く前後より、撃つ燒刀はこの世の別れ路、身は突齷になるまでに、鮮血流るゝ出來介も、おなじ枕に死てけり。登時願八益作は、先素藤を扶起して、喚活んとせし程に、妙棒はやく找みよりて、やよ人々諷き給ふな。唱儕金瘡の

神藥あり、一たび是を用れば、氣力清やかなるのみならず、瘡も亦隨て、癒ること速也。いでいひつゝ、懐より一包の、丹藥をとり出して、且素藤が、眉間の瘡に塗らしつ、餘るを口中に推入れて、水を求め沃ぎ下して、背を徐に拵る程に、素藤忽地息出て、膝組直して四下を見かへり、原來若們恙もあらで、那剛敵を撃果せしな。尼姑よ、還り給ひし歟。と問へば大家答るやう、既に知らせ給ふごとく、那南彌六が勅勇なる、出來介も亦思ふに倍て刃尖銳かりしかば、那御覽せよ、沙雁太麻嘉六、いへばさら也、夥兵們も皆辟易して、撃れたるもの五六名、瘡を負ふたるも尠からねば、殆難義に及びし折、料らず尼公の帮助によりて、兩個の冤家は那像く、撃捕候。といへば素藤眼を睜りて、憎むべし出來介奴が、恩義を思はて、寄隊の與に、飽まで我を欺きしは、南彌六よりも罪重かり。生拘にせば思ひの隨に、惡戮しにすべかるに、誅罰開里に至らざりしは、今さら飽ぬ心地はすれど、尼姑の帮助は千金也。尼姑は亦何等の故に、昨日は還り給はざりけん、我情婦はいかにぞや。と問へば妙椿含笑て、然ばとよ听給へ。いぬる日稻村へ赴きて、内外限なく覘ひしに、大江が在らずなりしより、障るものもなかりしかば、前宵人定りて、潛びて姫の臥房に近づき、喚覺しつゝ、迷して、出るを懸て搔擾ひて、長須賀まで來にける折、那荒磯南彌六が、其首に梟たる罪人の、首級をものしていなんとしたる、撞見首の事なれば、那奴が咄儂をあやしみて、引禁めんと角ひしを、拳一拵て仆せしに、後方に一個の乞兒あり、棒もて咄儂を撃んとせしを、近くはよせず逃走したり。登時咄儂思ふやう、這南彌六は相識ならねど、地方に名高る俠客なれば、我も粗認得たり。今は里見に従ふて、稻村の城に置るれば、こも敵がたの一人也。今更闕て罪人の、首級を竊取りたりし、事情はしらねども、這奴に姫を見られては、後の障りになりもやせん。結果るにしくことあらじ、と尋思をしつゝ、戒刀を、晃りと抜て、南彌六が、胸前刺んとせし程に、里見を護る髮鬼ならん、憶す开奴に、妨られて、刺も果さぬのみならず、懐儻や姫を拿復されて、剩胸を蹴られしかば、脆く一霎時も得堪ずして、そが儘其里に俯たるが、はやくも我に復へりてなん、影を撃しつ十町あ

まり、上總路投て走る程に、蹴られし脚の最腫う、痛みて堪がたかりければ、路の樹蔭に臥てをり。昨夜通宵、今日も終日、心ならずも氣を頷ひつゝ、時を移し日を過して、やうやく瘡り果しかば、日暮て开里を立出て、目今かへり來て見れば、敵の刺客とおぼしき、兩個の猛者が奮戰突戰、多勢に撓す克に乗る、そが一個は南彌六也、又那一個は出來介也。俱に認得れる奴們なれば、透さず秘術を施して、仆して躬方の甲乙に、討捕し侍りにき。と報るに素藤歡び感じて、今にはじめぬ事ながら、いと憑しき神術妙算、折よく還り給はずは、危かりしをよなき造化。恁まで微妙き活菩薩を、一霎時なりとも苦しめたる、その髮鬼とは何にかあらん、世の風聲に聞えたる、伏姫の靈なるべき歟。そは左まれ右もあれ、おん身の撲傷瘡りて、恙なきこそ愛たけれ。却今宵の騒劇は、那安西出來介奴が、内應の箭書をもて、簡様々々にいひ誘へ、子二刻の時候なるべし、荒磯南彌六共侶に、荒川清澄が首捕て、來つるといひしに計られて、召入れて對面せしに、實檢の折不意を撃れて、我すら痛病を負たるに、懼しきは尼姑の妙藥、疼痛立地に退きて、心地も生平に異らずなりにき。なほこの上に情婦を、搔擾ひもて來られなば、そは十二分の造化ならんに、拿復されしは月に雲、花に嵐の恨みにこそ。といふを妙椿聞あへず、そも又折のあるべきに、醜を得て蜀を臨む、情慾は且閑給へ。今さら思ひ合すれば、いぬる夜艾南彌六が、長須賀の申明亭にて、竊みし首級は、清澄の、偽首にせん爲にこそありけめ。然とは思はざりしかど、敵の帮助になるべきもの也、結果んと欲せしを、果さて遺憾かりしに、這里にて終に討捕せしは、他が命運盡たる也。明なばはやく斬梟けて、寄隊に胸を潰さし給へ。里見父子を討滅して、安房も上總も手に入らば、おん身の隨意なりぬべき、濱足を急ぐ事かは。と慰められて素藤は、笑つゝ、匿點頭て、意見誠にその理あり。本陣は、南彌六と、出來介が頭顱を刎て、城外へ梟首せよ。寄隊の奴們よしを聞かば、さぞな胆を落すらめ。沙雁太以下の力士們的、撃れしは皆屍骸を埋め、尙息あるは扶退けて、尼姑に乞ふて藥を用ひよ。願八益作碗九郎、狼之介們は其隊々々の、成りをな懈りそ。寄隊の陣へは間者をもて、虚實を探りて注進せ

よ。我病淺きにあらわども、神藥寔に即效ありて、起居も既に自由を得たり。先や奥へ退きて、徐に將息すべきのみ。天は明ぬらん快せよ。と言語急迫しく吩咐て、卒とてやをら身を起せば、妙棒は又懐より、件の妙藥一包を、出して本膳に遞與していふやう、そは金瘡兒に取する也。一匙づつ分ち用ひば、死を起すもの多からん。とこゝろ得さしつ素藤を、扶けて奥へ入る程に、本膳その餘の老兇黨も、言承をしつ、歡びを、舒て齊一目送りけり。恁而本膳碗九郎門は、猛可に多く雜兵を、召登し下知を傳へて、金瘡兒を退け、屍骸を出し遣り、血に塗れたる席薦はさら也。寶子縁頼遺もなく、洗ひ流せ。といそがする。鬨聲果ての棒ならで、杓幾條昇入る、篋は迹のまつり事、譙樓の太鼓音高く、天は耿々と明にけり。休憩單表、這嶺山の城の囚牢司に、海松芽軻遇八と喚做す者あり、南彌六出來介が亡骸を、奥利本膳より遞與されて、梟首の爲に獄卒に、命じて首を斬らせしかば、城外へ出さして、梟並べんとて準備をせしに、南彌六が首級は眼を閉ず、恐れる面色活るが像く、見るだに、快らざるに、その首級猛可に重くなりて、拿揚ぐべくもあらずなりしを、獄卒驚怪みて、左せん右せよと罵りつゝ、索もて紐結り杓に掛て、擡起さんとしたれども、索は斷離れ、人は轉輾て、いよ／＼重くなりし事、千曳の石に異ならねば、大家呆れ手を又て、立團ひつ徒長視てをり。登時軻遇八思ふやう、この荒磯南彌六は、むかし安房にその名聞えし、洲崎無垢三が外孫なるよし、世の風聲に傳れあらず。那無垢三は、神餘の與に、逆臣定包を撃まくせしに、謬て光弘主を、犯して誅戮せられたる、當時の風聲を語り傳へて、這頭の人も皆知れり。爾るに今又南彌六も、里見の與に頭の殿を、刺まく欲りせし事成らで、矢庭に撃れし勇者の冤魂、終に首級に止りて、恁る奇特を顯すならん。我は小鞠谷の舊臣にて、已ことを得ず墓田殿に、仕へて今に至れるのみ、素より里見に恨みはあらず。恁まで奇しき首級と知りつゝ、なほ多勢をもて擡出して、強て梟首するならば、竟に我身に祟を稟ん歟、是も亦知るべからず。然ばとて明々地に、聞えあげなば疑れて、貳ごころあるものといはれん。然るときは是も亦、罪得がましき所行なるべし。要なからずや、と尋思をした

る、主意既に決りければ、思ふよしを恣々と、獄卒們に聳まし示すに、獄卒們も這年來、素藤が恩蒙りて、政の最苛きを、疎ましとのみ思ひしかば、大家異議なく承引て、その指揮にぞ従ひける。登時海松芽軻遇八は、恭しく南彌六が、首級に對ひ合掌して、肚裏に念ずるやう、荒磯大哥、本意なかりけん、遺恨さこそと猜したり。よりに和主の首級を梟さて、悄悄地に隠しまるらせん。和主の代には、躬方の一人、名慕沙雁太の首をもて、筒様々々に計ふべし。沙雁太が面影は、和主に肖たる所あり、且年齢も相應しければ、實に究竟の替貨ならずや。願ふはこの秘事を、人に知らせず、我身を護りて、罪をな得さし給ひそ、と諄返しつゝ祈る程に、獄卒們も皆共侶に、跪坐て一齊拜みけり。既にして軻遇八は、念じ果て身を起しつゝ、卒試に擡ずや。といふに一人臂力ある者、逸早く找よりて、首級に兩手をうち掛つゝ、矢聲を出して擡抗るに、始には似ずいと輕くて、瓜を採るより易かりければ、大家二たび訝りて、その靈あるに恐れけり。登時軻遇八は、事の奇特の憑しさに、敢てあやむこゝろなく、はやく南彌六が首級を隠して、後までも人に知らせず。襦に本膳が下知を傳へて、躬方の士卒の撃れたる、沙雁太を首として、その亡骸を北郭なる、山蔭へ皆瘞めよとて、そをしも既に遞與されたれば、悄悄地に沙雁太が首級をもて、出來介が首級と俱に、城外へ出し遣るに、殿臺の方へ距ること、五六町にして並樹の松あり、その樹の間廣かる地方に、兩箇の首級を並擧げて、獄卒們に成らしつゝ、更に又沙雁太們が亡骸を、北の郭なる山蔭に埋るに、皆是妻子もなきものなれば、是を來て見る者もあらず。素藤が恩恵に疎かる、士卒の上にも恁ること多かり。然ば沙雁太が首級には、鮮血多く染著たるに、面相の南彌六と、聊似たる處もあり。そを又鬢の亂髪を、顔へ揮掛などしつゝ、術よく假裝たりければ、敵も躬方も贖首なりとは、思ひかくべくも見えざりけり。只這一奇事のみならず、異日荒磯南彌六は、首級を當城の郭内に、葬らるゝことを得て、義俠遠近に聞えしかば、そが墳墓あるにより、遂に郭の名に負して、荒磯郭と喚做しけり。こは是後の話也。爾程に這朝、殿臺なる里見家の屯には、昨日安西出來介が、野鷄を射て捉んとて、弓箭を携へて出たるが、

今に至るかへり來ず、他は御方の不利を見て、舊好あれば、素藤に、降参したるならんといふ、衆議の訴に及びしを、清澄聴て頭を敲け、出來介が不義と不義ならぬは、皆是推量のみにして、思ひ合するよしもなし。快館山の城の邊へ、間諜者を遣して、他が往方を探らせよとて、心利たる雜兵に、下知して悄々地に遣せしに、いまだ幾程もあらずして、其者聽てかへり來つ、却清澄に報るやう、小可密旨を承まつりて、館山を投し赴く程に、城より五六町這方なる松原に、斬梟たる首二級あり、敵うち成れば憚りて、樹間を潛り近づきて、熟視れば梟首の者、一箇は安西出來介也、又一箇は御方にあらず、いぬる日素藤が使に立て、兩個の生口、業當と、出高を驅略たる、名幕沙雁太に彷彿たり。恠れば那出來介は、敵に降参せしにはあらず、擊れたるにて候。といふを清澄うち聴て、原來安西出來介は、拔駈して擊れし歟、然らずば賊徒沙雁太が、出來介に内應して、那城内へ引容けんを、事發覺れて兩個ながら、擊れたるにぞあらんずらん。そは左も右もあれ、一人也とも御方の首級を、當陣近く梟られながら、知りつゝ聞くべきにあらず。开を成る賊徒を蹴散して、首級を奪取るべしとて、事の準備を急しつゝ、則田稅逸友に、二百餘名の士卒を授けて、那松原へ遣しければ、逸友隨即馬をはやめて、推寄せつ、士卒を找めて、咄と嘯て駈散せば、首級を成る獄卒們は、驚嚇して逃走るを、一町餘り趕蒐て、开が一人を生拘りつ、兩箇の首級を雜兵に、持して殿臺へ退く程に、館山の城兵們は、敵出たりと聞知りて、擊果さんとて罵噪げども、猛の事にて合期せず。左右する程に、趕れたる、獄卒們が逃て來つ、寄隊は首級を奪略りて、はや退きぬ。と報げしかば、擬勢いたづらになるものから、素藤は始より、毫も諜がず冷笑ひて、清澄們が不能なる、敵の首を捕得がたさに、斬梟られたる他們が躬方の、首を奪ふて手柄と思ふ歟、いと烏滸也。と嘲りて、心いよく驅りたり。然ば又海松芽軻遇八は、寄隊の爲に獄卒一名を、俘にせられしと傳聞て、肚裏に思ふやう、噫某甲が貧乏圖なる、寔に不便の事なれども、寄隊に首級を奪れしは、反て我身の幸ひ也。然ては件の替賃を、敵こそ知らめ、解方には、いよゝ知るよしなからん、と尋思に胸はうち鬱けて、

後安くぞおもひける。恠りし程に、殿臺には滿呂復五郎が、その身の看病に練られたる、雜兵をもて、訴あり。清澄隨即其者を、召近づけてよしを問ふに、雜兵のいふやう、安西出來介が擊れしよしを、復五郎も洩聞て、うち驚きつ枕邊なる、小屏風に手を掛けて、辛して立まくせしに、憶ず屏風を推倒して、登し掛りつ推破りたる、屏風の裡に書翰あり、この折に顯れ出しを、見れば出來介の手迹にて、寫遣し申事とあり、因て私に開封せず、そが儘呈閱仕りぬ。さて又昨日出來介は、復五郎が病痾を問ふて、晤暉の趣、箇様々々、恠々に候ひき。憶ふにその折復五郎が、枕邊に建たる小屏風の、外面破れてありければ、出來介悄悄地に开をうち見て、件の書翰を刺入れたる歟、是よりの外今さらに、思ひ合すること候はずといふ、復五郎が告訴のよしを、清澄聴つゝその書を奪て、聽て封皮を折き見るに、荒磯南彌六が義侠の事、又安西出來介は、郷に稻村へまゐりし折、南彌六に相譚れて、俱に素藤を刺まく欲する、計略は箇様々々。と偽首の事、箭書の事、その崖略を誌著て、倘不幸にして事成らで、我々二名擊れば、この義を人のしるよしなくて、敵に降参せしなめり、と疑れなん事のしさに、一筆こゝに遺すもの也。異日這書を見る人あらば、稟し給へ。とありけるを、清澄屢讀復して、感ずる事大かたならず、聽て高宗を招きよせて、よしを告て談ずれば、高宗も亦訝りて、南彌六出來介義侠をもて、館の洪恩を報ぜん與に、敵城に入りて戰歿したらば、梟首執か免るべき。然るを一個は南彌六ならで、沙雁太の首級ならんには、咱們もこゝろ得がたしと云、その詞いまだ訖らず、田稅力助逸友は、那首二級を奪取り、それを成る敵の雜兵一名を、生拘にしつ、士卒を領て、はやくもかへり來にければ、清澄はその即功を、賞て高宗と共侶に、先その兩個の首級を相るに、そが一級は出來介なること、今さら疑ふべくもあらず。又その一級は、南彌六が首ならず、果して名幕沙雁太なれば、隨即件の生口を、牽出さしてこの義を問ふに、愚果べくもあざれば、おそるゝ陳するやう、既に猜し給ふごとく、那南彌六も戰歿したれと、そが首級に靈ありて、始は擡げがたかりければ、館山の獄吏、海松芽軻遇八が密に計りて、那折南彌六に擊れたる、沙

雁太が面影の、聊肖たる所あれば、這那首級を入替て、梟首の數に充し也。又南彌六出來介が、素藤を撃まくせし折、その爲體は箇様々々にて、藁田は最初に瘻を負て、既に危かりけるに、女僧妙椿が幻術もて、急に射方を補助しかば、兩個の猛者は武勇を折かれ、進退猛可に自由ならで、遂に多勢に撃果されて、梟首に及び候ひきと云、招了分明也ければ、逸友高宗、いへばさら也、清澄連に感嘆して、思ふに優たる南彌六出來介が忠魂義胆、恠てこそ乃祖々々の悪名を、雪るに足るべけれ。就中南彌六は、その靈首級に住りて、梟首を免れし勇者なれども、那妙椿が幻術に、不意を撃れて克がたかりしは、是命運の致す處歟、惜むにも猶あまりあり。這生口は眞にも足らぬ、獄卒なりと聞きしを、誅するとも何の益あらん。意にその獄吏、軻遇八とやらんが祟を怕れて、南彌六が首級を隠せしは、這方の與にせし事ならねど、亦憎むべきものにあらず。因て這生口は、放ちてかへしいなすべし。且沙雁太が首級は要なし、こは家裏に取せんず、快もてゆきね。と、言示して、そが細綁の索を雜兵に、解して馳追立れば、獄卒は恩を稱て、宛鼠の逃るがごとく、館山を投てかへりゆく程に、返されたる沙雁太が、首級を城へ齎しては、奇也といふとも妙ならず。と、呟きつ路傍なる、沼田の中へ投棄しを、猶底深く踏入隠して、立かへりし折軻遇八にのみ、秘密を誦き報にけり。間話除繁、爾程に清澄は、高宗逸友們と商量しつ、南彌六出來介が忠死のよしを、館へ聞えあげんとて、更に又詰茂佳橋に、連署の呈書を齎して、稻村へ遣す程に、滿呂復五郎重時に、出來介南彌六が事の趣、恠々也と告示すに、尙起ことを得ざる金瀧兒、復五郎と共に四五名あり、他們は都て佳橋に俱して、稻村へかへし遣さん、徐に將息せよかし。と命じて各徒騎に乗して、看病の雜兵幾名歟、縁て安房へぞ還しける。事の差配は是のみならず、安西出來介が首級をば、程遠からぬ山院へ遣しつ、町寧に葬らしたる、墓表朽せず世々に貽りて、人その義俠を稱えけり。こも亦後話也。是より先に、稻村の城内には、荒川兵庫助清澄が、殿臺の陣中より、まゐらせたる使者、安西出來介詰茂佳橋を、かへし遣されける詰朝、濱路姫のをはしまさずとて、給事の女房們が、驚憂ひて辨よしもなく、

限なく尋まつりしは、黎明よりの事にして、往方をしるべき照驗なければ、已ことを得ず奥録の、老黨に告知らせ、終にはおん母吾孀前に、聞き上まつりしかば、母君驚き歎せ給ひて、うちも聞せず義成主に、訴稟させ給ふにぞ、義成も亦驚き給ひて、事の仔細を尋んとて、みづから後堂に來ませしを、吾孀前は立迎へて、閑室にて密談あり。然而宣ふやう、濱路が在らずなりけるは、昨夜半の事なりけんを、次の間に臥たりし、侍兒毎もこれをしらず、稍曉方になりし比、空しき臥簾を見出して、うちも諜し事なれば、往方は絶て知れず侍り。いかで士卒を部して、快々涉獵らせ給ひかねし。と詰も得果すうち泣給へば、義成主も嗟嘆に勝ず、眉を蹙て宣ふやう、這同の椿事も那物怪の、所爲にこそあらんずらめ。然すは深き窓の下に、且しくらせし少女子が、夜半に臥房を抜出て、那里へとてかゆくべきや。倘果してしからんには、縦追跡を蒐るとも、索逢ふことかたかるべく、命の有無も心もとなし。寔にしうねき物怪の、祟にこそ。とうち不娯給ふを、吾孀前推禁めて、そのおん恨みは理りに侍れど、奴家が思ふよしはしからず。濱路は大江親兵衛が、宿直の折より情由ありけんを、はやく遠離給ひしかば、慕ふて、惑ひ出たるならん。正しき證據の侍るか。といはれて義成又驚きて、そは亦甚なる證據のあるや。と問せ給へば、然ばとよ、濱路が在らずなりしより、往方をしるべき照驗に、なる東西のあらん歟とて、他が書案手匣などを、甲乙となく啓檢侍りしに、枕邊に置せたる、鼻紙臺なる紙の間に、親兵衛が濱路に贈りし、艶書一通侍りにき。那親兵衛は九歳といへども、心術大人備て、身長は年十五六の、少年にも優り侍れば、生情さへはやつきけん、思ひがけなき事にて侍り。と悄語給ふを義成主は、听つゝ歎息し給ひて、それにて思ひ合するよしあり。知られたれば慙すによしなし、我も亦いぬる比、親兵衛が宿直の夜艾、濱路が臥房の次の間に、他們が艶翰を拾ひ得たり。折から親兵衛は、其頭に在らず、臥房の方に男女の、悄語く聲の聞えしを、驚さんはさすがにて、怒を忍び退きて、獨つら／＼思惟るに、青年毎の惑ひにて、色情により生涯を、愆つものは世に多かり。就中親兵衛は、智勇兩ながら人に勝れて、當家に功ありしを、濱路は左

まれ右もあれ、只今他們が幸を糾して、可惜犬士を喪はんは、寔に不便の事にして、後に悔しく思ふこともあらん。快親兵衛を遠離て、他們が中を堰にはしかじ、と尋思をしつゝ、艶書をば、封も披かず焼棄て、人には知せず言を設て、その次の日親兵衛に、身の暇を取せしに、爾後那靈玉を、土中より拿出せし折、玉の失せしに疑ひ起りて、原來濱路と親兵衛が、不誼淫奔は、幻にて、そも物怪の所爲ならずや、と思ひ惑ふて決難しに、今又おん身も他們が艶翰を、料ずも得たらんには、濱路が逐電寔に由あり。我拾ひしはその夜艾、燒棄たれば、見すべくもあらず。今朝又おん身の見出せしは、那里にあるや、そも亦奇也。といはれて吾嬬前は面なげに、こゝに侍り。と懐へ、手を刺入れて出し給ふ、艶翰を義成受取て、ひらき給へば素紙也。是はいかに。と訝りて、返し給へば吾嬬前も、胸を潰しつ左見右見て、現不思議なる事に侍り、今朝憶もなく得し折に、見つるは素楮ならざりしに、文字の迹なく消耗せしは、そもや甚なる故なりけん。言疎忽に似て、倒に、いひ解よしも侍らずかし。とうち陪話給へば、義成主は、沈吟じたる頭を擡て、俺姊よ、おん身の疎忽にあらず、我拾ひし那艶翰も、亦その艶翰と異ならて、實は素楮なりけんを、封も折かて燒棄たれば、疑念を解くよしなかりしに、今朝又おん身の手に入りし、艶翰は文字の消耗て、紙のみ正可に残れるは、いぬる比直行直元們が、召返されし下知狀の、素楮なりしに相似たる、妖書なるを稍悟りぬ。こは親兵衛を遠離て、濱路を奪略まく欲する、素藤が與に計れる、那妙椿が幻術にて、這回も妖書を遣せしは、濱路只管情慾の、やる方なさに親兵衛を、慕ふて狂浮れ出たるなめり、と思せん爲也けんかし。それを鈍ましや始より、惑されつゝ親兵衛を、疑ひしより像賢に、出し遣りたる故にこそ、竟に守りを失ひて、濱路を奪略られけり。一期の瑕瑾を争何はせん、悔しき事をしてけり。と悄語きつ良將も、返すよしなき千慮の一失、おなじ惑ひは吾嬬前も、醒て甲斐なき子ゆゑの間に、嗶音をしのぶ夜の鶴、たゞまくをしき睡よりも、長き別れに堪難て、歎き沈ませ給ひけり。浩る折から巽なる、小坐席のかた謀しく、人の散動めく聲せしを、義成はやく聞著給ひて、那は何ぞ。とばかりに、耳を敲給



(す 悟 開 て 重 侯 見 里 失 一 の 慮 千)

ふ程に、給事の老女女房們が、遽しく來て稟すやう、方僅思ひがけなくも、東なるおん内庭の、樹柢深き邊より、五の姫君の忽然と、あゆみ出させ給ひしを、折から巽のおん縁頼に、單侍りし友禽が、心ともなく見奉りて、驚きつ歡しさに、聲ふり立て朋輩を、喚聚合つゝ皆共侶に、走下りつゝおん坐席に、迎入れ奉りて、却昨夜よりおん往方の、知らずならせ給ひしに、恙もまさて還らせ給ふ、事の顛末を問奉りしに、姫上答給ふやう、我身にこよなき厄難あり、昨夜は特に危かりしに、神の冥助を蒙りて、目今還させ給ひにき。是等のよしは家尊と母君に、見參して稟上てん。一霎時也とおん胸の、安からずをはしましけんに、快このよしを聞えあげよ、と仰によりてまゐり侍り。といふに義成主の歡びはさら也、吾嬬前は夢かどばかりに、憂ひを轉す哀みの、涙乾かぬ袖の上に、歡び涙堰あへず、女房們を見かへりて、そは又奇しき事也かし。對面してこそ詳なる、事由は知るべけれ。呬芽出たや。と宣ふ程に、濱路姫は奥隸の、老黨醫生侍婢

們、四五名に册れて、はやくも這里に來ましつゝ、身の歡びを稟し給へば、老黨老女女房們も、俱に壽き奉りぬ。登時義成主は、要なき男女を退して、濱路姫を身邊近く、侍らしつ席を賜ひて、吾嬬前と共に、奇異の安危を尋ね給ふに、濱路姫の宣ふやう、昨宵眞夜半時候也けん、奴家は熟睡したりしに、母君の御聲にて、連りに喚せ給ひしかば、覺るともなく應をしつゝ、遽しく身を起して、建たる屏風の外面に、立出て見れば、一個の女僧あり、思ひがけなき事なれば、吐嗟と叫ぶ程しもあらせず、矢庭に奴家を引よせて、楚と衝する布囊に、息さへ籠りて聲立ざりしを、左の脇に捉縛て、那里より出にけん、去向もしらすも去るゝ程に、既にして一里許、來ぬらんと思ふ比、路に一個の男あり、撞見頭に女僧を見て、懸危兒等、と喚禁つゝ、推提へんと立よりしを、拳一撃で仆したる、後方にも亦人ありて、棒もて女僧を撃んとせしを、呪文を唱へ、舳斗を打して、开をしも倒して、毫も諜がず、左手に刃を抜持て、始に仆せし一個の男子の、胸前刺んとせし程に、いと嬬娟なる一個の神女、最大なる狗兒の背に、尻うち掛つゝ、忽然と、虚空より降り來まして、女僧を遮留め給へば、女僧は怕れし面色にて、斫拂んと角ひもあへず、神女に胸を撲地と蹴られて、奴家を捐て仆れ侍り。登時神女は奴家が身邊へ、狗兒を找めつ奴家をも、乗せて翠天に升りつゝ、去向遙に俱し給ふ、快きこと宛箭の像く、風に撲れて布囊は、解けて地上に墜にけん、苦しきこともあらずなりにき。恁而神女は、雲の集る、高峯にやをら降立て、奴家が手を拿り扶掖て、岳峯に入り給ひしが、内はいと洞亮にて、月の夜艾に異ならず。この折神女のおん顔の、正可に拜れ給ひしかば、忝さの彌増て、問まつらんは惶さに、跪坐て氣色を伺ひ奉るに、神女は潮て妙音を、かけて慰め給ふやう、濱路よ、然のみな怕給ひそ。咱儂は那尼の類にあらず、過世は和女の親族にて、八犬士們が母なれば、今宵の厄を見過しがたさに、那惡物を懲たり。恁ばかりにては無明の醉を、醒すにいまだ足らざるべければ、具に告ん所ねかし。抑當國主義成は、その器其量親に劣らず、仁義の良將なるをもて、征せずして上總を従へ、下總半國をさへ駢するものから、天道は盈るを虧く、夷

灘一郡、館一城の、素藤が逆謀は、即天の警戒にて、小敵也とて侮りがたき、後鑿を示すに在り。こゝをもて咱身いぬる比、大江親兵衛仁に課て、老侯の厄を括ひまゐらせ、猶且藤田素藤門を、降伏の功あらせしかども、又素藤を幫助ぬる、邪魔の幻術大かたならねば、義成の明き鏡も、魔雲に曇り心惑ひて、鈍や大江親兵衛を、疑ふて遠離たれば、素藤二たび折を得て、又館山の城に據りにき。そをしも火急に攻伐さるは、義成が寛仁大度、士卒を思ふ故なれども、併素藤の、天罰その時いまだ至らず、仁を等て前功を、全うさすべき天機あり。もししからずは咱神力もて、素藤妙棒、いへばさら也、館山の賊徒數を盡して、颯にせん事の、かたくもあらぬ所行なるを、只那寬の一字を誨て、事を急がせざればこそ、妖孽屢起るものから、里見の軍威を落すことなく、缺損あるも死を免れて、畢竟に大害に、至らざりしを思はずや。今は禍鬼解除せられて、和女の上にも窮厄なく、賊徒は霜の解るがごとく、誅伏せん事疑ひなし。开も親兵衛を召返さずは、誰か亦よく那妖賊に、當りて克を一舉に奏せん。八個の犬士に輕重なけれど、先入なれば親兵衛を、疑はずして重く用ひば、餘の七犬士は招かずも、皆共侶に來會せん。所謂隗より始るよしにて、こも亦自然の理りなるを、悟らざりしは疎也。那素藤は、妖尼の、幫助ありとも小敵にて、心腹の患にあらず。然る小敵だも征伐に、その人を失へば、如意ならぬ事多かるに、異日倘百萬の、大敵西北に起ることありて、海陸共に攻寄來ば、房總諸城の守將成卒、悉皆解體せん。その折にしも八犬士の、幫助あるにあらざりせば、誰か亦よく大敵に、當りて那吳の周郎が、赤壁の克に倣ふべき。遮莫今番は義成の、やうやくに惑醒て、先非を悔る據あれば、咱言を俟ずして、親兵衛を召返すべし。素藤誅伏しぬるとも、後車の餘轍を忘るゝことなく、いよく犬士を重く用ひて、才略武藝に任しなば、那百萬の大敵も、怕るゝに足ざるべし。和女稻村へかへれる折、爹々にこの義を傳へよ、といと町寧に諭させ給ふ、示現にいよ／＼畏みて、頭を擡げ又伏拜みて、原來おん身は伯母君の、神靈にこそはすめれ。今にはじめぬ應驗冥助、得がたき御恩に侍るか。那八犬士の事はしも、奴家も豫聞知り侍り。そが中

に大江親兵衛は、六稔の程に身長の、いといたう大人備て、生年九歳とまうせども、十六七の少年にも、立優れるは甚なる故ぞ、と訝り思はぬ者も侍らず。この疑ひを解し給はゞ、好家裏に侍らまし、とおそるゝ問まつりしを、神女は听つゝ點頭給ひて、その疑ひは理りながら、非常の人には異體あり、猶靈木の一夜に生て、一夜に巨樹と成れるが如し。これ凡庸に異なる處、人も亦これに似たることあり。昔唐山東晉の時、安帝の義熙七年に、無錫の人の子、趙末といひし童男、年八歳、一旦身長の伸ること、暴にして八尺に至れり、且その鬚髯も蔚然たり、と晋書に載せしを思惟よ。宇宙の間往として、何等の物か對なからんや。恚れば異邦に趙末あり、今は我國に大江仁あり。世の人視聽に廣からねば、その事必なしとして、疑ふものゝ惑ひを解くべし。今はしも是まで也。二親のさぞ安からざらむに、快稻村へ還りねとて、送りに岳岨より出し給へば、已前の狗兒が等てをり、奴家を背にうち乗せて、雲を起し宙を走るに、駛こと宛駿馬の像く、這大城へ來ぬる程に、奴家は騎に堪ずして、憶ず狗兒の背より、滾びて大地へ忽然と、墜されて庭の樹間に在り。夢かと思へば、臥房にあらず、現かと思へば、覺ずしてかへり來たれり。然而あるべきにあらざれば、懸て樹蔭を出し折、侍婢毎の見出して、安否を問ふに、我を怪む、胸はやうやくおちる侍れど、そを知食よしもなき、物を思はせ奉りぬる、罪いと重きを争何はせん、饒させ給へ。と陪話給へば、義成主いよ、慚愧て、奇也々々。と稱給ふ。心はおなじ吾孀前も、奇しく愛たく歡しさの、神の冥助の辱くて、感涙の外なかりしを、側聞する老黨老女は、頭を擡げ目を注しつゝ、世に有がたき伏姫の、靈驗威徳灼然なる、奇特に心耳を洗れて、疑ふべくもあらざれば、憶ず俱に感嘆の、聲もひとしく尊みて、いと憑しくぞ思ひける。

南總里見八犬傳 第九輯 卷之十二分卷之上終

南總里見八犬傳 第九輯 卷之十二下

本輯は、第七卷百零四回より、第十二卷百十五回までの六卷をもて、中帙とせしよしは、第七卷の簡端にいへるが如し。しかるに這十二の卷は、楮數殊に多なれば、猛に釐て上下二冊とす。是故に中帙は七卷になれるなり。そを威影果るを俟ば、發兌の時に後れんといふ、文溪堂の好に盡して、七の卷より十の卷まで、四卷を中帙の上として、いぬる日既に發行したり。かくて十一十二の卷上下三冊も、權且中帙の下と唱へて、續きて今番出し訖ぬ。秩さへ上下に分ちしは、勿論一霎時の程にして、是より後は七卷を、一帙にして賣まくす。亦是書肆の請ふによれり。

抑大江親兵衛の列傳は、百四回の段左に起りて、今や百十五回に至るまで、いまだ全く説訖らず。後又二三回にして、八犬具足の卷に至らん。且八士全聚ふたりとも、物語尙多かり。看官明年全局の、大團圓まで閱しなば、日者此彼推量の、違るを知るよしもあらん。誰か作者の腹稿を、詳に探り得て、未發の後回を知れる者ぞ。茲に唯その一人あり、仰ぎて造化の小兒に問ふべし。呵々。

第一百十五回

前面岡に大刀自孝嗣を救ふ
不忍池に親兵衛河鯉を釣る

登時義成主は、吾孀前を見かへりて、俺孀子具に听給ひし歟。妖書の顛末今やうやくに、悟り得たりしのみならず、我女兒の神靈の、示現いよ灼然也、今さら何をか疑んや。這を听那を思へば、我謬の大かたならぬを、恥るにあまらるものから、長談緩話は無益に似たり。快親兵衛を召返して、妖賊を討滅すべし。おん身は濱路を慰めて、

なほ聞漏せし事あらば、委曲を盡さし給へかし。いでい。といひつゝも、遽しく身を起して、懸て前廳へ出給ふを、奥藏の老黨老女は、先に立後に従ふて、驛路にあらぬ鈴間なる、鈴兒の緒奪て牽鳴らせば、其頭に等て侍りたる、兩個の童屬従們が、答をしつゝ出て来て、老黨老女に立替りて、そが儘主君に俱したりけり。然ば這朝、三家老、有司們も皆出仕したるが、義成出させ給ひしかば、隨即問注所を啓して、けふの訟を定らるゝに、囚牢司の訴あり、昨夕長須賀の申明亭に梟られたる、盜兒戸郎六の首級紛失の事、並に當晩奇怪の事、件の顛末は箇様々々。と、梟首守護の、乞丐堅市と喚做者の、稟し、義を聞えあぐるに、首級を竊みし魍魎兒は、怪しき女僧に撃仆され、及魍魎者を捉へんとて、迹を跟たる堅市も、件の女僧に禁呪せられて、倒れて前後を亡せし事、且那女僧が脇腹に抱きし、美女の事、神女の事、告訴極て奇異也ければ、大家ひとしく駭嘆じて、所以を知るよしなかりしに、單義成主のみ分明にて、伏姫神の冥助により、濱路姫は恙なく、返されたりける當晩の光景、今亦告訴啗合したるを、意衷に感嘆し給ひけり。浩處に荒磯南彌六が逐電の事、預人より訟あり。その趣を申し給ふに、訴人の稟すやう、南彌六は、昨日の下哺に、恁々の爲體にて、東の城門より出たり、と聞え候ひしが、今朝までもかへり來ず、逐電ならんと思ひしかば、他が宿所を穿鑿せしに、硯宮の内に遺書一通あり。事恁々に候とて、懸てその書をまらせけり。是によりて南彌六が、義侠の心術正可に顯れ、安西出來介と謀し合して、素藤を刺まく欲する、計略の事の趣、逆徒を欺くべき與に、長須賀に稟指する、罪人戸郎六が首級を携て、館山なる敵城へ、赴くといふ事情の、詳に知られしかば、大家二たび駭嘆じて、原來長須賀の首級餘兒は、戸郎六が與にするる、伏家の悪棍にはあらで、館の御恩を深くも思ふ、南彌六が所爲なりけるよ。志氣はさることながら、敵地の幫助に憑みたる、那安西出來介は、智勇勝れし者にあらず、南彌六荊軻の勇ありとも、いとく心許なし、といはぬものなかりける。恁而この日の廳果しかば、義成主は別席にて、三家老杉倉元堀内貞行、東辰相并に有司の甲乙を、召聚合て、昨夜濱路姫の危難

の事、伏姫神の冥助によりて、救ひ返させ給ひし事、又那妖書の事までも、詳に解説し給へば、威愕然と面を注して、或は驚き或は懼び、囚牢司の訟稟し、神女は伏姫の神靈にて、女僧は妙椿なりし事、茲に始て曉得て、奇也奇也。とばかりに、嘆唱祝壽の聲も齊一、高き武運に應驗の、遠ざりしを感じたる、その歡びを稟し、かば、義成羞たる面色にて、明暗迷悟判然たる、この期に及びていよ、面なき、咱愈を争何はせん。畢竟大江親兵衛を、遠離しにより妖賊們が、邪術を行ふことを得たり。然ばとて親兵衛なくとも、房總二國の兵を盡して、伐ば、颯にせざらんや。然しては又躬方の士卒を、損ふ事も多からんと、思ふによりて始より、征伐緩なりしかば、素藤我を侮りて、做す事なしと思ふらめ。今は千萬悔とも及ばず、只速に親兵衛を、召かへしなば躬方に利あらん。汝達この義を何とか思ふ。と問せ給へば氏は、貞行辰相と共に、膝を伏めて稟すやう、御説寔にその理あり。嚮に故なく親兵衛を、遠離させ給ひたる、賢慮の程を料難て、慨しく思ひ候ひしに、亦も妙椿が反間の、幻術の所以なるよし、方僅發覺れしは公私の幸ひ、併伏姫神の、冥助は君が仁政の、應報にこそ候はめ。といへば又貞行も、臣們が愚意も氏元と、異なるべくも候はず。大江仁が啓行しより、日を経て往方を知らずといへども、心當ある處々へ、追隊を蒐させ給ひなば、又姫神の冥助によりて、索逢ふべく候はん。といふに辰相も亦稟さく、仁を召さるゝおん使には、蚤崎十一郎照文と、姥雪與四郎こそしかるべけれ。十一郎は、親兵衛が、忝きより相識れり。及與四郎は、伏姫神の、引接冥助を蒙りて、六餘富山に親兵衛を、守傳きたる因あれば、他們が御説を傳達して、説薦めなば、親兵衛が、澁りて稟すよしありとも、かへりまゐらざることを得ざるべし。但十一郎も與四郎も、瀧田の御城内に候へば、某おん使を奉り、馬を那首へ乗走らして、是等の義を老侯へ、聞えあげ奉らば、必件の兩人を、遣されんこと疑ひなし。この義はいかが。と正達て、各意見を述しかば、義成満面うち笑つゝ、幾回となく點頭給ひて、汝達が稟す趣、一個として我意に、稱はずといふものなし。嚮に我謬て、薄情や仁を他郷へとて、出し遣りしを大人のさぞ、心憂思食

にけん、この義は義成瀧田へまゐりて、分説をすべけれども、然では今とて火急なる、所要を果すに不便也。六郎は我名代に、はやく那里へ赴きて、いかで大人に陪話たてまつり、照文と與四郎を、俱して速にかへり來よ。この餘の事は筒様々々。と意状の趣を、詞急迫しく吩咐給へば、辰相はこゝろ得果て、然らば瀧田へまゐらんとて、遠しくぞ退出ける。爾程に義成主は、有司門を退かして、なほ氏元貞行を、身邊近く侍らしつ、或は伏姫神の靈驗威徳の、大かたならぬを稱讚し、或は南彌六出來介が、忠誠義俠を憐て、事の吉凶思ひ得がたし。明日は必殿臺より、告らるゝことあるべしとて、專素藤誅伏の、計議を旋らし給ふ程に、蛸崎十一郎照文が、老侯の仰を稟て、姥雪與四郎共侶に、瀧田より來にけるよし、その聞えありしかば、義成訝り且歡びて、大人の仰は何事やらん、いまだ尊意を得ざれども、好折からに來ぬるかな。先十一郎を召べしとて、そが儘に等給ひけり。然らば蛸崎照文は、近習に引れて、閑室に、まゐりて見參に入りしかば、義成主は、照文を、身邊へ招き近著て、先老侯の御安否いかに。と問果て却宣ふやう、這里にも火急の所要あらば、汝と姥雪與四郎を、大人に借奉れとて、方僅東六郎を、瀧田へ遣したりけるが、途にて他に逢ざるや。と問れて照文、然候。路もや錯ひ候ひけん、辰相には逢ず候ひき。といふに義成點頭給ひて、そは左まれ右もあれ、大人の仰は何事やらん、承るべし。と宣へば、照文馳て膝を找めて、御説餘の義に候はず。最憚あることながら、君侯は大江親兵衛に、遊歴の暇を賜りしを、悔しく思召ならずや。といはれて義成主驚きながら、それはいかにして知られにけん。誰が告たるぞ、不思議なる。と仰に照文然候。この義に就ては尤以あり。老侯料らず御胸中を、知召すよしありければ、仁を召するおん使には、小臣と與四郎こそ、相應しきものなればとて、隨即この義を命ぜられ、稻村よりいまだ一言も、まうさるゝ事なきものから、善事は急げ、と俗にもいへり。照文は速に、與四郎を俱して、稻村へまゐるべし。我推量に違はずは、用ひらるゝ義あらん。と仰によりて物とりあへず、汗馬に鞭を鳴らしつゝ、宙を飛してまゐりしに、與四郎は歩行ながら、老足今番も健にて、毫も後れず候

ひき。しかるに御父子御同意なる歟。這里よりも辰相を、瀧田へ遣し給ひしは、事暗合に候はずや。といふに義成主なほ訝りて、开も亦奇しき事ながら、大人は亦いかにして、我胸中を、白地に、然ばかり猜し給ひけん、こゝろ得がたし、甚麼ぞや。と問せ給へば照文答て、然候。那舶來の鸚鵡の事は、君侯の知召すことながら、且始より稟上ん。今より十稔あまり前つ秋、外國の商船、颯風に漂流して、當國洲崎の浦に歇りし折、君侯の仁恩により、破船を修復ひて、かへり去ことを得たりける。外國兒門その歡びに、方物種々を、獻りしそが中に、鸚鵡一隻ありしを、老侯にまゐらせ給ひしかば、馳ておん便室なる、牖の柱に掛させて、年來畜せ給ひしに、件の鸚鵡、今朝老侯の、起出給ふを等貌に、忽然と聲を立て、やよや老侯聞し召せ、稻村殿はいぬる比、大江親兵衛を遠離給ひし、おん愆を知し召て、今は御後悔大かたならず。その所以は筒様々々、恚々の事候とて、濱路姫上の御危難、神女の擁護、又那妖書の事までも、その崖略を告まつりて、親兵衛并に七犬士門を、召さるべきおん使には、照文與四郎に優者あらじ、と那里にも評議ありて、おん使を遣さるべし。开を等給はゞ時も移りて、今日の役には達がたかり。はやく件の兩人を、稻村へ遣されよ。必な疑ひ給ひそ、と諍復しつゝ稟しよかば、老侯驚き訝り給ひて、單おん胸裏に思ひ給ふやう、昔唐山晋の時、張華が畜し白鸚鵡は、主人に悪夢の兇兆を、報て免るゝことを得たりといふ、事文後集に本文あり。又唐の天寶年間、長安なる豪民、楊崇義が妻劉氏は、鄰舎兒にて疎からぬ、李弁と密通したりしかば、俱に計りて崇義を殺して、潤井の中に埋めつゝ、知ず貌して訴けり、是により、檢吏その家に来て、仔細を糾明しぬる折、崇義が畜ける鸚鵡あり、有司に向ひ隣ふり立て、崇義を殺せし悪棍は、劉氏と李弁也と云、その聲分明也ければ、奸夫淫婦は免るゝ路なく、その罪立地に發覺れて、馳て刑戮せられけり。時の天子玄宗帝、件の鸚鵡を忠とし賞て、封じて綠衣使者といふよし、載て天寶遺事にあり。然けれども今の鸚鵡は、僅に他鳥の聲を做すのみ、人の言語に倣へるも、一兩言に過ぎるに、かくの如きは疑ふべしといふ、宋明の人の小説に、記者たるも有といへども、是等は鳥の神な

るもの歟、他し鸚鵡と一列に、論ずべくもあらずかし。然ば唐山の例に憑りて、今我鸚鵡の奇談を思ふに、こは這鳥の心から、いへるにはあらずして、伏姫の神靈の、いはしたるにぞあらんずらん、と意衷に猜し給ひしかば、毫も疑ひ給はずして、臣と與四郎を、いと睦しく召させ給ひて、前條を愆々と、仰示させ給ひつゝ、若門は速に、行装の準備して、稻村へ走りまゐるよ。守の殿に告稟さんに、この事果して驗あらば、歡びて用ひられん。非除尙義成は、然る後悔の心なくとも、鸚鵡の奇談を聴れなば、親兵衛が召かへさるゝ、物種になるよしもあらん。快々せよ、といそがし給ふ、仰畏み言承まつりし、小臣并に與四郎は、驚奇感嘆辨よしもなく、時を移さず準備して、目今來著仕り、尊意を伺ひ奉れば、君侯にも件の御準備なる歟。辰相をもて老侯へ、稟させ給ふは奇異妙絶、恐れ入て候。と一五一十を告稟せば、側聞せる氏元貞行、俱に奇談に駭然たる、そが中に義成主は、憶ずも、手を額に加えて、嗚乎奇なるかな、妙なるかも。鸚鵡の奇言は、我大人の、御明査に錯ひなく、女兒の君の神靈の、神謀にこそあらんずらめ。現神通の無量なる、曩には民の童女に、化現して、賊徒征伐に、緩急の理を示させ給ひ、更に又疾風もて、躬方の刀瘡兒に冥助を施し、昨夜は又明月地に、神體を顯して、濱路を拯ひて、女僧妙椿を、懲し給ひしのみならず、義成が妖賊に、惑されたる愆を、諭させ給ひしそが上に、親兵衛が、童年に似げなく、大さうなりしは類ありとて、史書を援て、世の疑ひを、解き給ひぬる論辯廣博、最有がたき示現なるに、今朝は又瀧田なる、鸚鵡に憑て我意衷を、はやくも大人に告させ給ひし、おん計ひはいよゝ妙也。この義大人の夢想に入て、恚々と告給ひなば、なほ疑ひもをしまさん、朦朧ならぬ現身の、鳥もていはし給ひしかば、大人は毫も疑ひ給はで、快照文と與四郎を、這方へ遣し給ふにより、事立地に合期して、料らずも這便宜を得たり。濱路并に妖書の事さへ、既に知召たらば、照文們も聞知りたらん。然ば今さら告んは要なし。先や與四郎を召べしとて、近習にこゝろを得さし給へば、遠侍に侍りたる、與四郎は近習に引れて、おそるゝ義成主の、おん面前にまゐりしを、義成遙に驚して、やよ與四郎近く扱み

ね。鶴に我思ひ濁くて、犬江親兵衛を遠離たるは、實に無此上誤なりき。因て召かへさんと欲す。弁使外には十一郎と、汝に優ものなきをもて、瀧田へ辰相をまゐらせしに、奇しき鸚鵡の忠告ありて、大人のはやくも汝達を、這方へ遣し給ひしは、特に便宜のおん計ひ、忝くこそ思ひ奉るなれ。左にも右にも十一郎と、商量して快起行ね。路費はさら也、夥兵們を、伴當として遣すべけれ。單親兵衛のみならず、餘の犬士にも索遇はゞ、我意を傳へて俱して來よ。やよこの議をこゝろ得よ。といと懇に仰すれば、與四郎は額衝たる、頭を擡げて氏元と、貞行にうち對ひて、掛向は最も惶き、御説承り奉りぬ。鶴に瀧田を出る折、蚤崎生と既に、商議仕り候ひき。逆知し召れけん、下總なる市河は、是親兵衛が故郷にて、行徳は母親の、親里なるよししるれば、僕は蚤崎生と、路をわかちて那里に赴き、那山林の名迹と聞えたる、依介夫婦に對面して、穿柄問ば、那人の、往方を知る據候はん。御説に悖るに似たれども、伴當は一個も要なし。況難色輕卒也とも、御内人を俱していなば、影護くて倒に、進退不如意に候はん。この義は許させ給へかし。主にて候道節に、先だちて御扶持の下に、召置るゝ身の本意ならねば、音音も俱にうち不娛侍りぬ。いかで一霎時の暇を賜り、道節並に餘の犬士門の、在處を索候はゞや、と思ふ折から犬江の腕子すら、仰によりて這地には、在らずなりしと人傳に、聞知りしより胸潰れて、伴にも得立ず。愆に、執遣されし老が身の、遣る方もなく候ひしに、恚る御用に擇れて、蚤崎生と共侶に、那八犬の人々の、迎にいね、と仰の趣、寔に得がたき造化也。面目這上や候べき。この身單で候とも、犬江はさらなり、犬士達に、逢ば必説薦めて、俱さでは還り候はじ。といと勇しく稟すにぞ、氏元貞行有理と感して、聽て執做奉れば、義成莞然とうち笑給ひて、他が情願寔に餘義なし。夥兵を裁て遣さん、といひしは非常の與なれども、开も亦不便に思はれなば、強るは要なし、隨意たるべし。却十一郎は甚麼ぞや。この義に就て瀧田にて、別に仰はなかりし歟。と問せ給へば、照文答て、然候。目今與四郎が稟せしごとく、小臣は穂北なる、氷垣許索ゆきて、那里に犬士の在らずといはゞ、結城へ赴き候はん。君侯も聞召た

ることく、大法師は宿願あり、季基公を首まつりて、嘉吉のむかし結城にて、陣歿したる人々の、菩提を弔ふべき與に、春より那地に庵を結びて、大念佛を修行す、と豫その聞えあり。本月の十六日は、那諸靈位の亡日にて、結願のよしなれば、その日に至らば大士門も、俱に結城に赴きて、法筵に會候はん。非除來會せずもあれ、小臣は御父子の御名代を奉り、十六日の結願に、必法會に預るべし、と老侯の御諒あり、御布施なども儀のごとく、多く遞與させ給ひしを、柳宮に藏めつ、伴當に持せ候ひき。又老侯の宣ひしは、始賢士を招する、墨印は我一署也。這回は守の殿の、御教書を齎すべし、と仰られて候。と稟せば、義成點頭給ひて、寔に義ある仰也。しからば我も大士門へ、招状を與ふべく、祖靈へ香奠をまゐらすべし。十六日の結願に、餘日いくばくもあらざれば、十一郎は、今宵水行を、先武藏まで赴くべし。縦去向は異也とも、與四郎も俱に首途せよ。十一郎は十個の夥兵の、外に東西持すべき、奴隷なくば不便ならん歟。木曾介藏人は、是等の旨を有司に傳へて、事の準備を急ぐべし。と仰に大家こゝろ得果て、齊一退り出にけり。愆而照文と與四郎は、饗膳美酒を賜りて、權且伴當の揃ふを等しに、幾程もなく、事の準備、整ひにきと聞えしかば、隨即氏元貞行は、招状と香料を、照文に遞與しけり。又與四郎へも、親兵衛を、召かへし給ふ御教書と、路費を遞與し、御諒を傳へて、縦情願也とも、獨行はしかるべからず、一兩個の伴當をば、領てゆくべし。と諭すにぞ、與四郎固辭むことを得ず、瀧田より従へ來ぬる、鞋奴兒一名を、俱して照文と共侶に、稻村より首途す。長き日ながら影蔽きて、下晡になりけり。爾程に照文は、夥兵十名、奴隷五名、及瀧田より俱して來ぬる、私の伴當と夫に、二十餘名の從者を領て、與四郎と共侶に、便宜の港口に赴きつ、當晩海船に執乘て、武藏の千住を投て走らすれば、與四郎は纔に一個の、伴當を從へて、別船にうち乗つ、こは下總なる市河へとて、遙けき水行をいそぎけり。愆りし程に辰相は、瀧田よりかへり來て、義成主に愆々、と返命を聞え上るに、既に鸚鵡の奇談にて、這方の事を那里に知られ、はやく照文と與四郎を、遣はれたる後なれば、又させる事もなし。なれども君侯のおん意

を、みづからも悟り給ひて、親兵衛を召かへさせ給ふ、この一條は老侯の、御本意に稱せ給へば、觀ひ給ふ事大かたならず。因て南彌六出來介が、任俠義烈の事の趣、鸚鵡の告も漏せし事を、云云と聞えあげしに、老侯御感淺からず、譜第恩顧の者ならぬ、他們すら守の與に、命を惜まて義に勇るは、併守の殿の、士を愛し民を拊ぬる、仁慈の致す所也とて、おん歡びのよしを告稟し、かば、義成も亦歡び給ふ。父子賢明のおん相譚を、傳聞くもの稱讚して、感憑しく思ひけり。愆而この次の日の黄昏時候に、殿臺の陣中より、荒川清澄が使者として、詰茂佳橋が只一騎、稻村の城に著到して、荒磯南彌六、安西出來介が、素藤を刺んとて、敵城に入て、戦歿の事の顛末、且南彌六が怨魂は、その首級に住りて、梟首に及れざりし事、是故に、館山の、牢獄司が、贖首を梟し事、清澄この義を聞きりて、急に士卒を遣はして、出來介が首級を奪捕せ、且敵の雜兵一名を生拘りて、事の仔細を責問ひしに、南彌六出來介が、勇戦の爲體も具に聞え、素藤は瘻を負ぬ、撃れし士卒尠からず。亦那牢獄司が、南彌六の贖首に用ひしは、南彌六に撃れたる、賊徒名幕沙雁太の、首級にてありければ、一笑に堪ざるもの也。然ば出來介が遺書ありて、志の程も知られ、忠義分明に候へば、首級は近き山院に葬らして、異日墓表を建べき事、又滿呂復五郎以下の刀瘡兒の、久しく瘻ざる者五六名候へば、將息の與、大城内にかへし置まく欲す。そは皆篋輦に乗せられたれば、明日來著仕らん。先件の趣を、聞えあげまつらん爲に、馬を走らし候ひきとて、清澄高宗逸友們が、連署の呈書をまゐらせければ、有司これを受とりて、三家老に告知せ、當晩披露に及びけり。愆而この次の日に、復五郎を首として、刀瘡兒も來にければ、各宿所にかへし居らして、醫師に命じて藥を賜り、又滿呂復五郎に、南彌六出來介は、兒子なき歟、しかるべき親族の、あらずや、と問せたまふに、南彌六は妻もなく子もあらず、獨阿彌七と喚做すは、南彌六が弟にて、上總なる蘇々利の農戸也。件の阿彌七に、兩個の兒子あり、冢子を阿彌太郎、次を増松と喚做たるが、俱に尙總角也。又出來介が妻は世を去て、成之介と喚做す獨子あり、今茲は十一二なるべし。件の成之介が亡母の叔父は、上總國夷瀨郡、山田